

滨松市民文艺

63



滨 松 市

滨
松
市
民
文
艺

第
6
3
集



滨
松
市

平成30年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講座

講座名	講師	開催時等	受講料円
文学講座(春)	松平和久	4/4,11,18,25,5/2,9 毎週水曜日(全6回)9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代300+税)</small>
文章教室 I	たかはたけいこ	4/15,5/20,6/17,7/15 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2,500
川柳入門講座	今田久帆	4/22,5/27,6/24,7/22,8/26 第4日曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
現代文学講座	河原みち代	5/23,30,6/6,13,20,27 毎週水曜日(全6回) 13:30～15:30	3,000
短歌入門講座	村松建彦	6/2,9,16,23,30 毎週土曜日(全5回)9:30～11:30	2,500
俳句入門講座 I	鈴木裕之	6/2,9,16,23,31 毎週土曜日(全5回)13:30～15:30	2,500
歴史と文学講座	金原増吉	6/3,10,17,7/1,8 毎週日曜日(6/24除く全5回) 9:30～11:30	2,500
朗読教室	堤腰和余	6/12,7/10,8/7,9/11,10/9,11/13(全6回) 10:00～12:00	3,000
夏休み絵本づくり講座	井口恭子	7/28(土)13:30～16:00 4～6年生対象 付添不要	500
夏休み子ども朗読教室	堤腰和余	8/1(水)8(水)17(金)(全3回)10:00～11:30 4～6年生対象 付添不要	1,500
夏休み読書感想文講座	林容子	8/4(土)10:00～12:00 4～6年生対象 付添不要	500
文章教室 II	たかはたけいこ	8/19,9/16,10/14,11/18 第3日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2,000
文学と歴史講座	折金紀男	9/2,9,16,30,10/7 毎週日曜日(9/23を除く全5回) 9:30～11:30	2,500
文学講座(秋)	松平和久	9/3,10,17,24,10/1,8 毎週月曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代900+税)</small>
俳句入門講座 II	笹瀬節子	9/22,29,10/13,20,27 毎週土曜日(10/6を除く全5回) 13:30～15:30	2,500
古文書読解講座	小木香	10/6,13,20,27,11/3 毎週土曜日(全5回)9:30～11:30	2,500
文学散歩	和久田雅之	①11/8(木)事前講義10:00～11:30 } ①②セット ②11/15(木)現地見学9:00～16:30 }	4,000
文章教室 III	たかはたけいこ	12/8,1/12,2/9,3/9 第2土曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2,000
古典和歌講座	松平和久	2/13,20,27,3/6,13,20 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代300+税)</small>

展示 9:00～17:00 5階 展示室

●企画展 収蔵展

- 特別収蔵展「生誕110年藤枝静男展」平成29年12月18日(月)～平成30年4月16日(月)
企画展 I「浜松風まつり今昔物語 ～町名と風印の由来～」4月24日(火)～7月1日(日)
特別収蔵展 I「浜松文芸館30年の歩み」7月9日(月)～10月7日(日)
企画展 II「三方原物語」10月14日(日)～平成31年2月10日(日)
特別収蔵展 II「鷹野つぎと浜松」平成31年2月18日(月)～6月16日(日)

●講演会

- 「歴史と文学探訪」 金原 増吉 5月13日(日)13:30～15:30 500円
「湖郷の詩人 清水みのる」 和久田雅之 8月11日(日)13:30～15:30 500円

●朗読会

- 「藤沢周平を読む」 堤腰 和余 10月21日(日)13:30～15:30 500円
「賢治さんを読む」 やたべ 駿 12月24日(日)14:00～15:30 500円

浜 松 市 民 文 芸

第 63 集



観 玄 虚

(藤枝静男 書)

浜 松 市

川柳	自由律俳句	定型俳句	短歌	詩歌	随筆	評論	児童文学	小説	選者
今田久帆	鶴田育久	九鬼あきゑ	村木道彦	埋田昇二	たかはたけいこ	中西美沙子	那須田稔	柳本宗春	竹腰幸夫

☆ 表紙絵

田中優まさき氣き

平成29年度 浜松市芸術祭「第65回市展」

芸術祭浜松市長大賞受賞作品 工芸部門

題「向日葵」ひまわり

折紙をちぎって、よじって、ひも状にしてから、糊で一本ずつ貼って、作っています。

沢山よじるので、時間のある時はいつもよじています。そのため、服はいつでも色紙と糊がくっついていきます。

一年くらいかかって出来上がった時は、最高にうれしかったです。

「浜松市民文芸」第63集 市民文芸賞受賞者

部 門	小 説 児 童 文 学 評 論 随 筆 詩 短 歌
受 賞 者	生田基行 鈴木啓之 住吉玲子 金指芙美代 鈴木啓之 滝澤幸一 土居里華子 北山七生 犬塚賢治郎 大橋よし子 高澤海玲唯 田中貞夫 竹内としみ 内藤久仁茂 鈴木利定 岡部政治 野島見司 石黒實
部 門	定 型 俳 句 川 柳 自 由 律 俳 句
受 賞 者	松本重延 澤木幸子 鈴木秀子 田中美保子 山崎暁子 岩城悦子 鈴木利久 平野道子 小楠惠津子 池田智子 中津川久子 生田基行 竹山恵一郎 伊熊靖子 菊川文江 鈴木均 鶴見芙佐子

目次

小説

市民文芸賞

源次郎夢譚……………生田 基行……………10

夜の散歩……………鈴木 啓之……………26

入選

ジョーンズさんの戦争……………名倉 有一……………41

偶さか……………北 まくら……………63

融合……………鈴木 篠千……………70

ユウドの物語……………内山 文久……………88

選評……………竹腰 幸夫……………104

選評……………柳本 宗春……………105

児童文学

市民文芸賞

むぎ畑のカフェ……………住吉 玲子……………106

あしたへの小さな芽……………金指芙美代……………114

丘の上の空は明るい……………鈴木 啓之……………122

入選

いたずら子ガラスたちのぼうけん……………宮島ひでこ……………131

おばあちゃん ほのかです。……………河島 憲代……………136

絵葉書の魔法……………生崎 美雪……………141

けい子のクリスマス・イブ……………如月はるの……………145

評論

市民文芸賞

邪馬台國は大和説……………滝澤 幸一……………162

文学にみる小説の誕生……………土居里華子……………171

選評……………中西美沙子……………178

随筆

市民文芸賞

芝生男のたわごと……………北山 七生……………181

二十四年目の同窓会……………犬塚賢治郎……………184

百円市……………大橋よし子……………186

入選

父の探し物……………中津川久子……………189

家族の足を洗う……………ほりちよしひろ……………190

スマートフォンと私……………阪口佳寿子……………193

選評……………たかはたけいこ……………195

おねえさんになったミコちゃん……………立岡 律子……………148

星のバレリーナ……………関根 栄二……………151

……………那須田 稔……………161

詩

市民文芸賞

星を砕く	高澤海玲唯	196
妻に捧げる	田中 貞夫	197
ジグザグ	竹内としみ	198
無題	内山 文久	199
新世界の扉	清泉 陽子	200
時間の意識	高柳 龍夫	201
森羅万象	浜名水月	203
一期一会へ感謝	早川奈美江	204
砂時計	水川重輝羅	205
選評	埋田 昇二	206

短歌

市民文芸賞

内藤久仁茂	鈴木 利定	岡部 政治
野島 見司	石黒 實	
赤堀 進	安藤 圭子	伊藤 順子
伊藤 美代	太田 静子	畔柳 晴康
澤木 辰子	鈴木美代子	戸田田鶴子
猫田 伸	袴田 成子	山本 勝彦
渥美 進	あゆのつか碧	内田 一郎

内山 文久	岡本 久榮	恩田 恭子
加茂 智子	河合 和子	川上 啓子
川上 とよ	川上 勝	川島百合子
倉見 藤子	K・I	阪口佳寿子
坂口 ちせ	清水 紫津	清水 孜郎
新谷三江子	鈴木 和子	竹内オリエ
手塚 みよ	寺田 久子	鶴多 健
内藤 雅子	中村 照美	中村 弘枝
中山 和	平野 旭	藤生 好則
松浦ふみ子	峯村友香里	宮澤 秀子
宮本 恵司	柳 光子	谷野 重夫
山下 晏義	吉野 歌織	リコリス
あひる	飯田たつ子	伊熊 保子
池 蜻蛉	石井 泰子	石原 一郎
石原新一郎	伊藤 米子	井浪マリエ
犬塚賢治郎	今駒 隆次	岩城 悦子
内山 智康	太田あき子	太田 初恵
青海 まち	大庭 拓郎	岡本 蓉子
織田 恵子	恩田 利子	加賀の人
影山 ふみ	加藤貴代美	カモメン
川合 妙子	河田 琴栄	北島 はな
木下 文子	清川 真帆	久保 静子
後藤 とも	小林 和子	紺田みどり
近藤 茂樹	サウラ	寒風澤 毅

戸田 鶴子
永田 恵子
西尾 虹之助
羽生 遼平
平野 旭
藤本 幸子
松原美千代
馬淵 文夫
森 明子
山口 英男
和久田俊文
渥美 進
池 蜻蛉
石井 泰子
伊藤清太郎
岩崎 五郎
太田 沙知子
岡本 蓉子
加藤貴代美
金子真美子
川島百合子
絹 枝
後藤 とも
佐藤 健

戸田 幸良
中津川 久子
野田多満子
林田 昭子
藤田 節子
古谷 とく
松本憲資郎
水川 放鮎
八木 裕子
山田 知明
渡辺きぬ代
阿部 盛司
池谷 和廣
伊藤しずゑ
伊藤 紀子
右崎 容子
太田 静子
小楠 達司
金取ミチ子
川合 泰子
北島 はな
久野 悦郎
齊藤三重子
佐藤 周歩

内藤 雅子
中村 貞子
野中美美子
飛 天 女
藤田八重子
堀川千代子
松本 賢藏
宮澤 秀子
山岡 照彦
山本晏規子
浅井 裕子
伊熊 保子
池谷 静子
伊藤 順子
今駒 隆次
内田 一郎
大屋 智代
片岡 優宇
金子 典子
川上 とよ
北村 友秀
畔柳 晴康
サウラ
小百合

澤木 辰子
清水よ志江
新村みち子
鈴木やよい
高山 紀恵
竹下 勝子
館石 照子
黒葛原千恵子
利徳 春花
中村 寿
錦織 祥山
野島 見司
野田 俊枝
橋本まさや
浜名湖人
林 甲太郎
藤井 星子
牧 元久
松本みつ子
森のうさちゃん
山下 静子
山下 美恵子
和 季
あひる

清水 孜郎
不知 火
新村 幸
砂間 達也
滝澤 幸一
竹平 和枝
田中 安夫
手塚 みよ
鳥井 美代
長浜フミ子
二橋 記久
野末 法子
袴田 定代
長谷川絹代
浜名水月
伴 周子
藤生 君江
松島日出子
宮本 恵司
谷野 重夫
山下 宏
山中 仲夫
和久田しづ江
伊藤志津子

清水 康成
新村ふみ子
鈴木うた子
関根 由雄
竹内オリエ
竹平 安則
土屋 芳郎
寺田 久子
なおとら
西尾 淳子
二橋 康男
野田千恵子
袴田 吉一
服部 節子
浜 美乃里
正田 三二
堀内 一枝
松永 真一
森坂 芳喜
山口 久江
山下 昌代
横田 照
和田 有彦
岩崎 秀子

江川 一子 大仲 功 カモメン
 川合 妙子 コギ ト 佐藤 ケイ
 白井 忠宏 鈴木かや子 鈴木千恵子
 純 礼 竹田 道廣 田中 貞夫
 角皆 かつ 時久シヅ子 鳥居さく子
 永井 真澄 中村 崑十郎 のり弁大盛り
 畑中志げの 原田 悠平 松本 和樹
 三日 月 水野 健一 山本 澤乃
 幸 村 九鬼あき多：：：：：
 選 評 …………… 267

自由律俳句

市民文芸賞

入 選

中津川久子

生田 基行

生田 基行 井手賀代子 嘉山 春夫
 河村かずみ 倉見 藤子 中村 淳子
 橋本まさや 林 甲太郎 リコリス
 伊藤 美代 岩城 悦子 太田 静子
 大庭 拓郎 大道くにを 小笠原靖子
 岡本 蓉子 木俣 史朗 畔柳 晴康
 白井 宜子 鈴木 章子 竹内オリエ
 戸田 鶴子 戸田 幸良 中津川久子
 長浜フミ子 錦織 祥山 藤本ち江子

川 柳

市民文芸賞

入 選

竹山恵一郎

伊熊 靖子

竹山恵一郎 伊熊 靖子 菊川 文江
 鈴木 均 鶴見芙佐子
 浅井 常義 鈴木 賢三 鈴木千代見
 高橋 博 竹平 和枝 有本 千明
 伊熊 靖子 太田 初恵 竹山恵一郎
 田中 恵子 鶴見芙佐子 中村 雅俊
 廣島 幸江 馬淵よし子 守屋三千夫
 山口 英男 伊熊 保子 池田 稔
 市川 緑 伊藤 信吾 猪原 萱風
 内山 敏子 太田 静子 菊川 文江
 木村 民江 小島 松太 佐野つとめ
 鈴木 均 中津川久子 宮澤 秀子

選 評 ……………

水川 彰 宮司 もと

浜名水月 浜 美乃里 ヒメ巴勢里

鶴田 育久：：：
276

足立 和代	あめのつか碧	荒木いつか
岩城 悦子	恩田 恭子	カモメン
嘉山 和美	川口八重子	恭 子
倉見 藤子	畔柳 晴康	小鹿 朝子
澤木 辰子	鈴木 勝則	鈴木 覚
滝澤 幸一	竹内オリエ	竹川美智子
竹山 容子	手塚 美誉	出原 依美
寺田 文子	徳田美知子	ど ぜ う
戸田田鶴子	戸塚 忠道	内藤 雅子
袴田 宣子	平野 旭	馬塚 五朗
水川 彰	谷野 重夫	山田とく子
あそヒジネス	渥美 進	飯田 幸子
伊藤 美代	内山 文久	大村 晴三
岡本 蓉子	小栗 秀治	加藤 典男
金取ミチ子	金子眞美子	川上 啓子
川上 勝	河村 幸	絹 枝
久保 静子	齊藤三重子	不知 火
白井 忠宏	鈴木 敏子	関 まち子
高鳥 謙三	高橋 紘一	高柳 龍夫
高山 功	高山 紀恵	竹平 安則
建部 紀子	寺田喜代子	寺田千恵子
寺田 久子	鴫多 健	戸田 幸良
中村 禎次	長浜フミ子	橋本まさや
長谷川絹代	浜名湖人	浜名小舟

浜 美乃里 藤生 君江 堀内まさ江
 馬淵 征稍 宮崎 和子 山下あい子
 山下 宏 山中 伸夫 米澤寿鶴子
 選 評 …………… 今田 久帆 …… 292

「浜松市民文芸」第64集作品募集要項…………… 294

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
 掲載順については、市民文芸受賞作品は選考順、入選作
 品は選考順または五十音順としました。

第63集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一五	短歌	五九八
児童文学	一三	定型俳句	一、一六一
評論	五	自由律俳句	二二七
随筆	二九	川柳	五六四
詩	三二	計	二、六四三

小説

「市民文芸賞」

源次郎夢譚

明治二十五年の晩秋、井沢源次郎は火鉢を遣いながら、かつての同輩村田左京の孫、鉄之助の訪いを楽しみに待っていた。その左京も亡くなって、もはや十年になる。遠く過ぎ去った日の感慨と、自分は長く生きすぎたのではあるまいかとの気持ちが続いて交ぜになる。いやまだ天命のあるうちには……。あの御一新で亡くなった縁者たちを弔ってゆく、あるいは、まだ世の中で役に立つこともあるのかもしれない、などとそんな想いに耽っている。すると家の裏手にある櫛の枝先の百舌鳥の甲高い声が聞こえてきた。その啼き声には冬の到来も近いと思わせるものがあり、空気の乾いた一日の終わりを告げているようでもあった。傾きかけた釣瓶落としての夕陽が赤く障子を染め始めたころ、その鉄之助がやって来た。かなり寒くなってきたというのに足袋は履いていない。手には一升徳利を持ち、畳に座るや、お遣いくださいと言って源

次郎の前に差し出した。

おお、おぬしが左京の孫か。弓も引くと聞くが、そうか、二年ほどやっておるか。左京の若い時分に、目もとなどがよく似ておる。ところで、いくつになられたかの、ふむ、十八になるか。ちょうどその年の頃、われらは京へ遣わされたの。まあ酒をちびりとやりながら話すとしよう。ふむ、よい酒じゃの。

あれは藩中の経誼館の者たちと弓術の試合をする二年前のことであった。経誼館の名は知っておろう。我らが籍を置いていたのは弦友舎で、それも存じておるな。その年は二月に年号が改められ、弘化から嘉永になった四月半ば、今の暦で四月といえは春じゃが、その頃の暦ではすでに初夏であったよ。周知の通り、明治になって五年目の十二月三日が新暦の

生田基行

明治六年一月一日となった訳だの。その年は閏月があったのかもしれぬがな。

ともかく、その嘉永の申の（一八四八）年に左京、鈴木清三郎と連れ立って濱松を出立したのが四月初め、のんびりと十日ほどかけ、東海道最後の大津の宿を朝早くに歩き出した。逢坂山を越え、山科の盆地を過ぎ、九条山に差し掛かるころには陽が背中に貼りついたように暑かったのを覚えておる。その九条山を下り始めると南禅寺があり、そこから西に広がる京の街は整然と言つていいほどの見事な家並みであったよ。南禅寺の手前で、三人してしばらく京の街を眺めておつたが、道中これまで見てきた御城下とはちがった、いかにも古都であるという風情であつたな。

三条通りを歩んでいくと、ほどなく鴨川が流れていて、三条大橋の上を渡るときの風が涼やかに感じたのう。その大橋西詰めには、あの池田屋が建つておつた。ただ、通り過ぎて右側に見たのは記憶にある。おかしなことだが、池田屋で事件が起きたのはそれから十六年も後のことじゃから、どうゆう訳かはよくわからぬが、覚えておるほうが不思議であるかもしれないぬ。それはともかく、人が途切れることなく次から次へと橋などを歩いておる。左京と、京の街はこれほどの人がおるのかと驚いたものよ。清三郎はなにか食い物のほうばかり見ていたようだったが。

我らが宿する場所は河原町三条を北に向かい、御所の東側にある蘆山寺という、鬱蒼とした木木に囲まれた古い寺であ

つた。なんでもその昔、紫式部の邸宅があったところだそう。そこから寺町通りをはさんで、向かいがだっ広いとしかいいようのない御所であつた。

何しに行ったのかと。

まだ春の気配がうすい一月の終わりに、弦友舎の梅木先生から三名が呼び出され、ちかごろ江戸もさることながら、京の様子はいかがなものか見てまいれ、と下命があつた。梅木先生は弓の師範でもあるが、藩内では目付も兼ねておつた。すでに京の蘆山寺に依頼もし、先達の目付配下、二名も参つておる、という訳での、我らも京に上ることになった。蘆山寺というは、わが濱松藩とどのようないきさつがあつたかは、よくは知らぬ。が聞くとところによると、その昔わが殿、井上家の藩祖正就公の母が徳川秀忠様の乳母だったらしく、井上家はそのようなことで、幕府の中でも登用され、出世していったようじゃ。その正就公が公儀で京の所司代へ赴いた折、蘆山寺で世話になつたといふことの縁らしい。

ともかく、その下命を承つた時、俄かに緊張したことも覚えておる。いや、寒さもあつて身がすこし震えたのかもしれない。

弦友舎を出るとき清三郎が、これは簡単なことではない、源次郎、われらで大丈夫であろうか、左京もどう思うかね、と歩きながら心配顔で話しかけてきた。左京は、なあに心配

は無用さ、京の女子でもよく見てまいろうではないか、などと暢気なことを言っておった。

だが、昨今の京の街には、不逞浪士たちが入り込んで、不穏な空気が流れていると聞く、物見遊山で参るわけにはゆかん。わしはそう言つて気を引き締めなおしたのだ。

清三郎は、弓も持つて参るか、と言いながら、肩に担いだ弓をぽんと叩いた。

うむ、旅には少々邪魔になるやもしれぬがそのほうがよいであろう、と決めたのじゃ。ヤットーのほうはあまり得手ではないが、弓ならばこの三人で何とかなるであろうという訳での。

さて、その廬山寺だが、御所の中、禁裏は目と鼻の先じゃから、出入りする公家や武士どもを観察するには具合がよろしい。今日はどこそこの者が入つた、などとな。だが、あまりに見張つているようなそぶりを見せてはならんので、門まわりや玄関などを掃いているふりをしておつた。

そのころの風聞では、数年前から日本国の近海に異国船が出没しておつたようだ。そのため、幕府では異国船に対し打ち払うよう達しを出していたが、それを改め薪水を給与することになった。しかし、そのようなことに反発する勢力が声高に叫ぶようになったのだ。それは長州を中心にして各藩に影響を及ぼし、不逞浪士が京をうろつくという結果になった。その思想のもととは水戸藩の光圀公から始まった、いわゆる水戸学ではないかの。尊皇であり攘夷であるな。だがな、

あの水戸学というは狂気思想ではなからうか。日本国は神国であるなどと申し、皇室を中心にして攘夷運動にまで発展してしまつた。それにかぶれた吉田松陰や高杉晋作なる怪しげな者まで現れて、おかげで日本国中の浪士どもを煽動するなどという始末であつた。

だが、その者たちは藩を脱藩して浪士になつた訳で、藩に責任を押し付けぬようにしていたのじゃな。しかし徳川に恩顧こそないものの、幕府を倒さねばならぬ理由が今一つわしにはよくわからぬ。今の時代になつてみれば、なるほど時流はそのようになつていたのかもしれぬが、のちには長州の者どもが禁裏に向かつて大砲をうちこむなどという、まことにもつて前代未聞の非道なことを起こしたのだ。それは、禁裏の西にあるあの蛤御門の変のことであるが、時の孝明帝が激怒されたのは言うまでもないことじゃ。それら長州の者が京を追放されたのも当たり前のことであるな。

いや、話が前後してしまつたかな。

うむ、よい酒じゃ。

ともかく、こうして我らは廬山寺でお世話になることになつた。その住持の言うことには、三人ともいつも弓を持ち歩いているので、つきり三十三間堂にでも行き、通し矢をするものと思つていたようだ。たしかに、ナリを見ればそのように思うであらうな。だがわしたちは、通し矢のことは詳

しくは知らぬ。それでは、いちど三十三間堂も見ておこうということになって、三人で連れ立って京の町を見ながら三十三間堂に向かった。

廬山寺からは半刻（およそ一時間）とからぬ。河原町通りを南に下ればよい。昼間のことであったから、通りを行く者たちは普通の風体であったな。さほど怪しいと思われる者もいなかった。だが、三十三間堂に着くと、辺りには牢人と思われる連中が妙にたむろしていたの。これはどうしたことかと少々訝しんだ。その連中を横目に見ながら、南北に長いお堂を廻ってみると貼り紙があり、来る八月十日から三日間、通し矢をする旨が書いてあった。その初日は大安であるが、何に因んだものかよくはわからぬ。その日はまだ三月ほど先のことであろうか。それに申し込もうという牢人連中らしかつた。

清三郎は、するとなにか、勝てば褒賞金でも出るのか、とじつくりとその貼り紙を読んでおった。そのあと、首を回して縁の廊下を見やった。それはとてつもなく長い廊下で、三十三間堂とはいうものの、長さ三十三間ではのうて、間口が三十三であり、長さは、じつに六十六間（約百二十呎）ほどで、三人で顔を見合わせ、驚いたものよ。こんなところを射通すことなどできるものか、普通の道場では距離十六間（約二十八呎）でやるものだが、これは四倍の上じや。しかも、庇の垂木じゃったかな、これが邪魔をすることになる。射通そうとすれば当たり前だが弓手（左手）を上げ、角度をつけ

なければならぬ。上げすぎれば庇に当たってしまう、かといって普通に射つのでは途中で矢が廊下を掃いてしまう。見れば一目瞭然じゃが、よほどの剛弓でなければ矢を射通すことなどかなわぬ。思い出したのは、かの那須与一の話で、平家の扇までおよそ四十間（七十呎）ばかりと聞く。しかも馬上の与一に対するは船の上の扇じゃ。揺れておる。普通に考えれば中るものではないの。まあ、それで中れば神業じゃよ。それを見事に、ただ一発で中てたというから驚くほかはない。そのうえ、船中で手を打って褒め讃えていた敵の兵士を二の矢で射ち倒したなどと聞く、まことの剛弓じゃな。その話より、さらに長い距離に挑むだなどとはのう。

ともかく、それをやってみたという者が、昔からたくさんいたということにも驚いたものよ。百年ほど前の豪傑は一昼夜をかけ、なんと千本ほどを射たというから想像もつかぬ。だが、射通すことのできた数は六割ほどであったらしい、などという話を牢人たちは寺の者から聞いていた。ただ、今は一昼夜などということはなく五ツ刻（午前八時ころ）から正午までの部と、九ツ半（午後一時ころ）から七ツ半（午後五時ころ）までの半日の部であるらしい。

それにしてもだな、この間におそらく二百本は射たねばなるまい。しかも並みの弓ではなく剛弓じゃ。寺の者の話のあと、牢人どもはそのまま申し入れをする者と、あきらめ顔で去っていく者とが、じつに奇妙な取り合わせであった。それはそうであろう。通し矢はその時分には廃れてきていたとは

いえ、半日を休みなく使つてやる、体力ばかりではのうて、気力も横溢しておらねばできるものではない。それゆえ、一日に二人、つまり三日間で六人が挑戦するということじゃが、その前に選の中に入らねばならん。そうして初めて通し矢に挑戦することができる。その結果をもつてして、牢人どもはどこぞへ仕官しようなどと考えておつたのやもしれぬ。

そのような案内を聞きながら、左京がいちいち領いておつたのが気になって、おいまさか、とわしが言うとな奴は、できないことでもなさそうだと、言うのだ。ちよつと待て、これをやるには並の弓ではできるものではないぞ。まことの剛弓でなければ無理だ。それにもう、三月ほどしかないことではないか。ましてや、われらには京の町の様子を詳らかにして報告せねばならん仕事がある。

おおかたそのような話をしたと思うが、左京はその間、長い廊下を飽きることなく見つめておつた。やる気のようにじやなと感じた。

その帰り、寺町にある書物問屋の山科屋に立ち寄つたのだが、そこで三十三間堂の通し矢について書かれた書物があつたので買ひ求めてみた。そこには、やはり剛弓でもつて一昼夜をかけ、どれほどの数の矢を射通したかなど、話を書いてあつたり、その際、あまりの気力体力の損耗によつて死者も出たなどともあつたのじゃ。まさに命懸けの所業じゃな。死者が出るとは穏やかではないの。まあその話は、かなり昔のことであるから、一昼夜かけて弓を引くなどということとはな

いが、それにしてもということじゃよ。

これは容易なことではないと三人で話をしたものであったが、左京はウム、ウムなどといちいち領いておつたよ。

その山科屋じゃが、主人が修二郎という、話をしてみると、なにかこう、学者先生のような風情の落ち着いた御仁であつたな。その娘に「より」という名の、いかにも京の女子というがごとき美しい人がおつた。左京はそのよりのどのにどうやら一目惚れをしたようであつたよ。無理もない、あれだけの美しい人はなかなかおるまいて。

紙や筆を買ひ求めようと何度か山科屋へ通ううち、左京は三十三間堂の話を、よりのどのに熱く語つておつたようだ。しかしな、話がうまく進んだとしても、さて濱松へ連れてまいるのはむつかしからう、とわしは思った。

清三郎か？

あれは京の町を真面目に調べておつたよ。おもに長州屋敷をな。長州屋敷は河原町通りで、本能寺の東側にあつての。われらの廬山寺とは歩いて四半刻もかからぬ近さじゃ。そこは、われらばかりでなく、所司代の連中が常に目をつけておつた。

ん、京都守護職か？

うむ、京都守護職はその時分よりまだあとの文久二年とい
うから、十四年ほど後にできたことになるかの。

ともかく所司代の管轄は広く、京ばかりでいうて、伏見や
そのずっと南の奈良などに及んだよううて、手が足らぬこと夥
しい、とよく耳にしたものじゃった。それは河原町通りを行
き来するあいだに、何度か見かけた所司代の者と思しき下人
に話を聞いたりしたものじゃよ。公家屋敷に出入りする者の
後を尾けていくと、長州の屋敷に戻って行くのが多かった。

その者たちの名前はわからぬよ。せいぜい人相や風体を覚え
ておくことであつた。そんなことで、あの公家屋敷の主はだ
れそれ、などと調べておつたが、牢人どもはそこへ入るふり
をして、ただ通り越し、そのまた奥へ行くなどということも
度々での。ただ、町屋の者たちも案外口が固くて、尋ねても
本当のことは言わぬ。面倒にかかわりたくない、というのが
本音であるうよ。その当時、武鑑もでておつたが、これは大
名や幕閣の主だつた武家がわかるだけで、あまり役にはた
なんだ。公家屋敷へ出入りする者は、見たところの風体では
あまり上級の武士には思えなんだ。察するところ、脱藩者か
下級の侍であつたらうよ。しかしな、そのような連中が暗躍
する資金は、だれがどのように面倒をみていたのか、わしに
は皆目わからなんだ。考えてもみよ、あれだけの不逞浪士が
動き回つておつたのだ。そんな連中を使いまわす金はどうな
つておつたのか。不思議なことであるの。

うむ、おぬしも少しは飲んでおるか。いやかなりいけるく
ちではないか。

左京も、酒は好きであつたな。度を過ごしたこともたびた
びあつてな。お互い酔っぱらつて京の町をふらつたこと
も、今となつては懐かしいものじゃ。

さて、三十三間堂じゃが、そこでは稽古などできぬから、
御所の南にある、濟寧館という古い道場でやることになつ
た。そこも廬山寺に教えてもらひ、三人で行くことになつた。
そこはなんでも、格式のある道場らしく、古くても構えがた
いそうなもので、またきれいに磨きぬかれておつたよ。わし
などは、格式などというものは好きではないがな。まあ、廬
山寺の住持の口利きじゃから、できるだけ丁寧な言葉でもつ
て接することにした訳での。

ともかく、その道場での稽古は所謂、礼に始まり礼に終わ
るを絵に描いたようなやり方だな。それはそれは、格式をま
ことに重んじた稽古であつたよ。わしにとつては、かなり煩
わしく感じたの。ま、それよりも、剛弓とはどの程度のもの
かと、その道場にある弓を見せていただいたのだ。拝見して
いくと、これはと思う弓があつた。なるほど、剛弓じゃ。三
人で顔を見合わせ領いた。この弓ならば射通すこともできる
かと、左京はその弓を引いてみたいと申し出た。

すると、案外なことに、どうぞお使いくださいと言われ、
左京がその弓をもつて的に向かつたのだ。わしは清三郎と二

人、後ろで心配げに見ておつたが、左京はやや苦しげにそれを引いた。引いてはみたが、馬手（右手）が所定の位置までいかず、見たところややあまいままで矢が放たれてしまった。その弓の撓り戻る音と矢飛びの羽音が、ごおつとも、びしつとも、ともかく大袈裟かもしれないが、凄まじい音を立て、剛弓とはこれほどのものかと思つたものじゃつた。一本射ち終つただけで、左京は大きく息を吐いた。そうして的確をよく見ると、矢がかなり深く突き刺さつて、しかも的の壊れ方が尋常ではなかつたの。その剛弓の威力たるや、言うまでもないが並みの弓を圧倒しておつた。

左京がころなしに、肩を落として後ろにさがるや、これが剛弓か、と言つた。清三郎と、どうだと左京に問うと、うーむ、としか言わなんだ。おそらく想像以上のものであつたことは確かじゃの。そこで、わしも引いてみようとその弓を持つて的に向かつた。ところが、引き始めからして、物凄い力で弓が戻ろうとする。なんと一杯まで引く。引き留めて的を狙おうとした。が、矢が勝手に飛び出してゆくような錯覚を覚えた。いやはや、剛弓とはそれほどのものであるの。こんな弓を使いこなすことなどできようか、とそのときには思つたものじゃよ。

おぬしも飲んでるわりに、顔色は変わらぬようじゃな。うむ、左京によく似ておる。

その弓を三十三間堂で、朝から昼までひくとなると、どれほどの体力気力があるものか。濟寧館での試し射ちで、見当がつかぬものでもない。さすれば、新しい弓を買ひ求めようと、濟寧館の紹介状を頂き、東山八坂の山口堂に参つた。そこで剛弓と思しき弓を見定めてみると、見たことのある女子が入つて来た。山口屋のよりどのであつた。左京がいち早く気付き、これはこれは、などと丁寧挨拶をしておつた。聞くところによると、なんでも、山口堂では紙や筆などはすべて山口屋から取り寄せているとのことであつた。あまり長いこと話している訳にもいかず、用を済まして出ていくよりのを、左京は門口まで見送つておつた。わしと清三郎はそのとき、顔を見合せて目で笑つてしまつたがの。

ともかく弓じゃの。三人で見たとこころこれぞ、というのがひとつだけあつた。その弓は本弭もはすに「山」と読める刻印があつた。ということは、その山口堂で作られたものであるということにほかならぬ。そんな訳で、早速その弓を買ひ求めることにした。なかなか高価な弓で、たしか三両ほどであつたという記憶がある。

ところで、通し矢の稽古だが、うまいことに濟寧館の東に遠的の練習場があつた。なるほど、京の町であるな、かなりの者が通し矢に挑戦するのであろうよ。設えられた距離は六十間の上はあつた。射位から安土の的までの両側は柵と板で囲まれておつて、安全な形になつていたの。

さて、左京が一揖して弓を引き始めた。かなり苦しそうな

容であつたの。放たれた矢が轟音を放つて飛ぶ。しかしそれが的の数間手前で地を掃いての、左京が溜め息を吐いたよ。なるほど、道場での射と違って弓手を上げなければならぬだが、修練とは面白いものじゃの。おぬしもやっているからわかると思うが、出来上がった型を変えるのは容易なことではないものだ。ともかく、気を取り直して二本目に臨んだ。一本目より弓手をこころもち上げ、放つた。すると今度は的の上、二尺ばかりに突き刺さつたのじゃ。わしと清三郎が、左京、いいじゃないかと声をかけたが、左京は、弓手の位置が思うように決まらぬ、とほそつと呟いた。いやいや、まだ二本ではないか、弓の握りのどの位置に的が見えるかと聞く、拳の真下に的をもつてきたという。ならば、指一本分下げてみたらどうかなどと三人で握り具合を確かめてみたのだが。

ともかく、尋常の弓ではないので数を頼みに引いて慣れるしかあるまい、ということになり、次々と、と簡単にはいかないが矢数を増やしてその日、およそ三十本ばかりで切り上げた。的中したのはまったくなかったが、それでも半刻は充分かかったらうよ。

左京の様子か？

そりゃもう、かなりばてておるようであつたな。たかが三十本と思うじゃろうが、剛弓とはそれほどのものである

な。それも、一本でも中るのであればまた疲れ方も違つたであらうが。

夕刻、廬山寺に戻ると、やけに腹が減っていることに気づいて三人で台所に行き、晩飯を食っていると、先達の目付が一人やつてきた。

その堀川が、おぬしたちはなにか、通し矢の稽古をしておるのか、と聞いてきての。どう答えてよいものか、三人とも顔を見合わせたまま、口の動きを止めてしもうた。

つつきり小言をもらうモノと思つていたが、案に相違して堀川曰く、稽古にはたくさんさんの矢が入用であらうからそれがしの矢を使え、あとで部屋に取りに来るように、とのことであつたよ。ほつとして飯をかきこんだ。このときの飯はうまかつたの。

さあ、次の日から夕刻前になると濟寧館へ通いだしての。ともかく稽古じゃ。三人で代わる代わる弓を引く、というよりも左京に存分に引かせ、左京の休む間に清三郎とわしも使つてみた。そうして日暮に的が見えなくなるまで稽古じゃ。これを十日ほど繰り返しっていると、不思議なことこの剛弓がだんだん並みの弓のような感覚になつてくる。いや、若い時分のことであるゆえ、慣れることができたのではあるまいか。

うむ、飲んでおるかな？

おぬしも習い始めの弓というのは、まともに引くことは難しかったであろうよ。若いということは、うむ、すばらしいの。わずかな間にそこまで上達することもできるが、もはやこの年になると、慣れ親しんだことにはどうにかなるが、新しいことにはなかなか。

京の町のことが？

のちに、本当に騒がしくなるまで以前のことであったゆえ、日中はさほどの混乱は感じなかったの。だが、夜になると、どこからともなく呼子を吹く音が聞こえたりもした。捕りものなのかどうかはわからぬがな。

先にも言うたとおり、二百五十年あまり続いた徳川の世がもはや保たなくなってきたのは、世間でも何かと噂にはでていたのであるよ。だがそうであっても、後に幕府が瓦解するとは、そのときには思いもつかなんだ。どうしてあのようなことになってしまったのか。巷では慶応四年の一月、鳥羽伏見の戦の折り、大坂にあった圧倒的な幕軍の総大将、慶喜公が江戸へ逃げ帰ったから幕軍は大崩れしたのだとか、薩摩や長州が徳川に代わって天下を取りたいのだとか、それには公卿どもが暗躍していたのではないか、などと云われておったがな。慶喜公は国の混乱が内戦を引き起こしてはならぬと考えていたのかも知れぬが、今となっては新政府はそんなことにはなにも発表などせぬからの、よくはわからぬ。ただ、

薩摩は雄藩であつたらうから、軍資金も豊富であろうかも知れぬが、長州はどう見てもそんなに豊かであつたとは思えぬ。豪商と云われた京や大坂の商人が援助したのか、あるいはアジアに多くの植民地を持つ白人どもが武器を提供したのか、不思議な話じゃな。

そもそも慶応二年の十二月の初めに慶喜公が將軍に就いて、なんとその月の下旬には孝明帝が亡くなられてしまった。孝明帝は徳川に随分な信頼を寄せられていたようだが、なんでも噂によればその孝明帝は亡くなられたとき、体の各所から出血されていた、これは病死とは違うのではなからうか、何かを盛られたようだ、などという。これはあくまで噂ではあるがな。わしが考えるには、孝明帝は下級公家どもの云うことにあまり聞く耳を持たれていなかったらしいゆえ、何かあつてもとは思うが。いや禁裏の中のことゆえ本当のこととはわからぬ。

翌慶応三年十二月に王政復古の大号令があつて、後にそのような戦になつたのだが、それとて理不尽な話ではないか。徳川を倒す、ただそれだけの、大義などない戦ではないか、戦国の世でもあるまいに。この濱松藩でも、御三家である尾張の慶勝公から、早くから督促が来ており、討幕軍に恭順せよ、謂ば黙つて通せと云うて来たのだ。尾張徳川家というが宗家に弓を引くなどとはわしには理解ができぬ、そのような考えの違いはどこにあるものなのか。わしは家康公を神君とは思つてもおらぬよ。しかしそのような情勢の中にあつて

も、徳川に忠義を尽くし、負けたとはいえ会津の殿様は偉いものじゃよ。見事な戦をしたものだ。それに引きかえ、戦のあと長州の奴らのしたことは、なんと容保公を下北半島の不毛の地へ、有体に言うなら、島流し同然のことをしおった。そこでは畑や田もできず、餓死者が続出したというではないか。

ともかく、尾張の殿様から、その督促が来て、我が藩井上家でも侃々諤々の討議がなされた。わしなどは、どうして錦旗などといえども黙って通さねばならぬのか、などと反対しおってな。弓矢の百本もお見舞いしてやろうかと本気で思つたものであった。しかし下級武士のこんな意見はそもそも云えるはずもない。ましてそんなことをすれば朝敵となるのだ、と云われれば押し黙るしかあるまい。まことに口惜しいことであつたよ。あとになってみれば、その錦旗もどうやら岩倉どもが帝のご意志とは違つて即席に拵えたモノらしく、偽物ともつぱらの噂であつたよ。

かようななか、尾張への返事はさうとうあとに引きのばして、結局は神主を中心にした遠州報国隊などというものが結成され、怪しげな錦旗について行つたが、武士はまずいなかつたの。そりゃさうじゃろ、我が藩は殿様が老中まで務めた譜代の大名なのであるからの、武士ともあろうものが軽々しく掌を返せるものかよ。わしらは下級武士とはいえども、腹が立つてしかたなかつた。であるから、尾張の殿様の顔を立てる気にもならず、かといつて錦旗と一戦交えるわけにもま

いらす、忸怩たる思いだけが残つてしまつた。あのときは摩訶不思議な世の中になつてしもうたと思つたものじゃ。

うむ、三十三間堂じゃつたな。

さて、どうにか剛弓を引くこともできるようになつた左京を連れ、三人で三十三間堂の廊下へ立つてみた。初めに見たときとは違い、なぜか向こうがあまり遠くに感じなかつた。いや、面白いものであるな。遠くの的がはつきりと射程の内にあるような気がして、これならばいけるのではないかと、三人の意見が同じであつたよ。あとひと月ほどで始まるのかと思うと胸の昂鳴るのをおぼえたものじゃ。早速、庫裏へ行き申込を終え、堂内を一巡りして宿所へ戻つた。

さうこうしているうち、例の濟寧館の遠的場で左京がかなりの矢を的中させることができるようになっての。およそ五割の上をいつたのではなからうか。たいしたものじゃよ。清三郎もこのままいけば、勝利も夢ではなからうと喜んでおつたが、だが勝ちを制するには六割以上のものでなければな。

稽古が佳境に入ってきたころ、左京が肩を痛めたようだと言いだした。や、かなり無理を通していたからなと、正直思つたものだ。とりあえず冷やさうということになり、桶に水を張つて手拭を使い、休みながら稽古を続けた。初秋とはいへ汗も出てはいるが、左京の肩が少し熱を帯びていた。そこへ偶然通りかかつた書道具を抱えた例のよりののが、その様

子を見ており、これはいけませんなどと云い、提げていた袋の中から膏薬を出し左京の肩に貼り付けた。いやはや偶然とはいえ、なんだか不思議な光景を見せられた気がしたものよ。

こうなれば左京の熱も上がりっぱなしになるのも無理はなからう。それを見て、わしは清三郎に、さてと今日はこれで行き揚げることにするか、と声をかけ、左京を残して二人で廬山寺に戻った。すると、作事方の田辺雅之助、吉川半七郎、松本伸兵衛が旅装を解いて休んでおった。じつは三日ほど前、飛脚の書状によってこの三名が上京することは知っておったのだが。おお、久しいのうと、たがいに声が弾み、夕刻も近くになっておったので台所にゆくことにした。

この三名の名前も聞きおぼえがあるう。さよう、弦友舎の先輩であり、年も同じじゃ。こうなるとまずは酒になるの。

田辺たちの云うことには、やはり京の街の動静を見て来るようにと達しがあつたらしい。まあ悪く言えば、下級武士の使いまわしで、なにか事があつても、たいした扱いをせずともよいという配慮じゃの。だがそれほどに藩では京の様子を重視しているようであつたの。しかし、この時分では、先にも云うたようにまだ京の空気に、さほどの混乱は見受けられないんだ。さらに我々三人は八月の下旬には濱松へ戻るようにとのことであつたな。京詰めの交代と云う訳じゃな。そうか、それならば三十三間堂もなんとか間に合うかと。それにしても左京の奴はおそいな、ちよいと見てまいると、下駄で寺門の前まで行くと、左京がこちらに向かつてくるのがうす暗が

りのなかに見えた。

遅くなつたなと声をかけると、いやなに、よりのを寺町まで送つて来たのだという。やれやれどうやら本気のようにあつたよ。いやいや、おぬしもなかなかだの、まあ一杯やうではないか、田辺たちも来ておるぞと云うと、おお、と云うや真直ぐに台所に向かつての。京の初秋の澄みはじめた空気が顔を爽やかに撫でていったのを覚えておる。

いよいよ八月も下旬、通し矢の挑戦者を決める選が行われる日がまいった。およそ五、六十人の者が三十三間堂に集まつておった。その連中は、てつきり武士だけであろうかと思つていたが、中には町人もおり、あるいはどこそこの偉い身分のありそうな侍もおり、雑多な集団であつたよ。左京も緊張した面持ちで出番を待つておった。むろん、田辺たちも応援と称してついて来ておった。

さて、寺のどういふ立場の者かはわからぬが、記載された名前を読み上げ、二人ずつ廊下の外側に並ぶよう指図を始めた。ときにまだ日差しが強くなる前の早い時刻で、五ツよりまだ前であつたと記憶しておる。試技は一人四本で、二本は当てなければ落選となる。初めに呼び出された二人が縁の外側に立ち、草履をはいたまま、あるいは足袋の状態での向かい射ち始めた。ほとんどの者が庇に当てるか、的の前を掃いたりしておった。やはり、まともに的中させるのは難しいのであるな。そのうち、立派な体軀をした若者が立ち、射ち始めた。剛弓をぐいぐいと引き、ずばりと的中させた。四本

のうち二本を中て、選に入ることとなった。周りの者たちは、ホーと感嘆の声をあげる。だが、拍手はせぬよ。今どきの者は、御一新のあと西洋にかぶれたのか、きょうびはなにかやたら拍手などするが、そのころはそんな習慣はなかったのじやよ。

さて左京じゃが、呼ばれて射位に立つと緊張はしておったろが、顔つきは平静のまま、落ち着いた風で的を見つめつつ引き始めた。弓がギリギリと撓り、ちょうど好いところで馬手が止まった。瞬間、いけるとわしは思った。矢が捻りを立て、的の端ではあつたが中りを得た。よしつ、吉川も思わず声が出ていたの。二本目も同じような位置に中り、これで選に入ると確信すると、気が楽になったのか三本目も中ててしまった。四本目は的の上二寸ほどであつた。射ち終わつたあと、上気はしているが晴れやかな顔をしておつたな。結果、選に入つたのは左京を含め四人であつた。三本中てたのは二人で、あとは二本という事であつたの。このため、この四人で明後日の通し矢に挑むこととなった。よいか鉄之助、あれだけの人数でただの四人ばかりじゃよ、通し矢というのはなかなか簡単なものではないの。

かような訳で昼前、廬山寺に戻るとまずは堀川たちにも報告し、明後日は休みをもらうこととした。まだ選に入つたというだけであるから、祝勝会などというモノはやらなんだ。それでも晩飯時には堀川や村中といった目付役の者たちがささやかな酒と肴をふるまってくれたのじやよ。こうなると明

後日は何が何でも勝たなければ気が済まぬ、ということになってしまつたよ、下級武士ではあるがな。

左京の肩の様子か？

うむ、まあまあではなかつたかの。よほどの膏葉が効いておつたのではあるまいか。濟寧館でのがあつてからというもの、この廬山寺にも、よりののはたまに顔を出してくられては膏葉を置いていつてくれたからの。左京もまんざらではない体で、短い会話はしておつたな。

翌日は疲れない程度に稽古をし、明日に備えることとした。秋の月が九日目ですし太つて輝いておつた。

いよいよ通し矢の当日の朝、空は澄みきり遠く鴨川あたりから鳴の声やらが聞こえておつたな。廬山寺を六つ刻（午前六時ころ）過ぎには出発し半刻もかからず三十三間堂に到着した。この日、通し矢は八月十日から本来は三日かけての予定であつたが、今回の挑戦は四人のため二日間となった。午前で午後で一人ずつでな、左京は初日の午後の部となつておつた。

午前の部、一人目の射が始まつた。長廊下の南端を射位とし、立射ではのうて、半ば座り込むような形で射つのかな。それは立って普通に弓を起こしてゆくと庇に弓が当たつてしまふからの。少し窮屈な感じもするが、しかしおよそ二百本

近くを射つのであるから、そんな形がよいのかもしれない。傍らには、これは寺で用意してくれたと思われる矢籠に百本くらの矢が入っておった。これが無くなる前に矢返しをするのじゃろう。

一人目が北側に設えた的に向かつて射ち始めた。慌てておる様子もなく、ただ淡々と射つておる。時おりのを外した嫌な音がある。あの音はいつ聞いても嫌なものじゃの。まるで的が嘲てるように聞こゆる。それから看的は、的の手前二間ほどの部屋の中から見ておった。記録の役はたしか四人であつたと思うが、正確につけているものだよ。

およそ一刻でやはり百本くらいであつたかな、的の交換をし再開する。的の中はおそらく半分くらいであろう。後半には疲れが出て、少し的の中が下がるとみておると、やはり外すことが多くなつてきた。結果は百九十二本の内九十五本が的中であつたよ。おおよそ半分だが、なかなか見事なもんじゃよ。

さて、昼飯のあと左京の番となつて、ゆつくりと廊下の定位置に腰を下ろした。九ツ半（午後一時）丁度の太鼓の合図に合せて、一本目を幸先よく的中させ、まずは気を落ち着かせたようであつたな。あとは流れにのせて次々と矢を放つてゆく。時おり、的粹を外した時にはカチッと嫌な音がする。そのとき見物のうしろから、アツと声が洩れたので、振り向いてみるとよりどのであつたよ。膏薬も持参していたのかもしれないぬぞ。これはこれと思つたものよ。

ともかくも、一刻を過ぎると左京も疲れが出始めたものと

みえて、額にうつつすらと汗を浮かべ、肩で息をするようになっての。心配になつて、的を替えるときに肩のことを聞いてみたのだが、やはりそうとうな痛みがでていたようだった。ただこれは決まりなのでやむをえぬが、試合中にはお茶や水の外には摂つてはならぬことになつておつた。やはり、これだけの剛弓となると、さすがに肩に響いてくるものなのか。並みの弓であれば百本の上を引いてもここまでの疲れはみえないであろうよ。

さように心配げに見守っている中、ともかくも左京が七ツ半（午後五時）に射終つた。廊下から下りてくる左京は足下が少し不安定であつたよ。だが気丈に振る舞い、弓を杖にするようなことはせなんだ。わしも近くに行き、左京の肩に軽く手をやったが、左京は顔をしかめて、ウツと声を出した。やはり相当痛めたのであろうよ、熱を感じた。

やああつて、看的の者から達しがあり、左京の矢数が二百十五本、そのうち的中は百三十本とあつたの。よしよし、午前の某よりずい分と良い結果であると喜んだものじや。清三郎も半七郎、雅之助、伸兵衛とともに、よしつ、これでいただきだなど云つておつた。だが明日の結果を見ぬかぎり、うかれてはおれぬ。

翌朝、二日目の通し矢を見に行こうと左京にも声をかけたのだが、まだ肩が痛むと云うので清三郎と連れだつて行くことにした。道中、おい左京の肩は大丈夫だろうかと、清三郎に問うと、うむ、時がたてば癒されるであらうよ、それに、

よりどのも心配して膏藥をたくさん持つて来られるであろう。ほお、そうなのか、では、ほつておこう。などと、他愛もないことを話すうち、三十三間堂に到着した。見ると、このあいだの立派な体躯の若者がすでに相当な矢数を射ていた。近くの町人にその数を聞いてみると、先程、百本を超えたようでございますな、それによく中つておりますよと云う。最後まで見ていると、結果は二百十八本の内、百三十二本の中であつた。うーむ、左京を上回つてしまつたか、それにしても、あれだけの剛弓を二刻にわたつて引き続け、呼吸の乱れもないとは。

その午後にはもう一人が挑み百八十六本の内、百二本の的中であつたことからすれば、左京にはなんとも惜しいことであつたよ。肩さえ痛めなければなと、まことに残念としか言ひようがない。

まあしかし、考えようによつては、勝ちをおさめることはできなんだが、あの三十三間堂で選りすぐりの中で亘りあい、しかも二番手ではあつたが負けたというほどのことでもなからう。これを機に左京はますます精進するであろうよ、と思つた。事実、その後に藩内の上級武士が集う経誼館との試合でも負けることはなかつたし、さらにそのあと、江戸に出て異人との試合でも負けはしなかつた。われらは下級武士ではあつたがな。

なあ鉄之助、おぬしはまだまことに若いから云うが、世間

というものは、やたら勝つたほうに讃辞やらなにやら贈るが、そんなモノはたいしたことないぞよ。そう、嘗ての鳥羽伏見の戦のあとの、御一新このかた、長州や薩摩の連中がえらいハバをきかせておるが、あんなモノは勝つたとしても、大義があつたとはとてもいへぬ。正義でもなんでもない。官軍なんぞというらしいが、巷では錦の御旗なぞ、あの若いというより幼い帝（明治帝）がそうお考えになつて持たせたなどというは無理ではないか、などというのが道理にあつておる。禁裏に向かつて大砲をぶつ放した奴らがなんで錦の御旗かよ。しかもそのころの、たとえば京都守護職の配下にあつた新選組などは、大変な働きようであつたにもかかわらず、今の世となつては狂犬の集団のようにいわれておる。新政府からしてみれば、憎んでも憎みきれない連中と映つておる。その証拠に近藤勇など武士であらうはずなのに、処刑されたあと三条河原で晒し首にされたではないか。あんなことは常人はせぬよ。奴らはあの池田屋の仇を討つたと思つていられるかもしれぬが、わしからみれば、新選組は公儀を遂行したにすぎぬ、今の世の云い方をするなら警察の働きをした、まっとうな人間ではないか。池田屋で不逞浪士どもを斬つたり、捕縛した、そのおかげで京の街が火の海になることもなく、帝にも災難がふりかからずに済んだではないか。

よいか鉄之助、世間さまというは、見えている人と見えていない人が、おそらく半々ではなからうかと思う。よく目を開けて深く観察することじゃよ。

左京の肩はどうなったかと？

うむ、剛弓とはそれほど凄いモノであるとわかつてはいたが、あれから三日ほどは痛みが強かったようだ。しばしば、よりどのも参られ、その膏薬が功を奏したのであろうか。さすれば、山科屋は書物問屋のほかに薬も扱っておったのやもしれぬ。さようなわけで左京も五日目からは本来の雑務をこなしておったよ。なにせ若かったからの、快復も早いものよ。京の街の秋風ばかりでなく、何かが心地よく肩を撫でているようでもあったな。

京の街の様子についての報告か？

うむ、このころは外国の船が頻繁に現れていたと聞いておったが、京の街ではさほどの騒ぎもなかったの。牢人どもを見かけることはあつても、すぐにそれが事件につながるなどということもなく、まずは嵐の前、ということであつたのかもしれない。ただし、禁裏の中はどのようになつていたかはわからぬよ、中に入つてゆく訳にもいかぬでな。嘉永の初めはそのような情勢で、まことに京の街が騒擾になつたのは、その五年ほど後のことであらう。

国許へは、京の街は今のところ平静を保っておるようであります、などというような見聞きしたことをしたためて報告

をしておいた。京の動静を見るには、あまり頼りにはならぬ三人であつたかもしれぬな。

うむ、おぬしもよう飲んだな。ぼつぼつ、酒も底が見えてきたようだ。

さて、八月も盆の送り火を過ぎ、われらは田辺たちと交代するかたちで、京の街をあとにする支度に取りかかることとなつた。そのあと急遽、左京が山科屋のご主人、学者風の修二郎どのに面談に行つた。わしは驚いたが、なんと、よりどのを濱松に是が非でも連れてまいりたいと申し入れをしたのだよ。しかし修二郎どののは、それは難儀なことにございますな、お断りするよりございませぬな、と首を縦には振らぬ。それはそうじゃろ、よりどのから話は聞いてはいたかもしれぬが、濱松などでは遠国すぎるし、京からみれば田舎すぎるわい。わしとてもそう思うわ。じゃから左京には、諦めも肝心だぞ、と再三云うたが、もう少し通つてみると申し、こちらの云うことには耳を貸さなんだよ。

左京の気持ちもわからんではないが、これは困つたことになつたものよと思いつつ、ほつてもおけぬと思ひ直し、わしも清三郎も同行し三人で山科屋へ何日か通うことになつた。はじめのうち修二郎どのの当然ながら洪面であつたが、幾日か過ぎると次第に三十三問堂の話にも耳を傾け出し、なにやら考え込む風になつていったの。それを見て、よりどのも横

あいから修二郎どのと奥方を説得するようになり、しまいには、とうとう学者先生の首を縦に振らせてしまった。そのとき袖に隠れて顔は見えなかったが、あの美しいよりどのの頬に泪がつと流れたようだった、と左京も述懐しておったよ。山科屋の跡取りはよりどのの妹御に婿を採ろうということになったらしいがな。

ともかく、その話し合いのなか、三十三間堂での顛末が修二郎どのの心を動かしただけではないかの。あの舞台で、剛弓に肩をあれだけ痛めながらも、最後まで諦めず射通したのだからな。まあ、口の悪い云いかただが左京には、弓のほかにこれといって特筆するものもない下級武士であるからの。いや、失礼。

おぬし、酒も底をついたようだが帰り道は大丈夫かの？
そうか、さすがが若いだけに元気はよいな。

というわけで、やっと話がまとまったのが出立の前の日であつたよ。いや、もう少し長引けば左京をおいていかなければならぬところだったの。きわどいことであつたよ。

出立するにあたり、廬山寺や濟寧館など世話になつたところの挨拶回りを済ませ、涼やかな秋風を背中に受けて京をあとにすることになった。半年にも満たないわずかな京での出来事であつたが、濱松でのんびりと勤めていただけではこの貴重な体験をすることもなかつたらうよ。

九条山を越えるころ、東海道の脇では風に打たれた芒の穂が波のように揺れておつたなア。登りきつたあと、皆で振り向いて京の街に別れを告げた。秋の蒼穹に二十五日の細い残月が白く見えておつたよ。
では往くとするか、大津の宿に日暮れ前には着かなければと歩みを速めた。

三人ではのうて四人でな。

完

(東区)

「市民文芸賞」

夜の散歩

鈴木啓之

高校の同級生が十数人集まった、気の滅入る飲み会だった。定年も過ぎ、久しぶりに友の顔でも見ようかと気軽に参加したのだが、現役時代を妙に引きずった人間関係の生々しさ、過去の栄光自慢に興ざめて、一次会で早々に引き上げさせた。

歓楽街を少し離れた路地を駅に向かって歩いてみると、その店に気付いた。「飲みなおして気分転換だ」薄暗がりの中、金色の横文字の書かれたドアを開ける。すぐに受付カウンタ―があり、黒服がいきなり一万七千円を要求し、数人の若い女性の写真を提示して、「どの子にしますか？」と聞いてきた。バーだと思つてドアを開けた自分の間違いに、その時にはもう気付いていたのだが、いまさら「まちがいでした」とも言い出せず、その中の一人を指差した。

「部屋に行ったら女の子に二万円渡してください」と言わ

れ、ソファ―だけが置かれた、殺風景な待合室に案内された。「予想外の出費になったなあ」と、ぼつんと一人こまねいていると、五分ほどでドアが開き、ネグリジエの女が姿を現した。ぶつきらぼうに「お客さんこつち」と廊下の奥を指差した。茶髪にエクステまつげの、いまどきの娘なのだろうが、先を行く後ろ姿がけだるそうで、投げやりな様子だ。

「トイレはへいき。」と聞いてくる声にも気遣いは感じられない。せまい個室に案内され一万円を渡すと、簡単な礼を述べ、デコメされたきらびやかな財布に丁寧にしまいこむ。何か飲むかと聞かれたので、ビールと答えると「アルコールはないの！」とウーロン茶を出してくれた。

小さな湯船にはもう湯が張られていて、横の洗い場で手際よく洗面器に泡を立てると、「脱いで」とためらいもなくシヤツから脱がされた。出かける前にシヤワーを浴びてきたの

で、加齢臭はないはずだなどと思いつつ、促されるままにイスに腰を下ろす。泡だったボディースボンジで陰部を洗われ、湯船で菌磨きとマウスウォッシュを促される。まさにベルトコンベアーに乗せられた、まな板の鯉だ。

その間にもエアーマットが用意され、いよいよ本番が始まるのだが、一向にジュニアにその気配が現れない。女が持つる技術を駆使してがんばるのだが、暖簾に腕押し、ぬかに釘のジュニア。さつきまでの飲み会で、バイアグラが話題になり、小会社を経営する男が海外で購入したその薬の効用を自慢していたのだが、その会話が蘇った。

これは酒のせいなのか、歳のせいか、はたまた特異な経験にジュニアがひるんでいるのか、などと考えているうちにめんどつくさくなってしまう。

「もういいよ！」と股間でがんばっている女に声をかけると、「そうね」とにつこり笑った顔が、まだ幼いことに気づいた。バスタオルを腰に巻いてベッドに腰を下ろし、「いくつ？」と聞いてみると、「もう二十歳は過ぎていいるから、犯罪じゃあないよ」とあつげらんとした答えが返ってくる。

「なんでこんなところで働いているの？」と問いかけると「学費を稼いでいるの」としおらしく答えるのだが、どうみても苦学生には見えないし、知性のかけらも感じられない。

だまって聞いていれば「わたしね、母子家庭なの。小さい頃パパが死んじゃって、ママも病気がちで」などと、調子に乗っていかにもといった話をしてくる。

「そうか、子どものころから苦労したんだ」と応えると「うん」とエクステのまっつげをばたばたさせる。すっかり酔いもさめてしまったので、帰り支度を始めると、あわててネグリジェをはおって、かいがいしく手伝いをしてくれる。死んだ妻もこんな風に、着替えを手伝う古風な一面があったの思い出し、ちよつと感傷的な気持ちになる。

そんな思ひ出に酔って、財布に残ったお金の中から、「食事でも：」と五千円札を渡そうとすると、「これは貰えないわ、そのかわりもう仕事が終わるから、ラーメン食べさせて」と見上げてくる。「といつても：」と躊躇していると、「お願い！」と手を合わせて、公営駐車場の、灰皿の設置してある一角を、待ち合わせ場所に指定し、押し出すように入り口のドアを開いた。

そのまま帰ってしまうこともできたのだが、なぜその夜、娘の言葉に従ってしまったのか良くわからない。妻の姿が思い起こされた。

妻を亡くして五年になる。退職したらゆつくり旅でもしようとして、話していた矢先のことだった。その二年後に三十八年間勤めた地元の鉄道会社を定年退職して、今は子会社の委託職員として暇をもらっている。それもあと二年だ。

川をコンクリートで覆った駐車場からドブの臭いがして、意識がもどった。タバコをやめて七年になるのだが、今夜はやけに吸いたい。

「おまたせ！」あどけない笑顔が目の前にいた。化粧とく

ずれた服の着こなしはどうみても夜の女で、表情とのバランスが悪い。

「知り合いに出くわしたら、なんと思われるだろうか？」後悔が先にたつた。おかまいなしに娘は腕を組んでくる。ズボンのポケットに両手を入れて、さりげなく拒否をするのだが、気づく様子はない。

そのまま引つ張られるように駅前到新しくできたラーメン店の暖簾をくぐる。ゆげで店内が曇っていることになぜかほつとする。

店主のいらつしやいの大声にとまどっていると、娘の「わたしはねえ塩ラーメン、ぎょうざ、生中」と、よどみない注文の聲が、店主の声を追いかける。さらに戸惑うわたしに娘は「ウン？」という表情で注文をうながす。「同じもので」と答えると、「を二つずつ！」とたまたみかけるように注文を入れて、カウンターのスツールに腰から座る。

「まだ名前も言ってなかったね。わたし平井ゆき。源氏名だけどね。ゆきって呼んで」とおぎなりの自己紹介。

「私は鈴木ってんだが」とわたしのほうは思わず本名を名乗ってしまう。

「下は？」と高飛車に聞かれたので「ヒロユキ」と、これも本当の名前が口をついて出てしまう。

「じゃあヒロクンって呼ぶね」と笑うので「それはちよつと…、鈴木さんとかおじさんでいいよ」と言うのと、「かわいくないなあ」と返ってきた。

いつのまにか相手のペースに乗せられている。現役時代には営業成績もよく、鬼の鈴木といわれたこともあったのに、「これじゃあまるで、はなたれ小僧だ」とつぶやきがこぼれる。だけど悪い気はしない。娘の奔放さがうらやましくもある。

ここで餃子をつまみにビールも、まあいいかと思えてしまう。長いサラリーマン生活の中にあつて、「まあいいか」で行動したことはなかった。

家庭生活もつましく、妻と二人の堅実な人生で心残りには、子どもに恵まれなかったことだけだ。しかし妻との外食などで、娘と買い物する同僚に会つても、妻の心情を思い、うらやましさを見せることはなかった。

「なにを考えているの？」と娘が聞いてくる。

「わたしにも娘がいたらね、こんな風と一緒にラーメン食べたのかなあと」

「娘さんはいないんだ？」

「うん、子どもも、今は妻もいない。つまり家族がいなくてことだ」

「ふーん、かわいそう。じゃあ私が娘だったら、このシユチユエーションでどんな話をするの？」

「まずは、その髪を何とかしなさい。それから、今の仕事はやめて堅実な仕事をしなさい…かな。それからタバコもやめなさい」

「ふーん、つまんないの。あとは？」

「あとは、いい男を見つけて結婚しなさい…かな」

「いい男って、どんな男？」

「そうだなあ、まず健康なこと。歯がきれいで、肌と髪の毛のつやがいいこと。太りすぎもやせすぎもだめだ。これが健康の条件だ」

「それから？」

「それから、収入がいいこと。年収は五百万以上かな。公務員とかで、安定しているのもいい」

「ふーん、つまんないの。おじさん生中おかわり」

「じゃあ聞くけど、君はどんな風に生きて行きたいの？」

「君じゃあなくて、ゆきって呼んでよ！ ゆきはねえ、小説家になりたいの」

「て言っても、大将こつちも生中おかわり。ラーメンのびちやうから早く食べなよ。世の中そんなに甘くないよ。半世紀前なら勤当ものの職業だ」

「ヒロクンこそラーメン延びちやうよ！ 小説家ってかっこいいじゃん。今のバイトもそのための経験かなあ」

「ヒロクンってのは、やめってくれ。さつき食べたばかりだから、お腹すいてないんだ。人間、普通に生きていけば色んな経験の山積みだ。わざわざ辛いことすることないよ」

「ふーん、つまんないの。じゃあパパって呼んであげようか。パパ」

「もつと悪い、おじさんでいいよ。とにかくもつと地に足のついた生活を考えたほうがいいと思うよ」

「ふーん、つまんなの。おじさんお勘定して」

「え、もうお勘定？じゃあ大将ごちそうさま」

「三千八百円になります」大将の目が気になるが、このあたりのこの時間、若い娘とすけばおやじの取り合わせは普通のだろうか？大将はいたって平穏な顔つきで、おつりの二百円を手渡してくれた。

店の外で待っていた娘はメンソールの火を消して、ごちそうさまと頭を下げた。意外に礼儀正しいので、ちよつと見直した。

「じゃあ気をつけてかえりなさい。娘ができたみたいで楽しかったよ」と声をかけると、「なに言ってるの。夜はこれからでしょ。浜まで歩くと、」ともう、リズムカルにサンダルの音をさせて、歩き出している。

もと企業戦士がこんな小娘に翻弄され、なんてさまだ。と思いがらも、従わざるをえない。小娘を放っておけない。という言い訳の影に、少しこの状況を楽しんでいる、自分を認めないわけにはいかない。

「浜までの道は分かるの？」と聞くと「川を下れば海じゃん」とビルの角を曲がって、駅南通りを東に進む。一キロほど進めば、中川にぶつかる。中川には遊歩道が海のほうまで続いているはずだが、電車もなくなるこの時間帯は、いたって危険なはずだ。十五夜間近の月明かりで少しは見通しがきくが、女の子が一人で歩くほどの明るさではない。

あとを追いかけて横に並ぶと、にこつと笑いかけてきて

「じゃあ、二千十六年九月十一日、夜の散歩に出発！」とあとけない。

暑い夏だったが、さすがに九月に入りこの時間の風は涼しい。浜までの五、六キロを歩き通す自信はないが、酔いのせいか、この状況にアドレナリンの分泌が盛んになってしまったのか、ままよという気持ちが勝ってしまう。

「おしっこ」とコンビニに駆け込んだ娘が、小袋にお茶のペットボトルと菓子を買い込んできて、わたしにお茶を渡してくれた。

「君は親と一緒にじゃないの、帰らなくては、親御さんは心配だろう？」と聞くと、「君じゃなくてゆきでしょパパ」と手をつないでくる。今度はそっと手を離し拒否するのだが嫌な顔はしない。

「ゆきはね、一人暮らしたから。言つたでしょ学生だつて」と言つて国立大学の工学部の名前を出す。

「失礼だけどそんな風に見えない」

「パパだったら、普通の人生を長く重ねたくせに人を見る目ないんだなあ。カミオカンデつて知ってるでしょ。理論でしかなかった、宇宙物質のニュートリノを捉えてノーベル物理学賞を受賞したやつ。あの光電技術にあこがれて入学したんだ」

「でも作家希望に転向？」

「そうリケジョなんて、リケジョ分かる？」

「理科系女子のこと？」

「リケジョなんて、つまらない子ばかり。一日中計算した

り、本読んでいるんだよ」

「それが学生つてもんでしょ」

「だけどね一度きりの人生じゃない。本当のパパみたいに早く死んじゃうかもしれないし」

「選択に間違いって事はあると思うけど、逃げつてケースも多い」

永代橋が近づいてきた。両岸に歩道はあるのだが、橋を渡つて左岸の歩道をゆきは選んだ。

「見て、もう萩の花がこんなに咲いている」

指差すほうを見ると、確かに萩が風に揺らいている。

「萩大名つて知っている？七重八重 九重とこそ思いしに十重咲き出づる 萩の花かな」

「お登りの大名が、太郎冠者に頼つて風流を嗜もうとして恥をかくという狂言だね」

「人を馬鹿にして楽しむみたいなストーリーは嫌いだけど、萩の花を見るとこの歌を思い出すの。人の才能つて思いがけず、いっぱいあるんじゃないかって」

「ゆきさん、才能を信じることは大切だと思うけど、才能を生かして食べていける人はごくわずかなんだよ。たいていの人にとって、こつこつと生きてゆくことが才能なんだ。どんなに都で馬鹿にされたつて、萩大名は田舎では成功者で、才能を生かした人なんだよ」

「ゆきさんと呼んでくれてありがとう。でもおじ様の考えつて保守的でつまらない」

娘がいたらこんな風に言い返されるのだろうか。土手から見える老人保健施設の看板の蛍光灯が悩ましくゆれている。

中川が右に大きくカーブをして、楊子公園に着いた。この時間なのに何人かの若者がスケートボードで遊んでいる。一人で歩かせないでよかった。と内心でほっとする。

「休みしましょう」とゆきはブランコに腰掛けて、コンビニ袋からチョココレートを取り出し、箱のふたを開けてこちらに差し出した。ここまでお茶を口にすることも忘れて歩いてきた。汗ばんだ身体に川風が心地よく、チョココレートの甘さが疲れを癒してくれる。

ブランコに揺れるつま先を眺めながら、ゆきが考え事をしてるように見える。こんなに大人っぽい表情もあるんだと横目で感心していると、「わたしね、人を殺したの」と、ぼつりとつぶやく。

「またまたー」と笑いでごまかせる雰囲気ではない。「ちよっと待って」とお茶を一口飲む。ごくりと妙に大きくのどがなった。

再び、目を合わせる。「たまたま知り合った女子大生から、殺人の告白を受けたさえない男が、その娘の罪をもみ消すために、東奔西走するってストーリーを、今思いついたんだけどどうかなあ？」と屈託がない。

動揺を隠すために「そんな荒唐無稽な話より、ヘッセの車

輪の下のよなな、青春の悩みへのた打ち回るような小説がいいと思うのだけだ」と言ったら、「あら、私が小説家になること認めてくれたんだ。嬉しい」とすかさず失言をついてくる。頭はよさそうだ。

「せっかく学費も出して、好きな学問をするために送り出してくれた親御さんに、申し訳ないと思わない？」と少し意地悪な質問を試みる。

「さつきも言ったと思うけど、父は自衛隊のパイロットで、私が小五のときに岩国基地で訓練飛行中に事故で亡くなったの。今の大学を選んだのも、父がこの航空基地出身だったからかもしれない。子どものころから浜松の話は良く聞いていたし、パパとママが結婚したのもここだったから」

「あの話はうそじゃなかったんだ。すっかり疑っていたよ。ごめん。それでお母さんは？」

「母は入院中。父の事故の後ね、すっかりまいっちゃって、今は山口市内の精神病院に入院しているの。だからね、ゆきは苦学生なんだよ」

「すっかり酔いもさめちゃったなあ。ゆきさんの事情は少し分かった気がする。だからといって、バイトの件もだけど、知らないおやじと飲み歩いたり、夜の一人散歩ってのは自棄のそしりは免れないと思うのだけだ」

「そうね、ゆき、時々、人生どうでもいいなあって思えることあるから。父が死んだ歳まであと十六年、ゆき、その先の

人生って見えないんだ。」そういうとゆきはブランコを降りて、また土手の遊歩道にもどった。スケードボードで遊んでいた少年たちの姿はなく、秋の虫たちの声が高まり、いっそう夜がふけた気がした。

右手に駅前の高層ビルの明かりが点滅している。「誰の人生も先は見えないものだよ」

「ねえ、おじ様の奥さんってどんな人だったの？」

「話し出したら、泣いちゃうもの」

「かわいいなあ、ヒロクン がんばり！」

「まあ、取り立てて話すほどの、結婚でも、結婚生活でも、女房でも、夫でもなかったけどね。職場で知り合って、そのころは会社一番の美人だったんだよ。よく笑うけど、決して目立たない。みんなに、女房にするならあの子って言われていた。だからなんであんな冴えない男と結婚したんだって、陰口をいっばいたたかれた。料理は上手だった。旅行が好きで年に一回は泊まりで日本中を旅した。四十年も旅すれば大抵のところへは行ったかなあ」ブランコで蚊に刺された足のかゆみが戻ってきた。

「まあまあお暑いことで、ごちそう話ですこと」

「まだまだつづくよ！ 資格もないのに、子どもが好きだからって、保育園でパートをずっとしていた。そのくせ子どもに恵まれなかった。穏やかな性格で母親になったら最高のお母さんだったと思う。保育園の子どもばかりか親からも慕わ

れていた。年賀状は私の倍ぐらいいは来ていた。私に来る義理の年賀状ではなく、どれも心のこもった年賀状だった。特に贅沢をするわけでもなく、慎ましい性格で、生活だった」

「すてきな人だったんだね」ゆきが立ち止まって西に沈みかけた月に目をやった。

「子どももないから、老後に備えて便利な街中の高層マンションに、部屋を買った。3LDKの小さな物件だったが、二人で住むには充分だ。めったに自分の意見は言わない妻だったが、高層階の部屋がいいと言い張ったので、ちよつと予算はオーバーしたが、妻の希望に沿う条件にした。妻は満足げで毎日海を眺めて、その日の天気を予想するのを楽しみにしていたんだ」

「奥さん毎日、浜を見ていたんだね」ゆきが、道端のワレモコウを摘んで髪に刺した。

「それからじきに、乳がんが見つかった。ステージ4で末期だった。まだ五十六なのに積極的な治療は拒んで。私は祈るように治療を奨めたのだが、充分に幸せに生きたと言って、ホスピスで静かに逝ってしまった。私の定年二年前で、退職したらいっばい旅行しようって、話していた矢先だった」くしゃみが一つ出た。

「奥さんとの思いでは、幸せに彩られているのね」ゆきの瞳の月が揺れている。

「そうでもないさ。二人とも子どもをあきらめるのにずいぶん時間がかかった。特に妻は旅行先でも、子宝、安産の神様

への参詣は欠かさなかつた。今なら人工授精って手もあるけど、当時はまだ神頼みの世界だったから。旅行が多くなつたのはそのせいもある。生に執着しなかつたのも、子どもがいなかったせいかもしれない」

「人生に、子どもってそんなに必要なもの？」

「無い物ねだりなのかもしれないな、どんな夫婦や家庭だって順風満帆はないさ。結婚、子育て、人生はあつという間さ。

ゆきさんは十数年後から先が見えないって言ったけど、みんな明日のことも見えなくて、ただ毎日を積み上げて気づけばお迎え……」

「やだなあ、ますますやる気なくなる。せつかくいい話を聞いたのに」

「それでもないさ。二人の生活は充実していた。今思えば幸せな人生だった」

「そういうところがいやなの、もう人生をあきらめていたみたいで……。思い出なんて、まだいっぱい作れるじゃない。老いるって生理的につてより、自分の気持ちしだいじゃないの！」

ゆきは本気で怒っている。どんどん早足になって、追いかけるのに精一杯だ。昔、妻が珍しく怒って、下駄の音をからころさせて、祭りの夜店を駆け抜けたことを思い出した。あの時も、しおれた心で浴衣のあとを追いかけたものだ。

「ごめんなさい」急に立ち止まったゆきが、うつむいてつぶやいた。

「人生って、そんなに甘いもんじゃないよね。おじ様の言うとおり、あつという間に歳を取っちゃうし、成し遂げられることなんてほんのわずかよね」

「いや、ゆきさん、こちらこそ老人のたわごとだった。これからの人につまらないことを言ってしまった。君たちには、明るい未来がある。もしできるなら私にもそのお手伝いをさせてほしいものだが……」ゆきの目がきらつと光った気がした。

法蔵寺橋の橋脚下にさしかかる。「なんだか、ここは気味悪いわ」と袖樹が腕を絡めてくる。「平気だよ」と橋脚の暗がり目を見ると、獣のような目の輝きがこちらを見ている。ゆきを守るべく自然に肩に手を回すと「アレー」と妙に艶のある声がゆきの口からこぼれた。それを合図に、その瞳が動き出す。草を踏む音に気づいたゆきが息を呑む音が聞こえた。

「なんだい、じじい、若い娘と夜のお散歩か？お嬢さん夜は魔界だ。じじいにかどわかされて、困っているなら、私が助けてあげるのだが」とその大男の声は、よどみなく私を犯罪者だと決めつけてくる。

「失敬な、あなたこそ何者でられますか？」むっとした私は、馬鹿でないいな言葉で応じてしまった。

「この娘さんとはそんなにやらしい関係でも、強制的手段を使ったわけでもなく、自然の成り行きで、人生などについて語り合っただけです」

「語るに落ちたなじじい。何が自然の成り行きだ。スケベ心が見えみえなんだよ。さつさと娘を置いて立ち去れ」

「さつきからなんですか！じじい、じじいって、あなただつて十分にじじいじゃあないですか！それにこんな夜更けに、あんな暗がりについて、十分に怪しい」

「あそこは自分の家だ。夜中にトイレに起こされてしまうのは、ほれ、あんただっていっしょだろう」

「まあまあおじ様たち、二人して私のこと心配してくれてありがとう。私はね、充分に大人だし、高校まで少林寺拳法を習っていたので、腕にはちよつと自信もあるの」

「その考えが甘い！世の中にはあんたのような小娘が、想像もつかないような、魑魅魍魎が跋扈しているのだ。気をつけることに越したことはない」

「男の人って老齢期に差し掛かると、みんな同じような心配性になるのかしら。つい三十分くらい前にも、ヒロクンからお説教をされたばかりなの。それよりも、おじ様は何でこんなところに、暮らしていらっしやるの？」

「自慢じゃあないが、ホームレスってやつだ。ダンボールハウスに暮らしている。住めば都だ。まあ立ち話もなんだから、お茶でも入れるか」

私の心配をよそに「えっ！いいの」ゆきの瞳が、夜の闇の中でも輝くのが分かった。

ダンボールハウスは意外に広く、ビニールシートや廃材を使って、頑丈に作られていた。コールマンのコンロで、ペッ

トボトルの水を沸かして、ドリップ珈琲を入れてくれた。

強面で、立派な体格をしたこの住人は「元ビニールハウスを作る職人で、袋井市内の温室メロン農家を渡り歩いて、糧を得ていたのだが、大手建築メーカーの進出で職を失い、気がついたら今の生活になっていた。そんな根無し草の生活だったから、嫁ももらわなかった」温かい飲み物は、人の心を開かせるのか安^{やす}さんと名乗ったホームレスは、高飛車な言い回しはそのままに、しみりと自分の過去などを語った。

「えー！でも納得できない。生活保護法も自立援助制度もあるのに、なんでこんなに不便で、危険な生活をしているの？それに、働こうと思えば働く場所もあるのに」

「若いのにしっかりした娘だなあ。意外に思うかもしれないが、実はこんな生活もまんざらではないんだ。四季折々が身近にあるし、何よりも自由だし、人に気兼ねすることもない。小さい家を守るのに三十年もローンに追いまくられて、会社に減私奉公。ごめんだね！」

「でもみんな寂しいんだよね。一人だと死ぬほど寂しいから…、誰も、窮屈な人生をがんばっちゃうんでしょ」

「そうだなあ、やっぱり一人はさびしいかなあ」

「わたしは、安さんのいう、まさにゴメンの人生を送ってきたんだが、今は一人だ。最後は誰も独りになるんだけど、あと少しだけ人生にあらがってみようかなあって、気になりかけている。それは誰かとだったり、誰かのためにだったら嬉しい」

「ごちそうさま！ ゆっくりできて良かった。珈琲もおいしかったし、浜まで歩く元気が出たわ」そう言うゆきは、もうサンダルをつっかけている。

「じい、お嬢さんを頼むぞ。また顔をだしてくれ」そういうと片足を引きずりながら安さんは、土手まで送ってくれた。

法蔵寺橋から、二人の会話は少し減ってきた。私は同世代を生きた、安と名乗るホームレスや、さつきまで一緒だった同級生のことを考えていた。「ささやかな幸せを求めて、人それぞれってことか？」潮の香りがふんと鼻をかすめ、意識がゆきにもどった。

「ゆきさん海は近いようだよ、潮の香りだ」そう声をかけて振り向くと、ゆきの体が揺れて、ふらふらと歩いている。

「ごめんなさい。ゆきね心臓があまり丈夫じゃないの」と土手の草原に座り込む。

「救急車、呼ぼうか？」思わず声がうわずってしまふ。

「少し休めは大丈夫。それより、ここでじっとしているから、なにかすてきな話を聞かせて」呼吸は安定しているし、顔色もそんなに悪くはない。

「…そうだなあ、私の人生は平凡で感動的な話ってのは無いんだが、学生の頃から宇宙に興味があって、仕事に行き詰ると、星や宇宙のことを考えては現実逃避していたよ。百三十七億年前のビックバンで宇宙が生まれ、四十六億年

前に太陽系が誕生、四十億年前生命誕生、北京原人が生きていたのが五千万年前、縄文時代の始まりは一万五千年前だ。膨大な宇宙と地球の歴史を見ていると、なんだか、目の前の悩みがすこくちつぽけなものに感じられて、気分が楽になったよ」

「あんまり数字が大きくてびんとこないわ」

「お金に換算すると分かりやすい。生命誕生四十億円にたいして、ホモサピエンスの歴史は二十万円ってね」

「私の好きな平安京は千二百円ってとこね。そして私は二十一円」

「その通り、私は六十三円、延々と命を繋いできた地球の命の歴史の中で、自分の生きている時代なんてほんの一瞬、だけどハッブル宇宙望遠鏡や電波望遠鏡を駆使して、宇宙の歴史をここまで明らかにしてきたのも、わたしの生きた時代なんだ。ニュートリノの小柴博士の研究もその一部だ。一生懸命働いてその研究費を担ってきたのは、私たちの納めた税金だ。だからね、ちつぽけな私の人生もすてたもんじやないのさ。なんてね」

「パパ、結構前向きな発言もできるじゃない」

「ゆきさん、みあげてごらん、もう天の川は西の空に消えていくけど、私たちの銀河系には二千億から四千億の太陽と同じ、恒星が輝いているんだ。地球と同じように恒星を回る惑星の数は、もうそれこそ天文学的な数字だ。だからきつとこの銀河系のどこかの星でわれわれと同じように、星空

を眺めている生物がいるんだよ」

「わあ！ロマンチック。その生物も、恋や進路で悩んでいるのかなあ？」

「きつと、先輩の生物から、辛気臭い話をされて辟易しているんじゃないかな。ゆきさんの時代には、直接その生物に今の疑問をぶつけられるかもしれない」

「あの星のどこかで、誰かが、私のささやかな幸せを祈ってくれているかしら……？」

「祈ってくれているさ」

「なんだか、ゆき、甘えなくなっちゃった。パパおんぶ」

「えー」

「だって、サンダルずれで足先が痛いんだもん」

「だけど！もうお年寄りにこれ以上の負担はかけられないか」そう言っ、ゆきは子どものように笑った。

「もう、空が白み始めてきた。海まではもう少しだ」腰を上げると、ゆきも両手にサンダルを持って、立ち上がった。

海浜公園には数台の車が止まっていた。浜辺に立てられた釣竿と人の影が影絵のように揺れている。ベンチに二人腰を下ろして、オレンジ色に染まってきた東の空を見ていると、もう四十年前も前、妻と二人、震えながら迎えた伊良湖のご来光を思い出した。

「よむいー」ゆきが体を寄せてきた。甘い若い娘の香りがある。ジャケツトを脱ぎ、加齢臭を気にしながらゆきの肩に

かける。

「すてき。ゆきが夢に見ていたシユチュエーション」ここで遠慮のない大あくび。

「それからねおじ様、わたしの名前、柚子に樹木の樹って書いて、ゆきって読むの、源氏名じゃないよ。平井柚樹、パパがつけてくれたんだ」そう言くと、私のひざを枕に、あつという間に寝入ってしまった。

海のオレンジは明るさを増し、日の出は間近だ。若い娘の体温と甘い香りに、我を忘れそうになっていた私に、海風がしっかりとしるつとつぶやいた気がした。わたしは大きなくしゃみをつつした。

「行つてきまーす」

「忘れ物はないね。マスクは？」

「今日は大切なレポート提出の日よ。これでゆきの大学院が決まるんだもの。ぬかりはないわ」

「スニーカーはふんづけないの！」

「それって干渉の分野に入るんじゃない。でも分かったー分かったー」

「返事は一回！」

「はーい」

柚樹の軽快な足音が廊下を遠ざかってゆく。

柚樹が大きな荷物を抱えて、エントランスに立っていたの

は、夜の散歩から三日目のことだった。

「おじさまが、若い子を応援したいって言うから、アパートを引き上げてきちゃった」と屈託がない。

「それでね、これが契約書」渡されたA-3の紙には、細かい字で二人の生活の決まりごとが書かれていた。

「待った！わたしは柚樹さんが、ここに住むことを承諾していない」

「だって、この間の夜は『私の未来を応援したい』って言ったもの。私にとって今一番の経済的負担は家賃なの、空いている部屋を一間、シェアさせてください。お願いします！」と手を合わせる。

管理人が胡散臭そうにこちらを気にしているので、「取りあえず…」と部屋に通じたのがいけなかった。

「ほらやつぱり、こっちの部屋が空いているじゃない」と亡き妻の部屋を発見すると、さっそく窓を開けて、「わあ！すてき海が見えるし、風が気持ちいい。奥さんもこの窓から海を見ていたのね」と、もうベランダに立っている。しかたがないので、紅茶をいれ「こちらで話を聞かせてください」と声をかけると、テーブルに腰を下ろし、角砂糖をゆつくり四つ放り込み、私の目を見た。

「ゆきね、この間の夜の散歩の頃、死んじゃってもいいかなあって思っていたの。だけどね歩き始めて、おじ様の言葉に反発したり納得したりしているうちに、父と散歩しているように思えてきて、おじ様の言葉が父の言葉に重なって、そ

の言葉に向き合うことができるようになってきたの。将来に希望や展望が見出せないからって、死ぬことはないか！生きていけば、何か成し遂げられることもあるんじゃないかって、思えてきたの」

「それでね、まず大学及び大学院は卒業することに決めたの。学費は例のアルバイトでためたお金で何とかなと思うの。それからね、作家も目指すわ。二足三足のわらじ、履いちやうの。光電のエンジニアでもって作家、かつこいいでしょう！」

「それからね、生活費は家庭教師のアルバイトかなんかで捻出するとして、どうしても家賃が足りないの。だから、お願いします」と深々と頭を下げ、勝手に契約書の説明に入っ

た。

「一番は絶対にお互いの生活を干渉しないこと。それから、共有で使える場所はトイレ、洗面所、キッチン、リビング」

「あいさつはどんなに疲れたり、機嫌が悪くても必ずすること」

「部屋をただでお借りする代わりに、共有部分の掃除は私に任せて」などなど、けっこう細かい気遣いがメモモされていた。

「ベランダはリビング前がおじさま、私の部屋前が私の占有、だからお互いの洗濯物がぬれていても、取り込むことはできないの」が追加された。

そんな風に、二人の共同生活はなし崩し的に始められた。干渉しないことを第一条とした契約だったのに「何か取り組むものがないと、ボケちゃう！」と知り合いの考古学の教授を紹介してくれたので、子会社の委託社員を辞め発掘事業の手伝いを始めた。

最初の現場は浜北の丘陵地帯にある、中世の砦の発掘であったが、なんのことはない一日中、掘り返した土砂を一輪車で運ばされた。

帰ってリビングに足を投げ出し「もう、身体が動かない。明日からは無理だ」と弱音を吐くと、血管の浮き出たふくらはぎをマッサージしながら「なんでも始めはそんなものよ。少し辛抱すれば身体のほうが慣れてくれるから」などと死んだ女房のような口をたたく。そんなわけで今は掘り起こしの作業は終わり、竹べらで薄皮をはぐように土を削っている。

教授はどうも、柚樹の前のバイトの常連さんのようなのだが、気さくで愛想もよく教授らしくない。配られた弁当は、おぼりながら「いい女だったよなあ」などと、スケベな顔で、なれなれしく声をかけてくる。「この男とだけは、友達になりたくはない」と思っていたのだけれど、しばしば街の居酒屋に私を呼び出す。ゼミの学生を前に「きょうだい」と呼んだり「あにき」と呼びかけてくるので、半分くらいの学生が私を教授の兄だと思っているらしい。

またある日、右足を引きずるようにして一輪車を押す、初老の大男を見かけた。「ひよつとして安さんですか？」と声

をかけると「おお、じい。あの後な、お嬢が、健康と生活を守る会の人と我が家を尋ねてくれて、ここを紹介してくれたんだ。今はグループホームに住んでいる」と屈託なく笑う。そして居酒屋の飲み会にもすぐに参加するようになった。

学生たちは、教授にも、長老の私にも傍若無人にふるまうこの老人を、ゴットと呼んでいる。ホームレスだったくせに、学生たちになぜか人気が、しゃくに障る。そして柚樹が現場に顔を出した時など「おーい柚樹、ここに座れ」などとなれなれしく呼びかける時、私のジェラシーはマックスに達する。

群馬に嫁に行った妹が突然マンションを尋ねてきた。コートを脱ぐのもどかしそうにリビングのイスに腰を下ろす。「兄さん、悪事はすぐにばれるものよ。いい年してなにやってんの。私、はずかしいわ」

「いきなり何を言いますんだ。小松の叔母さんの葬儀以来だから、半年振りの兄妹の再会じゃないか」

「叔母さんもいいときに死んだわ、こんな鈴木家のごたごたに巻き込まれなくて済んだんだから」

「悪事だのごたごただと勝手に言っているけど、俺はやましいことなんて何もしていないよ」

「まったく、どの口が言うんだか。若い娘を家に引っ張り込んでいるって、群馬までうわさは流れてきたのよ」

「引っ張り込むなんて人間きの悪い、シエアーだよ。いまは

やってるだろ」

「あきれた。あれは若い子のはやりじゃあない！」

まずいところに、柚樹が帰ってきた。

「ただいま！あら、お客様？…もしかしておじさまの彼女だつたりして」と初対面の客になれなれしい。

妹の目が二倍ほどに見開かれたのが分かった。

「あら、こちら様がくだんのおじようさま？わたしは啓之の妹の万理子です。あなたこんなおじいちゃんとシェアーっていうの？一緒に暮らして平気なの？ご両親は知っているの？」

「万理子ちよつとまちなさい。このおじようさんに罪はないんだ」

「おじ様も、妹さんもすぐまつとうな人たちですが、時代も文化も進歩しています。誰も一人ひとり欠点や不足のかたまりだけど、足りないものを補い合って生きてゆく。それがこれからの生き方、家族と言うのかしら？社会の最も小さな単位としての有り方だと思えます。昔は結婚とか家族とかの形に縛られないと、安心できなかったと思うんだけど、私とおじ様は敬愛と契約で結ばれた新しい家族なんです。生意気なこと言つてすみません」

「何を言ってるんだか解らないわ」

「万理子、よく考えてごらん。私は五年前に享子をなくして一人住まいだ。病気になることもあるし、何よりも寂しい。三つある部屋も一人では使いきれない。そしてこちらのお嬢

さんは小さいころに父親をなくされ、お母さんは長期入院中だ。大学を続けるには経済的基盤に乏しい。いや、お互いに都合がよければという話ではない。私には子どもがない。このお嬢さんと知り合つて、話したり、行動を共にする中で、わたしはこのお嬢さんを娘のように愛していると思えるようになったのだ」

「兄さんはそれで幸せなの？」

「ああ！この頃では柚樹さん、このお嬢さんの名前だが、の紹介で、古墳の発掘に行つていて。身体を動かすので飯もうまいし、若い学生と話したり、飲んだりするのもすこぶる楽しい。正式に入学して学位も取得しようかとさえ思っている」

「まあすてき！おじさま」

「いわゆるボケの始まり！調子こいてるつてやつだと思うけど、兄さんがそこまで言うんだつたら、しかたないわ。どこかで夕食にしましょう」そういうと、万理子はイスに脱ぎ捨てたコートを羽織つてもう玄関に向かっている。

「久しぶりの浜松だからうなぎが食べたい」という万理子の一声で、私たちは駅前うなぎ店の座敷に陣取つた。白焼きと肝焼き、サラダを注文した万理子は「まあ、柚樹ちゃんお引越し祝いでことなかんぱーい」とわが妹ながら、なんとという変わり身の早さ。ビールを冷酒に変えた万理子は、柚樹さんの生い立ちに涙し、ハンカチで、はでに鼻をかんだかと思えば、私たちの出会いをしつこく聞いてきたり、この飲み会もすっかり万理子のペースで進んだ。私の考古学の教

授にも興味を示し、さかんに「お会いしたい」とせがむのだが、私はお茶を濁して、うな茶漬けを注文した。「柚樹さん、もいかがですか?」「いただきまーす」察しのいい柚樹さんも、教授のことには一言も触れなかった。

すっかり酔いつぶれた万理子を、駅前のホテルに送り、私たちは身を寄せ合うように、夜の街をマンションに向かった。あの夜の散歩から二ヶ月、見上げる空にはもう冬の星座が輝いている。

「あの星のどこかで、パパ、ささやかな幸せを祈ってくれてるかなあ。」柚樹がぼつりとつぶやいた。

「祈ってくれてるさ」

私は平井柚樹に心を込めて、坂本九の「見上げてごらん夜の星を」を歌った。

見上げてごらん 夜の星を

小さな星の 小さな光が

ささやかな幸せを うたってる

見上げてごらん 夜の星を

ボクラのように 名もない星が

ささやかな幸せを 祈ってる

手をつなごうボクと

おいかげよう夢を

二人なら

苦しくなんかないさ

カップルが私たちの横を、怪訝そうな顔つきで通り過ぎて行った。私はいつそう声を高く歌った。

見上げてごらん 夜の星を

小さな星の 小さな光が

ささやかな幸せを うたってる

見上げてごらん 夜の星を

ボクラのように 名もない星が

ささやかな幸せを 祈ってる

(東区)

「入選」

ジョーンズさんの戦争

名倉 有一

まえがき

豊かな自然に恵まれたニュージーランドやその北方のフィジーと比べ、さらに北に向かつて連なる太平洋の島々が意識されることはあまりない。地球温暖化の影響で島が沈むとニュースになる時くらいではないか。第二次大戦が終わるまで、これらの島々はすべて大英帝国の一部だった。フィジーと同様にギルバート・アンド・エリス諸島は戦後独立して北のキリバス、南のツバルという二つの共和国になるまで、フィジー総督を兼ねる西太平洋高等弁務官が統治していた。一九三九年九月、ドイツ軍がポーランドに侵攻し英国が宣戦布告すると、自治領ニュージーランドもそれに続いた。太平洋では当初目立った戦闘はなく過ぎたが、翌四〇年のクリスマスの前、ギルバート・アンド・エリス植民地の司令部が置かれたオーシャン島やその西方のナウル島沖で、商船を装ったドイツ軍艦が貨物船を沈めた。両島とも化学肥料や火薬の

原料となるリン鉱石を大量に産する。このため翌四一年三月、ニュージーランドの首都ウェリントンで開かれた会議で、ニュージーランド政府とフィジーの西太平洋高等弁務局はギルバート・アンド・エリス諸島での沿岸監視を強化することで合意、ニュージーランド政府が要員と資材を用意し、西太平洋高等弁務局が彼らを任地まで送り届けることになった。本書は、この決定に翻弄ほんろうされたジョン・ジョーンズ氏略（一九二〇～二〇一七）【図1】の記録である。（本文中敬称略）



図1 ジョン・M・ジョーンズ
撮影場所：善通寺捕虜収容所
〃 時期：1942年
提供：Jhon M. Jones

第一章 戦前

志願

大恐慌が始まった一九二九年、一四三千人あまりの英国人が母国を後にしたが、ニュージールランド北島のオークランド港に両親に連れられて到着した九歳のジョーンズも、そのひとりだった。彼は今日でも人口の少ない同国の南島西部で成長し、当時としては幸運なことにクライストチャーチで電信技師の仕事を見つけた。翌四一年三月ころ、首都ウエリントンの東郵便局訓練施設での講習最終日、訓練主任から太平洋の島々でドイツの艦船を監視する一人無線局が開設されると説明された。ジョーンズは若く血気盛んな受講生たちは、勧められるまま次々にこの沿岸監視員に志願した。ワラスという年長の男だけが、もしドイツ人がボートで島に上陸し捕えられた場合の救助や補償について質問した。主任はあり得ないことだと笑い飛ばし、結局ワラス自身も志願した。南半球の夏が過ぎ、秋を迎えるころだった。

やがて彼らが配属されるギルバート・アンド・エリス諸島の北に広がるマーシャル諸島は、第一次大戦後日本の委任統治領となっていた。ドイツの同盟国である日本の参戦は時間の問題だと考えられていたから、日本艦隊がフィジー占領のために南下する場合、早期に発見し警報を発する必要がある。したがってドイツ船の脅威はまだ存在していたものの、

四一年半ばまでには監視の重点は日本の艦船や飛行機に移っていた。しかしこの変更がジョーンズたち沿岸監視員に伝えられることは開戦までなかった。

訓練

志願者はウエリントン市内の国際ラジオ局で無線機の保守点検法を、測候所で気象学をそれぞれ学んだ後、帰省して家族に暇乞い^{いとまご}をした。二一歳未満のジョーンズの志願には親の同意書が必要になる。太平洋でも戦争が始まると確信していた父親は渋ったが、結局サインした。再び集合した彼らは汽車でオークランド近くの陸軍基地に行つて伝染病の予防注射を受け、その結果重篤になった者が出た。代りにチームに加わった優秀だがやや弱いマッカーシーは、不運にも任地で命を落とすことになる。ジョーンズはハーン、ヒートン、ピアソールら三人と気が合い、仲良くなった。沿岸監視員のチームは七月一三日オークランドを出港、敵船を警戒して夜間は光が外に漏れない措置がとられた。一六日フィジーの首都スバに到着、宿泊施設は中心街から三キロ余り離れた陸軍基地内にあった。ジョーンズたち四人組は粗末な食事とベッドに驚き、シビリアンである自分たちに軍人が命令するのも不愉快だった。それで若い中尉が絶叫するのを無視して市内のホテルに移り、フィジー総督官邸にある空軍司令部での講習にはそこから通った。

自分たちの任務を話すことは厳禁され、任地の詳しい説明も

なかったが、街に出て熱帯で使う品々―衣服、半ズボン、シャツ、帽子などを購入するように指示された。タバコ、蚊除けの香油、珊瑚から足を保護するゴム底のズック靴もあった方がいいという。すべて一年分だ。彼らはアンテナを含めた無線設備一式、燃料、備蓄食料や日用品といった官給の物資に加え、こうした私物を持って任地に向かうことになる。

出発

七月一九日土曜日。朝のスパ港に集合したジョーンズたちの所属は、ニュージーランド郵便電信局⁴から西太平洋高等弁務局に変更され、年俸三〇〇ポンドが支払われた。それまでの三倍の額で、しかも課税されない。ちなみにこの年俸を日本円に換算した四八〇〇円は、日本陸軍なら少将クラス。埠頭^{ふとう}で彼ら待つビティ号は香港で建造されたばかりで、全長四八・五メートル、幅九・六メートル、排水量六七六トン⁵。高等弁務官が太平洋に広がる植民地を視察する際に使われる船だ。「大英帝国は威信のシステム」⁶という言葉そのままの船で、高級船員は船長以下九名。その内の若い機関士スタン・ブラウンは、後にフィジー海軍の司令官に上り詰める逸材。その他フィジー人やインド人の下級船員が六〜八名。正午過ぎ、軍人、弁務局、電信局など多くの関係者に見送られながら出港。

【図2】最終の目的地に沿岸監視員を降ろす九月一日まで、北に向かう航海が続く。

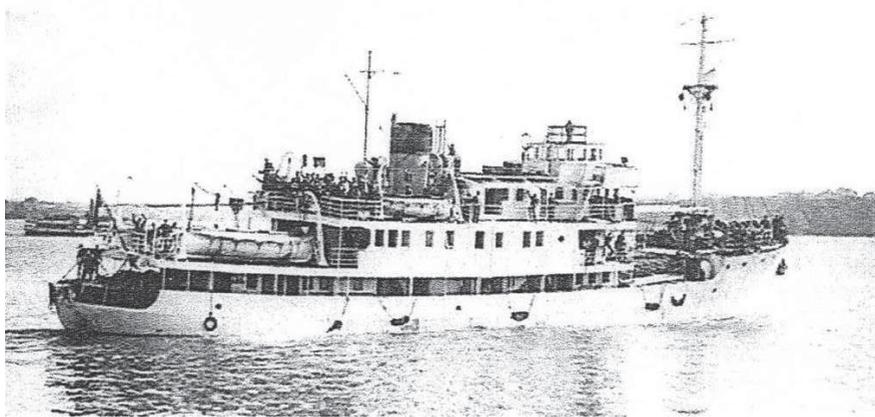


図2 ビティ号

撮影場所：フィジー島スパ港

＊ 時期：1941 - 7 - 19

New Zealand Maritime Museum 蔵

ニュージールランド軍の意向で非武装の兵士二名も乗船していた。未成年の監視員が駐在する一島の孤島に、年長の兵士各二名が同行する。植民地省側は兵士と現地人とのトラブルを懸念して再考を求めたが、参謀長が押し切った。ジョーンズは、ほとんどの島で兵士は電信技師や現地人とうまくいかず、失敗だったと断じている。兵士にとって、年下の電信技師の年俸が自分たちの約三倍だったことも不満の種だったらしい。船内は人があふれ、多くの者はあちこちに吊られたハンモックで寝た。しかし幸いなことにジョーンズたち四人組は、客室を与えられている。

出発した日の夕方、沿岸監視員と兵士は集合を命じられ、チームを組む相手を知らされた。上級電信技師ジャック・ホーガンが監視員に期待することを説明し、マーブ・コーナー軍曹が兵士に訓示した。そして配置先がギルバート・アンド・エリス諸島であると初めて告げられ、地図で各組が駐在する島が示された。出発前に提出した書類の宗教欄が、数カ月後ギルバート諸島に配置された要員の生死を分けることになる。ジョーンズたちカトリック信者は、その宗派の教会や信者が多いギルバート諸島の最北部。プロテスタント、メソジスト、英国国教会信者は中部と南部。エリス諸島も同様の基準で配置が決められていた。

七月二二日、初の上陸地となるエリス諸島最南端のニウラキタ島は大波のためボートが近付けず、断念。後日を期す電信技師と二名の兵士は、ビティ号で空しく航海を続けるしか

なかった。電信技師は毎日二時間、交代で無線当番を担当。敵に所在が知れぬよう、受信のみで発信はしない。ニウラキタ島を離れてフナフティ島に向かった日の午後、ジョーンズは数キロメートルしか離れていない船からと思われる、強いモールス信号を聴いた。急いで書き取り船橋に報告すると、アメリカ船籍だと分かった。しかし船長はドイツ武装商船と油送船間の通信ではないかと疑い、監視員を倍にして針路を北から西に変えた。ビティ号は一〇センチ砲を一門備えていたが、最初の試射の際に振動で船内のすべての鏡と便器にひびが入ったため使用されていなかった。さらに油をはじめとした多量の物資で船足が遅かったから、急ぎその海域を離れる以外選択肢はなかったのだ。

二四日に到着したエリス諸島の中心フナフティは、正にジョーンズが思い描いていた南の島だった。ココヤシの茂る珊瑚礁さんごしょうの島々が礁湖しょうこと呼ばれる広々とした内海を囲んでいる。許可が出て上陸すると、英植民地省駐在官の邸宅の先に三〇〇人ほどの島民の村があった。暖かい礁湖で泳いでから船に戻って夕食を済ませ、招待された島民の踊りを見物した。船内で販売される酒類は現代の海外旅行と同様に免税で、ビールが生ぬるいことを除けば文句はなかった。フナフティ局は全エリス諸島の無線基地の親局。白人の駐在官がいるので兵士は同行せず、電信技師二名だけを降ろしてビティ号は二七日に礁湖を離れた。途中、島民が運営している無線基地に立ち寄って、老朽化した通信機器の更新をすることも

あった。こうした島民の年俸は一四ポンドと、ジョーンズの六パーセント弱。しかし日本陸軍の軍曹並みだから、当時の日本の軍人の給与水準の低さが分かる。

ビテイ号の航海は続き、ジョーンズの親友たちが次々に船を離れて行つた。八月一日、ギルバート諸島のタマナ島でピアソール、十七日、クリア島でハーン、そして一八日にはマイアナ島でヒーナンがそれぞれ二名の兵士に伴われて船を降りた。これが親友たちとの永遠の別れになるとは、もちろん知る由もなかった。

三一日、ビテイ号はジョーンズの任地となる、マキン環礁【図3】北端のピカチ島に到着した。珊瑚礁の少し外側に停泊し、貯藏品や設備を大型ボートに積んで狭い水路を抜け、砂浜に乗り上げた。一年分の食料、タバコ、ガソリン、灯油、揮発油、送受信装置、アンテナ、電池、充電用モーターに私物も加わり、かなりの量になる。砂浜で、北部ギルバート諸島の植民地省地区行政官チャールズ・ウィリアムズが出迎えた。背はそれほど高くないが、がっしりとした体格で、日焼けして髪にはウェーブがかかっている。アクセントや人をそらさない話し方から、教養のある英国人だとジョーンズは感じた。ギルバート語を流暢に話し、現地人たちに陸揚げした物資を運ぶよう命じた。

ビテイ号はその日の午後出発して翌九月一日、ピカチ島に近い小マキン島に電信技師のマックスと兵士二名を降ろした。ここが英国領ギルバート・アンド・エリス諸島の最北端

で、日本領の最南端までは三五〇キロメートル。同じころ、日本が内南洋と呼んだこれらの島々を日本の學術調査隊が歴訪している。隊長は京都帝国大学理学部の今西錦司講師で、九名の隊員の中には当時は学生だった梅棹忠夫や川喜多二郎がいた。彼らはジョーンズたちのスバ出航より五日早い七月一日に横浜港を出てヤルトなど回りを、一〇月八日横浜港に戻った。また、東京帝国大学を卒業後、横浜で教師をしていた作家の中島敦がこの年、パオ南洋庁に勤務し、九月二七日妻にこんな手紙を書いている。

「毎日毎日、いかや飛魚を見ながら、漸く、ヤルト迄来ました。日本の東南の一番すみっこよやの小さな島です。夜明が午前三時、日没が午後四時。午後の八時ともなれば、もう太平洋の波の音のほかにな聞えませんが。」

なおヤルトは日本時間のため、南のマキン環礁とはマイナス四時間の時差がある。

行政官ウィリアムズ

ジョーンズたちを迎えたチャールズ・ウィリアムズ（一九一八〜一九四）【図4】は、英国国教会に勤務する父の任地インドで生まれた。八歳で家族と別れ、英本国で寄宿学校に入学している。パブリック・スクール時代、祖父と同じインド高等文官を志望し、超難関の試験に挑むが失敗。ロンドンで短期間新聞記者見習いをした後ケンブリッジ大学で歴

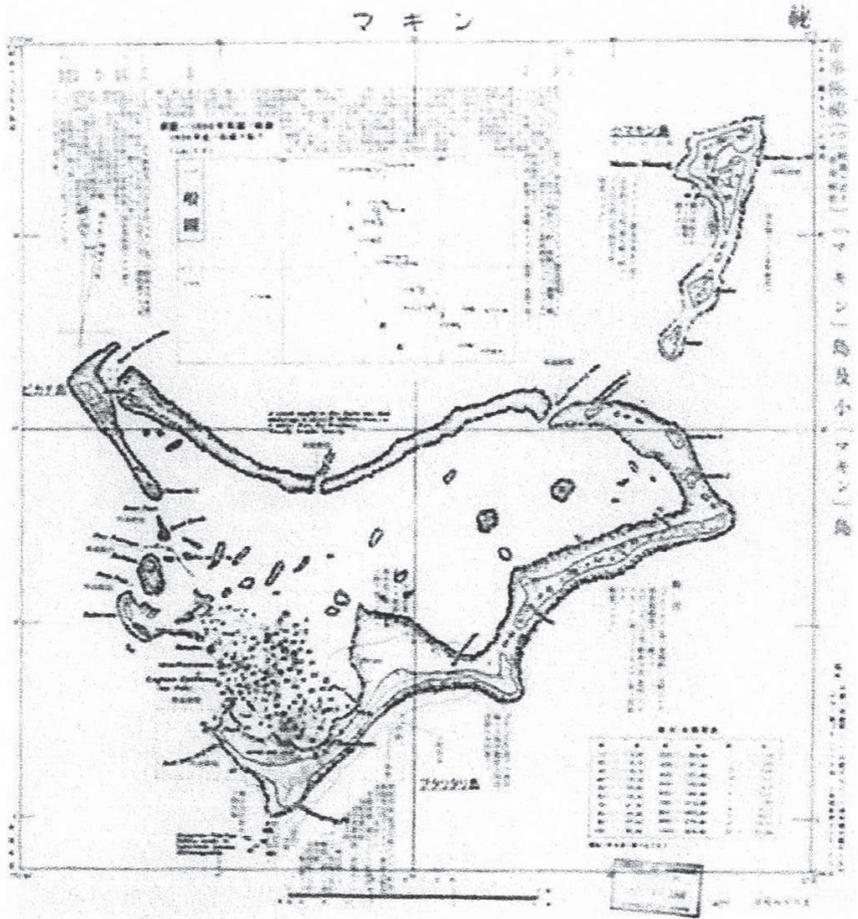


図3 マキン環礁

作成時期：1943 - 7

提供：Peter McQuarrie

3 島名（プタリタリ、ピカチ、小マキン）は名倉有一加筆

史を専攻し、在学中に願書を出した植民地省で繰り返し面接を受ける。当時採用を担当したサー・ラルフ・ファースは、志願者を筆記試験ではなく面接により選抜した理由を次のように述べている。

「*his many* まなことを幅広くあつかう植民地行政—ここでは生身の人間と接触し、忍耐、マナーの良さ、勇氣、決断力、ユーモア精神、思いやりなどが絶えず要求される—においては、人格とパーソナリティが依然として最も重要であるが、これまでに考案されたどんなペーパー・テストによってもわれわれはそれを評価できない。」

ウィリアムズは三九年に入省、研修の後四一年初め約二千人の島民が住むマキン環礁の中心ブタリタリ島に地区行政官として赴任。島の統治は、彼に次ぐ地位の大酋長^{だいじゆうちやう}ブレントラワが各村の酋長たちと協力して行なう自治制^{だいいじせい}だった。沿岸監視員一行を迎えるウィリアムズは、円滑に任務が行なわれるよう島民側との間の連絡役になった。

ジョーンズは到着後の様子を次のように語っている。

「ピカチ島はブーメランのような形で、折れ曲がった所の約九〇メートル南にウィリアムズの予定していた敷地があった。外洋に面した西の珊瑚礁へも、礁湖のココヤシが密生し

た東の砂浜へも距離は約二〇メートル。すでに完成しているコンクリートの床の上に、生活や通信のための施設の建設が始まった。ウィリアムズは島民を指揮してアンテナを立て、電線に絶縁体を取り付けさせた。そして敷地から一八〇メートルほど離れた村の酋長とココナッツの樹を切り倒す交渉をした。家から取り外した屋根の部分が砂浜を通って運ばれて来たのだが、「私には激しく上下に動く四〇本の足しか見えず、まるで巨大な甲虫が向って来るみたいだった。島民が敷地に頑丈なココナッツの幹を立てた。倉庫は当日の午後三時ころ完成し、運んできた物資が収納された。この建物は



図4 チャールズ・F・ウィリアムズ
撮影場所：香川県高松棧橋
出典：朝日新聞、1942-1-16. 朝刊（部分）

雨の日には炊事場になった。住居と無線室が入る、急斜面の草ぶき屋根の建物は、完成に二週間ほどを要した。片側に寝室が二つ。反対側が私の寝室で、その隣は無線室。各部屋へ行き来するときは真中の食堂が通路になり、両側が外に通じていた」【図5】

到着した四日後、ウィリアムズは自分用の小さなヨットで片道二時間半ほどかかるブタリタリ島に帰って行った。小マキン島の基地も彼の担当である。

日常

赤道に近いマキン環礁は、毎日ほぼ同じ時刻に日が昇る。ジョーンズは朝六時に起き、小マキン島に続いて六時半に暗号化した気象通報を南西の方角のオーシャン島に送信する。前述したように、この島がギルバート・アンド・エリス諸島植民地の本部である。ゴール・サインはジョーンズがBYB、小マキンBYA、オーシャン島がVQKだ。夜九時の任務終了まで二回の気象通報を含め六回の送信と機器の保守作業があるため、基地から遠く離れることはできない。空いた時間は言葉を覚えるために村【図6】に行つて酋長はじめ三〇人ほどの村人と話す。礁湖で泳いだり魚釣りをしたり、干潮時には隣の島まで歩いたりする。休日はない。一方特に仕事がない二名の兵士はカヌーでブタリタリ島【図7】に出かけるようになった。立派な栈橋から上陸するとウィリアムズの官舎やスイス人司祭のいるカトリック教会があり、日本と中国

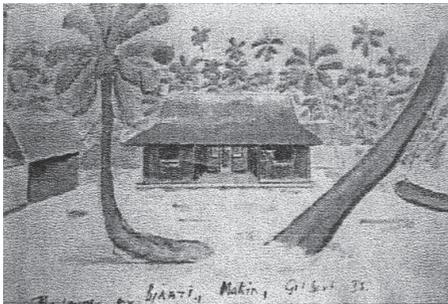


図5 ビカチ島の無線基地
善通寺収容所で描かれたクレヨン画
© Charles F. Williams 1942 - 43 頃
写真提供：John M. Jones



図6 ビカチ島の村
善通寺収容所で描かれたクレヨン画
© Charles F. Williams 1942 - 43 頃
写真提供：John M. Jones

の商社が売店を併設していた。

基地には救急箱があるので、毎朝九時ころになると切り傷や打撲傷の島民が列を作った。母親に頼まれて粉ミルクを分けてあげることもあった。四五〇グラム入りコーンビーフ缶は一回の食事では食べきれないが、冷蔵設備がないから数時間ダメになる。だから島民が喜んで食べてくれるのは好都合だった。島の家畜は鶏と豚が数匹で、高価な豚を食べるのは特別な場合だけだ。

ウイリアムズは困ったことがないか時々確認に来てくれた。荒天の日は波しぶきが井戸に入って塩辛くなると相談すると、倉庫の屋根を草ぶきからトタン板に変え、降った雨水を受けて水槽に貯める仕掛けを作ってくれた。彼は物事の処理が早く、どこからか物資を調達する名人だった。さらに料理人や掃除人に加えて漁師まで手配してくれたので、食卓には味気ない缶詰に代わって新鮮な魚や伊勢エビ、焼いたココナッツや掘りたてのタロイモが並ぶようになった。

戦争の影

ウイリアムズは、島民による民間防衛隊の編成にも精力的に取り組んでいた。ジョーンズの基地の北一五メートルほど先に小屋が建てられ、二四名の隊員が六名ずつ一週間交代で詰めた。さらに沿岸監視支援のため数カ所に見張り台を設け、夜間隊員を配置してくれたので、ジョーンズたちは大いに助かった。彼はこの小さな軍隊が島民から尊敬されるよ

う、労力と費用を惜しまなかった。ラバラバと呼ばれる青い腰巻を自分でデザインして各隊員に着用させたが、彼らの目印となりとてもスマートに見えた。ジョーンズも試してみると、実用的で涼しいものだった。

一月初め、夜一〇時ころ興奮した隊員たちがジョーンズの基地に飛び込んで来て、西岸の沖をライトアップした船が通過しているという。ジョーンズは船が南方へ去るまで三〇分間監視を続け、暗号化した電文をオーシャン島経由でフィジー島スバの海軍本部へ送った。その一週間後、北方から飛行機が接近し青年たちが再び大騒ぎした。ジョーンズたちの耳は島民ほど鋭敏でないから、爆音が聞えて来るまでには少し時間がかかった。やがて日本の飛行艇が頭上を通過し、彼は直ちに無線機に向かった。日本機は南に向かって飛行を続け、島々から発信される通信を傍受して沿岸監視基地を特定していた。こうした領空侵犯は三週間続いたが、すべてを目視できたわけではない。一二月初めまで彼は冷静に仕事を続け、島の生活を楽しんだ。

第二章 開戦

四一年二月八日。いつもと変わらない朝だった。ジョーンズは早朝の送信を終えてロスアンゼルスラジオ局にダイ

ヤルを合わせると、真珠湾が攻撃されているという混乱したニュースが流れて来た。ホノルルは一月七日の日曜日。いつものラジオ局はこの日の朝に限って無言だった。ジョーンズはすぐ兵士に伝えた。彼らは隊員たちに厳重な警戒態勢をとらせて酋長に説明し、念のため二人の隊員にウィリアムズへのメモを持たせ、カヌーでプタリタリ島に向かわせた。無線を使うには事が重大過ぎたのだろう。カヌーが到着する直前、ウィリアムズは日本軍の真珠湾攻撃を朝九時過ぎのBBC海外放送で知った。彼は島民の警官を連れて直ちに南洋貿易の支店に赴き、神崎支店長と部下の東川ひがしがわを拘禁した。それまで親しくしていた二人を島の刑務所に収容するのは気が引けたので、官舎のベランダにベッドを置き警官に交代で見張らせることにした。開戦初日は南洋貿易事務所にある資料や帳簿の荷造りで過ぎた。彼には読めないが、連合国側に役立つ情報があるものと確信し、味方の船がすぐに受け取りに来ると思っていた。その晩彼は日本人のお客のそばで熟睡した。

上陸

一〇日未明、ウィリアムズはプタリタリ島西の沖に船が見えると報告を受けた。午前六時、日本海軍陸戦隊一七八名が上陸を開始。ウィリアムズは大酋長と警官を伴って自転車で見えに行き、捕えられた。出発前のウィリアムズの指示に従い、電信技師ビリキは日本軍上陸の報告をオーシャン島に打電しようとしたが、応答がなかった。その様子をビカチ

島で聴いていたジョーンズが中継を申し出ると、ビリキは二五文字の暗号文、次に平文で「ジャップ上陸、次はそっち」と送信して来た。彼らは知らなかったがオーシャン島はその時刻、日本軍機の爆撃を受けていた。電信所が占領される前に、ウィリアムズの命令どおり暗号書は処分された。

翌十一日朝九時二〇分、機雷敷設艦「沖島おきのしま」の陸戦隊員四八名が二手に別れ、ビカチ島と小マキン島に向かった。同艦搭載の複葉機が爆弾を抱えてジョーンズの頭上を低空飛行し、陸戦隊員を満載したボートが汽艇に牽引けんいんされて西の珊瑚礁に接近。ジョーンズは、「ジャップ上陸、さようなら皆さん」と最後の報告を打電する。そして島民の助けを借りて送受信装置はじめすべての設備を破壊し、暗号表を燃やす。島民たちを村に返してから彼と二名の兵士は水際まで下りて行き、九〇メートル先の珊瑚礁への上陸を見守った。小銃や機関銃で重武装した日本兵たちは静かに基地へ近づき、ジョーンズたちを見つけると甲高い声を上げ突撃して来た。タバコに火を点けた兵士は、日本兵に殴り倒された。所持品検査の後、海軍将校しょうこうが太平洋を征服した日本海軍の強さについて退屈な演説をした。それから基地に向ったが、すべてが破壊されていることを知った日本兵たちはうろたえ、詰問した。しばらくすると三人に私物をままとめると命じ、それが済むと砂浜に背中合わせで座らせた。銃剣や機関銃を持つ監視兵が首を斬る真似をして、しつこくジョーンズたちをからかった。日本軍は島民を使い、二時間半ほどかけて捕獲品を大型ボートに

積み込むとジョーンズたちを乗せて出発。礁湖には多数の軍艦、輸送船、帆船、飛行艇が集結していた。ジョーンズは、双眼鏡さえ支給されていれば正確に報告できたのにと残念だったが、当局は軍隊や商船の需要を満たすだけで精一杯だったのでだろう。夕方六時前礁湖に停泊する「沖島」に着くと殺虫剤を吹きかけられ、写真を撮られて船底へ。ジョーンズだけは艦長室に連行された。艦長はギルバート・アンド・エリス諸島の巨大な地図を示して各島の名前を尋ね、日本船通過を報告したかとの質問に、ジョーンズは「した」と答えた。ギルバート諸島にいる兵士と電信技師の数は、「オーストラリアからフイジー島ではなくオースシャン島経由で来たので知らない」とうそをついた。

「沖島」には短時間いただけで、ブタリタリ島に移された。中国系商社オンチヨンの棧橋のつけ根の建物に收容され、蚊と衛兵に一晚中悩まされた。翌一二日、リトルマキン島で捕虜になった三名が隣の部屋に收容された。日本軍の上陸が真夜中だったため、彼らは暗号表を処分できなかったという。二五日、別の部屋にいた行政官ウィリアムズも含めた七名全員が一室に集められた。この日南洋貿易の神崎支店長が来て、官舎にあった赤ワイン二本と食料をウィリアムズに渡した。惨めな境遇のクリスマスが、おかげで華やいだ。

日本へ

二七日午後、彼らは機雷敷設艦「津軽」でマキン環礁を離

れた。翌日午前、マーシャル群島のヤルト島で特設砲艦「大同丸」に移されると、船倉にワラス電信技師がいて一行は八名になった。沿岸監視員の志願を勧められた時、捕虜になった場合の補償を質問した男だ。「沖島」は二四日にアイアン島で彼を捕え、翌日ジョーンズの親友ヒーンンのいるマイアナ島を掃蕩の予定だったが、荒天のため取り止めた。ジョーンズたち八名は戦後全員帰国できたが、マイアナ以南の島にいたヒーンンはじめ六名の電信技士たちは翌年八月に再度南下した日本軍に捕えられ、命を落としている。

一行は二九日午後、クエゼリン島で「山霧丸」に移された。四一年に徴用されるまでニューヨーク経由の南米航路に就航していた大型貨物船で、船員は流暢な英語を話し食事は洋食。船内は開戦で南洋諸島から日本に引き揚げる労務者で満員だった。

横浜

年が明けた四二年一月七日、横須賀港に到着。一行は初めて見る富士山の美しさに感動した。荷物を提げて上陸すると、税関職員は外国人観光客のように迎えた。開戦後初の捕虜だったのでだろう。海軍の哨戒艇で横浜港の埠頭に到着した時は夜になっていた。午後から降り始めた雨は止んでいたものの、気温は氷点下。夏服のジョーンズは震えながら護送車に乗せられ、窓から横浜の夜景をのぞいていた。ただし政府の自粛要請により、華やかなネオンは二年前から消えてい

る。横浜競馬場【図8】駐車場に到着。正面の特別観覧席に入り、レストランのテーブルを合わせた上に与えられた毛布と枕を乗せて寝た。トイレに行く時も見張りが付く。開戦後、横浜在住の敵性外国人の抑留施設になっていて、姿は見えないが英語で話す声が聞えた。翌日朝食の後、外人墓地入口に続く坂の途中に建つ洋館に車で運ばれた。内部の寝室も書斎も前の住人が生活していた時のままで、少しも荒らされていなかった。横浜育ちの紳士的な進藤一海軍少尉が、大柄な水兵たちを指揮して警備に当たった。着物姿の中年女性二人に給仕され、豪華な洋食器で食事する彼らの姿が繰り返し写真に撮られた。ジョーンズは、自分たちをはるばる日本まで運んで厚遇するのは、海外向けの宣伝のためだろうと考えた。中国の青島領事館ヂンクオウで捕虜になった米海軍のグリフィス電信技師が、ジョーンズたち到着の二日後に収容された。一月四日に洋館を離れる際、捕虜になって日が浅い彼らは持主の所有権を尊重して何も持ちださず、後々大いに悔やむことになる。この山手二五〇番館は二九年に米国スタンダード石油駐在員の社宅として建てられ、戦後横浜市内の別の場所に移設された。【図9】

横浜駅を午後四時に発車する列車に、九名の捕虜が進藤少尉や二名の水兵とともに乗り込むと、乗客は驚いてしばらく囁き合った。進藤は自分が配給を受けた煙草を、列車の中でもしきりに捕虜に勧めてくれた。座席の水兵は交代で仮眠していた。翌朝九時二十九分、終点岡山駅着。美しい瀬戸内海を

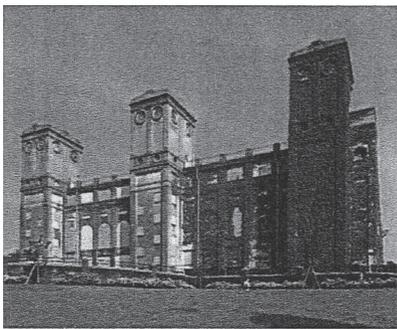


図8 横浜競馬場跡
出典：Wikipedia. CC



図9 復元された山手250番館
撮影時期：2013年
者：名倉有一

横断した連絡船は、一二時一〇分四国高松港に到着。棧橋を歩く彼ら捕虜の写真が翌日の新聞各紙一面を飾る。【図10】

大阪毎日新聞の記者が高松棧橋駅から同行し、車中で捕虜に取材している。これほどの注目を集めたのは、太平洋戦争初の善通寺捕虜收容所が前日に開設され、彼らが最初の收容者だったためである。午後一時三五分善通寺駅着。【図11】出迎への陸軍将校の案内で駅前道の道を進み、左折した右手に護国神社の森が見えた。神社に隣接した木の塀で囲まれた收容所正門を入ると、正面に大きな二階建てが二棟並んでいる。ジョーンズたちが收容された手前の建物の内部は無人で、畳敷の寝台の足もとには毛布とアルミ製の食器が整然と並んでいた。五〇〇人は楽に收容できそうだった。一室に集まった彼らは状況を話し合い、日本軍に編入されて中国あたりの前線に送られるという結論になり、暗い気分ですぐ床に入った。夜九時消灯。二時間ばかりすると突然電灯が点き、大勢の米国人の声が聞えて来た。万事楽観的なウィリアムズは一瞬、「上陸作戦だ、助かったぞ!」と思ったが、グアム島総督以下、捕虜四二一名の到着だった。彼らに乗せた船はこの日早朝、善通寺の北にある多度津港沖に到着し、善通寺第十一師団から依知川参謀長が来ていた。しかし雪交りの悪天候のため上陸開始が午後七時一五分まで大幅に遅れた。このため写真が締切りに間に合わず、翌朝各紙の一面を飾った写真は、前述したとおりすべて高松港に到着したウィリアムズたちのものとなった。

收容所生活

收容棟の二階の窓から練兵場を眺めると、数百名の教練が行なわれていた。若い兵隊が下士官から殴られ蹴られて失神し、地面に倒れるのが見えた。植民地で異文化に慣れたウィリアムズは、もしこれが日本軍で権力を持つ者の行動パターンなら、規律を守らせるため捕虜に同じことをしたとしても驚くには当たらないと判断した。收容棟の中を日本の衛兵が銃剣を持って巡回し、規則違反を見つけたら日本語で何か叫び、時には捕虜の顔を平手で殴った。当初規則も日本語も理解できない捕虜は大いに面食らった。日本人の二名の通訳から説明されても、下らない規則が多過ぎると感じた。收容所側は捕虜を集めてあまり歓迎されない日本語教育を実施し、日本軍が優勢な間は戦況を解説して聞かせた。戦後ジョーンズは、欧州戦線で捕虜になった同国人の話を聞いたことがある。ドイツでは日本と違い衛兵は通常收容棟内に立ち入らず外部を巡回するだけだが、建物の周囲に張り巡らされた鉄条網に近付くと事前の警告どおり容赦なく発砲したという。(どちらが人道的な捕虜の扱いかは別として、ドイツの方が効率的だと思われるがいかかであろうか)

收容所側から捕虜のメッセージをNHKラジオで海外に流すという通知があり、ジョーンズは応じた。この放送は、日本軍基地近くで無線を所持していたシビリアンとして(スパイ扱いされ、最悪の場合)処刑されたのではないかと心配し



図10 朝日新聞。
1942 - 1 - 16. 朝刊
写真の右から3番目が
ウィリアムズ

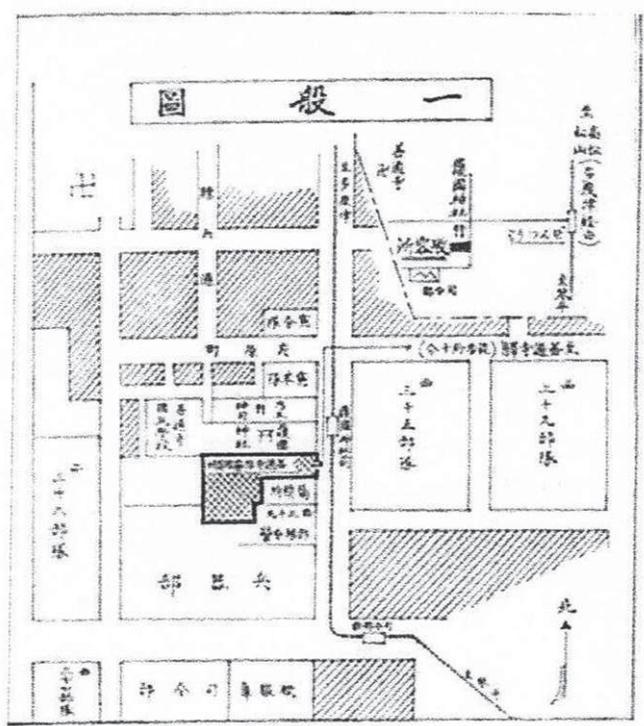


図11 普通寺収容所と周辺図
出典：普通寺俘虜収容所。収容所要覧。1942，普通寺市立図書館蔵

ていた彼の家族に届いた。到着から二週間ほどすると収容所側は、「将校以外の捕虜は働け」と命令。シビリアンのジョーンズもそのグループに入れられて高松、丸亀、坂出の埠頭や鉄道駅での荷役作業に駆り出された。二月二七日からは収容所の南にある大麻山の開墾作業が始まり、朝から弁当を持って市内を行進した。収容所に残る将校は食料を減らされたので、外で働くことを志願する者もいたが体力が続かなかった。

ジョーンズは終戦までの三年半、こうした単調で辛い肉体労働に従事した。食事は当初の米から麦と雑穀のお粥になり、日本軍が劣勢になるにつれてさらに食糧事情は悪くなって行った。日本人班長の目を盗んで食料を抜き取ることだけが、きつい荷役作業の特典といえた。わずかな賃金は支払われたものの、収容所内に設けられた売店で買えるものはほとんど何もなかった。収容される捕虜の数は増え続け、たまの風呂も七、八百人の将校の入浴後では厚く浮いた垢の下に湯はあまり残らず、雪の降る日に冷水のシャワーを浴びるのは辛かった。週一日から二週に一日に減った休日に洗濯をするのだが、冬はなかなか乾かず気が滅入った。過酷な状況下、日々の歩みは遅々としたものを感じられた。

ジョーンズの楽しみは、監視の目を盗んで付ける日記【図12】と、休日に風呂場の脱衣場を利用して開催される捕虜の演芸会。ハワイ出身のヘンショー海軍少尉（一九一八～二〇〇三）【図13】は合唱団を組織し、ジョーンズは夕食後その練習に加わった。ウィリアムズは植民地行政官という地

位を考慮して将校待遇とされ、演芸会の劇の台本書きに熱中した。日本の敗色が濃厚になった四三年夏、参謀本部が捕虜を使う対米ラジオ放送を計画。国内外の収容所に対し候補者を東京に送るよう指示。善通寺からはウィリアムズとヘンショーが選抜された。一〇月二八日、収容所を出て行く親しい友たちを見送るジョーンズは悲しかった。

四四年の末、負傷で右足を失った米軍飛行士が善通寺に収容された。タラワ環礁のベテイオ島にある滑走路から作戦に参加していたという。ジョーンズが沿岸監視員に会ったかと尋ねると、「いや。しかしベテイオ島には二人の記念碑があった」と答えた。ジョーンズはこの時初めて親友たちの死を知った。

空襲

四五年に入ると日本本土を空襲するB二九のエンジン音が頻繁に空に響き、至る所に飛行機雲が見えるようになる。善通寺に爆弾は落ちなかったが、神戸や大阪が爆撃される時は重苦しい騒音がはつきりと聞え、窓ガラスがガタガタと音を立てた。四月、米軍は沖繩に上陸。占領した飛行場からのP五一、日本近海に接近した機動部隊からのコルセアやヘルキヤット戦闘機も地上攻撃に参加する。ジョーンズが作業の行き帰りに乗る列車はそうした小型機の恰好の目標だったが、幸運なことに攻撃されたことはなかった。しかし終戦直前に坂出港【図14】で、危うく命を落とすところだった。

二機のコルセア戦闘機が突然内陸から低空で現れ、作業していた艦艇の船尾から船首まで機銃掃射した。一目散に引込み線の貨車の下に逃げ込んだが、小柄な日本兵が対空機関砲で応戦。双方の弾丸は命中せず、すべては一分足らずで終わった。美しいコルセア機は急上昇し、千五百メートルほど上空で友軍機の編隊に合流した。上空の米軍パイロットの眼には、自分は服装から日本人に見えたのだろうと思つた。高松駅では撃墜されたB二九の残骸を積んだ貨車を見た。撃墜された米軍パイロットが憲兵隊に連行される場面に遭遇したこともある。元氣付けようとジョーンズは米国の歌を口笛で吹いてやったが、彼は銃殺された翌日聞いた。あちこちで老人と子供が竹やりで人を刺す訓練をしていた。六月二三日、沖繩では牛島司令官らが自決し、組織的な抵抗が終わつた。ジョーンズは六月二八日の日記に、善通寺收容所の将校捕虜全員が移動することになったと書いた。彼らは国籍別に百名ほどのグループを作り、他の收容所に移動させられて行つた。残つたジョーンズたち百余名は二棟あつた收容棟の奥の二階に集められ、庭に穴を掘るよう命じられた。戦後收容所に来た米軍人から、本土決戦が始まつたら捕虜全員を殺して埋めるための穴だつたと聞かされた。将校たちが去つて間もない七月四日の午前三時から約二時間、B二九が善通寺收容所の真上を通過して高松市を空襲した。四日後、復旧作業のため高松駅に着くと驚いたことに駅舎以外市街は消え失せ、どちらを向いても焼野原が広がっていた。死傷者数は甚大

で、收容所の関係者もほとんどが家族や親戚を亡くし、捕虜を扱う態度が目に見えて邪慳とじけになった。トラブルを避けるため、ジョーンズはなるべく日本人と話さないように用心した。八月八日、日本人の班長から広島に落とされた一発の爆弾で一〇万人が死んだと聞かされた時は、とても信じられなかった。しかし広島は直線距離で一〇〇キロメートル余り。善通寺收容所の本部でもあつたから、間もなく捕虜も何か異常なことが起きたと分かつた。

第三章 戦後

八月一五日の朝も、いつもどおり七時に出かけた。一時、高松駅での作業を中止し、道路に整列せよと命令された。日本人は全員気を付けの姿勢をとつた。拡声器から独特な抑揚のある男性の流れる声、皆深くお辞儀してひざを落とし、捕虜も同じ姿勢をとらされた。数分後に放送が終わり、誰も何も言わなかつた。それが降伏を告げる玉音放送だつた。

放送が終わると衛兵は、いつも食事をする小屋に入ると捕虜に指示した。一時間後列車に乗せられ、收容所に戻ると全員伏せの姿勢をとれと命令された。朝から頭上を米軍機が飛んでいないのに気が付いた。日本は降伏し、間もなく救助されると確信した。收容所の衛兵は正門詰所の四人以外は姿を消した。翌日彼らから小銃を取り上げて門を閉め、知らない日本人は一切

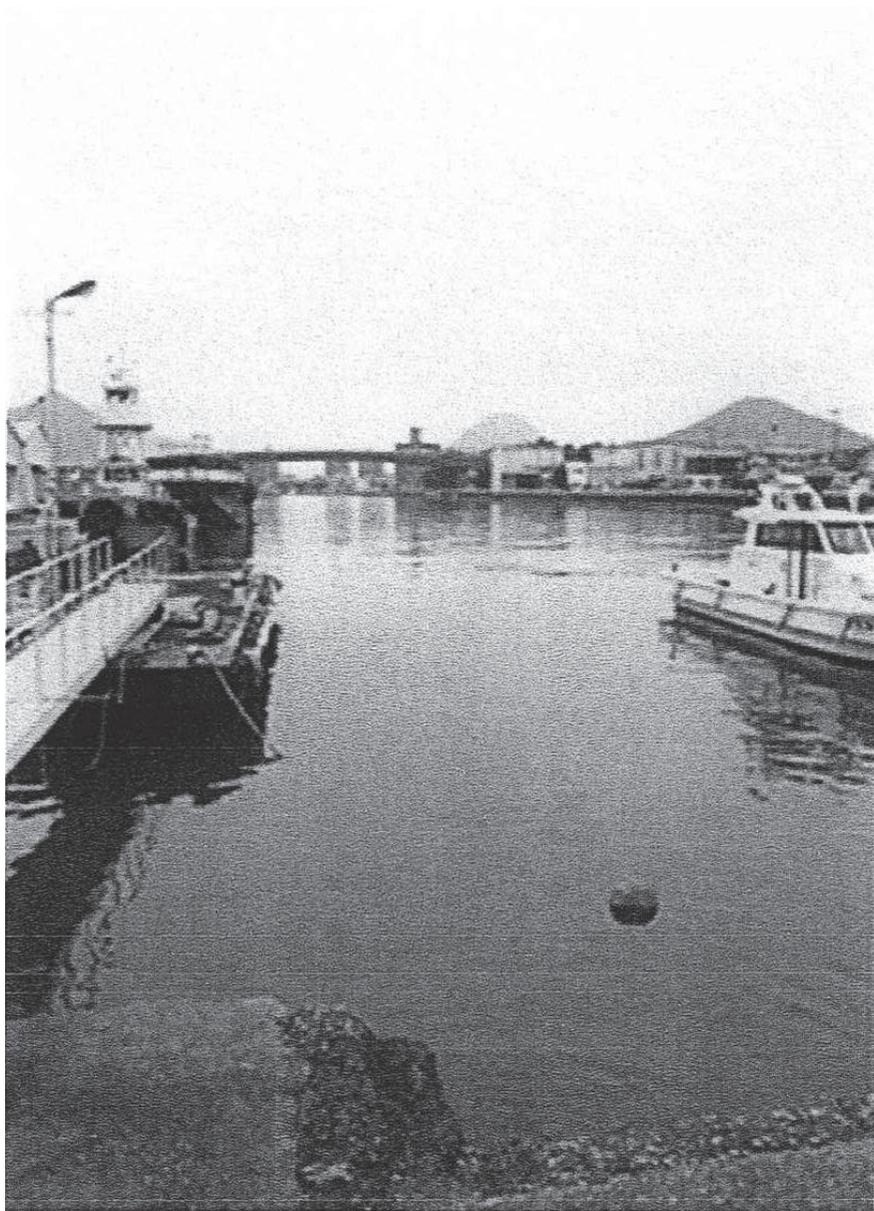


図 14 香川県・坂出港
撮影時期：2017 - 11 - 8
〃 者：名倉有一

中に入れないようにした。【図15】数日後に日本の飛行機がパラシュートで投下した命令書には、屋根に黒くPWと表示すること、現在地に留まること、B二九による食料投下に備えることが書かれていた。それからは八機のB二九が四日ごとに食料、衣類、タバコを補給してくれた。旧約聖書に神がモーゼの祈りに応じて空からマナ（食物）を降させたという記述があるが、数年間空腹に苦しんだ捕虜にとってこれは、正に空から降るマナであった。パラシュートが開かないことも多く、一個九〇〜一四〇キログラムほどの梱包物は爆弾のように音を立てて落下して家々を破壊し、缶詰の中身をあたり一面にぶちまけた。捕虜は毎日思う存分に飲み食いし、それでも余る物資は兵舎に鍵をかけて蓄えた。時には寺院周辺の店に持って行き、酒と交換することもあった。

帰国

九月半ば、善通寺収容所を出発。瀬戸内海を横切り、神戸大阪を経由して和歌山に向かった。途中、汽車が速度を落とすと、トタン板の下の爆撃で空いた穴から女性や子供が走り寄って来た。男性の姿は見えなかった。これを見てショックを受けたジョーンズたちは、車窓から手持ちの食料をすべて投げ与えた。和歌山港を埋め尽くす米国の軍艦に交って英海軍の軽巡洋艦ガンビアが停泊し、艦上に多くのニュージーランド人がいた。ジョーンズたちは病院船で診察を受けた後、その船で沖繩に向かった。ジョーンズは一〇月二五日帰国。

父親は終戦の年の八月に他界していた。

郵便局には復職せず民間企業でマネージャー職を務める傍ら、沿岸監視員時代や捕虜生活中に知り合った人々と連絡を取り合った。八四年にリタイアした後は、精力的に交流の機会を増やした。ウイリアムズは戦後植民地省に復職し、ギルバート・アンド・エリス植民地に帰任した。四九年にアフリカのウガンダに転任し一時途絶えた音信はその後復活し、英国の自宅を訪問した。またジョーンズはカナダに住む息子の家族を訪ねる際はハワイに立ち寄り、善通寺収容所の合唱団で知り合ったヘンシヨアの屋敷に滞在することが習慣になった。戦後ヘンシヨアはテレビ業界に入り、舞台構成の仕事で成功していた。米国で開催される元捕虜の集いに招かれることもあった。ジョーンズは戦争で縁者や親友を亡くし、自身も過酷な状況で重労働の辛い日々を送った。しかし、「もし日本人を生涯憎み続けて子供たちにもそうさせたら、住みにくい世界になってしまう」と語っていた。

彼は一緒に沿岸監視員に志願して命を落とした同僚の顕彰を、ニュージーランド政府に求め続けた。時の経過とともに彼らが忘れ去られないよう、戦時中の手帳を基に自分たちの体験をテープに記録して機会を見つけて人々に話し、求められれば手元の資料を快く提供した。近くに住む歴史家ピーター・マクエリーは自著に沿岸監視員の活動を記し、ジョーンズの終生の友となった。九二年にニュージーランドのテレビ局が戦時中命を落とした沿岸監視員たちのドキュメンタリ

ーを制作した際は、求められて現地ロケに同行し、ピカチ島では島民と再会した。番組を見た遺族など関係者から多くの問い合わせが寄せられると、彼は一件ずつ丁寧に回答した。こうした地道な努力が実を結び、かつての職場であるニュージラランド・ポストのCEOが二〇一二年ジョーンズ宅を訪問し、沿岸監視員に志願した人々の献身を讃えるレリーフを本社内に設置すると公表した。同年一〇月、起工式のため首都を訪れたジョーンズは、キー首相を表敬訪問している。【図16】こうしてその晩年親友たちに対する思いを形にしたジョーンズは二〇一七年二月三日、九六歳でこの世を去った。

あとがき

本文で述べたように、ジョーンズ氏の友人の英植民地省行政官ウイリアムズ氏は参謀本部が計画した対米ラジオ放送の候補として、善通寺捕虜収容所から東京に送られた。彼が軍刀を提げた軍人の協力要請を命がけて拒否した事件は、中公新書『日の丸アワー／対米謀略放送物語』に描かれている¹²。ジョーンズ氏と善通寺収容所で知り合ったヘンシヨー氏もその場に立ち会った。私はこのエピソードに興味を持ち、余暇に当時の関係者を探してウイリアムズ、ヘンシヨー両氏からお話を伺い、ジョーンズ氏を紹介された次第である。本書をまとめるに当り、浜松市立中央図書館レファレンスご担当者をはじめ

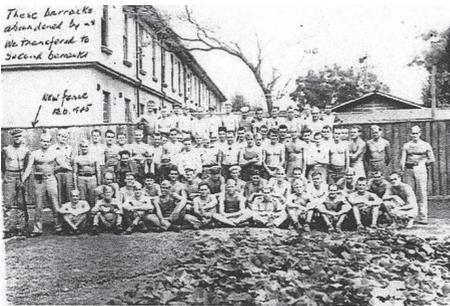


図15 終戦後の善通寺収容所
最後列右から5人目がジョーンズ
撮影時期：1945 - 8頃
提供：John M. Jones



図16 キー首相（左）を表敬訪問した
ジョーンズ
撮影場所：ウェリントン
時期：2012 - 10 - 16
© Peter McQuarrie 2012
提供：Peter McQuarrie

めとした方々から「支援」をいただいたことを報告する。

2.p.7]

¹² 池田徳眞、日の丸アワー…対米謀略放送物語、中央公論社、1979,p.52-55.

(中略)

- 1 Mc Quarrie, Peter. *Conflict in Kiribati: A History of the Second World War*. Macmillan Brown Centre for Pacific Studies, University of Canterbury, 2000.
- 2 ブライアン・R・ミッチェル編著、マクニラン新編世界歴史統計1 ヨーロッパ歴史統計、東洋書林、2001,p.137.
- 3 前掲 *Conflict in Kiribati*,p.30-31
- 4 New Zealand Post and Telegraph Department.
- 5 "NATIONAL MUSEUM OF THE ROYAL NEW ZEALAND NAVY".HMFS Viti (Minesweeper Vessel) .
<http://navymuseum.co.nz/hmfs-viti-minesweeper-vessel/>,
 (参照: 2017-10-13) .
- 6 「ある意味で「大英帝国とは「威信のシステム」であった」ところから」。中西輝政、新装版大英帝国衰亡史、PHP研究所、2015,p.8.
- 7 前掲 *Conflict in Kiribati*,p.34.
- 8 District Officer.
- 9 中島敦、南洋通信、中央公論新社、2001,p.33.
- 10 浜渦哲雄、英国紳士の植民地統治、インド高等文官への道、中央公論社、1991,p.146
- 11 植民地省の役人が巡回でピカチ島に宿泊するための公的な施設の屋根だと思われる。[Williamsの作者宛手紙、1991-8-

〔入選〕

たま

偶さか

北まくら

三途の川の幅はわずか一メートルほどで田圃をめぐる灌漑用水路のようなものだ。水深は五、六十センチ程度、流水はヒスイ色で透明度は低い。兩岸の堤防は無い。今にも水流が地面に溢れ出る勢いだつた。

三途の川について人は勝手な想像をしていた。ゴビの砂漠のような瓦礫の原野に、地に滲むように踝の深さの清水がどことなく流れ、川幅は広く蛇行して、水の干上がった手前の岸の河原には石がでんでんに積み上げられ、その前に賽銭を置いて、過去の懺悔と残してきた人達に祈りを捧げ、向こう岸に向かって浅い流れを歩いて渡って行くものだと思っていた。渡り終わると、待っている閻魔さまとの面接試験が始まるだろうと予想していた。他にも船で渡る方法や、生きている間、水泳プールで川を歩く練習をしておいたほうが良いという実用的な俗説もあったがどれも間違いだつた。渡り賃は取らない。とても閻魔様に賄賂を渡す機会などない。「地獄の沙汰も金次第」などと言つたのは生前強欲な生活をした

人々の発言だろう。その狭い三途の川をヒヨイと飛んで渡ると、跳ねた途端に一瞬地平線が見える。向こう岸に着地すると、お花畑の情景が広がる。寝たつきりだつた人も、車椅子の人も、万人が自力でこの疎水を跳び越す。ここでは質量は無い。

鉢合わせした目の前の閻魔さまは身長が二メートルから十センチほど引いた大男だつた。風体から体重は百キログラム超はあるだろう。怒髪額の額は皺が数本深かい。口元は窪み、ほうれい線は頬のたるみを引つ張りあげようとしている。膝から下の筋肉はさほど鍛えあげた形でもない。ヒョウ柄の法衣を纏うこともない。紫色のタンクトップに裾がほつれてくすんだ灰色の短パンを履いて、ビーチサンダルをひっかけ、それでも仁王立ちになって女人達を迎える。閻魔さまは女性とだけ面談する。男性には閻魔さまとの面接は無い。男性の場合三途の川を渡る前に前世の生活による判定がマニュアルに示されているのでそれに従い来世の生活が振り分けられる。男性の生前の行為はせいぜい三種類くらいに分類されるので今更閻魔さまのご判断を仰ぐような煩わしいことは無い。

人類が発生して最初に死んだ人が閻魔様になって、この面談場所を開設した。すぐその後三人が閻魔様になり都合四人の閻魔様が彼岸にいる。各閻魔様の立つ間隔は一万キロメートルを保って円陣を組んでいる。四人の閻魔さまは特に専門分野を持っているわけではない。ある閻魔さまと三途の川を跳んで渡つたその女性が偶然行き当たつたところで面談が始

まる。一対一である。閻魔様は女人の生前の男性関係について尋ねる。生活ぶりや、苦勞話も聞く。ほんとうは閻魔様は偶然出会った女人のデータを一瞬間的に入手しているので、前の状況は百も承知だ。念のため本人確認することが義務づけられている。

俗名は「なみ」と申します。享年五十八です。シングルマザーです。六畳一間で娘の「れい」と二人で暮らしました。「れい」は私が三〇歳の時生まれました。父親になるべき人は結婚できないお立場でした。小さな命を授かったときは、すでにお別れしていました。振り返って、認知や養育費は求めませんでした。私の実父母は当初ずいぶん驚きましたが、最後は領いてくれました。私達の生活費は母子手当と両親の援助と私の細やかな稼ぎで成り立ちました。私は美大で習い憶えた陶芸技術で陶作品を作りこれをグループ展などで販売しました。なかなか安定した家計にはなりません。やっと、娘が高校を卒業するころ陶芸職人として窯元から認められるようになりました。少しだけ誇りと、安定した生活ができるようになりました。

「なみ」さん、あなたが陶芸家として認められるようになったのはどんな理由からですか。

はい。良く分かりませんが、たぶん釉で、立体的墨流しを確立しかけていたことだと思います。比重の異なる二色の釉薬を混合して自然に拡散させます。そこに素焼き作品をゆ

っくり浸け掛けします。立体作品に曲線の縞模様が見れます。二つとない縞模様が作品ごとに現れてきます。従来、皿のような平面の墨流しですと作品を三つくらい施釉してしまおうと縞模様が甘くなり、二色の釉薬は使い物にならなくなりません。その後は二色を満遍なく混ぜ合わせ一色の釉薬にしてしまいます。考案した立体的墨流しは二色をいつまでも分離して使えるように二種類の釉薬の比重の加減をくり返し調整したものです。三年かかりました。

あなたは苦心をしながら娘さんを仕立て上げました。ところで、今までで一番の苦しみはどんなことだったでしょうか。

はい。陶芸作家としての苦勞は楽しみでもありました。母親としての苦勞は数年で終わるものではありません。つい昨日まで、今だってここで折り、苦悩しています。娘が健康に育つこと、安定した収入が得られる職業につくこと。できれば娘は普通に配偶者を得て皆と同じ様な家族生活が営まれていくこと、そんなことを目標に娘と接してきました。当たり前です。こんなものは苦勞って言いませんね。苦勞が一番も二番もありません。

あなたが娘さんに望む普通の家庭は母子家庭では成立しない、娘さんは承知していたのでしょうか。

はい。二人とも普通の家庭ではないと言う劣等感を持っていました。私は結婚生活を彼にも他の男性にも望んだことはありません。劣等感、作陶と、娘の成長を見ることで代替してきたと思います。娘は人一倍自分の勤勉な生活でこの劣

等感をのり超えていたと思います。

普通の結婚生活の代替思考はそれだけでしたか。

はい。それしかありませんでした。

お嬢さんは今、見習い弁護士として出発しましたね。

はい。本人の正義感と、寄せ集めのお金で何とか自立できるようにになりました。

それではあなたの来世を示しましょう。あなたはシングルマザーとして、他の模範となる生活をしてきました。真摯で勤勉でした。彼には何も求めず、お嬢さんを授かった偶然をただ喜び、経済も均衡を保つことができました。今あなたが不治の病に侵されたのはただの自然淘汰、偶然によるものです。あなたの来世は、現世を再びたどることになります。ご不満はありますか。

いいえ。不満はありません。質問があります。こちらでは最初に、六道に赴くと聞いています。私は六道の内どの世界に滞在してから来世に進むのでしょうか。

六道とは人が生きている間の生活を六種類に分類して、今の自分の生き方がどの道に相当するかを分析させ戒める小道具です。だからこの先に六道はありません。私との面談後はこの花畑を歩み続けてください。ある時あなたの来世の母となる人がヒョイとあなたを自分の胎内に受け入れてくれます。受け入れられるまで歩き続けてください。必ず受け入れられます。どれくらい時間がかかるかは言えません。偶然を待ちながら歩いてください。

そうですか、私はまた普通の家庭は持てない女として転生するのですか。わかりました。「なみ」は別の転生に期待感もあったが、また同じような生活が展開することに少しだけうれしい気もした。お花畑に行く姿は軽い足取りだった。

貴方は舞踏家「あや」さんですね。

はい。怪しいの「あや」です。いつの間にか、あっちにぶつかり、こっちに跳ね返され、五十年をこなしてきました。三人の子供たちはいずれも巣立ちました。

貴方の舞踏「身体表現」の特徴を教えてください。

はい。小柄な私ですので、これを生かして、空中を無い跳ぶことです。音楽に合わせることもあります。ただ静止して、顔の表情だけで感情を描写することもあります。小道具を使うこともあります。メークはほとんどしません。時にはペリダーダンス擬か、ポールダンス崩しか、サーカスかと言われることもありました。気持ちが悪くとも言われます。その時浮かんた感情を身体の動作で描き、それを観客に伝えます。あまり美しい動作ではないと思います。アートというより職人芸だと思っています。道端で人目を引くと高揚感や、達成感が得られます。間違はなく大道芸です。アートにまで上り詰めるにはもう少し時間が必要だったと思います。

あなたは三十歳の時に結婚を約束した男性とは違う男性二人と同時期に恋をしましたね。一人はジャグリングの名手でしたか。他の一人はギター弾きでしたか。自分の感情を抑え

ずに奔放に婚約外恋愛に一生懸命だったようですね。ギター弾きさんとは駆け落ちして、三カ月間同棲をしましたね。

はい。婚約者と実父の二人に連れ戻されて、どうにか結婚の約束を果たすことができました。戻ったときは針の筵という気持ちではありませんでした。何処かすっきりした、新婚生活がスタートしました。歓びいっぱいでした。駆け落ちのパートナーも私から逃げ出そうとする素振りが見え始めていましたからほとんど悲しくも悔しくもありませんでした。つまり、連れ戻されたのは渡りに船でした。その後ギター弾きは、所在不明だと聞いています。ジャグラーも音信不通です。私は小学校、中学校では発達障害児と言われてきました。教科では音楽と体育が高い評価を貰っていました。あとの教科はどれも最低のランクでした。小学中学ではお友達も無く孤独でした。公園で一人踊っていました。父母がそろって寡黙だった事が影響したのでしょうか。主人は貧乏寺の跡継ぎでしたが私のすべてを承知して結婚したのだと思います。

発達障害は教育学者、脳科学者や医療学者が論文に新規性を持たせたいため、細分化して提唱していることもあります。まだすべてが真理とは言い切れません。それにしても、私は発達障害と言う学術用語は認知症と同じくらい憎しげな表現だと思います。前者は「個性」後者は「老耄」です。あなたの奔放な男性関係の原因は発達障害ではありません。単にあなたに常識的倫理観が欠けていただけでしょう。あなたの個性です。

はい。常識が欠けると、別のある一点に気持ちを集中させることができるのだと理解しています。私は昨日ジャグラーと過ごした感覚を、今日、ギター弾きとの逢瀬に持ちこんでしまいます。異なる二つの熱気が重なり合って、今日の情熱は昨日の五倍六倍に昇華します。

あなたのその特異な集中力はある時、身体表現の演技中プツリ切れてしまいましたね。

はい。私には初めての気持ちでした。「自己嫌悪感」「厭世観」を表現したくなりました。私の舞踏演技にはあらかじめシナリオや振り付けはありません。その場限りの感情の身体表現です。「凌ぎ踊り」と言います。その時、嫌悪感、脱力感に進みました。立ち木から垂れたロープが首に絡まったまま、次の所作に入りました。瞬間、恍惚感が走り、縊死してしまいました。

良く分かりました。享年五十で偶然の事故死を得たあなたの来世は、ついこの前の現世と同じ歩みを繰り返してください。あなたの身体的個性に嫌悪感を持つ必要はありません。ただ、来世ではロープの扱いに習熟してください。偶然の事故が無いことを希望します。来世では凌ぎ踊りをアートの領域まで引き上げてください。この花畑を歩み続ければ、きっと次の母の胎内に掬いあげられるでしょう。

ありがとうございます。「あや」は晴れがましい気持ちで、スキップを踏みながら、カウボーイのようにロープを振り回しました。やがて怪し気な後ろ姿でお花畑を下手方向に走り始め

た。「私の前世は棘皮動物」と歌いながら。

あなたは「しの」さんですね。

はい。私は享年八十ですが、天命を全うしたと思いつつ、ここにまいりました。

それではあなたの生涯を遡るように、ごく簡単に確認していきたいと思います。あなたは寿命を全うし、しばらく、献体機関に身を寄せていましたね。なぜそこで一休みしたかったのですか。医学の進歩に貢献したかったのでしょうか。

はい。私は生来のん気な女です。ほとんどの人は肉体が死滅すると瞬く間に生きている人に葬られます。死者の心は日単位のせわしなさで三途の川を目指さなければなりません。この時間の経過は私には早すぎてついていきません。献体すれば年単位で肉体が葬られていきます。それだけの時間があれば、自分にけりをつけることができると思いました。予想通りちよんど三年掛けてここに参りました。

三年でご自身納得できるけりをつけられましたか。辻褃は合いましたか。

はい。無理やりだったかもしれませんが結論づけました。ありがたいことに晩年私の人生の大半はうやむやになりました。音もなくあちこち躰糸が抜けるように多くの記憶が消え去りました。七十歳の時、認知症の初期だと診断されました。徐々に私の記憶は十代に戻ったようです。

ある夏のとても暑い日、父と二つ上の兄と私は川遊びに出

かけました。母が持たせてくれたおにぎり塩梅良くおいしかったことをよく覚えています。川は幅が広く透明な流れでした。川下に向かって大きく左に湾曲していました。兄は向こう岸に向かい流れに直角に泳ぎ始めました。向こう岸は林の茂る斜面でしたから、兄はこちらの河原に引き返してくるはずでした。河原に座っていた父が突然川に飛び込みました。兄の頭が向こう岸寸前で見えなくなったのです。湾曲の内側は深く、流れは渦を巻いていたようです。すぐに父の頭も見えなくなりました。私は遠くの家族連れに向かって石だらけの河原を叫ぶこともなく走りました。溺れる父と兄を助けてもらおうとしました。その家族連れは誰も泳げないと返事でしたが、近くの人家に走ってくれました。大勢の人が集まってくれるまで私の足はすぐんでいました。ただ震えていただけだと思います。長い時間でした。

その日から五十数年母と私の二人だけの生活が過ぎていきました。父と兄は生きたままこの幅広い三途の川を渡っていったのだとずっと思っていました。私は高校を出て母と同じ会社に勤め定年まで置いてもらいました。やがて母を見送って、さつき申したように認知症の診断を受けることになりました。生涯の記憶の大半に煙が覆ってきて、なんだか気持ちが楽になりました。かわりに十代のその記憶だけがとても強く思い出されるようになりました。私の生涯はあの水の事故までで、あとは長い余剰の人生だったと、献体待機中の三年をかけて了解しました。あの時、私も父と兄と一緒にあの川幅

の広い透明な流れの三途の川を生きたまま渡ってしまったのでしよう。だから、それ以後の記憶はいらなくなつて霞んでしまったのだと思います。

良く分かりました。あなたの来世を指示します。前世の母親に再度揃い上げられます。もう偶然の事故は起こりません。兄弟も増えるかもしれません。あなたも配偶者に巡りあい、楽しい家庭を営むことになるでしょう。このお花畑を歩き始めてください。のん気な歩調で構いません。

はい。でも、どうして閻魔様はもう偶然の事故は起こらないとして来世を指示して下さるのですか。

あなたのご家族には偶然の事故を回避する知恵がつきました。

「しの」は指示通り暢気な歩調で優しく前を見据えて慎重にお花畑に向かった。

あなたは「あきら」さんですね。さてよ、男性はこの場には来ないはずですが。

はい。私は戸籍上男性でしたが、気持ちには女性でした。だから、ここに参りました。世間の人々は私たちのことをマイノリティーと分類します。私は密かに誇りを持って「少数民族」と呼んでいます。中学校、高校のクラスメートの男子を見て、あの乱暴さ、粗雑さ、勇敢ささえも許せませんでした。

几帳面で優しく、穏やかな男子なんか私の身の回りには一人もいませんでした。私の友人などはマイノリティーの多くは

見世物興行で生計を立てていると言います。本当はマイノリティーのすべき重要な仕事は、昔のろくろ首やヘビ女なんかじゃないと思います。少数民族にしか出来ない仕事です。例えば老人介護や病につき添う看護師などを考えました。優しい力持ちです。保育士だっていいと思います。

あなたは試行錯誤しながら、まれに男性をのぞかせることもありましたが、ほとんど女性として優しく生きてきたと判断します。その苦心には努力賞を差し上げます。次の世界では男性と女性のどちらを希望しますか。

はい。どちらも希望しません。私の第一希望はここでお終いにすることです。これ以上の転生はお断りしたいと思えます。

気持ちは分かりました。でも、一度生命を授かった生物は永遠に転生をくり返して生き永らえる決まりです。もし、あなたが途中で途絶えたいとすれば、この全宇宙が消耗しきつた時になります。あと五十億年掛かります。それまで待つしかありません。

解りました。それでは、来世は今回頂いた努力賞の上の栄誉賞を頂けるように生きたいと思います。

それではあなたの二番目の希望に沿って、ついこの前の現世と同じ来世を指示します。あなたにしかできない重要な仕事に偶然行き当たるでしょう。

はい。ありがとうございます。ところで神様はほんの悪戯心で私のようなヒトをお造りになったのでしょうか。

いいえ。神が人間をお造りになったと言う通説は頂けません。全く逆です。つまり人間が神を作ったのです。例えば人は「木に仏性あり」として、もともと木の中には仏さまがいらっしゃると言います。人の一捻が木を穿ち開いて、既に木の中に佇んでいらっしゃる仏さまを現世にお迎えするという考え方です。これも逆です。人が物語を創作して、祈りたい偶像を創造したに過ぎません。出来上がった偶像に向かって祈りを捧げると、人間の悩み苦しみが少しだけ和らぎます。

この方法は人間が二十万年かけて積み上げてきた叡智によるものです。でも、人の心が祈りで和らぐのはほんの少しの間です。もし安穩を続けたいなら、目を覚ましている間、のべつ幕なし三六五日祈り続けなければなりません。それでは、人々の生活は成り立ちません。そうではなく自分の体得した価値観、判断力、実行力で悩み苦しみ、迷いを解決していくことが多くの人々の日々の生活です。ありがたいことに、悩み苦しみ、迷いはそう長く続きません。人の肉体的痛みと同じです。痛みは飽和してしまい、ある強さ以上には感じられません。では、神を作った人間はどんな様が、どんな風にしたのかと疑問を持つでしょう。その答えは「宇宙が偶然に造った」のです。その偶然は今もお続いています。簡単な例をお話します。酸素と水素が偶然ぶつかってその周囲が偶然高い温度だったとします。この三つの偶然が水を生み出しました。これは人間が積み上げた知恵で解明した真理です。ヒトはその偶然起きた事象に必然性や論理性を見つけたがり

ます。また神秘性や不可思議さに意味を持たせません。そして事象間の因果関係を創り出さないと気が気ではなくなるようです。すべてが、偶さか、たまたま、偶然の衝突でしかないと言いきるには余りある深遠な偶然の時間経過に畏敬の念を持つことになりました。それらを解明していこうとする人間の知恵の蓄積も偉大でしょうが。

夢と希望を持って、感謝の気持ちで、前向きに、謙虚に、真摯に、思いやりを持って、誠実に、明るく、美しく、健康に真理を求めて計画的に生存せよと、人々は言い伝えてきました。だから秩序ある人類が営々と生き永らえ、霊長類の頂点に立てたとする考え方もあります。これでは、偶然の出来事に両手を挙げて立ち向かう形相にも取れません。でも、植物や微生物、昆虫、魚類などはヒトよりもはるかに多くの生命体を維持しています。彼らは偶然、たまたま、偶さかのからくりなど考えもしません。ただ、日々精いっぱい生命を全うすることで、種の保存を維持してきました。「食物連鎖」などは人が勝手に都合よく分類して整理したに過ぎません。草食動物に食べつくされた草原は時を経てまた同じように生命を得て繁ります。

あきらは閻魔様の長い解説に領いて三途の川を背にお花畑に向かおうとした。その瞬間あきらの体は宙に浮き、反転して今渡ってきた三途の川を跳び戻ってしまった。閻魔様は驚くこともなく乱暴な口調であきらに向かって叫んだ。「心配

するな。この頃はヒトの血液浄化技術が向上したのだ。君の飲み下した毒液は計画的に排泄された。人の知恵は素晴らしいこともある。でもなあ、まれだけど、作意的過ぎる人の作る偶然は愚にもつかない結果を招く。また来いよ」

閻魔様は面談の終わる寸前に、一息つく。次にビーチサンダルを履いたまま右足を宙に蹴上げる。足から抜けて空を泳ぎ、着地したサンダルが鼻緒のある表であれば、そのまま「遺伝」として来世は前世と同じだと女人に指示する。裏が出れば、他の三人の閻魔様の面談者のついこの前の現世と入れ替える。そして来世を「多様性遺伝」として指示する。女人一人当たりの面談時間は来世の指示まで入れて、おおよそ五十億分の一秒で終了する。閻魔様は通常三途の川の向こう岸で生活しているが、こつち側の現世にも引つ張り出されてたくさんの「地蔵尊」に作り替えられている。黙って、じつとして、いつも微笑むことを強いられている。

以上

(中区)

「入選」

融合

鈴木篠千

辞書で『融合』という言葉調べてたら何と書いてあるのか。それは『科学反応の一種で、異なる物質を融合合わせて一つになること』とある。

それは、物質だけではなく、この世で起きる身近な物事もそうだ。個人に起きる様々な問題は混ざり合い一つになっている。

そんな溶け合った問題を解決するのはどうすればよいのか。

「…鈴木君、あのさー、ちょっと言いにくいんだけどさ…」

金子は言いにくそうに、開店準備をしていた俺に背後から声をかけた。

この社員食堂のある階のひとつ上のフロアにある喫煙所に誘われた。俺は脳腫瘍を患ってから喫煙を止めていた。なので、休憩中もこの場所に來ること自体が無かった。

金子は俺の対面に座ると、胸ポケットから煙草の箱を出し

てタバコを一本引き出した。それを片手に持ちながら話した。

俺は彼と呼ばれた時から、何を告げようとしたのか、すぐに分かった。

その兆しは先週からあった。

先週の金曜、ベテランのパート、山崎から「コップの置く位置が悪い」と些細な注意を受けた際に、頭に来て睨み付けてやった。

危うく手が出そうになるのを我慢した。

山崎は「何よ」と怯えた眼をして抗議した。俺は「す、すいいま、せん」と相変わらず不自由な言葉を絞り出して謝ったが、腹の虫が治まらない彼女は店長の金子に言い付けたに違いない。

それを受けて金子に『決断』をした、という事が予想できた。

いろんな事を言っても、彼にとつて口の不自由な年上バイトの俺より、長年勤めているベテランパートの方が良いのであろう。

俺自身も覚悟は既に出来ていた。

元々この職場に採用された去年の夏から、俺は他のパートと馴染めずにいた。

俺がこのバイトに応募したのは、俺を敵視するパートの一人である堀内の「標的」にあえてなるためだった。

堀内は俺がバイトとして入社する前は、金子の標的になっ

ていて、彼女はそのストレスを自身の子供に向け、その子供はそのストレスを同級生の村越雄介に浴びせた。雄介君は憐れな事に登校拒否に陥る。そんな村越雄介君は去年高校野球で活躍した投手、村越安里の年の離れた弟だった。

実弟の事に心を痛めた彼は、甲子園出場がかかった静岡県予選で不甲斐ないピッチングをして負けてしまう。

偶然、それを知った俺は、その馬鹿馬鹿しい連鎖を断ち切る為、このバイト募集に応募し、あえて金子や堀井の「標的」になり、そこからのストレスの矛先が子供に行かないようにしていた。

その甲斐あってか、雄介君の登校拒否は解消したらしく、兄の安里率いる浜松学芸高校野球部は秋季大会で四強にまで勝ち上がり、夏の県予選では注目校に挙げられるまでになっていた。

俺の計画は成功した、と言える。

ただ、納得行かない事も出てきた。

俺は脳腫瘍を患い、言葉が不自由になってしまった。仕方ないことだが、そのせいか、堀内以外のパートからも馬鹿にされ、度々怒られた。

俺にも限界というものがある。

それが先週の「睨み付け」になった。

俺の役目はもう終りではないか。

金子の火を付けないタバコが手の中で動く度に、俺は彼から放たれる言葉を予想した。

「というわけだからさ。ま、大変なんだよ。人をまとめるってのはさ」

金子は組織と個人の在り方をくどい程、話した。

「でね。他のパートさんからキミについて、何回か、クレームが来ていてね」

ようやく話は核心部に及ぶ。

「鈴木君が一生懸命やっているのはオレも分るし、病気でいろいろと大変なものも分かっているよ」

ちなみに俺は主治医から「就労には問題無し」という診断書をもらっている。

「で、…わかりやすく言えば、今月まで、って事にしたいんだけど」

俺は少し肩を落とした。こういう素振りを見せないと何かまずい気がした。「そ、そうですかか」と呂律の悪い声で言う。

金子は「オレは、このまま居てもらって構わないんだけど」と、これまた予想していた言葉を吐いた。

俺は首を振り、解雇通告を受け入れた。

こうして俺は、バイトを解雇になった。

約一年前、退院した俺は様々な求人に応募し、落され、就労が叶っても度々と解雇されて、ファミレスなどで慥然と日々を過ごしていた。慣れた事ではあった。耐え切れない事はない。人生には慣れと忍耐が必要だ。

また、あの日々に戻るのか。

あれ程の無為な日々に戻るのが、どこか安心した感じがしていたのも事実だった。

次の日からハローワークに行ったり、求人誌を読み込んでみたが、あまり目ぼしいものはなかった。

解雇の日が近づくある日、俺は朝の出勤前に新聞の折込求人を見ていた。その流れで新聞の三面記事を何気なく眺めていたが、下段の黒い太文字が目を引いた。

『南区の工場でボヤ騒ぎ』

それは浜松市南区の工場で起こった火災事故を告げる内容だった。工場の一角から出火し、騒ぎになった。常駐の警備員がすぐに鎮火した、というような内容だった。

俺の興味を引いたのは、そのボヤ騒ぎが起こった工場の会社名だった。

『サンリープ株式会社』

それは俺が約一年前に契約解除された会社の名前であった。

そこにはあまり良い思い出が無い。だが、ボヤ騒ぎとは考えられない話だった。サンリープは車のシート部分を作る工場だった。五階建ての工場であり、一階は造り上げた製品のチェックと配送用の保管庫で、上の二、三、四階が製造シートの作成作業場であった。五階が会社事務所と食堂になっていた。

その三階で、俺はシートの基盤にスポンジ生地の衝緩材を組み付ける仕事をしていた。

火の手が上がったのは、その三階の一角であるらしい。

にわかには信じられない。構内への火器の持ち込みは厳しく制限されていた。タバコは喫煙スペースが作られ、そこから出来ない。火の元への注意はかなりなものだった。

さらに、発火したのが深夜らしいが、この会社は日勤のみであり、午後五時を過ぎれば社員全員がほぼ退社する。残業も無い。

それにも関わらず深夜のボヤ騒ぎ。

一瞬、(まさか放火) と思ったが、記事では警察は『事故』の面から調査中らしい。

以前いたこともあり、気になった。

俺は次の日の午後三時半、解雇まで数日に迫った食堂のバイトの後、俺は徒歩でサンリーブに行ってみる事にした。

梅雨明け間近の日差しは厳しく、体から絞るように汗が出たが、普段、空調の効いた食堂の厨房で堀内らの冷たい雰囲気の中にある俺にはこれくらいの熱気が丁度良かった。

四時半には工場の見える公園近くに着いてしまった。派遣社員だったとはいえ、一度辞めた人間が工場付近をうろつくのは良くはない。平日に来た事を後悔しながら、辺りを見回す。ファミレスがあったが、もうすぐ無職に戻る俺の財布から仲間が減っていくのは極力避けたい。仕方なく、隣のコンビニの立ち読みで時間を潰した。

腕時計が午後の五時半を指し、店内の強め冷房で身体が芯から冷え切った俺はコンビニを出た。

誰か知り合いに会うかと思ったが、そんなことはなかった。

工場までの道のりを歩く。感慨は沸かない。つい一年前まで勤めていた会社だったが、そこまで思い入れはなかったからだ。

工場の外観が見える位置に来た。就業時間が終わり、社員らは皆帰路についているのであろう。駐車は殆ど無い。記事にあった発火場所を外から見ようと移動する。初夏の午後六時前はまだ随分と明るい。俺がいた三階部分の外壁に火事の跡が無いか、ぐるりと見て歩く。三階の部分には窓ガラス越しに黄色の規制線が薄っすらと見えた。

そのまま歩きながら工場の社員用通用門の前に差し掛かった時、中から従業員らしき人間が出てきた。思わず俯いてやり過ぎそうとした。

そいつは、すれ違いきま急に振り向いた。

「あれ？ 鈴木さん？」

白井だった。

先ほど俺が来店を控えたファミレスで、白井と向き合いボヤ騒ぎの詳細を聞いていた。

白井は、俺がこの会社に居た時、唯一と言って良いほど親しくしていた人物だった。彼は人の良さが滲む笑顔を持っていた。俺以外にも愛想が良く、人間関係が苦手な俺としては彼の社交性が羨ましくもあった。

だから、彼は社内の人間関係等に詳しい。

一日、白井が出勤すると工場内、特に三階は大騒ぎになつていた。消防の人間が激しく出入りしていた。出勤してきた他の社員らの話から、昨夜にここで火の手が上がったことを知った。

「…噂が出ているんすよ」

神妙な顔をして白井は声を潜めた。

「噂？」

「先月、宮本さんが急に会社辞めたんです」

宮本。

思い出したくない名前が出た。この工場にいた時、俺の「上司」だった男だ。

丁寧な言葉遣い、姿勢の男だった。だが、その姿勢とは裏腹に俺に対しては手酷く当たり、懇懇な物言いの中にこちらを小馬鹿にしてくるニュアンスを醸し出していた。おそらく言葉の不自由な俺があまり言い返せないことを良い事に嗜虐的になつていたのである。堀内らと変らない人間だ。許せなかった。

また、俺が宮本を許せないのは、俺が何かミスをするに必ず「フロア長」と一緒に注意に来る点だった。ミスをしたのは俺自身に責任があり、その場で叱責すれば良いのだが、年上の俺に遠慮してか、彼は必ず自身の上司に当たるフロア長と一緒にやって来た。その陰に身を隠し、非難に満ちた眼差しをこちらに向けていた。

非常に狭い器量と小賢しさを持った人物だった。ちなみに

彼は「リーダー」と呼ばれていた。これは通常の会社では「課長」にあたり、フロア長は言うなれば「部長」となる。

そんな宮本が、この会社を辞めるような考えや度胸は見受けられなかった。

「突然だったんすよ。…急に来なくなつたと思つたら、フロア長に電話一本で」

「…え？」

何度も言うが、この会社に残業無く、ノルマも厳しくはない。何が不満だったのか。

「な、なんで？」という疑問がすぐ出た。

「それがわかんないつすよ。それで、昨日のボヤでしょ。…みんな、噂してんすよ。『宮本さんじゃないか。』って」

「でも、や辞めさせられたつて、事じゃ、なないんでしょ？」

「そこが謎なんすよね。急だったし…。確かに自主退職らしいですけど、誰かと揉めていたつてこともないですし…」

信じられない。未だに自身の居場所が無い俺からすれば、宮本は完全にそれを得ていたようで、あのサンリーの三階は、彼にとつて代え難い居場所ではなかつたのか。

「ま、その気持ちも分かりますけどね」

白井は急に顔を歪ませて会社へ不満を披露し始めた。就労状況が緩やかなこの会社にそんなに不満があるのか。いつも笑顔の白井にこんなどす黒い一面があることを知った。

白井は自分もこの会社を辞職するかもしれないという予想

を述べた。そして俺に「そう言えば、鈴木さんって今、何、やっつてんすか？」と尋ねてきた。

俺としては今一番答えたくない質問だ。

一週間後、俺は食堂のバイトを辞めた。

堀内、山崎は最後まで冷たい態度を崩さず、金子は「鈴木君ならどこでも出来る」と根拠の無いエールを最後にくれた。外に出た時間はまだ午後の三時半である。

昨夜、食堂のバイトをクビになったことを母に告げると泣かれた。確かに今年で三十九になる長男が未だに無職で、しかもバイトもロクに勤まらないなど考えたくもないのだろう。このまま帰宅すれば母の怒りがさらに加速する気がした。俺は、一年前までよく顔をだしていたファミレスに向った。

そこは食堂のあるビルから歩いて数分であり、俺が村越兄弟の窮状を偶然知ったのもこのファミレスだった。

一階の冊子ラックから無料求人誌を引き抜き、階段を上がる。二階の入り口から店内に入ると以前と同様、エアコンの効き具合が凄い。冷蔵庫のような冷気が汗ばんだシャツの背中に襲い掛かる。今は心地良いが、後々はどうなるか、心配である。

俺は以前と同じ、奥の席に着座した。食堂のバイトを始めてから、ここに来ることは無くなった。バイト終了後に堀内が来ている可能性があったからだ。金子も来店しているようだったが、それは食堂の営業終了後の午後八時過ぎであ

るはずだ。

今となつては誰に見られても構わない。

ドリンクバーのみを注文し、まずは水を多めに入れた烏龍茶を喉に流し込む。そして辺りを見回す。そこには堀内も金子も、そして村越雄介の状況を心配していた安里の同級生もいなかった。

代わりに、スーツ姿の男性が俺の斜め後ろ、店内で一番奥の席に座っていた。

その姿にやはり一年前に見た奇妙な男女の事を思い出した。スーツの男性が年配の女性を説教する奇妙な光景であり、その年配の女性は別の日にまた別の女性をここで叱責していた。今を持ってても奇妙な光景だった。今はそんな人々は見当らない。

俺はそのスーツの男性に、どこか見覚えがあった。俯いて、テーブルに広げた雑誌を必死に読み込んでいる。見つめている俺の視線にも一切介さない程に夢中だ。

その男だけを見続けるわけにはいかない。

俺も手元の求人誌を開く。巻頭の『医療関係特集』から順に求人を読み進める。

俺に安穩としている時間は無い。出来れば正社員採用されたいが、ここまでの経験からそれが難しいことは理解している。またバイトで食い繋ぐしかないのか。出来れば『新規オープン』などで、あの食堂のようにうるさいベテランがいない現場が良い。

自宅近くの病院の洗浄部門の求人が眼に入った。『新規採用』であったが、勤務時間は午後の五時からであった。これでは昼間の時間が空いてしまう。

と、その時。

スーツの男性のテーブルに置かれたスマートフォンが鳴った。着信だ。その音に男性は身体を震わせて反応した。顔が跳ね上がる。

(へっへ)

驚いた。それは知っている顔だったからだ。知っているどころか、先日、白井と話していた宮本、その人だった。

今度は俺の方が顔を伏せる。

(何故、ここに?)

彼の自宅は磐田方面であると聞いた記憶がある。何ゆえ、浜松の街中にスーツ姿でいるのか。

俺に気付かず、宮本は着信のあった自身のスマホに飛び付く。

「あつ…、はい、はい、そうです。…ええ、はい。…あ、ありがとうございます」

宮本はスマホを片耳に当てながら、居ない相手に礼をした。そしてゴニョゴニョと謝辞を言うと、顔を綻ばせてスマホを置いた。

面接の連絡だろうか。彼のテーブルの上を覗き見れば、読み込んでいたのは求人誌だった。それは俺の無料求人誌ではなく書店でいくらか金額を支払う正社員求人の多い求人誌で

あった。彼が確か妻帯者であったはずだ。子供の有無は知らないが、同じ無職でも背負うものが大きい。俺には還暦を過ぎた年金暮らしの両親がいるが、未だに独身であった。

再び宮本のスマホが鳴った。激しいギター音が高いコードの曲線を響かせた。

俺は上げていた顔を再び落す。それで求人誌を読み込む素振りをして、彼の行動を確認した。

一度目の着信には飛び付くように出た宮本だったが、二度目の着信には液晶画面で相手を確認すると何故か苦々しい顔をした。

「…はい。俺。ん？ …で、そう…」

小声で応対する。よく聞き取れなかったが、相手を近しい人間のようにだった。小声で諭すように、うるさそうに話す。

以前、俺をいびっていた時を思い出した。俺の中に黒いものが渦巻き始める。

すると宮本は突然。

「そんなこと、できるわけないだろ！」

急に怒鳴った。その声は店の隅々に響き、客に注文を訊いていた店員がこちらを見た。

俺も再び驚いた。いつも丁寧な口調であった宮本からこんな乱暴で大きな音量が放たれるとは思っていなかったからだ。

自身の声の大きさと興奮に気が付いた彼は、また元の小声に戻った。そして自分に向けられる視線を確かめるべく、素

早く周囲を見回してた。

一瞬、俺と眼が合つて。(おや?) という表情をした。

俺は首を振り、伝票を持って立ち上がる。気付かれたのか。

もうここには居られない。後ろから視線を受けているのを感じながら手早に支払いを済ませて店外に出た。

結局、ドリンクバーは烏龍茶一杯しか飲まなかつた。高く付いたが、あのまま宮本の姿を見るのも、声を掛けられるのも嫌だつた。

それは彼も同様だろう。二回目の着信は家族からか。ならば、彼が自宅から離れた浜松街中のファミレスに来ているのは、俺と同じ理由かもしれない。

腕時計を見る。まだ午後四時を少し回つたあたりだ。帰宅にはやはり早い。

俺はモール街から有楽街を抜けて北に歩いた。シャツは再び汗で濡れ始める。時間だけはある。今後の身の振り方考えながら遠州病院駅辺りまで歩くのも良いだろう。

今日辞めた、あの食堂のバイトをしていて、分かつたことがある。

何にせよ、人の役に立つのは気分が良いということと、人間は我慢すれば何でも出来るということだ。

不思議と一年前のような焦燥感や暗さは感じられなかつた。

ファミレスで見た、病院での洗浄のバイトの事をぼんやり考えながら有楽街北の交差点を渡つた。先に白い壁の店舗が

見える。何回か見たことのあるケーキ屋である。かなりの人気店であり、朝には行列が出来ていた。壁に店名を金具で打ち付けてあるが、読み方がわからない。それを含め、全体から繁盛店の雰囲気が出た。どこかにバイト募集の張り紙でもないかと探したがあろうはずが無い。俺とは縁遠い店のようだ。

そこから数十メートル北の十字路まで来た。左に曲がれば市役所だ。頭の中は洗浄のバイトに応募するか否かで迷つていた。

ふと、左にパン屋らしき店舗を見た。

『パン屋』と確認できたのは、ガラス越しに四角い食パンの並びを見つけた事と、人気ケーキ屋のわずか数十メートル先で営業している同業種の店舗に同情を感じたからだ。

(こんなところにパン屋、あつたんだ) 何度か通つた事があるはずだったが、存在に全く気が付かなかつた。

店舗前は前面が駐車場になっていて、道路脇の電柱に這うように茶色の寂れた看板が出ていた。

『ブーランジェリーWAKUDA』

これが店名らしい。初めて見た気がした。店の奥で赤い鳥打帽を被った老人が疲れた顔でノートパソコンの画面を見ていた。並べられたパンの数がひどく少ない。既に正午の時間は過ぎていた。あらかた売れたのか、元々売っていないのか。すぐ先のケーキ店に比べて盛況さに欠けるのはすぐに分かつた。

営業中なのはドアにかかる木板の『OPEN』の文字で何とか判断できた。

それより俺の眼を惹きつけたのはその下の『配達員募集』

勤務時間 九時～十四時（多少前後有）』という求人貼紙だった。

話は上手く運べば、驚くほどすんなりと行くものだった。

すぐにパン屋のドアを開け、眠たそう顔の店主の和久田に求人への応募を告げると「明日、改めて履歴書持って来て」と言われ、同時に「いつから来られる？」と訊かれた。次の日に再訪すると、その場で採用を告げられた。履歴書には経歴と共に脳腫瘍の事も書いてあったが、和久田は意に介さないうだった。とにかくすぐに人手が欲しそうだった。

こうして、朝九時から午後二時までの約五時間の仕事が決まった。

しかし、この仕事のみでは物足りない。

ファミレスの求人誌にあった病院での洗浄の仕事に応募した。勤務時間は午後五時から九時まで、パン屋のバイトに支障はなかった。『新規採用』と銘打ってあるように、この現場も人手が不足しているようで、面接した担当者は和久田同様、可否の前に「いつから入れますか？」と訊いてきた。履歴書の病気の事など全く口の端に上らなかつた。

一年前の苦勞が嘘のように、バイトではあるが、あっさり仕事が決まった。俺は朝はパンの配送。午後は病院での食

器の洗浄のバイトを始めた。すぐに時給を計算した。二つ合わせて得られる手取りの給与は月十四、五万円になる。今の俺には充分な金額であった。この金額が月々入るのなら実家を出る事も可能であろう。そこまで算段した。

何より、何かやることがあるのが嬉しかった。面接に落され続け、誰からも相手にされなかつた一年前からすれば、それは随分と有意義な日々には思えた。

パン屋と病院への間の空いた時間。俺は再び例のファミレスで遅めの昼食を摂るようになった。そして時折、宮本の姿を見つけて入店するのを止めたりした。見たところ、宮本の求職はあまり芳しい模様ではなかつた。そしてあの電話での怒声も忘れていった。

『ブーランジェリーWAKUDA』での仕事はすぐに慣れた。朝九時前に出勤すると和久田が既にパンを数種類焼き上げており、それを黄色のケースに入れ、店の脇に停められているボロの軽自動車で配送する。配送先は近隣のスーパー、東区の大形モール内の市場、磐田市内の同じく大形モールやスーパー、計五軒ほどに配送する。パンの焼き上がりの時間などで多少前後するが、おおよそこのルートで配送すれば午後二時には店に戻って来ることができた。ルートは単純で一週間で頭に入った。トラブルが無ければ二時を過ぎることは無い。パンの種類と配送先毎の卸す数量も決まってい、二週間もすればそれも問題無く覚えることができた。

問題は仕事では無く、別の所にあつた。

店主である和久田の様子がどうにもおかしかった。

慣れてきたある日。和久田は俺に「磐田、今日はクルミパン二個」と言った。配送されるパンの種類、数は和久田の思いつき、仕入れによって時折変わる。「：はい」と答え、俺は磐田のスーパー用のケースに渦巻き型のクルミパンを二つ、袋に入れて販売用のシールを付けて入れた。数分後、それを見た和久田が俺に言う。

「何で、クルミパンが二個、磐田用に入ってたんだ？」

俺は思わず「はあ？」と聞き返した。

その瞬間、和久田は先ほどの自分の発言を思い出したようだ。「ああ、まあ、いいよ…」と云う。まるで俺がミスしたのを寛容に許したような感じで一人納得する。

こういう事が多発した。

和久田は見た目は六十手前で、俺の父より少し若いように見えた。その父は今や退職し、孫（弟の子供）の相手に日々を送っていたが、和久田は早朝から小麦を捏ねて生地を作り、パンを焼く日々を未だにしていた。よく俺に「今日は疲れたあ」とか「腰が痛え」と愚痴る。体力的にはすでに限界に思えた。従業員は俺の他に早朝に生地作りに来る近所の年配女性バイトで一人いるのみだ。パンの焼き上げ、陳列などは和久田一人だった。

「昔は職人三人くらい雇ってよお」と言った事があった。今や近隣に出来たケーキ屋に人気と売上を持っていかれ、職人は減っていき、配送用の人員にも困っていたらしい。そこに

俺が応募してきたのだ。それでどうにか店を回しているらしい。

自分で吐いた言葉も忘れるくらい忙しいらしいが、店が繁盛している様子はなかった。

初めは言葉の不自由さを見せたくないので黙って従っていた俺も、似たことが二回三回と続くと、さすがに頭に来る。

「さっさア、アンタ、二個こっつて、言っただろ！」

そのうち平気でタメ口で怒鳴るようになった。そうすると和久田は苦笑いして「そうだったなあ」と言う。俺の言葉使いを注意されることはなかった。店主一人、バイト二人の零細パン屋、俺がいなくなれば売上の生命線である外注（スーパーへパンの配送）を担当する人間がいなくなる為か、和久田は俺の暴言を受け入れているようだった。

父親と同世代人に怒鳴るのは少し後ろめたかったが、あの食堂のように自分を押し込めて働くよりは随分と気分が良かった。

そのバイトを二時に切り上げるとファミレスに寄り、四時程になって赤電で、今度は自宅近くの病院に向う。

一階の栄養課。その隣にある『配膳室』と『洗浄室』が俺の二つ目の仕事場だ。

五時前に着替えて、待機して居れば、病室で食べられた食器がワゴンに載って降りてくる。それを手分けして回収し、軽く洗ひ、洗浄室の中央に構える大型の洗浄機のコンベアに送り込めば、大方の食器は綺麗になって出てくる。それを種

類ごとに分けて肺炎室の乾燥庫に入れたら午後九時頃になる。

以前は、この病院直接雇用のバイトがこの仕事をしていたようだったが、夜の九時までが時間的に厳しかったらしく、派遣会社に夕食の洗浄を委託したらしい。

洗浄作業は五人で行う。

俺以外の人間は一ヶ月前に入った派遣バイトらで、皆、俺より年上の年配、と言うより初老の人ばかりであった。作業には既に馴れ切っていて、親切に教えてくれたので問題無く働けた。

そして、和久田のように自分の発言を忘れるような人間はいなかったので、俺は誰にも怒鳴ること無く、食堂の時と同様、こちらでは、無口な青年を演じた。それがこの現場を円滑に回す術のような気がした。

こうして瞬く間に一ヶ月が過ぎた。

午前のパン屋では怒鳴りながら配送し、午後は病院の洗浄室で無口な男として働いた。

この先、自身がどうなるか分からなかったが、どうにか生活の基盤が出来た気がして悪い気はしなかった。

食堂での金子の説教や、堀内らからの嫌味などすっかり忘れていた。

また、宮本を時々見かけて、彼の求職が順調とは言い難い様子を密かに喜んだ。

(ごまあみろ)

臼井の言っていたサンリーブ内の噂の真偽は分からないが、俺に攻撃的だった宮本の凋落は俺の心を僅かに躍らせた。

だが、俺の安心感、高揚は長くは続かない。『人を呪えば、穴二つ』とはよく言ったものである。

俺の一つ目の墓穴は磐田のスーパーにいた。そこはストア内に作られた天然食材を扱う市場だった。

そこに十種以上三十個ほどのパンを卸していた。業者用の通用口から店内に入り、ケースからパンを出して並べる。十五分ほどで終わる作業だった。

その際に、いつもクレームを付けてくる女性の店員がいた。『青沼』というその大柄な女性店員は陳列作業をする俺に「もっとキレイに並べてよ」とか「このパンあんまり売れないから持ってくるの、止めたら」などと小言のような文句を言ってきた。俺の性格上癩癩を発し怒鳴りたくなる衝動に駆られたが、頭の中に、零細パン屋と朝から辛そうに働く和久田の顔が浮び、それを控えさせた。また言葉の不自由な俺は、自身のそれを聞かれるのも嫌で、彼女の説教を聞き入れ、ただただ頷き、「すすいまま、せんん」と小声で謝罪するしかなかった。

青沼はそうした俺の姿勢を『気弱』と見たのか、より一層俺にクレームを並べ立てるようになっていった。

その内容は店に帰った後、和久田に報告したが、また苦笑いを浮かべるのみだった。

ただでさえ、売上が減っている現状で、大口の受注先からのクレームは甘んじて受け入れるしかないと思っただけだ。うだった。

俺は売り場に向い、青沼の大柄な姿をただでうんざりするようになっていった。

二つ目の「墓穴」は病院の洗浄と一緒に働く鶴田という初老の女性だった。青沼と違い背が低い女性であったが、その口から出るのは俺に対する嫌味と愚痴だった。

「この食器は必ずここに纏めておいてっていったでしょ！」
「カネのスプーンは先に乾燥庫に入れるんだってば！」などと手厳しく指導された。

初めは他者より遅れてバイトに入った俺の手際の悪さ指摘しているだけと思っていた。

だが、次第にそうではないと思えてきた。

どうも彼女の俺への指導には、本人の攻撃性の強さが混じっている気がしたからだ。

「私は腰が悪いの。だから下膳車の降ろしは鈴木君、やってよ」

どう考えても自分の都合を俺に押し付けているようにしか思えなかった。

この洗浄の仕事で、俺はブルーランジェリーの時とは打って変わり無口であった。その姿は、午前中の青沼同様、鶴田には『気弱』と映ったらしい。彼女の言動は次第にエスカレーターしていったが、この現場で「リーダー格」の彼女を抑制す

る人間はいなかった。

俺は、青沼に言われた際と同じく、頷き、呂律の回らぬ声で謝るしかなかった。

こうして、当初は順調で自由に過ごしていたWワークの日々であったが。二つの「墓穴」の出現で、一気に暗澹さを帯びてきた。

午前中に青沼に文句を言われ、午後に鶴田にいびられた日など、帰宅後、何とも言えないやるせない気持ちになった。

それはサンリーブで宮本がフロア長を先頭に文句を言った時と同じだった。

ファミレスにおいて「迷走」する彼を笑った自分が恨めしかった。そして人生とはこういう『生き難さ』がついて回るものかと、思った。脳腫瘍から復帰したとはいえ、それは世間には関係ないことなのだ。誰も褒めてはくれない。

そんな感じで七月は過ぎていった。

気にしていた、高校野球県大会での浜松学芸高校の成績は、二年連続で決勝敗退だったが、それでも俺は満足した。

力投していた村越安里に憂いは見られなかったからだ。実弟には何の心配もないようだったからだ。それは俺の勝手な見方であり、一人で納得していたが、それで良かった。他者が自身の影響で幸せであつたら、それで良いではないか。

八月に入ると、何故か暑い日が続かない。今夏は曇りが多く、テレビでは日照不足による作物の収穫不良を報じるよう

になった。

そんな調子外れの天候に沿うようにおかしくなり始めたのが、鶴田だった。

ある日、一緒のシフトに入っている時、彼女は洗い場の担当だった。鶴田は食器の種類により、シンクに漬け込む位置を細かく指定する。俺はそれを間違えて度々怒られるのだが、その日も俺は長皿をいつもと違うポイントに入れてしまった。

鶴田がその皿をシンクから引き出すのを見て、また叱責を覚悟したが、彼女はそのまま何事も無いようにスポンジで汚れを落として洗浄機に流した。

いつもなら洗う手を止め、「…鈴木君」と小言を言われるパターンだ。

(気付いてないのか?)

俺は自身の幸運を密かに喜んだが、その日の鶴田はどこか虚ろで憂鬱な感じがした。

それは、その日のみではなく、三日は続いた。俺は内心『鬼の攪乱』と微笑んでいた。

俺の心理的足枷になっていた鶴田が静かになり、多少の平穏が訪れた気になった。

そんなある日、パン屋のバイト終了後、病院に行くまで長い休憩時間。俺はいつもの通り、ファミレスに向かった。

久々に真夏の太陽が降り注ぐ午後だった。エアコンの効きすぎる店内のいつもの奥の座席で、ドリン

クバーのアイス珈琲を飲んでいた。四時前には第一通り駅から赤電に乗らないと、病院の洗浄に間に合わない。

と、見たくもない顔がやってきた。

宮本である。まだスーツ姿だ。職は決まっていないと、見て良いだろう。

いつもは彼の姿を見たら、入店せずに駅に向うことにしていた。俺が入店した後から来たのは初めてだった。避けられなかった。

宮本が俺の座席の背中を通る時、かなり緊張したが、彼の存在など気にならないように通りすぎ、店の一番奥、先日俺が見かけた席にまた座った。

俺は帽子を目深に被り、宮本から見える横顔を隠した。だが、宮本はまた広げた求人誌を読み込み、こちらには気を回さない。

一瞬、どうしようか悩んだ。

すぐに席を立つか。

このまま、ランチセットを頼むか。

俺は後者を選択した。よく考えたら、もう宮本と俺は無関係だ。何も逃げ隠れることはないではないか。見つければそれまでの話だ。

そんな妙な決意をしていると、宮本のスマホがギター音を放ち出した。

すぐに出る。店内での携帯電話の使用を禁ずる貼紙は無いが、マナーにもとる行為だ。だが、宮本にはそこに気が回ら

ないほど焦っている様子だった。

「はい、宮本です！」と出たが、すぐにそのトーンは落ちた。汗で滑り落ちそうな眼鏡を摺り上げる。どうも知り合いからの着信だったようだ。話す声が小さく、ここからはよく聞こえない。数分間、小声のやり取りをしていた。そして急に、「だから、出来ないって言っているだろ！」と吠えるように叫んだ。

店内の目が一斉に音源の宮本に向く。

俯き加減だった俺も思わず見てしまう大声だった。

そして、すぐに顔を伏せた。

前にも見た光景だった。

その後、宮本の声は小さくなる

「母さんがそう言っても、無理なものは無理だよ……」

母親との会話らしい。

無職の息子への苛立ちか。俺自身も覚えのある話だ。家族を持った宮本にかかるプレッシャーは俺以上であろう。この前見たときは（ざまあみろ）などと馬鹿にしたことを少し反省した。

宮本に見つかからないように支払いを済ませファミレスを出た。

電車で揺られながら、宮本の事を考えた。

病院の従業員口から入り、栄養課前の更衣室に入ろうとするが、中から女性の声が出た。ここで作業着に着替えるのだが、男女兼用なので、女性が着替え中は男性が外で待機して

いなくてはならない。

更衣室のドアはそれほど厚くはないので中の会話が丸聞こえだった。

鶴田と別の女性の話す声が出ていた。一緒のシフトに入っている女性のような声だ。

「鶴さん、最近元気ないじゃん。どうかしたの？」

「……うん。ちょっと、ね」

「……心配事？」

盗み聞きする気は無かったが、聞こえて来たからには仕方が無かった。

その話によれば鶴田は去年離婚したらしい。「原因は夫なのだ」と彼女は言った。そして離婚直後、別れた夫の体調が急変。認知症を発症したらしい。二人の間には息子が一人おり、その息子と元夫の介護を巡り言い争っていると言っていた。

「今日もさつきまで電話でメモちゃって……。息子も会社辞めて介護してんだけど、なかなか上手くいかなくてね。その息子も離婚しちゃったのよ」

ドア越しに鶴田の沈んだ声が出た。

元気の無い態度の理由はそれだった。誰も心労があると気が晴れないものなのだ。

「息子さん達、なんで離婚しちゃったの？ やっぱりお父さんの介護で……」

随分と突っ込んだ事を訊く同僚だ。

「…うん。それもあるんだけどね。息子の嫁がおかしな宗教にハマっちゃって…」

二人が喋りながらこちらに近寄って来た。

俺が身を離す間も無くドアが開いた。

「あつ、鈴木君、…おはよう」

ドアを開けた女性がクリーム色の作業着で出てきた。

作業しながら、普段よりさらに静かな鶴田に心から同情していた。

そして俺は『認知症』という問題を改めて身近に感じた。

俺も年老いた両親を持つ身である。幸い、二人ともその気配は見えないが、近い将来、どのようになるかは分からない。

また、物忘れの多すぎる和久田の事を考えた。彼には既にその気配が濃厚に漂っているのではないか。

配送個数の誤認は、短期の記憶の欠如か。『老人だから』

と軽く見ていたが、思い返せば彼の『症状』はテレビの医療特集で観るそれに酷似していた。

和久田から自身の家族の話聞いた事が無い。今後どうなるのだろうか。そう思うと文句を言い放題の彼にも同情の念が沸いてきた。

次の日、配送でいつもの磐田市内のスーパーに行った際だ。一番人気の生クリームパンを陳列していると、後ろから「ちょっと、ブルーランジェリーさん…」と声をかけられた。

振り返ると青沼である。手には昨日配達した『チーズの包み焼き』があった。

「昨日のこのパンなんだけど…」

毎度お馴染みの『説教タイム』である。今日は「パンの中にゴミが入っている」と言い出した。この手のクレームは何度かあり、割って見ると、一緒に焼いていたパンの欠片などで、お客の口に入っても問題は無い。だが、青沼にしてみればそうしたモノが混入している事自体が『店の売上、信用に関る』と言うのだ。それは『最も』であり、こちらは聞き入るしかない。説教は最低十分ほど続く。俺は鶴田に叱責されているのと同じように反省の姿勢をし続けていた。

とその時、別の社員が彼女の背後から声をかけた。

「宮本、…じゃなかった、アオさん…」

振り返った青沼が鋭く、その社員を睨む。

俺は俯き続けたが、内心、驚いた。

(…宮本)

昨日。鶴田が自分の息子が離婚したことを言っていた。離婚して旧姓に戻ったか。『宮本』など良くある苗字である。偶然という可能性も否定できない。

だが、俺の中では全てが繋がった。

前もこんなことがあったかと思える。

様々な出来事は独立しているようで、実は繋がっている。海域で離れているように思える大地は、海水が無ければ地続きの大陸だ。

今回もそうなのかもしれない。

ブルーランジェリーに戻る蒸し暑い配達車の中で俺は深く考

えていた。

ふと、中学の化学の授業で習った『融合』を思い出した。複数の物質に同時の刺激を与えると溶け合い始める。それは様々な工業分野で行われ、我々の生活に役立っている。

今回、俺が偶然知ってしまった個々の事実は、まさにそれぞれが独立した問題に思えるのだが、それが今、融合した。確認しなければならぬ。

その日、病院の仕事に入る前、あえて早めに着替えて更衣室前で鶴田の到着を待った。

午後四時四十五分に鶴田はやってきた。

「お、おはよう、さん！」

俺はわざと大きな声で挨拶をする。そんなことは今まで一度もしたことが無かった。ドアノブを持ったまま、鶴田が驚きの表情を見せて立ちすくんでいたが、「おはよう」と答え、俺が出てきた更衣室に入ろうとする。

「…あ、あのさ。む、息子さん、宮本って、つって言うの？」

鶴田が、驚愕の表情で振り返った。それで充分だったが、「何で？」と吼えるように訊いてくる鶴田に理由を言うしかなかった。

「…ち、ちよつと息子さんと知り合い、で、でねね」

あながち嘘ではなかった。

その日の鶴田は一層、静かだった。

帰宅後、俺は考える。

この絡み合った問題を解決するにはどうすれば良いのか。

宮本の元妻青沼に復縁を進言するか。

それは無理な話だ。いきなりそんな話を青沼にしたら、激怒されるのみだろう。

では、宮本に何か言うか。

だが、口の不自由な元部下が、突然自分の家庭内の問題に提言したら、驚きを越えてやはり怒るだろう。

そもそも、俺から何を提言するのか。

「奥さんとやり直せよ」

「母ちゃんと仲直りしろよ」

そんな事を偉そうに言っても聞き入れられるとは思えない。

彼らの家庭を再生させるには、宮本家が抱える根本的な問題を解決するしかない。それは、『父親の認知症と介護問題』だろう。鶴田の言っていた青沼のハマっている『宗教』というのも気になる。

どうするべきか。

その時、漫然と付けていたテレビの画面が気になった。お笑い芸人が舞台に出てくる。いわゆる『ネタ見せ番組』のようだ。白いフリップを立てせ、それをめくりながら、シユールなネタを披露する。フリップをめくり、芸人が話す度に、笑いが上がっている。

俺はある考えが浮かんだ。時計を見れば、午後九時過ぎ。近くのショッピングモールならば、あの店は開いているはずだ。俺は座っていたソファから立ち上がった。

次の日、配送を終えてから少し間を開けて、いつものファミレスに向かった。

昼の三時過ぎのそこには、案の定、宮本がいた。蒸し暑い中、スーツ姿でいる。

俺は入店すると、店員の案内を無視し、勝手知った店内を奥に進む。

そして、宮本の横に座る。

当たり前だが、店員も驚いていた。俯いてスマホを見ていた宮本が一番驚いた。

穴が開くほど俺の顔を見る。いきなり隣に座った人間が誰かまだ分からないようだ。

「……！ す、鈴木さん？」

五秒かかって、ようやく分かったらしい。

そんな事はどうでも良いことだ。

注文を聞きにきた店員を片手で制し、俺は手持ちのバッグから画用紙を出した。

「え？」

宮本が強引な展開に疑問を隠せない。その戸惑いを利用して、一気に話を進める。

この画用紙は昨日の夜にモール内の百円ショップで購入したのだ。そこに書いておいた「メッセージ」がある。昨日のネタ見せ番組を観て思いついたのだ。

『宮本、お父さん認知症で大変でしょ？』

「……え、なんで？」

（知っているのか）と聞きたいのだろう。

そんな疑問も無視した。

『お母さんも離婚して、大変でしょ？』

「……あ、あつ。は、はあ」

言葉にならない驚愕を表す。

『もう一度、お母さんと話してみたら。悪い事は言わないからさ』

全て知っているのをさりげなく匂わす。

『元嫁さんからも、連絡あるよ。きつと』

宮本が声を詰まらす。自身の離婚まで言われ、目を見開いて驚く。

ここで昨夜に練った「ドドメ」の一言を見せる。

『信じるのは、俺だつて言つてやれよ』

「俺」のところをわざと赤い太めのマジックで書いてある。

「は、は、は？ な、何なんすか？」

宮本は疑問しか表さない。

そんな彼を放つておいて、俺は席を立つ。見せるべきものは見せた。

「ちよつと、ちよつと！ 鈴木さん！ 鈴木さん！」

後ろから叫ぶ宮本の甲高い声を無視した。

鶴田に連絡すれば、その疑問も判明するし、元妻の青沼に連絡すれば、俺の事もわかるかもしれない。

だが、それで良い。家族が話し合うきっかけが必要なのだ。

そこで『信じるもの』を話せば良い。それが『口の不自由なおかしなヤツに言われた』という契機でも良いはずだ。後は元妻の青沼だ。

さらに次の日、俺は決意を秘めてブーランジェリーから磐田のスーパーに向った。

いつもの売り場にケースを運ぶ。

青沼が待ち構えていた。計算通りだ。

昨日パンを並べる際に、生クリームパンをあえて潰し、自身の生クリームをわざとビニールの中にこぼしておいた。

これを青沼が見逃すわけがない。大柄な体に肩を立たせてこちらに来る。

「ちよつと、ブーランジェリーさん。これは酷いわよ…」得意げに言い出すと、お説教が始まった。

俺はただ黙り、いつものように俯いて聞き入る姿を見せる。十分ほどで、青沼の説教が一応、終着点にたどり着く。

解放された後、すぐにパンを並べる。そして、他の商品のチェックをしていた青沼に近づいた。

「…す、すいません、で、でした…」と謝る。それに気付いて青沼が振り返った。

不機嫌な表情のままだ。

「…これからはお願いしますよ」

青沼が眉を顰めつつ、鋭く言い放つ。

俺は頭を下げてから、おもむろにポケットから折り込んだ紙を出した。

「…?」
顔一杯に疑惑を浮かべて受け取る。反射的にそうしてしまつたらしい。

そこには、昨夜書いた、俺が見たそれまでの宮本家の「現状」を書き、やはり『信じるもの』もつと他にあるぞ』と書いておき、『一度、元の旦那に電話しな』とも書いた。

「は?…ち、ちよつと! アンター!」

元旦那と同じく戸惑い、俺を規制する声を出す、無視して業者通用口に急ぐ。

これで宮本を取り巻く問題が解決するかは、わからない。その起点のようなものになれば良い。

そうでなければ、今度はあのファミレスで宮本の横顔を張り倒してみるか。

今日の午後、病院の洗浄室で鶴田の表情を見るのが少し楽しくなってきた。

空のケースを軽自動車の荷台に放り込み、俺は蒸し暑い助手席に体を預けた。

朝は曇っていた空が、正午過ぎには夏空に変わっていた。暑い夏が戻ってきたようだ。

俺は、何故か清々しい気持ちでキーを回して帰路に着いた。

(了)
(浜北区)

「入選」

ユウドの物語

内山文久

昔々のお話をいたしましょう。戦争の絶え間なかった頃のことです。遠く近江の国（現在の静岡県西部）のある山村に、お爺さんとお婆さんが住んでおりました。お爺さんは家の近くの山から杉や檜、コナラや樟といった木の枝を集め、薪にするため山刀で長さを揃えてから、家の軒下や薪小屋で乾かし、それを藤蔓の縄を使って縛り、その村や周りの村に持って行って生活に必要なものと交換して生業をたてていました。お婆さんはお爺さんの薪作りの仕事を手伝いながら、山の斜面のほんの猫の額のような畑で（それを段畑とか、傾斜畑といいます）お爺さんと一緒に、野菜を作って静かに暮らしていたのです。お爺さんとお婆さんには子供がいませんでした。それでもふたりはとても仲が良く、他の村人には微笑ましく、また羨ましくさえ思われていました。そうはいってもふたりは実のところとても寂しかったのです。そうです、時がたてばふたりは、いつかは別れていかなければならないのです。残されたものは一人で生きていくより他はありませんから。

或る年の冬の日の朝のことです。お婆さんはいつものように近くの（段畑）で働いていました。朝から上天気で、空は抜けるように青々として、もうすでに紅葉が終わった森の遙か上、山の端をなぞるよう広がっています。もんぺ姿、寒がりやお婆さんはやや厚着で、顔には手拭いで頬かむりをし、（備中）という鍬で白い息を吐きながら土を掘りおこしていたのです。何度も何度も土を掘り返していました。（そうです。土を起こして柔らかく、しかもふんわりさせると野菜は元気よく育つのです）一生懸命土を掘り返していると突然、土の中から声が聞こえてきました。

「カノンよ、今からいうことをよくお聞きなさい。おまえがもう一度鍬を振ると、素敵なことが起ります。おまえはそのことを大事にするのですよ」

カノン婆さんは驚きました。それで不思議に思つて

「あなたはどなた様ですか。どこにおられるのですか。声は聞こえておりますが姿が見えません」

と土に向かって言いますと、土の中から

「わたしですか？わたしはずっと昔からこの土地に住んでいるものです。ですからあなたたちふたりのことは何でも解っています。ですから安心してわたしの言うとおりにしてみなさい」

そういわれてカノン婆さんは疑いもせず素直に力一杯（えいっ）と鍬を土のなかに突き刺しました。そして（ぐいっ）とお婆さんが土を掘りおこすと、なんとということか、取り去った

後の土のへこみに小さな裸の男の子が、クワガタムシの幼虫のように丸まっていました。カノン婆さんはびっくりし、急いで被っていた頬かむりを外し、二度畳んで男の子を包み、抱きかかえました。お婆さんの両掌から少しだけ膝下が出るくらいの小さな赤ん坊でした。カノン婆さんは手拭いの端で所々ベタツと着いてしまった土を拭き、それから赤ん坊の冷たい身体を優しく人指し指でそつと撫で、体を温めようと思いました。すると赤ん坊は、突然「ふぎゃあふぎゃあ」と泣き始めました。赤ん坊は生きていたのです。カノン婆さんは余りの可愛さと嬉しさに、泣き叫ぶ赤ん坊に思わずこにこしながら優しく何度も頬ずりをしてしまいました。すると赤ん坊は何故か急におとなしくなり、微笑んだような顔つきですやすやすと眠り始めました。カノン婆さんとはにかく、嬉しくて、嬉しくて仕方がありません。すぐさま鍬をその段畑にほつたらかして、畑仕事をやめ、しっかりと赤ん坊を抱え山道を急ぎ足で歩き、家に戻りました。

家に着くとヨシヒト爺さんが家の前で薪を（しよいこ）に背負って隣村に行こうとしていました。カノン婆さんは「お爺さん大変じゃ。ほれ赤ん坊が」といって、手拭いの中に眠っている赤ん坊を見せました。それを見てヨシヒト爺さんはびっくりしました。

「こりやまた小さな赤ん坊じゃ。婆さんこの子をどこで見つけたんじゃ」

「それがのう爺さん」

カノン婆さんは一畑を耕していると土のなから声が出たと、もう一度鍬を土に入れなさいと言われたこと、そうすれば大事なものがそこにあるからそれを大切にすることだと言われ、その通りに鍬を振ると土のなかかこの赤ん坊がいたこと―を一生懸命しかも詳しく爺さんに話しました。（お婆さんの話によると土のなから聞こえたのはおんなのひとの声のようだったということです）

「それじゃあその声の主は私達にこの赤ん坊を育てなさいとおっしゃったということなのじゃな」

「ああそうじゃ爺さん、子供のいない私達にきつと恵みを与えてくださったのじゃ。そうとしか思えない」

「ほんに有り難いことじゃ、ふたりで一生懸命育てよう」

ヨシヒト爺さんはそういって、急いで（しよいこ）を下ろし振り返って、ガラガラと家の木戸を開けました。

「婆さんや私が床に布団を敷いておくからおまえさんはこの子をとりあえず（あがりはな）に寝かせて、それからお湯をわかしてくれ。産湯じゃ」

「あいよ、爺さんや、あんたは薄くて柔らかな布をできるかぎり用意してくださいよ」

「あいよわかった」

ふたりは互いにそう言ってそそくさと家の中に入っていきました。年老いたふたりにはこれは大変なことです。確かにほかのひとの赤ん坊の姿と動きは知ってはいましたがそれはただ見ていただけで、いざ自分たちの子供となるとまったく解

らないことだらけでしたから。やっと釜のお湯が湧き、一尺余りの檜の盥にお湯が張られました。カノン婆さんはおそるおそる所々泥土の着いた赤ん坊を左の掌に乗せ、親指と中指で耳をそつと塞いで、右手でお尻を支えながら盥のなかに入れました。そして暖かくなったお湯を使い、薄く柔らかな布で汚れを取り、右手の指先で柔らかに撫でるように洗っていました。すると眠っていた赤ん坊が眼を開き、お婆さんの方を見た気がしました。もちろん、「見た」というのは思い違いなのです。しかしお婆さんはそういつたすこしの変化さえも嬉しいのです。(お婆さんあのね、生まれたばかりで目はまだ見えないのですよ) 気持ち良かったのかそれとも安心したのか、うとうととしていた赤ん坊はまた眠ってしまいました。

綺麗になった赤ん坊は布にくるまれています。次は産着です。お婆さんが慣れない手つきで急いで作った赤ん坊の産着は本当に質素なものでした。長い端切れの布をふたつに折ってその折り目を半分丸く切つて、赤ん坊の頭に通し肩に掛け、おなかの辺りを軽く紐で結んだだけのものでした。おしめも同様に簡単なものでした。ふたりがあれこれと赤ん坊のからだを動かしても赤ん坊は驚く様子はなく、柔らかな布にくるまれ、すやすやと眠っています。ふたりはほつとひと安心、お互いに皺だらけの顔を見合わせてにこにこしています。それでもたつた一つ困ったことがあります。そうです。カノンはお婆さんです。当然お乳が出なかつたのです。ふた

りはどうしたものかと悩みました。赤ん坊はお乳以外の食べ物(今ではミルクがありますが)食べてはいけません。食べると消化できず死んでしまうのです。それでもふたりはそのことも解決することができたのです。それは全く幸運なことでした。実は半里程離れた所に住んでいる、前の月に子供を産んでいた親戚の娘(姪)がいたのです。ふたりはこの姪に頼んでお乳を貰うことが出来ました。不安な気持ちでふたりが赤ん坊を連れてこの姪を尋ねると姪は赤ん坊を見てすつかり気に入り、ふたりの願いを喜んで聞いてくれました。姪はその日から一日も休むことなく朝昼晩とお乳をあげに自分の赤子を(おおいヒモ)で背負いながらも爺さん婆さんの家によつてきてくれたのです。

子供がふたりに授かつたことを村の人は不思議に思いました。(当然ですね。お婆さんになって赤ん坊を産む人はいませんから) ふたりが真摯に土のなから出てきたといつても誰も信じてくれはしません。意地悪なひとは(この子は恐らくはきつと他の村から拾ってきた、あるいは奪ってきたのだ)とさえ噂しました。しかし時間が経つにつれてそういつた事実もないため、いつの間にか村人は全く噂をしなくなつていきました。ふたりは貧しさのなか、赤ん坊をしつかりと育てていきました。赤ん坊はすくすくと育つて、四歳位になるともう他の子供と変わらない背丈になっていました。子供はユウドと名付けられました。土から湧きだすように生まれたいという意味です。思うように作物も出来ない山村です。食

べるものには不自由な生活でしたが、三人で力を合わせて暮らしました。ユウドはお爺さんお婆さんを親として、すくすくと成長し、ふたりから言われたことには素直に従っていました。ですからユウドは友達思いの喧嘩など全くしない子供となっていました。

五歳の頃からユウドはその村のはずれにあるたった一つのお寺に行くことを楽しみの一つにしておりました。お寺の名は無量寺と이었습니다。そのお寺の主の坊さんに大変可愛がられていたのです。ユウドは最初お寺に法事に連れていかれた折、持仏堂内の壁や台の上の紙に墨で文字が描かれているのをそこにいたお坊さんに尋ねました。

「この黒い模様は何ですか」

「これか、これは文字というもののじゃ。わしやお前が話す言葉を描くと、この模様になるのじゃ」

とお坊さんが答えました。ユウドは目をきらきらさせて

「そうですか。ではこれはなんとという文字ですか」

ユウドが板壁に貼られた紙の中の一字を指さしました。

「それは「空」という文字じゃ」

「えっ、これがそうなのですか」

「それでは、これは？それでは、これは？」

と次々に聞いていきました。余りにも矢継ぎ早の問いに、仕事でもあるこのお坊さんは呆れながらも、にこにこ笑いながらユウドに

「おまえは文字がたいそう気に入ったようだな、それでは今度お前が来たら文字をもっと教えてあげよう」と約束してくれたのです。

ユウドは文字を覚えていきました。お坊さんも夢中になってユウドに教える事になりました。何故ならユウドは一度覚えた文字を、決して忘れずにいたからです。初めに問いかけた「空」という文字も次にお寺に行つた際、お寺の本堂の前で偶然お坊さんに会つて、ユウドはすぐさま近くの小石を握つて、本堂の前の土に大きく「空」と書き

「お坊さま、これが山の上にある青々としたもの（そら）という文字ですね」と言つたのです。（驚いたお坊さんの姿が目には浮かびます）

ユウドは次々と文字を覚えました。千字文を手始めに文字を覚え、さらに漢籍等書物を読み続け、最後には仏典までも理解するようにまでなっていました。当時庶民、ことさら農業や林業をして生活するひとは文字は殆ど無縁でした。文字を読めないのは普通でしたから。ユウドが文字を覚え、しかも成人にも満たない年齢で、坊さんを驚かせるほど、ものごとを理解したのは稀有の事でした。そんなわけでお坊さんは是非ユウドを仏門に入らせたいとお爺さんお婆さんを説得したのですが、当のユウドは全く考えていないと言いました。お爺さんはユウドのこれからの事を思い、仏門に入ることを勧めましたがカノン婆さんとはとうとう何故かお坊さんに丁寧にお断りをしていました。お坊さんは落胆しましたがそれでもユ

ウドを愛弟子のように接してくれましたので、楽しく学び続ける事が出来ました。

貧しく、生活が苦しいなかでも幸せに暮らしていたユウドでしたが、時の流れとは誠に非情なものです。お爺さんはユウドが八歳の時、お婆さんは十二歳で亡くなってしまいました。たった一人になってしまったユウドでした。ユウドの悲しみは到底推し量ることは出来ません。十二歳なのです。ひとりでは生活することは儘なりません。ただ幸いなことにユウドにお乳をあげていた姪のミルマがすぐさま快く引き取ってくれ、その一家と一緒に生活することになったのです。

ミルマの旦那さんは猟師でした。一年中槍や弓を使い、また時には罾を仕掛けて、鹿や猪、熊、兎などを捕獲するために、山野を駆け廻っていました。猟が終わると仕留めた獣の皮を剥いで鞆にして外套にしたり、獲物の肉を切り分け、燻製などを作って役人や村人と物々交換をしたりして生計を立てていました。当時狩猟での肉は貴重なものでした。(その頃は、家畜は食べてはいけない、またその死んだものは絶対食べてはいけないとされていきましたから)ただ、食肉の為重宝された猟師の身分も樵と同じようにこのうえもなく低いものでした。

この家には二人の子供がいました。ユウドと同じ年に生まれた女の子と二つ下の男の子です。小さな頃から二人はユウドにとってかけがえのない友でした。ですから母のミルマから一緒に住むことを聞かされて、二人とも大喜びでユウドを

家族のひとりとして迎え入れてくれました。姉の名をサヤマ弟はサミチといました。三人はいつも一緒に、二人の父親のコウチや母親であるミルマさんのお手伝いをしたり、周りの野山や川に遊びに行ったりして、とても幸せに暮らしていました。なによりもミルマはユウドのことを我が子として大事にしたのでした。

それから二年が経ちました。唐松の新芽が吹きはじめた春の日の朝、十四歳になったユウドはミルマさんに

「お話があります。聞いてくれますか」

といました。

「どうしたの」

ミルマがたずねるとユウドは、静かに話しはじめました。

「じつはお爺さんが亡くなるまえ、ふたりは私を呼んで私がどうして生まれたのかをもう一度詳しく、話してくださいました。確かに私はあなたも知っていらっしやるように、あの畑から生まれてきたのですが、どのようにして生まれたかは勿論私にも解りません。ただ生まれて物心がつく頃から、いつも私は他の子供とは違っていると感じ続けていました。あの時、おふたりから詳しく話をしてもらい、話の底に満ち溢れるものと、生まれてきた私の心のなかにずっと響いていてそのためずっとそれを思いつづけたことがまったく同じであるということを確かめる事が出来ました。私は生まれてから十二歳までふたりに育てられ、そして二年間ミルマさんを始

め皆さんに心優しくしていただいても幸せでした。もう一度いいます。私はお爺さんとお婆さんの話が真実であることを実感したのです。もともと私はそういう使命をもって、ふたりのもとにやってきたのだと解りました。ですから、そのようにいわれても、初めからなんの躊躇いありませんでした。これからお話しすることにあなたは驚くことと思いません。お婆さんは亡くなる前に私に、こう言ったのです」

「ユウドや、わしはもうすぐこの世にはいなくなる。わしはおまえに、ひとつだけ残しておいた言葉があるのじゃ。それお土のなかからいわれた言葉なのじゃが。ただそれを今迄おまえにも、ましてやお爺さんにも言うことが出来なかった。

可愛いわしの子供にむかつてこんな辛いことを言うのはいいけないと思ひ、どうしてもそうすることが出来なかつた。幾度も幾度もおまえににおうとして躊躇つたのじゃ。でももうわしは死ぬ。だから言わなければならぬ時が来た。よいか、ユウドよ、驚かないで、心して聞いておくれ、お前が生まれた時—カノンや、最後にお願ひする。この子におおきくなったら(物乞い)をして生きよと必ず告げなさい—土の主からこゝういわれたのじゃ」

カノン婆さんがそう話すと、まだ少年だったユウドですが「やはりそうでしたか。良く解りました。では私は成人したら、物乞いをします」

とカノン婆さんにそう返事をしたということです。その時カノン婆さんはユウドの全く恐れる事のない決意を聞いて泣きじ

やくり(おそらく病のことも重なったのでしよう)悲しみのあまりそれから間もなくして息を引きとってしまったのです。

「私にはわかつていました。そうすることが私の生まれてきた意味なのだ。ずっとそう考えていたのです。私はひととして生まれてきましたが、どこか普通のひととは異なっていました。何故なら私は大地そのものから生まれたからです。ですからそのように生きたいと思つていました。解つていました。物乞いをするのが私にとってなによりも自然なことなのだ」

「いまや私は十四歳という年齢になりました。ふたりが年老いていく姿や亡くなったこと、その生きる姿を通して、ひとの悲しみや喜びなどが心から解る年齢・おとなになりました。今がその時と思ひます。今から物乞いを始めます」

ミルマさんはユウドのあまりにも意外な言葉に驚くとともに亡くなったお婆さんのようにとても悲しみました。ユウドに自分のお乳を含ませ続けましたからまぎれもなく自分の子だと思つているのです。物乞いをするのは乞食になるということなのです。尋常なことではないのです。とても大変なことなのです。病や飢餓、いじめや暴力、死と隣り合わせの生活です。ミルマにはどうしても理解できなかったのです。

「どうしてなの。あなたほどの知恵のある子供なら何にでもなれるのよ。あなたはこの世の中で大勢のひとを導くことができるひとだと私は思つていました。例えばこの世の中で、

もし、なろうと思えば裕福に暮らせる、庄屋にさえもなれる力があるというのに、どうしてそのような道をえらぶのですか」

ミルマがユウドにそう言う

「ミルマさん、それは違うのです。私の本当の両親は私にひとが本当に幸せになるための方法をおしえるために私をこの世界に送ったのです。私には解ります。ですから悲しまないでください。これでいいのです」

ミルマには全く理解できないことでした。ただユウドの決意の固さを心の底から感じました。ですからミルマはしっかりと口調で

「わかったわ。あなたは生まれてから今迄、人を裏切るようなことは一度もなかったからね。あなたの思いはあなたの心と体の全てから出たものだと思っていますよ。あなたのその思いは私には止められません。あなたはあなたの望むようにしてください。でもね、せめて今日一日だけはうちにおいてくださいね。私はあなたに私のできることを精一杯してあげたいの」

と目に涙を浮かべて言いました。ユウドは

「ミルマかあさん本当にありがとう。おかげで更に心が決まりました。それでは私は明日から物乞いを始めることとします」

と答えました。

ミルマはその日一日、何も飲まず何も食べず、ユウドのため

に心を込めて食事を用意し、ゴザや草鞋を作り、着物を縫いました。忙しく体を動かしながらも（これからどのようの子は生きていくのだろう）と思うととめどなく涙が溢れ、いまにも胸が張り裂けそうでした。

つぎの朝、ユウドはミルマと二人の兄弟に別れを告げてこの村を離れようとしていました。コウチさんは猟で留守でした。わけが解らないサヤメとサミチの二人は泣きながらユウドの後を追いかけていきます。生え始めた草だらけの道をユウドは二人を振り切るように速足で歩きましたからその間はどんだんひろがりユウドの姿は全く見えなくなっていました。ユウドはすっかり「ひとり」になってしまいました。

ユウドはミルマから譲り受けた少し大きめの木のお椀を携え、それを（受け椀）とし、隣村の土くれの道端に藁を敷き座って、物乞いを始めました。隣村と言っても二里ほど離れています。暫くすると以前に会って、遊んだことのある、この村のいたずらっ子、ヒミフがやってきました。

「おいユウド、いつから物乞いになったのじゃ。おまえ、このまゝまで隣村のミルマさんのうちにいたのだろう？おまえが物乞いをするほど貧乏だとは思わなかったぞ」

「今日から物乞いです。あなたは素晴らしいひとです」

「ええっ、今までそんなことを言い出すんだ。この呑百姓のおれが「素晴らしい」？なんでそんな凄いいことになるのだ。そ

れに今日から物乞いだなんて、おまえ頭がおかしくなったんじゃないのか」

「いや、決して頭がおかしくなったのではありません。そうなのです。あなたは素晴らしいひとなのです」

これがユウドの物乞いとしての対話の始まりでした。

ユウドは暫くその村にいて物乞いを続けました。ただこの村には知り合いませんでしたし、思いのほかユウドに物や眠る場所を与えてくれました。ですから生活に困ることは殆どといってありませんでした。

「私の村のひともこの村のひともそれぞれがみんな素晴らしいひとたちだ」

ユウドはそう安堵して次の村に行くことにしました。でも本当のことをいうと、そうではないのです。この村のひともそうですが、近くの村で出会ったことのあるひとは、多かれ少なかれ（ユウドとは知り合い）という気持ちが強いためユウドの言うことが却って解らなくなるのです。それではいけないとユウドは思い、立ち去ろうとしたのです。立ち去ることで、いなくなったユウドの言ったことを思い出してくれるのだと信じたのでした。

次の村で物乞いをしていると、ひとりの中年の男がユウドの前に立ちました。

「おまえがユウドか、おまえは逢うひとごとに（あなたは素晴らしいひとなのです）と言って回っているがよくもそんな訳の分からない嘘っぱちが言えるものだな。そうだ、お前に

そういうわれたやつどもをわしはよく知っているが、どうもこいつもろくな奴はいないぞ。嘘つきや泥棒、はたまた人殺しをしているのに。おまえは本当に嘘つきだ、おまえこそひとを騙しているじゃないか、どうなんだ」

「いやそうではありません。あなたも皆も素晴らしいといっているのです。その通りなのです」

「なにをいうか。こいつ」

そういうとその男は近くにあった小石を握ってユウドに投げつけました。コンと鈍い音がしました。みるみるうちにユウドの左の額から一筋血が流れました。男は一瞬驚きたじろいだがように見えたが、「ふん」と言い放って何処かに行ってしまった。

つぎに現れたのは五、六人の子供達でした。

「さっきうちのおとさんが言っていた。こいつは嘘つきでたらめをいうやつだって」

「そうだそうだ。みんな素晴らしいひとなんてよく言えたものだ。おまえは物乞いの身分でどうして普通のおれたちに説教なんかするのだ」

「そうだそうだ。どうにも気に食わないやつだ。目障りだ。気味が悪い、とつとつ、この村から追い出してしまおう」

かわるがわる子供達は大声をあげながら、ユウドの腕を引っ張ったり、足を蹴り上げたり胸や背中を棒や拳骨で殴ったりしました。まったく抵抗をしないユウドでしたが、どうにも仕方がないのでユウドはその場所を離れようとはしました。ユ

ウドは村の外れまで走って行き、振り返り「きみたちはみんな素晴らしいひとなのです。ですから私は絶対に怒りません」と叫び、村から遠ざかっていきました。

その次の村では（妙な乞食がいる）という噂を聞いて、お供を従え、これ見よがしに着飾ったお婆さんがやってきました。端正な姿のユウドを見て驚き、こう言いました。

「あなたは何故乞食などするのですか。私の見る限り、あなたは若いから、世間の事を未だ何も知らないのですよ。世の中にはもっと楽しいことは沢山あるのですよ。乞食など今すぐやめなさいよ。もし食べ物が欲しいのならうちにおいでなさい、あなたの姿をみているとものつたいないのです。うちにくるなら樂をさせてあげますよ」

どこかの庄屋のおかみさんでしょうか。おそらくそのおかみさんはまだ服のほとんど汚れていないユウドの姿、整った顔立ちと受け答える時のしつかりとした言葉を聞いて自分の家におきたいと思ったのでしょうか。また年齢もユウドと同じぐらいの娘も傍にいましたから将来は婿にしたいと思ったのでしょうか。その言葉に対しユウドは

「お断りいたします。私にはそれは縁のないことでございます」

「私はこのままでいいのです。あなたもあなたの家のひとも皆素晴らしいひとなのです」

と言いました。当然この着飾ったおかみさんにもその言葉の意味はまったく解りません、あつけにとられたおかみさんは

出す言葉もなく慥然としましたが、呆れ果てて、そそくさと去っていきました。

それからユウドは物乞いをして歩きました。初めは丈夫だった身体も、物乞いであるため、食べ物が少ない上、蹴られたり、殴られたりするので、次第に弱々しく、痩せ細っていきました。皮膚は汚れ、髪の毛は伸び放題で虱がいつぱい、着ていたものも次第にすり減り汚れ、ポロポロになっていました。ただそうなればなるほどユウドの目はらんらんと輝きを増していくのでした。

ユウドは更に様々な場所を彷徨いました。そしてこの国の都にやってきていました。秋も終わりの昼下がりでです。道の両側には様々な店や旅籠が並んでいます。荷車も通ります。ひとびとは通りに溢れんばかりです。よろよろとユウドは歩きます。十四歳なのにもう（お爺さん）のようです。ユウドは小高い丘の上に立つ領主の館の東、南北一直線に延びる通りの一角に座って物乞いを始めました。歩いている殆どのひとが（卑しい、汚い）と避けるようにユウドの前を通り過ぎます。立ち止まって話しかけるひともいないので、なす術もなくユウドはそこに座っていました。

急に辺りがあわただしくなりました。お館様が通られるというのです。お館様は館の南にある六社神社にこの国の安寧を祈願する儀式を執り行った後、館へと戻ろうとしていました。戦が近づいていたのでしょうか。ひとびとは通りの後ろ

に身を隠したり、大通りの端に土下座し続け、道を開けていました。歩き疲れ、ぐったりしているユウドはどうしようもなく、ボロボロの藁の蓆の上にそのまま座り続けました。

「お館様の御通り」

家来たちは口々に声を張り上げて道を開けるように促しています。お館様を守るため、最初に騎馬隊、次に槍や刀を持った大勢の兵士が長々と整列し先に歩いて、最後にお館様が側近の家来の警護のなか、十二人の兵士が担ぐ御輿に乗って現れました。ユウドの横を通る時になって、御付きの家来が、一人だけ通りの隅に端座しているユウドに向って声をあげました。

「なんと無礼な乞食だ。お館様のお通りだというのに。頭を下げようとしてもしない。誰かすぐさまこの薄汚れたものを引立てよ」

この言葉に、ユウドは小さいながらしつかりとした声で「申し訳ございません。このとおりの者です。すぐ動くということが出来ないのです」

と答えました。

「ええい何を言うか、黙れ、誰かこの者を捕らえよ」と再び御付きの家来が声を荒げました。

「どうしたのじゃ」

御輿の上からお館様の声が聞こえました。

「じつは、妙な乞食がおりまして、無礼と思い、そやつを引つ立てようとしているところでございませう」

と家来がお館様に申し上げると、お館様は御付きの家来に「そうか、あいわかった。輿を止めなさい」

こういつて御輿を止め、お館様は静かに降りられました。

お館様の目の前にいたのは誠にみすばらしい痩せ細った物乞いの若者でした。しかしさすがにお館様です。ユウドの目をみて「ただならぬ者」と判つたようでした。

「おまえはどここの生まれじゃ。名はなんという」

「お館様恐れ多いことでございます。私はこの遠つ近江の国の山賤の子でございます。名前はユウドと申します」

ユウドは弱ってはいましたが、そうはつきりとお館様に申し上げました。静かな声なのですがその驚く程の力強い、丁寧な言葉遣いにお館様も家来もびっくりしてしまいました。乞食である若者がこのような言葉を話すことはあり得ません。もう一度言います。お館様は心あるひとでした。昔のことですから乞食であれば領主の前に出ようものなら、おそらく受け答えができませんで、もじもじするくらいだったのでしよう。お館様は家来の話を聞くなり不思議に感ずるものがあつてこの物乞いに会おうと思われたのです。そしてどうやらこの乞食と受け答えることをこのうえもなく喜んでいるようなのです。

「そうか、あなたは物乞いをして生業をたてているのか」

「はい、さようでございます。ただの物乞いでありませう。私は物乞いをするために生きていますのでございませう」

ユウドがこう答えると、お館様は更に驚きながら感心してこ

ういしました。

「誠におもしろいやつじや。飯を食べるために物乞いをする
ことは普通なのだが、そちはまったくちがうのだな」

「はい、おっしゃる通りでございます。私は物乞いをするた
めに生きているのでございます」

周りにいた家来は何のことか、皆目解りません。立派な服装
のお館様と、ぼろぼろで汚れた身なりの若者が真剣に話をし
ているのですから無理ありません。その時代は今より
ずっと、身分の違いを絶対的なものとしていました。更にこ
れより暫く後の江戸時代では「武士」が一番偉く「農民」が
二番「ものを作るひと・職人」が三番「商人」が四番目とさ
れていたようです。(もつとも現代の歴史学ではこの四つの
身分は単なる区別であって、四民といわれ「ひと」であつた
といわれています。しかし各身分同士の交流が主で特別の場
合を除いて武士の身分にはなれなかつたようです。しかもそ
れ以外の者はひとではなかつたのです) 例えばひとが亡くな
るとお葬式があります。その時亡くなつたひとの世話をし、
土の中に埋める役割をするものを「エタ」と呼び「非人」つ
まり人間ではないとされていたのです。物乞いももちろん
「ひと」ではありません。しかしこのお館様は違つていまし
た。実を言うと、このお館様は館にいて、いつも、人知れず
思い悩んでいたのです。ただ自分の思うことは誰かに尋ねて
も決して解らないであろうし、もし解つたからといって、私
に説教などしはしないであろうと思つていました。お館様は

いつもこんな風に嘆き、呟いていたのです。

「私とて、この戦いの世の中、いつか負けてしまふかもしれ
ない。負ければ必ず殺されてしまふ。当然わたしの妻も子供
も家来にも命の保証などない。戦いの世とはいえ、これは何
ということだ。何という世の中に生まれてしまつたのだろ
う。(人として生きるために、殺し、殺されるということ)

これは考えてもどう考えても間違つている」

「昔から身分の違いがあるということはよく知つている。解
つている。しかしよく考えると私はたまたま領主として生ま
れただけではないのか。運よく生まれただけということでは
ないか。いやそうばかりともいえない。もし万が一わたしが
商人として生まれれば商人であろう。そうだ、逆にいえば(ひ
と)はどんな身分にでも生まれることがありうるということ
だ。考えてみれば人が生まれる事と身分とはなんの関わり
もないのではなからうか。そうであればこの領主という今の
身分とはいつたい何なのだろうか」

折に触れてそのように考えてばかりいるお館様は、ユウドの
言葉からこのようにも思つたのです。

「私はこの国の全ての民の暮らしを豊かにすることを目標と
してきた。それが領主としての務めなのだ。しかしこのよう
な貧しい、しかも身分のない者がここにいる。私の領地には
まだこのような者がいるのだ。ただそのような者がいたとし
ても、そのたつた一人さえ救ふことが出来ないこの私とはな
んなのだらう。私は武士という力の下で民に従えと命じ、民

はそれを素直に守ろうとしている。恥ずかしいことに私は実のところその民の気持ちに答える事さえ出来ないでいるのだ。しかしながらこの若者はそのようなことはまったく考えてはいない。この若者は貧しさに耐える事をもっともしない。この若者は（ひととを世間の中でなんとかする、またひとになにかしてもらう事）を全く自分とは無縁の事だと考えているのだ」

「なんとという若者だろう」

そう思ったお館様は、ユウドともっと話をしたくなりませんでした。ただ立場上難しいのです。お館様は戸惑いました。

しかし、しばらく考えてから

「この者を捕らえて「牢」に入れよ」

と命じました。勿論お館様はそんな酷いことはしたくなかったのですが、当時の決まりによると、ほかに方法がないと思っただけです。この時代、普通の民でさえお館に行くことなど余程のことがない限りありません。ましてや物乞いの若者です。誰も理解、納得などできません。行列の進む中、お館様は家来のなかで信頼のおけるひとりの家来だけに（この者を館に連れて来てくれ。この者と話をしたい、然る場所に招いてくれ、私をもてなすのだ）と密かに命令していました。お館様の近くにいてそのひととなりを良く知っているこの家来でさえあまりのことに驚きましたが、お館様の命令です。従うよりほかはありません。

初めは縄で縛られ、家来達に抱えられ、通りをよろよろと

歩いてきたユウドでしたが、牢ではなく館の門に入った途端すぐさま縄を解かれ、部屋に導かれ、食事を出されました。それが終わると衣服を脱がされ、大きな風呂に連れていかれて、お女中達に全身びかびかに洗われ、髪も纏められ、着る物も新調されてしまっていました。その姿は痩せていなければ立派な若侍のように見えました。ただそれでもユウドは側近の家来の人に

「お願いです、出来れば直ぐここを出たいのです。お話はさせていただきますが、お館様が私の帰る事を許されるのであれば、あの着物もまた私に返してください」

そうお願いをしていました。

ユウドはお館様と会うこととなりました。お話をしたのは十二畳程の客間でした。板敷の上、自らの近くにユウドを座らせたお館様は一段高い上座に居ました。そして

「ユウドといったな。そなたの両親はどうしたのじゃ」

とお館様は静かに、しっかりと口調で尋ねました。

「おりません。私（わたくし）は爺さまと婆さまに育てられました。既にあたりとも亡くなりました」

ユウドは答えました。

「そうか、それは気の毒なことだ。それでは聞くがそなたの父と母はどうして亡くなったのじゃ」

そう尋ねられてユウドは言葉に詰まってしまいました。自身解らないのですし、その事を言っても理解してもらえないことは不可能だとおもったのです、でも本当のことを言う

より他はありませんでした。

「お館様、このことは誰に言っても理由が解らないと思うのです。私自身どうしてそうなったのかも解りません。信じられないのでしようが、実は私は土のなかから生まれたのでございます。そして私は爺さまと婆さまに育てられました。ふたりは土から生まれた私を我が子として育ててくれました。私はそのように生まれました。もちろん生まれた時の私は、ほかの赤ん坊とは違って、へその緒は地に繋がっていましたし、体は冷たく背丈も僅か八寸位だったとふたりは私に話してくれました。ご存知のことかと思いますが赤ん坊はお乳がないと駄目なのです。さようでございます、お乳が飲めなければ生きられません。その時なす術がなければ私は時を待たずに死んでいたことでしょう。ただ幸いといえますか、偶然にも爺さま婆さまの姪でミルマという子供を産んだばかりのひとがおりました。その乳で私は生きながらえました。私はとりわけこの三人の素晴らしいひとたちに守られ、十四歳まで生きてまいりました。生まれてから私は実際にこの三人に「ひと」として生まれることの喜び、生きることの大切さを教えられたのです。感謝しても感謝しきれないほどなのです。よくよく自分の事を考えてみますと、土のなかから生まれたことは、さようでございます、この五大（地下水風空）から私が生まれたということです。五大はずっと昔から、そうですこの世の初めからありました。今もあるのです。私は更に考えました。そしてはつきりと解かったのです。

私が今ここにいる事—それは生まれたことと生きることの素晴らしさ、それもひとの姿で生まれることの素晴らしさを、私が生きている限り伝えるということだと。私に与えられた使命はそれを行なうことだと。私のこの身体・心を生きている限り使い、出来る限りのひとにその素晴らしさを伝えようと。それも出来ればひとりひとりに直接会って伝えたい、そう願いました。でもどうやって伝えればいいのかと思悩んでいましたが、婆様の遺言（土のなかからの最後の教え）「物乞いになりなさい」という言葉を聞き、喜びの中、直ちに物乞いをすることを決心しました。

確かに物乞いは生きる為にしております。それは生きているもの全ての道理だからです。食べなければ生きていけないのがいきものありかたですから。ただその中で私はひととはひとに真実を伝える場合「全てのこと」に公平でなければ「全てのひと」に伝えることなど出来ないと思っていました。その際、世の中にあつて損得を説く事を、真実を述べるための手段としては絶対にしてはいけないと思っていました。例えばこの世の中で金銭を持つひと・「お金持ち」がお金を持たないひと・「貧乏」なひとに与えれば、与えられたひとは喜ぶでしょう。感謝するでしょう。でも争いは必ず起こるので。お金をもらった人は

「なんだ、こんなにすくないのか、けちなおひとだ」

「あの人より私の方が多い」「少ないのはどうしてだ」
また与えた人は

「私が与えたのだから私の言うことに従うのが当たり前だ」「せっかく与えたのに、ありがとも言わない」「など、そういった各々の思いが錯綜して混乱してしまうのがこの世の中の常なのです。私の訴えたいことは損得なので、利害なのは毛頭ないのです。」

私は物乞いです。この心と体以外何も持つてはいないので。私は何も持たないものが何かを持つていると思つているひとに向かつて「あなたは素晴らしい。きっと幸せになれるでしょう」と宣言することが当たり前だと思うのです。いや、そうでなければいけないのです。お判りでしょうか。そうです、何も持たないことによつて初めてひとは自分以外のひととなんの蟠りもなくお話ができるのではないのでしょうか。確かに、私がそう言いますと、いわれたひとはそのことに応じて様々な態度をとります。それは無理もないことと私は承知しております。ただそのことが大事なのです。そう言われた人が（どうしてこの人はそのように言うのだと思ひ、そこでしつかりと考える事）で心が深くなるのです。決して私は何も相手に否定的なことは申すつもりはありません。それとは反対にどんな状況であれ話をし、聞いてくれたひとりとひとりに感謝し心の底から祝福しているのです。そのこと自体に善悪が全くないのは明らかです。どうか私のことを申し上げることそのままお聞きください。無礼だ、不遜だと思ひになつてもどうかお許しください。「私が土から生まれたこと」ということ」それは私がどう考えてもはじめから生きていた

ということなのです。今生きるもの全ての最初から私は生まれてきたのです。先程も申し上げましたが私の本当の両親はこの「世界」なのです。ですからきつぱりと申し上げられるのですが、誰もが私の子供という事なのです。私は私が生まれてきているこの「世界」を素直に信頼し受け入れていきます。「世界」を信頼できることは幸せなのです。そうですそれゆゑ世界は素晴らしいのです。当然そのなかでいきているひとりと私が素晴らしいということを知らせたいのです。でも（何故そうなのだ）と問われるかと思ひます。

「この世界には様々な苦しみや悲しみがあるではないか。それを解決しようとしている人も沢山いる。しかし確かにそれと良くならなかつたばかりは言えない。かえつて不幸になる人も多いのではないか。不幸はなくなるならいのでは」と言われるかもしれない。そういうられる人が大勢いらつしやることは承知しております。しかしそう考えることは果たして真実なのではないか。

物乞いをする中で、お館様はわたしとなんの蟠りもなく話してくださつた初めてのひとです。勿論、爺様婆様もそうでした。私を育ててくれたふたりには生きることへの蟠りは全くありませんでした。そうです。ふたりは生まれて死んでいくことに素直でした。生まれることを喜び生きることが喜び、厳然と死を受け入れていました。なにも得することは望んでいませんでした。貧しい生活がそこにはありましたが、彼らの心は（得する・損する）そんな所には無かつたのです。

お館様ならお解りでしょう。大切なのはそのことなのです。いつの頃からでしょうかひとびとはそのことに気づくことを忘れてるように思います。もちろん今でもそのことを大切にしてはいるひとはいらつしやるのですがそれはほんの少しのひとびとです。この半年という間に、物乞いをして改めてその事は良く解りました。ただその多くの人は（自分の考えが余りにも世間の常識と呼ばれているものとは違う）と感じて、言うのを止め、黙ったままで過ごしています。私はふたりの生きる姿を通して本当の両親が望んだことをそのまま行っているのです」

お館様は心を打たれました。

「私はこの年になるまで、自分の心を顧みもしなかった。領主として生まれて、それを当たり前のように思い、領主という身分からの言い訳を正しいと思い、家来にもこの国の民にも言い放っていただけなのだ。なんとという愚かな領主であったことだろうか。それにくらべてこの物乞いはもうすでにそのようなことからは全くかけ離れている所で語っているのだ。誠にひとを思うということとはこういうことなのだと初めて知らされた。そうだこのことが幸せということなのだ。」

「ユウドいやユウド殿私はあなたから「世界を信頼する」ということを、心の底から教えてもらいました。感謝してもしきれないのです。わたしはもっとそなたから教えをうけたいのです。この館に住んでは頂けませんか」

お館さまはこう頼みました。

ユウドはそれに対してこう言いました。

「恐れ多いことです。有り難いことです。しかしそれは出来かねます。あなた様は素晴らしいひとです。ですからあなた様は、あなた様のまま、その素晴らしさをこの国のひとにあなた様から伝えてください。わたしは物乞いとして生きるためにここにいるのです。どうかこれからも、わたしに物乞いをさせてください」

そう言われて領主はユウドをなくなく城の外にそっと出させました。ただ別れ際に一つだけ頼み事をしました。

「ユウド殿、あなたの衣の一切れを私に頂きたいのです。私はそれをいつも懐に入れ、領主としていや一人のひととしてこの国の行く末を考え、民とともに幸せに暮らしていきたいのです。その事を忘れないようにいつも見つめていきたいのです」

ユウドは快く自ら左の腕にあるほつれた麻布をさっとむしって渡しました。見送りをしながら、お館様の目からは涙があふれて仕方がありませんでした。ユウドは知っていました、そして振り返りこう言ったのです。

「お館様、その涙は私の涙です。大地から湧きだす水なのです。その涙をこの国の民にお分け下さい」

ボロの服を再び纏ったユウドの姿が次第に遠くなり見えなくなりました。

ユウドはその後も多くこの国を巡り、「あなたは素晴らしい

ひとです。幸せになります」と言い続けました。当然馬鹿にするひと、おちよくるひと、怒鳴りちらすひと、石を投げる人は後を絶ちませんでした（訪れる国の真の素晴らしいひと・真の幸せなひと）に守られそれから二十八年間物乞いをする事が出来ました。しかしとうとう病に倒れて四十二歳で亡くなってしまいました。

いまでも遠州地方のとある町の民俗館の一角にユウドの衣服の一部と伝えられている麻の布地が展示されているそうです。聞く所によるとその布地は汚れてはいませんが発見されてからここ七十年余りもまったく変わらない風合いを保っているようなのです。もっとも誰も他人を信用しづらくなったこのご時世、本当に心有るひとしかその布地を見に行かないという噂を聞くのですが、それも頷けることではないのでしょうか。

（中区）

小説選評

竹腰幸夫

本年度応募作品は15点。歴史もの3点(信長期、幕末期、太平洋戦争期)、現代もの4点(弱者の視点、愛人の立場、定年後の生き方、女の生き方様々)、自伝的作品(留学体験その後、年齢離れた夫婦の物語、八十五歳の青春追憶)、青春物語(昭和30年代の高校生、現代の高校生)、寓話・ファンタジー3点。以上、分け方に異論もあるかもしれないが、大略右のような傾向だった。

これまでも、しばしば述べてきたことだが、創作は、読者とのいわば共鳴・共話によって成り立つ。筆者の一方的なおしゃべりでは読者はついて行けない。創作の動機がどうであれ、聞いてほしい、読んでほしいという筆者の痛切な思いが作品のどこかに(人物や背景の描写に)にじみ出てきて、それが読者の心を揺さぶるというものである。書き手の独善的な観想・世界観の表出だけでは、創作とは言えないと思うのである。

自伝や身近に題材を取った作品の場合、しばしばそうした傾向に陥りがちである。また、リアリズムを離れてファンタジーの世界に遊ぶのも、当人にとっては面白いことには違いないのだが、着想におぼれて、読者の共感を度外視してはその成り立ちも危うくなる。

要は、常に、だれか(一人でもいい)読み手と、その人の表情を想像しながら構成・描写・会話などに思い凝らさせていたいただきたいと考える。読者を離れて文芸は成立しないのだから。以下、強く共感した作品を紹介する。

『源次郎夢譚』幕末動乱期、京都の様子を探るべく命じられ

て浜松を出、京に向かった一行。弓の弦友社の面々は、仕事の合間に「三十三間堂・通し矢」の興行のあることを知る。腕に覚えの彼らは、近くの弓の稽古場に通いその興行に挑戦しようとする。目まぐるしく動く時代の転形期の今、一方、長い歴史を持つ「通し矢」に思いを凝らす若者たち。……数十年を経て、その時を回顧する老人。討幕史の裏事情に、通説とは異なる冷静な視線を投げて背景とする、筆者の手際がなかなか見事。

『ジョーンズさんの戦争』時は一九四一年八月。四か月後には日米の開戦を控えた、南太平洋、ニューギニアランド北方の島々の沿岸監視員(民間人)の物語(記録)。彼らはやがて日本軍の上陸によって、殺害、あるいは捕虜となって日本に抑留された。主人公は当時19歳のジョーンズ氏。時代は目まぐるしく彼を翻弄、日本の善通寺に捕虜生活を送ることになる。日本での英米捕虜たちの生活はあまり知られていない。(描写・資料の提示の仕方に若干の物足りなさは残るが)彼らの日記その他資料を駆使しての労作。

本誌で、主人公が浜松で活動していなければならぬという制約はない。このような広い視野からの作品も歓迎である。また、この作品が「小説」であるかどうかという点も問題になるかもしれない。だが、「記録」という色彩の濃いなかでも、一人の人間の生きざまが、筆者によって活き活きと描き出された「創作」として、十分受け入れ可能と考える。私たちは空襲を受けた地域の側での戦争を実感できるが、同じ事件を別の観点から眺める眼をこの作品から得ることが出来たのである。

『夜の散歩』定年後、妻を亡くして独り暮らしの主人公。いかわしい店で偶然指名した若い女と閉店後の食事と散歩。成り行きからお互いの心の奥を覗かせ合う。やがて、彼女(女子大生)は、彼の家の一室に移り住む。部屋代なし、掃除他の担当とのシェアだという。軽快なユーモア小説。ありそうもないシテューションだが、しみじみと人を信頼し合うことの喜びがあふれて楽しめる作品だ。

柳本宗春

十六作品のすべてに、皆さんの「書いておきたい」という意志を感じました。ただし、小説では、内容の絞り込みをすることと、どこまで読者に説明をするかのバランスの良さが重要です。書き過ぎたり書き足りなかつたり、その加減は非常に難しい所ですが、同時に最も注意を傾けるべき所だとも思います。それぞれの作品について一言ずつ述べます。

「策謀家 酒井忠次の奮闘記」

歴史的な説明が前後し、酒井の奮闘ぶりが伝わらない。

「ユウドの物語」

内容は哲学的だが分かりやすい語り口。すべてを説明しきらない方が良かったのではないか。

「7. または、どこかへ、七つの入り口。」

七つの話がそれぞれに啓示的で、どこかに何かが迫ってくるという不安感は伝わってくる。不可思議なお話。

「融合」

「融合している」ことは充分伝わるストーリーなので、直接説明しない方がよい。文章の見直しを丁寧に行ってほしい。

「ナーダ（虚無）」

友人の遺した日記的な文章と主人公の回想がうまく絡んでいく。長年にわたる物語なのでもっと紙数が必要かもしれない。

「夜の散歩」

後半の展開にややぎこちなさを感じるが面白い。会話をより

自然に書くことさらに良い。

「源次郎夢譚」

描写にリアリティーがあり、よくまとまった物語。話の聞き手の姿を思い切つて削つたのが良かった。佳作である。

「偶さか」

アイディアと地の文の描写は良い。会話に魅力が欲しい。

「帰郷」

やや解説的な描写もあるが面白く読めた。人物がそれぞれ魅力的で、生き生きと描けている。

「54歳の父」

切ない話であるが、小説として描くには工夫が必要。題名からして、子供の視点で書いた方が良かったかもしれない。

「八十五歳の述懐」

文章力を感じる作品。内容を刈り込み過ぎたようにも感じている。もう少し長い小説にすると主人公の心の動きが分かりやすい。

「時屋」

「時屋」をめぐる連作短編の一つという感じ。単独の作品としては魅力が少ない。

「ジョーンズさんの戦争」

素晴らしい記録であり内容も興味深い。小説として評価するのは難しい。

「宇連山の雨傘」

人物の状況や関係性がよく分からないまま物語が進んでいくため、作品の世界に入り込みにくい。

「青春の一片 夏の終り」

主題としてはよくある話だが、短編としてよくまとまった構成である。情景描写の書き込みをよりバランス良くしたい。

児童文学

「市民文芸賞」

むぎ畑のカフェ

住吉玲子

ここは、広い広いむぎ畑。

空にむかって、なだらかにひろがる丘いちめん、みどり色のむぎの葉が、風にゆれておどっています。

五月になって、むぎの葉のあいだから、つんつんした穂^ほがのびてきました。遠くからも近くからも、ヒバリの鳴き声^ほが聞こえます。

そんなむぎ畑のかたすみに、一本のかしわの木が、枝をひろげて立っていました。

きつと、むぎ畑ができるよりずっと昔から、立っていたのでしょうか。かしわの木は太くて、地面にどっしりと根をはっていました。

その木の下で、けさもネズミのチュウさんが、お店をあけるじゅんびをしています。

『カフェ☆かしわの木』というのが、チュウさんのお店の名

前です。

チュウさんは、このお店のマスターなのです。チュウさんは丘の上の、まぶしくかがやく青い空をみて、「きのうまでの雨が、うそみたいに、みごとに晴れたねえ。」と、ひとりごとをいいました。

きのうまで何日も雨の日がつづいていて、とくにゆうべは、たいへんな大雨だったのです。

おや、だれかが、むぎ畑の中を走って来ます。

丘のはずれの林からやってきた、野ウサギのミミコです。野ウサギのミミコは、かしわの木のところまでくると、店の前をそうじしているネズミのチュウさんに、

「チュウさん、おはよう。きょうはイチゴジュースはあるかしら？」

と、たずねました。

「ああ、ミミコさん、いらっしやい。ひさしぶりに晴れて、
気もちがいいですね。ありますよ、イチゴジュース。」

「まあ、うれしい。」

「きょうは、いいイチゴが手にはいったから、ミミコさんが
来てくれるといいなど、思っていたところです。もうそろそ
ろ、イチゴの季節はおわりですからね。たくさんめしあがっ
てください。」

「ええ、きつとおかわりすると思うわ。わたし、イチゴジュ
ースが大好きなんですもの。」

「さあ、もう開店ですから、どうぞ中へ。」

ネズミのチュウさんは、ホウキとチリトリをかたづけ
ると、まえかけをパンパンと手ではらつて、お店のドアをあけ
ました。チリンチリンと、ドアのベルが鳴りました。

「あ、チュウさん、ちよつとまつて。きのうはどしゃぶりの
雨だったから、畑の土がぬれていて、足がどろだらけなの。
そこの小川で洗ってくるわね。」

ミミコは、かしわの木のうらてにある、小川のほうへ行き
かけて、

「あら、これは何かしら？」
と、足をとめました。

「チュウさん、木の根っこのかげに、白い紙がおちているわ。
字が書いてあるから手紙みたいよ。」

「手紙ですって？」

お店の中にはいりかけていたチュウさんが、ミミコのそば

に行ってみると、雨のしずくにぬれた草の上に、白い紙がお
いてあります。紙にはところどころに、どろのしみがついて
います。

チュウさんは、その紙をひろいあげました。

「ああ、たしかにこれは手紙ですね。なにになに……」

チュウさんは、声にだして読みはじめました。

『「カフェ☆かしわの木」のマスターへ。』

この近くをとおると、いつもコーヒーのいいかおりがしま
す。お店におじゃましたいと思うのですが、ざんねんなこと
に、ぼくはひるま、外出ができません。ぼくの仕事がおわる
夜中には、いつでもお店がしまっています。きょうの夜は、
早めに仕事をすませて、お店にうかがいますので、よろしく
おねがいします。モグタより。」

「モグタさんって？」

野ウサギのミミコが、茶色の耳をかしげてきました。

「さあ、知らないお客さんだなあ。この店は、朝八時から、
ゆうがたの六時まであけているのだけど、せっかく『きょう
の夜に来ます』って、手紙をくれたから、きょうは少し、店
をしめるのをおそくしてみますよ。」

「まあ、よかった。モグタさん、お店があいていたら、きつ
とよろこぶわね。」

野ウサギのミミコは、あますつばいイチゴジュースを、た
っぷりと飲んで帰っていきました。

そのあと、『カフェ☆かしわの木』には、イタチのごふう

ふがやって来ました。イタチのごふうふは、紅茶をのみながら、チュウさんに話しかけました。

「いまね、孫の顔を見てきたのですよ。きのう生まれたばかりなの。そりやもうかわいいのなんのつて。小さくつて、いいにおいがするんです。」

イタチのおくさんが、ニコニコしていいました。

「それはよかつたですね。おめでとうございます。」

「ありがとう。おかげで楽しみがふえたよ。」

イタチのごしゅじんも、うれしそうにひげをびくびくと動かしています。

ネズミのチュウさんは、イタチのごふうふの幸せそうな顔を見てみると、自分まで幸せな気もちになりました。

午後になると、『カフェ☆かしわの木』の窓からは、チラチラと明るいこもれびが、はいってきました。

さわやかな五月の風が、窓から窓へ、リボンがひるがえるように、とおりぬけていきます。

ちょうど、お客さんがとぎれて、チュウさんがカウンターイスで、うとうとしていると、チリンチリンとドアのベルが鳴りました。

「おっと、うたたねしてしまつた。」

チュウさんは急いで立ちあがりました。

お客さんはヤマネコの若者でした。大きなリュックサックをせおっています。

チュウさんはヤマネコの若者を、明るい窓べの席にあんなにして、

「ようこそ、『カフェ☆かしわの木』へ、ご注文は？」とききました。

「おながすいたので、サンドイッチをおねがいます。それと、つめたい牛乳を。」

「はいはい、けさしぼったばかりの牛乳がありますから、すぐにおもちしますね。サンドイッチは少しおまちください。」

ヤマネコの若者は、牛乳をごくぐくと、のどを鳴らして飲みました。そのあと、よほどおながすしていたのか、サンドイッチをあつというまに食べてしまいました。それからコーヒーを注文しました。

「ご旅行ですか？」

ネズミのチュウさんが、コーヒーを運びながら、ヤマネコの若者にききました。

「ええ、鉄道の駅のある町から、歩いてきたのです。まだいくつも丘や川をこえて、岬の町まで、歩いて行くつもりです。」

「それはずいぶんと、遠くまで行くのですね。何日もかかりそうですね。」

「こうしてねぶくろも、持っていますよ。」

ヤマネコの若者は、ニコツとわらうと、大きなリュックサックを指さしました。そして、

「マスターは、岬の町に行つたことがありますか？」

と、ききました。

「さんねんながら、まだ行ったことがありません。」

「ぼくもはじめて行くのです。あの町はとも昔に、貿易でさかえた町なので、りっぱな古い石づくりのたてものが、たくさん残っているそうなのです。ぼくはけんちくの勉強をしていますから、そんな古いたてものや町なみを、ぜひ見たいと思います、やってきたのです。」

「なるほど、きつといい勉強になりますね。」

「それから、岬には高いがけがあつて、そこからは、海が遠くまで見たせるそうです。ずっとずっと、どこまでも海がひろがっているそうなのです。ぼくは、それも見てみたい。いつか、その海のむこうの外国にも、行ってみたいと思つているのですよ。」

「そうですか、それは楽しみですねえ。」

チュウさんは、ヤマネコの若者のえがおが、こもればいとしよに、かがやいているみたいだなと思つた。

「たてものだけじゃなく、ぼくはあちこち旅をして、知らない世界を見てみたいんです。いろいろな場所に行つて、さまざまなことを知りたいのです。」

ヤマネコの若者は、目をさらにさらさらさせていました。

「いいですねえ。すてきですねえ。わたしはまだ海を見たことがないので、いつかその岬の町に行つて、海を見たいですね。」

「ええ、ぜひ。さあ、そろそろ出発しないと。マスター、サ

ンドイッチも牛乳もおいしかったです。コーヒーももちろん。」

「それはよかった。帰りに、もしここをとつたなら、岬の町のこと、海のこと、話してくださいね。」

「ええ、きつと。それじゃあ。」

ヤマネコの若者は、かた手をあげてニッコリすると、大きなリュックサックをせおつたせなかをゆらして、チュウさんの店を出ていきました。ネズミのチュウさんは、ドアのところで見送りました。

そのあとは、リスの親子と、三びきのアライグマのお客さんが来ました。

そしてゆうがた、いつも仕事の帰りにコーヒーを飲んでいくカラスが、

「マスター、ごちそうさん。じゃあまた。」

といつてお店を出たのが、ちょうど六時でした。

ネズミのチュウさんは、ドアのそとに出て、かしわの木の下から、広いむぎ畑を見わたしました。そして、

「なんて気もちがいいなげだらう。きょうも一日いい日だった。」

と、のびをしました。

むぎ畑のむこうに見える赤い夕日が、チュウさんに、ニコとわらいかけてくれているみたいでした。

「さて、きょうはモグタさんのために、もう一時間、店をあけておこう。」

チュウさんは、そうひとりごとをいうと、お店にもどり、それから、ドアのその電灯でんとうをつけました。

夕日がゆつくりと、丘のむこうにはずんで、空が青色から水色に、色をかえていきました。

やがて、空の色があい色になって、『カフェ☆かしわの木』のあたりが、やさしい光で、むぎ畑のかたすみまでらすころ、チュウさんは、お店のかたづけをしながら、モグタさんのくるのをまっています。

とつぜん、バタバタとせわしない羽音がして、さつき帰っていたカラスがもどってきました。そして、店のドアをあけるなり、

「マスター、たいへんだ。きのうの大雨のせいで、村のはずれにがけくずれがおきた！」
と、いいました。

「えっ、がけくずれですって！」

コーヒーカップやおさらを、戸だなにしまっていたチュウさんは、びっくりしてふり返りました。

「いま、見てきたが、となり村とのさかいを流れる川が、がけくずれのせいで、だいぶせき止められている。早く川に流れこんだ土をどかさないと、川の水があふれて、あたりが水びたしになるかもしれない。」

「それはたいへんです。川の近くには、たくさん動物たちが住んでいますから。みんなですすけに行かなくては。」

「いま、大工だいくのアイグマのおやじさんに、知らせてきた。」

若いもんをつれて、すぐに行つてくれるそうだ。モグタたちは、もう川に行つて、作業さぎょうにとりかかっている。おいらは夜目よめがきかないから、あとはフクロウのじいさんが、あちこち知らせに、とびまわつてくれている。」

「じゃあわたしも、手つだいに行きましよう。」

「いや、チュウさんはここにおいて、みんなの夜食やじよのじゅんびをたのむよ。はらがへつては、ちからがだせないからな。」

「わかりました、そうしましよう。」

「じゃ、たのんだよ。」

カラスは、来たときと同じように、せわしくなく羽音をたてとんでいきました。

チュウさんは、モグタさんのことをすっかり忘れて、お店のおくで、みんなの夜食を作りはじめました。

その時、ドアがいきおいよくあいて、ドアベルがリンリンと、けたたましく鳴りました。

チュウさんがあわてて出ていくと、野ウサギのミミコが、息をはずませて立っていました。

「ミミコさんじゃないですか、どうしたんです？ こんな時間。」

「チュウさん、わたしモグタさんというお客さんが、来たかどうか気になって、ようすを見にこようとしたら、林を出たところで、フクロウのおじいさんに会ったの。川がたいへんなことになっているんですって？」

「そうなんです。がけくずれがあつて、いま、みんなで川

に流れこんだ土を、どかしているところなのです。」

「こんなに暗くなつてから、あぶなくないかしら？」

「心配ですね。」

「何か、わたしにできることがあれば、お手つだいをしたいわ。」

「それじゃあ、いっしょにみんなの夜食を作ってください。いま、うちにあるナベをぜんぶ使って、シチュウを作っているところなのです。」

「ええ、いいわ。」

チュウさんとミミコは、いくつものナベにシチュウを作ったり、パンを切り分けたり、飲みものをポットにつめたりして、いそがしくはたらきました。

二ひきとも、川のこと心配で、こころの中がザワザワと波だつていましたから、だまつたままでした。

窓のそとのむぎ畑は、すっかり暗くなりました。むぎ畑からさこえる虫たちの声が、夜がふけたことを知らせています。

チュウさんが時計を見ると、九時を過ぎていました。

夜食ができあがつて、チュウさんとミミコは、イスにこしかけてひと休みしました。

「川のほうは、どんなぐあいかしら。」

ミミコが、ため息をつきながらいいました。

「なんの連絡もありませんねえ。」

「そろそろ夜食をとどけに行こうかな。ものおきに手おしく

るまがあるから、あれにナベをのせて、川の近くまで運べると思うのですよ。そうだ、こんやは月もでていないから、あかりがほしいですね。カンテラをだしてこなくては。」

そういつて立ちあがりました。

その時、パタパタという羽音がして、お店のドアが、リンと鳴つてあきました。

やってきたのは、フクロウのおじいさんでした。

「やあ、フクロウさん。川のようにすはどうですか？」

チュウさんは、フクロウにかけよるとききました。

「ああ、なんとか安心できるぐらい、川の流れはもどせたがな、まだぜんぶの土をどかしたわけではではないが、とりあえず、きょうの作業はおわることにした。あとはまた、あしたの朝からということじゃ。」

「そうですね。ごろうさまでしたね。」

「みんなおなががすいて、へとへとじゃから、夜食を食べべに、ここへくることにした。よろしくたのむよ。」

「ええ、もうじゅんびはできています。野ウサギのミミコさんも手つだつてくれたのです。じつは、いまから川までとどけようと思つていたところなんですよ。」

「そうかそうか、それはありがとう。」

フクロウのおじいさんは、ミミコのとりのイスにこしかけて、

「ふうっ」

と、大きく息をつきました。

「フクロウのおじいさん、すぐくつかれてるみたいね。」
ミミコが心配そうに、ききました。

「ああ。じゃが、みんなががんばってくれたから、川があふれなくて、ほんとうによかった。モグラたちや、アライグマたち、イタチや、キツネ。リスやカラスも。それに旅のヤマネコも、どろだらけになって、はたらいてくれた。」

「そうなんですか。旅のヤマネコさんというと、きつと、きょう、お店に立ちよってくれたヤマネコの若者ですよ。」

チュウさんが、コーヒーをいれながらいました。

「ああ、手ぎわのよい仕事ぶりの若者じゃった。」

「そうでしたか。よい若者ですね。フクロウさん、まずは熱いコーヒーをどうぞ。」

チュウさんが、フクロウのおじいさんの前に、コーヒーをおきました。

やがて、ガヤガヤという話し声が、とおくから聞こえてきました。話し声はだんだん近づいて、おおぜいの足音や、カチャカチャとガタガタという物音がして、お店のドアがリンリンと、いきおいよくあきました。

「ああ、やっとついた。マスター、はらがへったよ。」

大工のアライグマのおやじさんが、大きな声でいいました。

「ああ、もうペコペコだ。」
キツネもそういうと、ドスンとイスにこしをおろしました。

どろだらけの村のなかまたちが、
「ワハハハハ」

と、いつせいにわらい声をあげました。

「はいはい。みなさんほんとうにおつかれさまでした。おいしいシチュウができていますよ。」

チュウさんとミミコは、大急ぎで、みんなにパンとシチュウを配りました。それからコーヒーをいれはじめました。お店の中に、コーヒーのかおりがひろがりました。

その時、またドアがあいて、ひるまのヤマネコの若者と、モグラたちがお店にはいつてきました。

「やあ、ヤマネコさん。きょうはがけくずれの場所で、手つだつてくださったそうですね。ほんとうにありがとう。」

ネズミのチュウさんがおれいをいうと、
「いいえ、ちようどとおりがかったからですよ。」

と、ひるまと同じえがおで、ヤマネコの若者はこたえました。
ドアのすみの暗がりや、モグラたちが、かたまつて何か話

しています。

「どうしました？ おつかれでしょう。早くこちらに来て、こしかけてください。」

と、チュウさんが声をかけました。

「わしらは、明るいところがながてなんだよ。」

年かさのモグラがいました。

「ああ、そうでしたね。モグラさんは、光が好きじゃあなかつたですね。では、そちらにシチュウとパンをもっていきませね。いま、テーブルを運びますから。」

そういうってチュウさんが、テーブルを、ドアの前にもつて

いった時、一ぴきの若いモグラが、鼻をクンクンさせているのに気がつきました。

チュウさんは、ハッと思いました。

それは、けさ、かしわの木の根もとにおいてあった手紙のことです。

「コーヒーのいいかおり。ひるまは外出ができない……」

チュウさんは、ぶつぶつとひとりごとをいいながら考えました。

（もしかして、あの手紙をくれた『モグタさん』は、モグラ？）と。

「モグタさん……ですか？」

チュウさんは、鼻をクンクンさせている若いモグラにたずねました。

「ええ、ぼく、モグタです。」

若いモグラは、パツとえがおになって答えました。

「そうですね、あなたが手紙をくれた、モグタさんなのですね。」

「はい。ぼくの手紙を、読んでくれたのですか。」

「ええ。きょうは、店をしめるのをおそくして、モグタさんをおまちしていました。ところが、がけくずれがおきて、それどころではなくなっていました。こうして来ていただけでうれいす。こんやはおつかれさまでした。」

「へへ」

と、モグラのモグタは、ちよつとてれたようにわらいました。

「さあさあ、みんなおなががすいでいるでしょう。おしゃべりしていないで、パンとシチュウをどうぞ。」

ミミコが、やってきて、おさらをならべはじめました。

「おっとっと。」

チュウさんはわきへよけながら、

「ようこそ、『カフェ☆かしわの木』へ。ご注文は？」

と、モグタにききました。

「あの、いいかおりの『コーヒー』をお願いします。」

「かしこまりました。」

チュウさんはおじぎをすると、カウンターにもどって、さつそくコーヒーをいれはじめました。そしてミミコのほうをチラリと見て、ニッコリとウインクしました。

『カフェ☆かしわの木』に、コーヒーのかおりがたちこめて、むぎ畑のかたすみで、夜がにぎやかにふけていきました。

(浜北区)

「市民文芸賞」

あしたへの小さな芽

金指美美代

日曜日の朝、玄関の戸を激しく閉め、庭に出た直宏は、そのまましゃがみこんだ。

「もういやだ！ 塾も、陸上も、何もかもいやだ！」

涙をこらえて、地面をみつめた。

蟻がチヨロチヨロと、動き回っている。

（お前、そんなに小さいのに楽しそうだな）

そんな直宏の気持とは別に、玄関のわきの花だんに、あざやかに黄色のパンジーが咲きほこっている。

直宏は、今年の春から六年生、勉強も運動も自信があった。

それなのになぜ、突然心がくずれてしまったのか、直宏自身にも、わからないでいた。

「直宏、いかないのか」

「いかない」

「そうか、じゃあ、休むんだな、陸上は」

お父さんが外に出てきて、しゃがんでいる直宏のうしろで、素晴らしい残して、車で陸上にでかけていった。

お父さんは、直宏が入っている陸上の丘アスリートクラブの会長を、今年からしている。

お父さんが出ていった後、直宏は静かになった庭で、まだしゃがみこんだまま花だんをみつめていた。

（なんだよ、自分だけ陸上にいって、お父さんが走るわけないだろ、走るのは、俺だぜ！ 苦しいのは俺だぜ！）

直宏は、急に涙があふれだした。

ポトリと落ちた一しずくの涙は、パンジーの花びらをなで流れていった。

パンジーの隣に、かくれるように小さなチューリップの芽が出ていた。その三角の緑の芽に、涙はにじんで消えた。

直宏は、つき出たチューリップの三角の芽を、ひとさし指

で、そつとさわつてみた。

その芽は、固くじつとしたまま動かない。

(小さいのに、強いな、芽つて)

直宏は、そう思ったしゅんかん、立ち上がった。そして、お父さんに、悪かつたかなと、と思い始めていた。

直宏は、小学校一年生から、陸上の丘アスリートクラブに入り、五年間、頑張つてきて今年からは、最上級生なのだ。

一年生の時は、陸上のことを知らず、ただ走るのが好き、で入つた。

それが今では、一年生から六年生まで、全児童で六〇名、足の早い子の集まりの、丘アスリートクラブ。その中でも、直宏は期待されていた。

先週の陸上の練習の時、

「直宏君、最終学年だぞ！ たのむぞ」

竹中監督が、直宏の背中をたたいて、

「頑張れよ！」

と声をかけた。

「はい、頑張ります」

直宏は、竹中監督に力強く答えた。

そう答えたものの、しかし、ほんとうは、

自信がなくなつていたので。

直宏は、学校でもクラスで、身長は前のほうである。

それに、一番悩んだのは、靴のサイズだった。

陸上のスパイクは、22センチ以上しかなくみんなは、とつくにスパイクをはいて練習をしていた。

六年生になつた今、足も大きくなり、スパイクをはいて練習している。

それなのに直宏は、靴のサイズは、22センチに届かずふてくされていた時があつたのだ。

それは四年生になつた時だった。お父さんの運転で車に乗つてスポーツ靴店にスパイクを買いに行った日、店員さんには、足の寸法を測ると言われ、しぶしぶ測つたら、22センチには届かず悲しい思いをした。

お母さんが、

「直宏、そのうち大きくなるからね」

「うるさい！」

直宏は、そういつて早々車に乗り、しゃべらなかつた。

「直宏、あの、赤と紺のスパイクが、格好良かったじゃないか、買つとけばよかったじゃないか、すぐ足は大きくなるさ」と、おじいちゃん。

おばあちゃんも、

「そうだね、あつという間に大きくなるよ」

そういつた そのとき、

「しゃべるな！」

と直宏は、怒鳴つた。

車の中は、シーンとした。弟の竣也が、直宏の顔を横目でチラッとみて、下を向いた。

じつは、直宏は、体が小さいことや、足が小さいことを、ずっと、悩んでいたのだ。

一年生の時に、一緒に入ってきた、こうすけ康介君と、はると遥大君も足が大きく、すでにスパイクをはいていた。それに頭一つ分、直宏より大きい体をしていた。

直宏は、小さいのは、いやだなあと、ずっと、感じていたのだ。

そして竹内監督に、

「はい、頑張ります」

と、答えている自分もいやになるのだった。

それに、お父さんが丘アスリートクラブの会長になったりして、直宏は、自分の力以上のものをださなくてはならない苦しさがあったのだ。

そんな折、塾の成績も下がった、そして、陸上のタイムも下がっていった。

直宏の生活態度などを、お父さんから注意された日曜日の朝だった。

直宏は、家の中に入り、黙って二階の自分の部屋にいろいろとした。

「直宏、少しは、落ちついた？」

お母さんは、キツチンのテーブルをふきながら、直宏の背中に、やさしく声をかけた。

「うん」

直宏は、そういうとふりむいて、お母さんにわざとニコッと、笑ってみせた。

「そう、よかった」

お母さんは、直宏をみつめてうなずいた。

流し台で洗いものをしていたおばあちゃんが、
「何もかもしやになる年頃なのよね、直宏、ここんところ、とても成長したもののねえ」
と、いう声が聞こえた。

「どこも成長してないよ」

直宏は、ぶつぶつ言いながら二階にかけあがった。

そして、自分のイスに座ると机にほおづえをつき、

(成長か)

と、つぶやいていた。

その日の夕食の時、

おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、弟の竣也、そして直宏、久しぶりに、家族そろってにぎやかだった。

カレーを食べていたお父さんは、突然、

「九月に大会があるそうだ」

と、いった。

カレーをほうばろうとしたスプーンを置いて、弟の竣也が、

「えっ？ 大会って？ 何の？ まさか、サッカーじゃない

よな、この前、試合やったしな、俺、一点、シュートしたの、

あれ、格好よかったなあ」

竣也は、そういつてから、お父さんと直宏の顔をキョロキョロとみて、

「陸上の大会なの？ お父さん」

「そうだ、陸上の大会だ」

「へえ、じゃあ、直宏兄ちゃん、頑張らなくちゃね」

竣也は、ニコツと直宏をみてから、カレーをほうばった。

黙ってカレーを食べ終った直宏は、立ち上がり、

「俺、陸上やめるから出ないよ、出るもんか」

そう捨てぜりふをいうと、流し場について水をコップに勢いよくつぎ、ゴクゴクと、一気にのんだ。

「どうしたの？ お兄ちゃん、なに怒ってるの？ 陸上やめるって、なんでよ」

竣也が、つたつたまま、黙っている直宏をみてから、お父さんに聞いてきた。

「わからないよ、直宏、今、ちょっと反抗期だからな」

お父さんは、一口のカレーを食べ終え、腕を組み、じつと、考えこんで上をみている。

それで、家族全員、シーンとなつてしまった。

ことし四年生になる弟の竣也は、兄の直宏をいつも見習って行動していた。もちろん、勉強も運動も、直宏兄ちゃんには、かなわないと思っているし、でも、いつか兄ちゃんみたいになりたいと尊敬もしていた。

「お兄ちゃん、ほんとに陸上やめるの？」

竣也は、流し場で立ったまま、からのコップを持っている直宏の横にきて心配そうに聞いた。

「ああ」

直宏は、竣也と顔をあわせまいと、顔をそらした。

「なんで？ お兄ちゃん」

「うるさい！」

直宏は、そういうと持っていたコップを流し台の上にドンと置いて、二階へいこうとした。

「直宏、まちなさい、話しあおう」

お父さんの静かな声に、直宏は思いなおしゆっくり席についた。

「お母さんは、

「直宏、いろいろ悩みがあるんでしよう、きっと。もつと自分につつかればいいのよ、ぶつかって初めてわかることもあるんだしね」

直宏は、下を向いたまま黙っていた。

おばあちゃんが、からになったお父さんのカレーの器をとりながら

「おかわりするかね」

と、にっこり笑った。

「いいよ、ごちそうさま」

お父さんは、両手をあわせた。

「そうかい、直宏も竣也もきょうは、ごちそうさまかい？」

直宏と竣也は、同時にそう答えた。

そして、おばあちゃんは、直宏の気持ちを感じてか、

「直宏も竣也もよく頑張っているよ、たいしたもんだ」

すると、直宏は、

「おばあちゃんは、いつも頑張ってるねっていうよね、どこ頑張ってるの？ 俺たち、な竣也！」

「そんなことないぜ、俺は頑張ってるよ、勉強も、そしてサッカーも頑張ってる。お兄ちゃんもさ」

「よせよせ、陸上やめるっていうって俺のどこがだよ、どこが頑張ってるんだよ！」

また、捨てぜりふをいう直宏。

自分で自分に嫌げがさしている。なぜかわからないけれど、直宏は、そう思っていた。

お父さんがしんみりいった。

「直宏、よく聞け、お前は、一年生の時から陸上をやってきた、あの頃は、足が早く、走るのが好きだったんだろ？」

それに、直宏の他に二名いたな、こうすけ 康介君とはると 遥大君だ、もうすぐ六年生だな、三人共、陸上をやめることもなく続けてきた」

直宏は、下を向いたまま、うなずいた。

そして、

「あいつら、俺よりずっと足早いし…」

小さな声で、そういった。

「そうだな、苦しかっただろうよ、つらかっただろうよ、知ってたよ、スパイクのことも身長のことも、でも、直宏、こ

こ一年間で、足のサイズも、身長も、ぐうーと、伸びたじゃないか、まだまだ伸びるぞ」

お父さんのことばに、溢れ出る涙を腕でぬぐうと直宏は、

「つらかったさ、やめたかったさ、でも陸上は好きだよ、走るのは大好きなんだ、勉強も嫌いじゃないさ」

「そうか、嫌いじゃなくて良かった。ここまで陸上も乗り込んできたじゃないか、すごいことじゃないか」

「俺も兄ちゃんのこと、すごいと思ってる」

真剣な顔で、竣也がいった。

お母さんとおばあちゃんは、顔を見あわせほえんだ。

うでくみをしてジッと目をつぶり、それまで聞いていたおじいさんが、大きく、何度もうなずいていた。

お父さんは、大会のことは、それ以上いわなかった。

それから、お父さんが、陸上の丘アスリートクラブに出かけても、直宏は長い間、陸上を休みつづけた。

六年生になり、さわやかな五月の空に、こいのぼりが、堂々と泳いでいた。

日曜日の朝、

「お父さん、今日、陸上にいくよ」

スパイクを持ち、ウェアに着がえた直宏は、突然、いった。

「そうか、いくか！ よし！ いこう」

お父さんは、きちんとウェアに着がえた直宏をまぶしそ

うにみて、弾んだ声でそういった。

そして、

「竣也、竣也もお兄ちゃんの練習、見に来るか」

「いく、久しぶりだなあ」

直宏は一ヶ月ぶりの陸上の練習だったが、何だか自信があった。

じつは、陸上を休んでいた間、誰にも知られないように、学校から帰ると、近くの公園で、真剣に走りにとり組んで練習をしていたのだった。

スタートの練習や、バトンを渡す練習、太ももを高く上げ筋力をつける練習を、雨の日も毎日、日が暮れるまでしてきた。

すると、今までにない自信がからだじゅうに、みなぎってくるのを感じていたのだった。

久しぶりに直宏は、お父さんの車で竣也と一緒に、丘アスリートクラブに出かけた。

竹内監督が、一番のりの直宏をみつけると

「直宏君、筋肉痛、もう大丈夫か？」

「えっ？ 筋肉痛？ 俺が？」

直宏は、お父さんが、休んでいる理由を、竹内監督に、そういつてくれていたんだと、すぐに気づいた。

「はい、もう大丈夫です」

「そうか、よかったな！ 筋肉痛は、イコール成長痛ともいうもんな、体が出来上がってくるってことだ、アツハツハツ

ハ、よかった、よかった」

お父さんが遠くで、竹内監督と話をしている直宏を笑ってみつめていた。

お父さんのとなりで竣也が直宏に手を振った。

直宏は竣也に片手をあげた。すると、お父さんと竣也が両手を高くあげ、手を振った。

それに答えるように直宏も、両手をあげて手を振り、練習に走っていった。

陸上の練習が終ると、

「五、六年生、全員集合！」

竹内監督の声に、五、六年生は、すばやく竹内監督の前に集合した。

「みんないいか、九月の大会もあと四ヶ月しかない、リレー、100メートル走、800メートル走、1500メートル走とある。どれも苦しい戦いだ、頑張ってやろう」

「はい！」

力強く、みんな答えた。

一年生から一緒に陸上に入っている康介君が、

「直、しっかり走ろうぜ」

直宏は、突然そういわれたので、気おくれしそうになったけど、

「康介君もね」

と、いつて笑ったら、直宏のうしろから、

「直！ リレー、出場したいな」

と、遥大君が、元気よく声をかけてきた。

「うん、そうだね、リレー、俺も出場したいな」

ふり返り、直宏も明るく言った。

直宏より大きい身長（はもと）の康介君と遥大君、どうみても勢いがある体格だ。

でも直宏は、陸上を休んでいた間、自分で自分を鍛えつづけた。

今では、その気力では誰にも負けないと、心から思うのだった。

それからの直宏は、さらに人の倍以上の練習を積みかさねた。スタート、手のふりかたダツシユ、竹内監督から、いろいろ注意されていたくせも、直した。コツも覚えた。タイムもぐんと上がり、六年生で一番早い康介君と、すれすれのタイムまでできていた。

「直！ お前、早くなつたなあ。どんな練習してるんだ」

と、康介君が、終り仕度して、しゃがんでスパイクをぬぎながらきいてきた。

「何もしてないさ、やる気、やる気だけさ」

そっくりながら直宏は、

（やる気、やればできる！ 努力は実るんだ）

と、自分に語りかけた。

すると、体の底から自信がわいてくるのだった。

そして、直宏は九月の大会の 1000メートル走と、リレーの第一走者（はもと）に選出された。

遥大君がリレーのアンカーだ。

康介君は、長距離の 1500メートルに、選出された。

朝食の時、直宏が、九月の陸上大会の 1000メートル走とリレーに、選出されたことを聞いたお父さんは、

「直宏、すごいな！」

こぼれそうな笑顔で、何度も肩をたたいてくれた。

直宏は、力強い目でお父さんを見てから、につこり笑つてうなずいた。

数日たった登校の朝、

直宏は、庭で、花だんに咲いているチューリップをながめながら、竣也を待っていた。

あの時のチューリップの三角の芽が伸び、赤色、黄色、白色、もも色と、色とりどりに咲いて並んでいた。まだつぼみもある。

どのチューリップも、精一杯、空にむかって伸びていた。

「直宏兄ちゃん、お待たせ」

肩から、ランドセルがずり落ちそうになり、また、しよなおしている竣也。

「しつかりしよえよ、竣也、じゃいくか」

「うん」

竣也は直宏と一緒に歩きながら、持っていたサッカーボールを高く投げあげて、両手で落ちてくるボールを受けとめ、

「兄ちゃん、すごいね、100メートル走もリレーも、選ばれてよかったね」

「ああ、でも、まだこれからだけだな」

直宏は竣也の顔をみて笑った。

「兄ちゃん！ 兄ちゃんの努力が実ったってことか」

「竣也、偉そうなこといなよ、まだ、これから、これから」

「へへっ、ほくも、まだこれから、だ」

また竣也が、サッカーボールを高くあげ、パシッと、両手で受けとめた。

「竣也、俺には勝てないぜ」

「そうかなあ、それはわからないぜ、努力しただだよ」

「竣也、やれるか」

「やれるさ」

「じゃ、俺についてこい！」

直宏は、ランドセルをかたかた、ならしながら走った。

「直宏兄ちゃん、やっぱり早いなあ、待ってよう」

竣也もランドセルをかたかた、ならして、直宏についていく。

五月の空の太陽が、

「きつと、いいことあるよ、あしたにむかって伸びる小さな芽たちよ」

と、語りかけるように、ふたりのうしろすがたに、ふりそそ

いでいた。

(南区)

「市民文芸賞」

丘の上の空は明るい

鈴木啓之

真美^{まみ}が浜松市天竜区の、丘の上の病院に入院して、もう二回目の春だ。真美は父親と二人で磐田市に暮らしていたのだが、中学一年生の二学期からはこの病院に併設する特別支援学校に転校した。真美の両親は真美が小学校四年生の梅雨明け間近な頃に離婚して、それからは父親との二人暮らしだった。父親は県内でも指折りの自動車会社に勤めるエンジニアだったのだが、毎日の残業で体調を崩し、真美が中学に入学して一回目のテストがあった頃に入院した。

真美はこのことを学校にも告げずずっと普通に通学していたので、真美が一人きりで暮らしていることを誰も知らなかった。一学期の終わる頃、家庭訪問で真美の家を訪れた担任が、父親の不在を聞いただし、真美が一人暮らしをしていることを聞きだした。

担任は校長に報告し、児童相談所を通じて真美の処遇を模

索しているうちに、真美自身の精神の変調に所員が気付き、この丘の上の病院への措置入院となった。症状が落ち着いたところで、特別支援学校中等部への編入が認められた。

「真美さん最近の調子はいかが？」声をかけられて、真美の意識が緒方^{おがた}先生の横顔にもどった。緒方先生はアラフォーには見えない、小二と五歳の娘のシングルマザーで、とても美しい臨床心理士だ。そのていねいな物言いと、知的な風貌に真美はあこがれている。診察室の淡いピンクの壁に目を戻して「平気です。もう変な声も聞こえないし、廊下もまっすぐです」

緒方先生のふちなしめがねがきらりと輝いた気がした。「それではもう一度、お父様の帰りが遅い夜はどう過ごしていたのか？またお父様が入院されてからの一人きりの生活の様子をお話してください。」と聞かれても真美にはあまり話すこ

とが思い浮かばない。

「あまり寂しくは感じませんでした。ピアノと部屋いっぱいの写真があったから。真美、小さい頃すごくかわいかったんだよ。ママに抱っこされて、パパが横で笑っていて」

「学校のお友だちや、勉強の悩みなんかは、どうだったの？」
「あまり良く覚えていないんだけど、学校から帰って、自分の部屋に入ると、ぬいぐるみや消しゴムに話しかけるだけで、ほっとして、いやなことも忘れてしまうの、時間の経過も忘れて、いつの間にか朝が来ていたの」

「幸せな思い出とピアノのメロディーに満たされ、あなたのお部屋はお母さんの子宮の中みたいだったのね」

「そうかもしれない」

「あなたはとても大切に育てられたのね。だから一人でもやってこれたの。けどもう一人じゃないわ。幻聴や幻覚の症状も落ち着いてきたことだし、これから少しずつ現実を生きる方法を見つけていきましょう」

そう言うと、緒方先生は、飛び切りの笑顔を向けてくれた。病棟に帰るとソラちゃんが、談話室のソファでつまらなそうにテレビを見ていた。談話室はナース室と食堂の間に設けられた、二十畳くらいの部屋で半分には畳が敷かれ、本棚やテレビが置かれている。絨毯が敷かれたもう半分には、ソファやアップライトピアノが置かれていて、入院患者の交流や憩いの場になっている。

ソラちゃんはお父さんがオランダ人、おかあさんが日本人

のハーフで、飛び切りの美人だ。その上モデルのような長い手足をしている。まだ大学一年生だというのに、真美には大人の女性に見える。物事をすごくはっきり言うので、びつくりすることもあるのだが、人とうまく話せない真美にとっては憧れのお姉さんだ。

「おかえり。真美ちゃんピアノ聞かせて」

そう言って亜麻色の瞳を向けられると、真美はもう従うしかない。

「いいよ」そう言うと、アップライトピアノに向かって、今日の気分でゴダーイの「セイケイ人の悲しみ」を弾いてみた。

「それぞれ、夜を迎えるこの時間の寂しさにびつたりよ。真美の選曲はいつでも聞きたい気持ちで満足させてくれる。まさに天才的だ」

「この音階のずれたピアノでほめられても……」とうつぶやく。真美、音楽は再現芸術だけど、本質は心よ。あなたはまっとうな心の持ち主。だから音程の少しのずれなんて気にしないで、あなたのピアノが充分に私の心を癒してくれるの」そう言うとやさしくハグしてくれた。甘い柑橘系の香りが真美の鼻をくすぐって、真美は泣きそうになった。そういえばママもこんな香りがした。

夕食のとき婦長さんから新しい仲間の紹介があった。

「今日から皆さんと一緒にお食事をするようになりました、匂坂駿さんです。よろしくね」この病棟では症状の落ち着いた患者さんは食堂で食べることになっているのだが、そこに

居た二十名くらいの患者さんから、小さなざわめきが聞こえた。紹介された患者さんは一ヶ月ほど前に、刑場に曳かれるキリストのように肩をがっくりと落として、病棟にやって来た。それを目撃したソラちゃんや、何人かの患者さんの間で、その風貌が話題になっていたのだ。

「つてき(すてき)」中学校からの薬物依存で入院の奈津さんがつぶやいた。

「すっかり見違えたわ、ジャニーズじゃん」とソラさんが手をたたいた。

「じゃあ歓迎の一曲を真美さんおねがいね」婦長さんはいつも突然ふってくる。本当に困っているので「困ったなあ」つて顔で、続きの間の歓談室のピアノに座って「カントリートード」を歌う。

「すてきねえ」婦長さんはうっとり聞き入ってくれる。

「自分が聞きたいだけジャン」とエイトマンが茶々を入れて、主治医の稲川先生に生まれられている。

「匂坂駿です。ずっと長い間引きこもっていました。よろしくお願いします」

「ちんこグループ」とまたエイトマンがはやす。

「エイトマンはねえ、注目されたいの。だけど方法が間違っているから、そんなときには無視してね」と担当ナースの栗山さんから言われているので、食堂は無視の波に覆われた。いつもどおりエイトマンは歓談室のソファでシユンとうなだれる。なぜエイトマンっていうあだ名で呼ばれるのか、真

美は知らないのだけれど、どこか、にくめないエイトマンが真美は好きだ。

次の日学校から帰ってくると、談話室に人だかりがしている。

「ピアノ治療計画発進！」とエイトマンがはしゃいでいる。

ソラさんに聞くと、どうやら駿くんがピアノを修理することになったらしい。

「て言っても、ぼくはまったくの素人で、ピアノに触ったこともないんだよ。引きこもっている間ずっと音楽ばかり聴いていて、その流れで楽器に興味がわいて、ネットでピアノの仕組みや調律のことをかじっただけなんだ」

「それだけ知っていれば十分よ」とソラさんが無責任なことを言う。

「この病院にはねえ適任者がいるよ」と助け舟を出したのは大バーバだ。大バーバは大庭美智子さんと言うんだけど、この病院にヘルパーとして誰よりも長く働いているので、病院のことなら何でも知っている。

「高ちゃんって言ってね、もとは地元のピアノ工場で働いていた人がいるんだ」

「浜松にはむかし、小さなピアノ工場がいっぱいあったんだよ。だけど大きいところにはかなわなくて大方がつぶれちゃったんだ。高ちゃんはその腕のいい職工だったんだよ。今は管轄係で病院のあっちこちの修理に飛び回っているけどね」そう言うと、「よんでくるわ」と病棟を出て行った。

エイトマンがナース室からもらってきたA-3のコピー用紙にクレヨンで、あつと驚くほどにすばらしい「Piano治療計画」のポスターを書き上げたころ、大バーバと高ちゃん談話室に入ってきた。高さんは大バーバといくらも年の変わらない、職人風のかっこいいおじいさんだった。

「よろしくお願ひします」と駿くんが神妙な顔で頭を下げた。

「あいよ」と高さんは気軽にピアノのパネルを開けた。しばらく懐中電灯で様子を見ていた高さんの顔が曇った。

「こりゃあ、大修繕が必要だなあ」とつぶやくと腕を組んで天井を見上げた。

「たいしょう！ たいしょう！」とエイトマンがまとわりつく。

「なんだ、この小僧は」と高さんがにらむとエイトマンはシエンとなって、ソファアークにぐずれおちる。

「エイトマンのお父さんは宮大工でね、だから職人さんが大好きなのよ」と大バーバが助け舟を出してくれた。

「じゃあ明日、道具を持ってまたくらあ」と言って高さんはもどっていった。

翌日、朝早くから高さんは談話室のピアノにもぐりこんで修理に没頭していたらしい。真美が学校から帰ると、ピアノをぴかぴかに磨き上げた奈津さんが「えっへん」と得意そうにピアノに頬ずりしていた。

「ピアノの本体はなんとか無事に修理が終わったみたい。これから、駿くんといっしょに調律だって」とソラさんが教え

てくれた。駿くんといえばパソコンを前に、ピタゴラス率とかファイボッチ数列とかわけの分からないグラフに顔をしかめている。

「ピアノの構造の基本的な理論で、調律に必要ななんて」とソラさんもいつになく真剣な表情だ。

それから高さんは駿くん、レンチの使い方やハンマーフェルトへの針の刺し方など熱心に指導している。稲川ドクターはハンマーレンチやチューニングツールセットを駿くんのためにそろえてくれた。

「無理をしないで、一日二時間以内にしてくださいね」といつものこにこ笑顔で注意することも忘れなかった。

そんなある日「真美ちゃん手伝ってくれないか」駿くんが声をかけてきた。

「真美ちゃん絶対音感の持ち主だって？ 機械でも音程は測れるんだけど、やっぱり人の耳が一番だって、高さんが言うんだ」

「私、やったことないし……」とうつぶやく。

「真美ちゃんやってみれば、稲川先生の許可は私が取るから」とソラちゃんの声が後ろから聞こえてきた。

ソラさんは時々無責任なことがある。自分は「障がい者年金で、働かないで優雅に暮らす」と言って、後ろ向きな生き方を宣言しているくせに、人にはポジティブを求める。

そんなソラさんが、かつてに稲川先生と掛け合って、駿くんと同じく、放課後の二時間を「ピアノ治療」の時間として

認めさせたのは、三日後だった。

「真美さんちょうどいい機会かもしれません。あなたはこれまで大変な苦しみを、実体を伴わないバーチャルの世界で解決してきたのだけれど、ピアノという実態、駿君という生身の人間と向き合ってみてはいかがでしょう。みんなのために誰かと協力して、何かをやり遂げる。これからの生き方を方向づけてくれる取り組みになるかもしれません。ただし一日二時間という制限はつけさせていただきます」眉毛にも白髪の混じり始めた稲川先生がそう微笑みかけた。

これに一番喜んだのは、エイトマンだった。エイトマンはポスターを書き上げてから、どうもこの治療計画のリーダーだと思い込んでいる節があつて、何かにつけては談話室に入り込んで、駿くんに声をかけたり、高さんににらまれたりしている。そういえば人を試すようなエッチな言葉も修まつている。

「これで、計画は完璧だ。駿くん、真美さんがんばってください」と変に大人びた口調で言い、ソラさんの失笑をかった。

ピアノの調律はなかなか大変で、音程はハンマーレンチでおおよその加減が分かるのだが、音色を左右するハンマーフェルトの調整が大変で、真美には一針ごとに変わる音色を言葉にして駿くん伝えることが難しかった。

「朝もやの中をさつと風が通り抜ける音」

と真美が伝えると駿くんは首をかしげて針を刺す。何回も試しては「それ」と真美の了解が出るまで駿くんは粘り強く針

を打ち続けた。そんな二人を高さんは黙ってみている。

「セオリーを破った調律の仕方だが、案外いい音色のピアノに仕上がるかもしれない」

と高さんは隣の大バーバにささやいた。

梅雨明け間近に始まった作業は、夏休みに入っても続いていた。

「真美は外泊しないの？」ソラさんが聞いてきた。

「真美、帰る所ないんだもん。たった一人の身内のパパは入院中だし、ママの行方は分からないし…ソラさんは？」

「わたしはね、母とうまくいってないの。子どものころね、母がどっちにするのって聞くから、こっちつて応えるでしょ。するとそうかなあつてまた聞いてくるの、じゃあこっちつて応えると、母はとっても満足そうなの。だからしだいに自分で選択するというより、母ならどうするかって考えるようになってしまったの。中学のときに試されている。操作されている。つて気がついて、それからは母のことが嫌でいやでたまらなくなつてしまったの。母は思い通りにならなくなつた私を、今度は黙殺するようになったわ。こんな家早く出たいと思つてた矢先に統合失調症を発症して、パパの友だち、稲川先生のいるこの病院に入院できたの」

「だからね、外泊は母も私も望んではいないの」

「ソラさんも大変だったんですね」

冷房の効いている病棟なのに、真美、駿くんの汗まみれの

ピアノ治療は駿くんの外泊まで続いた。ほとんど人のいなくなつた病棟は寂しい。数人の患者が影のように夕食を食べている食堂に真美のピアノが静かに流れている。

治療の終わった三分の二ほどの鍵盤を使った、シヨパンのバラード一番だ。なぜかけだるく、暮れかかった夏のしじまを揺らしている。曲の余韻をさえぎるようにピアノの音が断ち切られた。

目の前にソラさんの真剣な顔がある。「真美ちゃん落ち着いて聞いて、悲しい知らせなの」ソラさんの美しい瞳がぬれている。

「奈津ちゃんが亡くなつたの。家からコンビニに向かう途中で、電車にはねられたんだって」真美の胸がトクンと音を立てた。ソラさんの美しい瞳から、涙がこぼれ落ちる。

「うそだ、うそだソラちゃんさらい」真美の横でピアノに聞いていたエイトマンが、そう叫ぶと病室に駆け込んだ。

エイトマンの病室から物が壊れる音がして、ナースがあわてて病室に向かった。それからエイトマンは二週間病室にこもつた。大バーバやナースがこまめに病室を訪問してエイトマンは手厚い看護を受けている様子だった。

心配して様子をたずねると大バーバは「エイトマンはねえ、本当に優しい子なんだ、奈津ちゃんの痛みを、自分のこととして感じてしまつたんだ。だからさ、愛されないウサギは死んじゃうんだって昨日までいい続けていたんだ。一度も病棟を訪れたことのない親は奈津を見捨てていたのかねえ。

そんな奈津の見捨てられ感を一番に心の痛みとして感じていたのが、エイトマンでことなのかねえ」大ばあばが、目をしばたかせた。

病棟にはしばらく重い空気が沈殿した。誰も奈津ちゃんのことは触れようとしなかった。そんな中、談話室では真美と駿くんの二人だけの作業が続いていた。真美の伝える感覚は次第に駿くんにも、たやすく届くようになり、作業は順調に進んだ。

そして夏休みも終わりに近づいたころ、真美のソナチネの一曲を聞いていた高さんが「いやあ、まいった！ 音程は完璧、いい音色に仕上がっている。二人ともごころうさん」とピアノの完治に太鼓判を押してくれた。

その日、夕食の後婦長さんがみんなを食堂に集めた。「みなさん今日ピアノが治りました。この夏、悲しい出来事もありませんが、このピアノが治つて談話室がいつそう楽しい場所になることは、病棟にとつてとても嬉しいことです。今日はこの夏の区切りとして悲しいことにピリオドを打ち、前に歩き出す出発の日にしたいと思います。それでは真美さんよろしくお願ひします」

思いもかけない婦長さんの挨拶に、集まつた患者の間からざわめきがおきた。エイトマンはまだ青白い顔で、緒方先生と一緒にテーブルに座つてぼかんとしている。ソラちゃんは「すてき」とさげんで一番前の席に陣取つた。

「そこは高さんの席よ」とやさしく婦長さんがたしなめた。

「わるいなあ」と高さんがソラさんの隣に座る。

婦長さんとの打ち合わせどおり、駿くんが進み出て、ピロイドのピアノカバーをゆつくりと取りはずした。歓談室のドアが静かに開き、婦長さんの娘さんのドレスを着た真美がごちない足取りでピアノの前に座った。

「それでは最初に奈津さんにささげる、モーツアルトのレクイエム二短調を聴いてください」と駿くんが告げた。

真美は一つ大きく息を吸うと、丁寧に静かに心を込めて鍵盤に指を置いた。ピアノから流れ出したメロディーは優しく病棟を包んでいった。エイトマンが緒方先生の白衣に顔をうずめている。緒方先生はやさしくエイトマンの背中をなでている。

ソラさんが美しい瞳からぼろぼろと惜しみなく涙をこぼしている。病棟中が静かな悲しみのなかで、その向うにきざしたかすかな明かりを感じていた。

真美の指先が静かに鍵盤から離れた。

「みなさん、人が亡くなるとどこに行くのか私は知りません。ただそれっきりということではないと私は思っています。奈津さんとハグしたときの暖かさ。庭のハンノキの芽吹きにまつげを震わせていた姿を思い出します。愛すること愛されることの大切さ。そういったことを私は奈津さんに気付かされたと思うのです。そして私の意識を高めてくれました。私の意識は次の世代、周りの仲間へと繋がっていきます。だから奈津さんは無くなりほしくないのです。だから悲しみは

今日で終わりにします」婦長さんが一言ひとこと丁寧に話しかけた。

エイトマンが鼻水をたらしながら笑っている。「じゃあ真美ちゃん元氣の出る曲をたのむわ」と言ってしゃくりを一つした。

「それじゃカントリー・ロード」とソラさんが立ち上がった。予想外の展開に、駿くんは困った顔つきなのだが、おかまなしにソラさんは真美の横に立った。ピアノの伴奏が始まった。真美の肩に手を乗せたソラさんとの合唱がはじまる。

カントリー・ロード

この道 ずっと行けば

あの街に つづいてる

気がする カントリー・ロード

ひとりぼっち おそれずに

生きようと 夢見てた

さみしさを 押し込めて

強い自分を 守っていろいろ

カントリー・ロード

この道 ずっとゆけば

あの街に つづいてる

気がする カントリー・ロード

歩きつかれて たたずむと

浮かんでくる 故郷の町

丘をまく 坂の道

そんな僕を 叱っている

カントリー・ロード

この道 ずっとゆけば

あの街に つづいている

気がする カントリー・ロード

どんな挫けそうな時だつて

けして 涙は見せないで

心なしか 歩調が早くなつてゆく

思い出 消すため

カントリー・ロード

この道 故郷へ つづいても

僕は 行かないさ

行けない カントリー・ロード

カントリー・ロード

明日は いつもの僕さ

帰りたい 帰れない

さよなら カントリー・ロード

いつしか合唱は大きな輪になって、病棟を優しく包み込んだ。食堂に出られない患者さんの部屋からも口ずさむ声が漏れてきた。

「いつか、この病棟が皆さんのカントリーになってくれたらとても嬉しいわ」婦長さんが笑っている。稲川先生は駿くんの手を握って泣いている。

青空にはけで掃いたような雲が広がっている。ソラさんはあっけらかんと病棟を去った。

「わたしやっぱり自分の力でゆっくりと、歩いていくことに決めたの。奈津や駿くん、真美ちゃんを見ていると、自分が恥ずかしいわ」そう言いのこして病棟を去ったソラさんから、大学のチャペルで笑う自撮り写真が届いたのは一昨日だった。

「真美さん調子はいかがですか？」ドクターの丸い顔が優しく聞いてきた。

「調子いいです。来年は定時制高校へ進学できたらいいなあつて、児童相談所の木村さんにお願ひしました」

「グループホームのほうも来年四月からの受け入れの承諾をもらいましたよ」稲川先生の目が優しい。

「真美さんを御覧なさい。カラタチのとげの間にさなぎが

ぶらさがっているでしょう。あれはね、アゲハチョウのさなぎなんだよ、ああやっつとげや衣に守られて、きびしい冬を越し、春になったら羽化して、命を次の世代につなげて行くんだ。幼虫はその日に向けて今、準備の真っ最中だ」

「先生、わたしね、幼稚園の先生になろうと思うの。ここで学んだこと、人とのつながり、大好きな子どもの教育に、絶対生かせると思うんだ」
「それはすてきな考えです。真美さんはきつとりつばな先生になれます」

丘の上の空は明るい。

(東区)

「入選」

いたずら子ガラスたちのぼうけん

宮島ひでこ

浜名湖という湖の近くの森で、子ガラスのカンタとガーコは、それぞれの家族といっしょにくらしています。

カンタは、いたずらが大好きで、父さんにおこられてばかりいます。妹の食べものをかくしたり、口でつついて、いじわるをしたりして、家族みんながこまっています。

ある日のことでした。

カンタは、小さいころ父さんと、いったことのある浜松の町の方へ、なかよしのガーコといっしょに、浜松駅の方へ旅をしたいと父さんと母さんに話しました。

父さんは、

「いっておいで。きつと、心がひろくなりやさしいお兄ちゃんになってくるよ」

母さんも、

「いろんなことであうと、みんなの気持ちがわかるようになるって、おばあちゃんからのおしえよ。いってらっしゃい。くらくなってきたら、どこかの木に止まって、ひとばんすご

すこと、いいわね」

ガーコの両親も、カンタから話をきいて旅にでることを、さんせいしてくれました。

出発の朝です。

まだ、あたりはうすぐらく、ひんやりしています。そして、東の空の白い雲がやさしい青、黄色と、だんだん明るくなってきました。

父さんは、カンタにむかって話します。

「カンタ、いいかね、人間がこわがることをしたり、いたずらしてはいけないよ」

母さんも、父さんにつづいて話します。

「大きな鳥、犬やねこ、車にも気をつけるんだよ。小さな小鳥にはやさしくしてね」

カンタとガーコは、朝ごはんの木の实をたくさん食べたあと、それぞれの家族に見送られて出発です。

「いってきます」

カンタとガーコは、東名高速道路につづく広い道にそって、とんでいきました。ときどき、電柱に止まり、姫街道という道に入り、そのまま、スイスイ、パサパサとすすみます。

町の中に入ると、高いビルが見えてきました。コンコルドとよばれるホテル、浜松城、そしてこんもりとしげった森。

カンタとガーコは、お城の公園の森に、水のみ場を見つけました。

「カンタ、ここの水おいしいね」

「うん、ほんとに、おいしいね。もう少し行くと浜松駅だからね。羽根をやすめてから出発しよう」

公園の水のみ場でひと休みしてから、しばらくして、カンタとガーコは、駅までつづく道にそって、スイスイ、パサパサと、とびはじめました。

にぎやかな街並にでました。人どおりが多いので、びっくりしたガーコは、街路樹に止まり、カンタに声をかけました。

「人間って、こんなにいっぱいいるんだね。みんな、何してるの？ あっちへ行ったり、こっちへきたり。おもしろいね」

「ほら、みてごらん。あれは、レストランっていうんだ。みんな、お店でごはんを食べたりするところ、パンのお店もあるみたい。いいにおいがするだろう」

カンタは、父さんに教えてもらったことをガーコにせつめいしました。

「さあ、ガーコ、駅は、あのアクトタワーという大きなたてものの方だよ」

「うん、いこう、カンタ」

すつと、とびたつたカンタとガーコは、しばらくとんでいて、デパートの前のプラタナスの木の上に止まりました。遠くに見えるガード下に、カラスのなかまたちが、とんだり、はねたりしています。

「いつてみようか、あのなかまたちのところへ」

「でも、わたし、あのアクトタワーのてっぺんへいきたい。おにいちゃんが、すてきなところだよと話していたから」

カンタは、ガード下にいるカラスたちのそばへ行くのをあきらめて、アクトタワーへガーコといくことにしました。

ヒュー、パサパサ。ヒュー、パサパサ。からだをくねらせながら、ガーコが先にとんでいき、そのうしろからカンタがつぎきます。ガーコは、アクトタワーのてっぺんに止まりました。

「みてごらん、カンタ。むこう、海がきらきら光ってるよ。あの海が太平洋、あそこは遠州灘というんだって、母さんが教えてくれたの」

「ほんとにきらきらしてるね」

遠くの水平線のむこうには、白い帽子をかぶった富士山が、小さくみえます。

水平線のそばに、アリのように小さな船がたくさんかんでいます。

カンタとガーコは、しばらく、きらきら光っている海をじーっとながめていました。

東の空にあつたおひさまは、いつのまにか、頭の上の方から照らしています。

カンタとガーコは、ま下にひろがる浜松の町をゆっくりながめたあと、アクトタワーの下の方をじっくりみました。おもちゃのような小さな車がつらなるように、スーツと走っていきます。ごまつぶのような人のすがたもみえます。

少し風がでてきました。空の方を見ると、ぽっかりとすきとおったような白いお月さ

まが、南の方にうかんでいます。

「カンタ、ほら、あっちの方をみて、白いお月さま…。おせんべいみたい」

「ほんとだ、白くて、うすいおせんべい」

カンタとガーコは、急におなががすいてきました。

「さあ、ガーコ、行こうか。おなかすいた」

「うん、わたしもおなかすいた。どこへいくの？」

カンタは、父さんといったことのあるレストランの残飯のおき場をおもいだしました。

「父さんが、教えてくれたお店なんだよ。いこう、ぼくが先におりにいくよ」

「うん、カンタ、先にいって。ついていくから」

カンタは、羽根をひろげると、ぐらりと、ぐらりと、ゆっくり舞いおりていきました。

ガーコも、カンタのまねをしながら、あとへつづきます。

アクトタワーの一階までおりると、街路樹のあいだから、赤い屋根のレストランがみえます。そして、入り口からはなれたところに食べ残しのある青いふたつきのバケツがあります。

「だいじょうぶ？ カンタ」

「少し、のこりものをいただくだけだよ。ぼく、パンをひろつてくる。バケツのまわりにおちてるのをね」

「うん、わかった。わたし、この木の上でまつてるね」

カンタは、キヨロ、キヨロしながら、ピョンピョンと、バ

ケツのそばへちかづきました。すると、バケツのふたが少しあいていて、パンのミミがいっぱい入っています。今にもこぼれおちそうです。

カンタは、急いでそのパンの耳を口にくわえると、木の上にいるガーコのところへ運びました。バケツの下の方には、ミカンも、ゆでタマゴもおちています。カンタは、何回もガーコのもとへ運び、いっしょにパクパクたべました。

「お水をのみたいな、カンタ」

「さあ、いこう。水をのめるところに。まえに父さんからきいて、ぼくしってるよ」

カンタとガーコは、レストランの近くにある小川の岸べに、ならんで水をごくごくのむと、街路樹の上で、しばらく体をやすめました。

「ねむたくなつたね、カンタ」

「うん、でも、これから、ぼくたち五社神社という神社へ行って、そこでおまいりしたい。」

「おまいりって、なあに？」

「人間が、神さまに、じぶんも、みんなも、いつも元気でしあわせにくらせるようにって、おねがいするんだって。その場所が神社というんだって。ぼくも、一度、神社でおまいりしてみたいと、ずーっと思ってたんだ。ガーコも、いっしょにいつてくれる？」

「いいよ、人間って、やさしいんだね。わたし、おうちのちかくの畑で、仕事をしているおじいちゃんに、いつもおせん

べいやおまめをもらったり、お話ししたりするんだよ」

「よかった。ガーコといっしょに旅にでてよかった。神社では、人間がやつてることをまねしてみろんだよ」

「うん、わたしも、まねするよ。でも、できるかな？」

「できるよ。ピョン、ピョンと、とばないで、ゆつくり、一歩、一歩足をおくようにあるくんだ。おまいりするときは、羽根をこうやってあわせて、おじぎをするんだよ、わかった？」

「うん、カンタのうしろからついていく」

「ぼくのまねをしてね。いいかい」

「うん、わたし、がんばる」

カンタとガーコは、よりそいながら五社神社へ向かって、スイスイパサパサ、スイスイパサパサと、とんでいきました。

またたくまに、五社神社の赤い門をくぐりぬけ駐車場に舞いおりました。

駐車場には、二台の車が止まっていて、着いたばかりの車から、両親と五才ぐらいの女の子がおりてきました。神社におまいりにやってきた家族です。

カンタとガーコは、その親子のあとからついていくことにしました。

カンタは、親子づれから三メートルほどはなれて、ガーコとならんで歩きます。

「ガーコ、両方の羽根をうしろへまわして、いいかい…。右足、左足をかたほうずつ前に出してごらん。ここは少しのほ

り坂になってるから、前の方に体をすこしたおしてね。はい、いちにい、いちにい…」

ガーコはひつしに歩きます。カンタは、ガーコにあわせてゆつくりすすみます。前の方を歩いてきた女の子と両親は、手をあらう所で、ひしゃくで水をくみ、両手をあらっています。

「わたしたちどうするの、カンタ」

ガーコはカンタにそつとききました。

「羽根の先をこぼれおちている水にちよつとつけて、たまつてる水のところは両方の足を入れてね、ぴよんとあがるんだよ」

女の子は、ときどき、カンタとガーコの方をふりむいていきます。そして、両親といっしょに神社へつづく階段をのぼっていききました。女の子たちが歩いてのぼっていった階段のぼつだん目に、カンタとガーコは立ちました。そして、右足をひよいとあげて、階段をのぼろうとしましたが、足がとどきません。左足もためしましたがとどきません。

そこでガーコは、階段からはなれて、走ってはずみをつけて階段に片足をのびしました。足が階段にぶつかったそのときです。バランスをくずしたガーコは、後ろの方へころんでしまいました。

「ああっ、いたいよー、カンタ」

ガーコは、頭と羽根をいたがります。

「だいじょうぶ？ ガーコ」

カンタは、あたりをキョロ、キョロみまわしました。そして、そーつと、ガーコを口ばしでおこしてやったカンタは、階段をのぼるのをやめて、神社へつづくべつの道をさがしました。

「ガーコ、まだ痛い？」

口に水をふくんできたカンタは、口の中の水を、ガーコのいたがるところに、ぷーつと、かけてあげました。

カンタは、父さんから水で冷やすことを教わっていたからです。

カンタは、口に水をふくんで何回も、ガーコの足と頭と羽根をひやしてあげました。

あたりは、だんだん夕焼け色に染まりはじめています。

しばらくして、ガーコは、もとどおりに元気にあるけりようになりました。

カンタとガーコは、ゆつくり神社におまいりにむかいます。

おまいりするところには、人間がたくさんいます。

「ぼくたち、もう少し人間がいなくなつてから、おまいりしよう」

カンタは、ガーコと、おみくじ箱のそばでじーつとしていました。

どのくらいたつたでしょうか。

おまいりにきた人たちがかえつていって、あの女の子と両親だけとなりました。

カンタとガーコは、女の子たちのうしろに仲よくならび、

お祈りしました。

「みんなが、いつまでも、しあわせでありますように、ガーコの足がよくなりますように」

二回あたまをさげておまいりして、それから二回手をたたき、そしてさいごにもういちど、あたまをさげます。さつき人間たちがやっていたのをまねしています。これを二礼二拍手一礼というのだと、母さんがいつていたことを、おもいだしました。カンタは、上手に人間のようにおまいりできました。

ガーコもおじぎしたあと羽根をあわせ、ポンポンとたたき、そしておじぎをしています。

近くでみていた女の子とお父さん、お母さんは、カンタとガーコの方をみて話しています。

「あらー、このカラスさんたち人間みたいね。神さまにおまいりする二礼二拍手一礼をするなんて」

「ほんとだ、えらいなあ、このカラスたち」
と、女の子のお父さんは、かんしんしたように、カンタたちをながめます。

カンタとガーコは、その言葉をきいた時、うれしくて思わずとびあがり二羽ならんで、女の子たちの方へむかっておじぎをしました。女の子は、カンタとガーコに、にっこりわらいました。

だんだん空は夕焼け色から暗くなりはじめました。
カンタは、ガーコに言いました。

「ガーコ、今夜は、この神社のあの木の上でゆっくりねむろう。夜があげてきたら、お家へかえろうね」

「うん、きょうは、たのしかったね」

「足や首や羽根はいたくない？ ガーコ」

「もう、大じょうぶよ。とつてもいい気もち。神さまがまもつて下さつてみたいだね、カンタ」

「明日も、お天気になるといいね。帰りにトマト畑によつて、トマト、ふたついただこうか。ガーコ」

「父さんや、母さんがいたずらしてはいけないよつていつてたよ。カンタ」

「いたずらじゃないよ。ふたついただいただけだから……」

カンタとガーコは、ピョンピョンと駐車場の方へむかい、木の上にさーつとのぼつていきました。

外は、お月さまの光で、ほんのりあかるくみえます。その光につつまれるように、カンタとガーコは、楽しかった一日のことをおもいだしながら、なかよくからだをよせあつてねむります。

(中区)

「入選」

おばあちゃん ほのかです。

河島憲代

ほのかが幼稚園ようちえんからかえつてくると、バイクの音おとがしました。

「あつ、あれは、ゆうびんやさんのバイクだ」

ほのかがおもつたとおり。赤いあかバイクがはしつてきて、

ドコドコドコツ ガチャリ

と、ほのかのまえでとまります。

「やあ、こんにちは。ほのかちゃんにてがみだよ」

ゆうびんやさんのおじさんが、赤いあかバイクのにだいのほのかから、ちよつと大きな茶色ちやいろのふうとうをだして、ほのかにわたしました。

「わたしに？ だれから？」

ほのかは、くびをチョコンとかたむけます。

「ママにきいてみるといいよ」

「うん。ゆうびんやさん、てがみをとどけてくれてありがとう。ごくろうさまです」

ママが、いつもそういうように、ほのかもいつてみました。

ゆうびんやさんは、にっこりわらつて、また赤いあかバイクを

ドドドコと、はしらせていってしまいました。

「わたしにだつて、このてがみ。だあれから、だあれから？」
庭をふく風は、ちよつぱりあたたかです。

ほのかは、てがみをしつかりかかえて、スキップしてうちにはいりました。

それは、海のみえるとおくのまちに、おじいちゃんと、ふたりですんでいるおばあちゃんからのがみでした。

二月六日は、ほのかのたんじょう日。

おばあちゃんが、その日にまにあうように、ほのかへのプレゼントを、おくってくれたのでした。

とどいた大きい茶色のふうとうの中には、ほのかのすきなイヌのキャラクターのえがついた、びんせんと、ふうとうのてがみセット。ちゃんと、きつてのシートもはいつていました。

「ほのか、おたんじょう日おめでとー！ じいちゃんも、ばあちゃんも、ダンもげんきだよ。おたよりまつてまーす」と、おばあちゃんからのメッセージでした。

ダンは、おばあちゃんがかわいがつている白いイヌです。

おばあちゃんちには、ほのかが幼稚園にはいったところ、パパのうんでんするくるまで、ママと、三人でいったことがありません。

あさ、すぐくはやくうちをしゅっぱつして、とちゅうでお

ひるごはんをたべて、おばあちゃんちについたのは、もう、ゆうがたでした。

だから、なかなか、おばあちゃんにあえません。

ほのかは、さつそく、おばあちゃんにてがみをかきます。

こどもべやに、水色のまるいテーブルをだして、おしゅうじの先生にいつもいわれているように、きちんとすわります。

それから、やつぱり、おしゅうじの先生がいうように、字は、ゆつくり、ていねいにかいていきます。

てがみをかきながら、ときどき、本はこの上にかざつてあるしゃしんをみあげます。

おばあちゃんちへいったときのしゃしんです。ザブン、ザブンって、なんだか、青い海のなみのおとがきこえてくるみたい。

おばあちゃん、ほのかです。

幼稚園のまめまきね、はじめ、すぐくわかった。

だつて、幼稚園に、しましまパンツの赤おにと、青おにが、「ガオーツ。ガオガオ、ガオーツ」

つて、あしをふみならしてきたの。

だから、ひなのちゃんと、えんちよう先生にだきついてしまった。

ひなのちゃん、ねんちようぐみのなかよしさんです。「みなさん、まめをまして、おにをたいじしましょう」

えんちよう先生がそういったから、ほのかは、ゆうきをだ

して、ひなのちゃんと、まめを、おにたちにむかつてなげました。

「ウォーッ。まいった」

「まいった、まいった」

おにたちが、あたまをかかえてにげていったから、ほんとはよかったです。

「やったあ！」

って、みんなでジャンプしちゃった。

ところで、おばあちゃんは、まめをいくつたべましたか？

ほのかは、六さいなので、六つだよ。

四月、庭にチューリップの花がきれいにさいたころ、ほのかは、二かいめのがみを、おばあちゃんにかきます。

おばあちゃん、ほのかです。

ほのかは、小学校一年生になりました。

ひなのちゃんと、おんなじくみさん。

うけもちの先生は、いまだのりえ先生。

すごくびじんだよ。

おじいちゃんに、おねがいがあります。

「おい、ようちえんこ」

って、もういわないように、です。

このまえ、学校で、アサガオのタネを、うえきばちにまき

ました。まい日、お水をあげているけど、まだ、めがでません。

うちで、カボチャがめをだしたって、ママがいました。

「カボチャのタネを、花だんにまいたなんて、おもいだせないんだけど……」

ママがそういつたら、パパが、

「ママ、花だんにやさいくずをうめたんだろう。そのとき、きつと、カボチャのタネもいっしょだったんだよ」

と、わらっていました。

そしたらね、ママが、

「もしかして、おばあちゃんがおくってくれたクリカボチャのタネかしら、くふっ」

だって。

ママ、うれしそうでした。おばあちゃん、げんきでね。

六月。きゆうに、まい日あつくなくなってきたころ、ほのかの

うちで、ちよつとしたじけんがあつたので、そのことを、お

ばあちゃんに知らせたくなりました。

三かいめのがみをかきます。

おばあちゃん、ほのかです。

日よう日のあさね、せんたくものをほそうと、ママが庭のものほしほにきました。

すると、せんたくものをいれたカゴをもったまま、

「たいへん！ ものほしはが、せんりようされたあ」
 って、二かいのベランダへ、バタバタあがつていったんだよ。

だから、せんたくものを、二かいのベランダにほすんだなと、ほのかは、すぐわかりました。

「庭にわのものほしはが、せんりようされたあ？ ほんにんは、なにものだ！」

コーヒーのみながら、しんぶんをよんでいたパパが、ぱつとたちあがりました。

ほのかは、どきつとなつて、いそいでおそうじモップをもつてきて、パパにわたします。

「パパ、やつつけて！ ものほしはをせんりようしているのは、きつと、ママがきらいなものだよ」

「おーっ！ へビか？ ケムシか？」

パパは、おそうじモップをもつて、ランニングシャツと、パンツのかっこうのまま、庭にわにいこうとしました。

そこへ、ママが二かいからおりてきて、

「あらら、パパ、どうしたの？」
 「だつて、ママ。せんりようされたんでしょ、ものほしは。へビ？ ケムシ？ パパがやつつけてくれるんだよ」

ほのかがいうと、
 「えええ——っ！ いてみればわかるわ」

ママは、なぜか、にこにこがお。

おばあちゃん、もんだいです。

『ほんにんは、だれだ？』

ふとこのやちぢみぎよのらかやみ花、おびそ
 ぞたこ

ほのかは、パパとものほしはへいつてみました。

「わっ、大きいはっぱ！」

「ほのかのおおが、かくれそうだな」

「パパ、ここに花がさいている」

ほのかは、小さなラツバみたいな黄色きいろの花をみつけます。

「こっちにも花がさいているぞ」

と、パパ。

「おいしい、おいしいカボチャがなあれ」

なんて、ママは、うたつてます。

ほのかは、ものほしはで、カボチャのつるをみているみんなのえをかきました。

それを、おばあちゃんにてがみといっしょにおくりました。それががみのさいごには、

「おばあちゃん、なつやすみには、あそびにいきます。ほのか」

と、かいてあります。

七月しちがつ。もうすぐ、なつやすみ。

そこで、ほのかは、おばあちゃんに、またてがみをかきま

す。

おばあちゃん、ほのかです。
二十五日にじゅうごにちから、なつやすみだよ。

そうしたら、おばあちゃんと、おじいちゃん、イヌのダン
にあいにいくね。

三つは、おとまりしたいから、いま、パパと、ママにいつ
しようけんめいおねがいをしているところです。

だって、海うみでいっぱいおよぐのだから。わたし、学校のプ
ールで五メートルおよげたよ。

それから、ダンとおさんぽもしたいし。おじいちゃんがそ
だてているクリカボチャのはたけのおてつだいも。

おじいちゃんのクリカボチャは、すごくおいしいから、お
くつてもらうと、ママは、

「さあ、ごちゆうもんは？ パンプキンパイですか？ カボ
チャのスープは、いかが？ それとも、てんぷら？」

といって、はりきります。

ほのかは、どのメニューもすきだけど、だあいすきは、お
ばあちゃんがつくってくれるクリカボチャのものだよ。ほ
くほくしてて、あまくて「おいしい！」っていつちやう。

こんども、ぜったいにつくってね。おばあちゃん。

そこまでかいて、ほのかは、本ほんはこの上うへのしゃしんを、じ
つとみつめます。

なんと、しゃしんなかの中のダンが、ほのかにむかつて、しつ

ぽをふり、パチンとウインクしたのです。

「…ダン」

ちいさくよんでみました。

そのとたん、きゆうに、へやの中なかが、まぶしいお日ひさまの
光ひかりで、キラキラしました。

いつのまにか、ほのかは、いちめんのカボチャばたけにた
つています。

ワン ワン

ダンが、いきおいよくはしつてきました。

「ほのちゃん、あつちにすごく大きなカボチャがなっている
んだぞ」

「どこっ？ どこなの？」

ダンについていくと、そこには、みごとなカボチャが。

「うわっ！ デカカボチャ！」

ほのかが、りょうでかかえても、びくともしません。

「ほのちゃん、目めをつむって、馬車ばしやになあれって、そのカボ
チャにおまじないをかけてごらんよ」

「うん。やってみる」

ほのかは、わくわくして目めをとじます。

「カボチャ：馬車ばしやになーれ！」

(もしかして、ダンだんは、馬うまさんになっているかも…)

そっと、そっと、目めをあけました。「なあんだ、デカカボ
チャのまんまじゃん。ダンたらっ」

ほのかは、ダンをだきました。

「あれっ？　なんで、わたし、ダンとはなせるの？　ふしぎっ？」

「そうだよ。ふしぎなことって、いっぱいあるんだ。はやくとまりにおいでよね」

ダンが、ほのかのほつぺたを、ペロンとなめてきました。そのとき。

「ほのか、てがみかけたの？」

ママのこえがしました。

「かけたあ！」

ほのかは、てがみをたたんで、ふうとうにいれます。それをもって、ママのところへいききました。

「なにかいいことあったの？　そんなににこにこして？」

ほのかは、ダンがペロンとなめてくれた右のほつぺたを、そっとおさえて、

「うふっ、とつても」と、うなずきました。

ものほしげにしげっているカボチャのはつぱのあいだから、カボチャの花が、あっちこちでゆれています。

(東区)

「入選」

絵葉書の魔法

生崎美雪

五月の最初の日曜日のことでした。五年生のゆりは、うべ、お母さんに、

「お部屋、散らかしたままでしょ。お掃除しなさいよ。」

と、言われたことを思い出しました。それで、朝ごはんを食べ終わるとすぐに、お部屋のお掃除をすることにしました。

床の上に散らかったお人形やぬいぐるみを、大きな木のおもちゃ箱へ。

机の上の鉛筆と消しゴムは、筆入れ箱に。

ノートや教科書は、ひきだしに。

それから、絵本や童話の本を、本棚にしまいました。

その時、本棚から、絵葉書が一枚、ひらりと床の上に落ちました。

「あら。」

ゆりは、その絵葉書を拾って、見てみました。

「外国の写真…。」

ゆりは、絵葉書を裏返しました。

「これ、昔、おじいちゃんから、おばあちゃんへ送った手紙

だわ。でも、どうしてこんなところに、はいつていたのかしら……」

ゆりのおじいちゃんとおばあちゃんは、田舎の家で暮らしています。ゆりは、毎年夏休みに、お父さんの車で、お母さんと一緒に、おじいちゃんとおばあちゃんの家に遊びに行きます。田舎の家のまわりには、田んぼや畑が広がっていて、色とりどりのきれいな花が咲いています。青空に白い雲がほつかり浮かんでいて、緑の山も見えます。都会の街とちがって、その風景が、ゆりはとても好きです。

おじいちゃんとおばあちゃんは、ゆりが行くと、

「よく来たね。待ってたよ。」

と、いつもうれしそうにむかえてくれます。

ゆりは、おじいちゃんとおばあちゃんの、にっこり笑った顔を思い浮かべました。

それから、本棚から出てきた絵葉書を、もう一度よく見てみました。絵葉書には、こんなことが書いてありました。

「私は今、フランスのパリの街にいます。パリの街には、エッフェル塔や石畳の道、古い家や教会が建ち並んでいます。パリの人たちは、何百年もの歴史を大切にしています。」

ゆりは、エッフェル塔の絵葉書を、机の上に飾りました。それから、洋服だんすから、お気に入りの白いベレー帽を出しました。

いつか絵本で、フランスの女の子が、こんなベレー帽をかぶっているのを見て、ゆりは、お母さんにねだって、お誕生

日に買ってもらったのです。ゆりは、鏡の前に立って、ベレー帽をかぶった、自分の姿を見つめました。

鏡には、窓の外の青空と白い雲、おひさまの光が映っています。鏡の中のベレー帽をかぶった姿を見つめて、ゆりは、なんだか楽しい気持ちになりました。

「私、パリに行ってみたいわ。エッフェル塔や、石畳の道、古い家や教会を見てみたい。このベレー帽をかぶって、パリの街をお散歩したら、きっと素敵でしょうね。」

ゆりは、そっと目をつむりました。

「ワンワン。」

ミニチュアダックスのクッキーが、ゆりのそばに来て鳴きました。

「クッキーも行きたい？パリの街を、一緒にお散歩しましょう。」

クッキーは、お散歩と聞いて、うれしくなったのか、薄茶色のしつぽを、プルプルとふりました。

「そうだ。おじいちゃんとおばあちゃんにお手紙を書きましよう。」

ゆりは、引き出しから、絵葉書のファイルケースを出しました。ファイルケースには、お父さんとお母さんと旅行に行ったときに、お店で買った絵葉書や、美術館で買った絵画のポストカードが、大切にしまっておりあります。

「どれにしようかしら……」

ゆりは、ファイルをめくっていききました。

「フィンセント・ファン・ゴッホの絵葉書。これにしましう。」

おじいちゃんとおばあちゃんの家の庭には、夏休みにゆりが遊びに行くと、ゴッホの描いたひまわりのような、黄色のひまわりの花がいっぱい咲いています。

ゆりは、いつも楽しみにしているのです。

ゆりは、ボールペンを持って、ちよっと考えてから、こんな風に書きました。

「おじいちゃん、おばあちゃん、お元氣ですか？ゆりは、元氣です。小学校5年生になってから、勉強が難しくなつたけれど、新しいお友達も出来て、学校へ行くのが楽しいです。今日、おじいちゃんの絵葉書が、私の部屋の本棚から出てきました。おじいちゃんが若い頃、フランスのパリから、おばあちゃんへ書いた手紙だよ。エッフェル塔と青空のパリの景色、とても素敵です。私も、いつかパリへ行ってみたくないかと思いましたが、でも、どうして私の部屋の本棚にこの絵葉書がはいっていたのかしら。今度また夏休みに遊びに行った時に、パリのお話、聞かせて下さい。また、夏休みに会えるのを楽しみにしています。絵葉書の秘密も教えてね。ゆりより。」

ゆりは、ゴッホのひまわりの絵葉書を、おじいちゃんのパリの絵葉書の横に並べて飾りました。

「早く、夏休みにならないかしら。ひまわりの花も見たいし、おじいちゃんとおばあちゃんに会いたいわ。フランスのパリのお話も聞きたいな。」

「ワンワン。」

クッキーが、ゆりの顔をじっと見つめて鳴きました。

「クッキーも一緒に行こうね。」

ゆりがそう言うと、クッキーは、大きな黒い目をぱちくりさせて、また、うれしそうに、

「ワンワン。」

と、なきました。

ゆりは、おじいちゃんのパリの絵葉書を、もう一度、手に取って見てみました。水色の空に白い雲、エッフェル塔は、空に向かって、まっすぐに建っています。そのエッフェル塔の下の道には、人々が行き交い、車がたくさん並んで走っています。水しぶきの湧いた噴水の周りには、ピンクや白、黄色や赤。色とりどりの花がたくさん咲いていて、とてもきれいです。緑の葉の茂った木々の間から、小鳥たちの鳴き声が聞こえてきそうです。

「パリの街、エッフェル塔……」

ベレー帽をかぶったゆりは、歌うようにひとりごとを言いながら、クッキーを抱いて、鏡を見ました。すると、鏡の中に、パリの景色が映ったのです。

「まあ、不思議。」

ゆりは、目をまん丸くして、鏡の中のパリの景色を見つめました。

エッフェル塔の下に、クッキーを抱いて、白いベレー帽をかぶって立っているゆりが映っています。まるで、ゆりとク

ツッキーが、一緒にパリの街に迷い込んだように思えて、ゆりは、胸がわくわくしました。

「魔法みたい。」

ゆりがそうつぶやくと、今度は、鏡の中から、車の走る音や、石畳の道を歩く人々のささやき声、犬の鳴く声や、小鳥たちのさえずりが聞こえてきたのです。ゆりは、ドキドキしてきました。クツキーも、不思議そうな顔をして、

「くーん。」

と、ないて、鏡の中をのぞきこんでいます。その時、どこからか教会の鐘の音が聞こえてきました。すると、ゆりを取り囲むように、大きな黄色のひまわりの花が、いつせいに咲き始めました。

「まあ、素敵。」

いつのまにかゆりとクツキーは、鏡の中のパリの街へ、入り込んでしまっていたのです。

ゆりは、クツキーをそっと、石畳の道へおろしました。

「クツキー、パリの街をお散歩しましょう。」

ゆりがそう言うと、クツキーは、

「ワンワン。」

と、しつぽをふりました。

白いベレー帽をかぶったゆりとクツキーは、一緒に、エッフェル塔を眺めながら、歩きはじめました。

「これは、きつと、おじいちゃんのパリの絵葉書の魔法ね。」

ねえ、クツキー。いつかきつと、一緒にパリの街へ行きまし

よう。その時までには、フランス語の勉強をしておきましょう。」

ゆりは、立ち止まってクツキーを抱くと、パリの空を見上げました。水色の空に白い雲、おひさまの光がまぶしくて、ゆりは、そっと目をつぶりました。

黄色のひまわりの花が、風に揺れています。

その時、

「ボンジュール。」

ゆりの耳元で、ささやく声がありました。

ゆりは、パッと目をあげました。

「まあ。」

ゆりの前に、青い帽子をかぶった、すらりと背の高い少年が立っていたのです。少年の髪の毛は、金色で、大きな青い瞳で、にっこり笑って、ゆりを見つめています。

「ボンジュール。」

ゆりもフランス語で、こんにちは。と言ってみました。

ゆりは、目をパチパチさせて、少年を見つめました。それから、キョロキョロとあたりを見まわしました。ゆりが不思議な気持ちで石畳の道に立ち尽くしていると、

「ゆりちゃん、ほく、クツキーだよ。」

その少年が微笑みました。ミニチュアダックスのクツキーが、フランス人の少年に変身していたのです。

「クツキー？ どうして？」

ゆりがそう言うと、

「これも、パリの絵葉書の魔法さ。さあ今からぼくが、ゆり

ちゃんをパリの街の中へ案内してあげるよ。」

という声が、聞こえてきました。

フランス人の少年に変身したクッキーが、ゆりの手を取りました。ゆりと少年は、手をつないで、黄色いヒマワリの咲く道を通り、エッフェル塔の下をくぐり抜けて、パリの街の中へと、誘い込まれるように歩いていきました。

それから、いくにちかが過ぎました。パリの夢から覚めたゆりのもとに、おじちゃんから、お手紙が届きました。

手紙には、こんなことが書いてありました。

「ゆりちゃん、こんにちは。お手紙ありがとう。うれしかったよ。パリの絵葉書を見つけたんだね。どうしてゆりちゃん部屋の本棚に入っていたのか、その秘密を教えてくださいね。実はね。昔、ゆりちゃんの部屋にある木の本棚を、おばあちゃんが若い頃に使っていたんだよ。」

おじいちゃんの送ったパリの絵葉書を、本棚には喜んでおいたのは、おばあちゃんなんだよ。ゆりが見つけてくれたことを知って、おばあちゃんも喜んでくれるよ。なつかしいって。

夏休みに、ゆりちゃんが遊びに来てくれるのを、楽しみに待っているよ。そのときには、庭では、黄色のひまわりの花が、たくさん咲いているよ。パリのお話、聞かせてあげるね。おじいちゃんより。」

ゆりは、おじいちゃんからの手紙を読んで、夏休みにおじいちゃんとおばあちゃんの家に行くのが、とても楽しみになりました。

そのときに、フランス人の少年に変身したクッキーと一緒に、パリの街を歩いた、不思議な夢のおはなしを、おじいちゃんとおばあちゃんに話してあげようと思いました。そっと窓を開けると、五月のさわやかな風が、部屋の中にはいつてきました。

(中区)

「入選」

けい子のクリスマス・イブ

如月はるの

家の前の横断歩道をわたって、まっすぐに歩くとすぐ右側に、教会があります。

教会の屋根には、十字架が青い空に浮んでみえました。

入り口にはマリア様の像が、やさしく微笑んでいます。

その顔は、けい子に「どうぞおはいいいなさい」と言っているようにでした。

けい子は、この教会が大すきです。

教会では、日曜日のミサのあとに子供達の為の日曜学校があります。

けい子はこの日を楽しみに待っています。

ミサのときには、オルガンの音が美しく流れます。

白い、レースのベールをかけた人たちが、お祈りをしています。

けい子もいっしょに、お祈りをします。

ミサがおおると、フランス人の神父様が、けい子にかならず「よききたね」といって、あたまをなでてくれます。

そんなすてきな教会が、十二月になると、普段よりも一層華やかな感じになります。

けい子はそわそわ、うきうきしています。

入り口のマリア様も、いつもよりもっと嬉しそうにみえました。

だって十二月二十五日は、キリスト様のお生まれになった日、クリスマスですから。

みんなで、その日のお祝いの準備をしています。

ある日、教会の入り口が歩いていて、中がみえるようになっていました。

「あつ」

けい子はたちどまりました。

天井と窓のステンドグラスは、キリストのお誕生の話が、紙しばいのように並んで描かれています。

ホールには、けい子の背丈の倍よりもっと大きいクリスマスツリーがありました。

「わあきれい」

思わず中に入っていくと、ツリーのてっぺんに、大きい銀色の星がありました。

その星の輝きをひきたてるように、金や銀のモールがたれさがっています。

けい子は、ツリーにみとれていました。

すると、あつたかい手が、けい子の肩にさわりました。

ふりむくと、神父様がほほえんでいます。

神父様は、

「この星はね、けい子ちゃん、キリストがお生まれになったことを、皆に知らせてくれた星ですよ」

と、やさしく教えて下さいました。

けい子は、いつも教会の日曜学校でみせてもらっている物語を思い出しました。

キリストのご生誕のおはなしです。

けい子はそれから毎日、教会のツリーを見に行きました。

そしてイブの日、ツリーをみていると、いいことを思いつきました。

けい子は、むちゆうで走って家に帰ると、台所のおかあさんのところに行きました。

けい子は、息がつかまって言葉になりません。

するとおかあさんは、マリア様のように優しい笑顔で「ゆつくりおはなししてごらん」と言ってくれました。

けい子は、おかあさんの顔をみつめながら深呼吸をしてから、話しました。

「ね、うちにも大きいツリーを飾ってね、教会みたいにお祝いしたいな。お店に売っているような白いケーキを作りたいな」

おかあさんは、

「それじゃ、急いで仕度しなくちゃね」と言ってくれました。

けい子には、一つ年上のお兄さんがいます。

そのお兄さんは、とても器用で工作がじょうずです。いつでも、工夫して広告に絵を描いたり切り抜いて何でも作ってしまいます。

お兄さんも教会に通っています。

つぎの日けい子が家に帰ってくると、お兄さんはもう、クリスマスツリーのしたくをしていました。

みると、ほうそう紙をつなぎあわせてツリーの形に切つて、緑色にぬつて、ちょうど居間の壁にはりつけるところでした。

「すごいなあ」

ツリーは、けい子の背よりも高く、両方の手をひろげてみたら、枝はそれよりも大きくひろがっていました。

そして、てっぺんの星、ベル、ローソク、モールのベール

……紙のツリーがまるで本物みたいでした。

けい子も手伝ってわたで雪をふらせました。

それから、色紙でかざりつけをしました。

うきうきしてきます。

少しづつ、畳の部屋は、教会に変わっていきます。

「さ、こんどはケーキね」

おかあさんがいました。

けい子とおかあさんは、近くのパン工場に買いものになります。

そこは、おかあさんとけい子が、いつも行くおなじみのところですよ。

ふだんは、パンのみみが安いので、それを買っています。

それをおかあさんが、油であげておさとうをまぶしたり、コロッケをサンドして焼いたりします。

こうして、いつもおかあさんは、工夫しておいしいおやつをつくってくれていました。

ところが、きょうはおかあさんが特別に、白くてふわふわの4枚切食パンを買ってくれました。

そして、食パンのまわりのミミも、切り落として、スポンジケーキのかわりにしようといいました。

そのころは、まだ家でスポンジケーキをやいたことがなかったもので、それはものすごいすてきなかんがえでした。

それからおかあさんは、白いクリームと、赤いいちごも買ってくれました。

わくわくして家にかえると、さっそくエプロンをかけました。

けい子は、まずおかあさんに教えてもらっていちごをスライスしました。

パンには、クリームをぬりました。

「入選」

おねえさんになったミコちゃん

立岡律子

けい子は、ちよつときんちようしました。クリームをぬったパンには、スライスしたいちごを並べます。同じものを3つ作り、1枚ずつかさねていきました。4枚めは、いちばん上に、ふたをすするように置きます。そうしたら、まわりをちよつと厚めにクリームをぬるので……けい子にはかなりたいへんな作業でした。でもけい子は、いっしょうけんめいに、ていねいにクリームをぬり上げていきました。

クリームをぬるだけでも1時間以上かかりました。雪のように真白いケーキが出来上がり、仕上げのいちごは、おかあさんとお兄さんの3人でかざりました。

仕度ができたときはもう、あたりは暗くなっていました。いよいよケーキにローソクを灯し、3人でクリスマスのお祝いをはじめようとした時、いつもは仕事で遅いお父さんが、ふいに

「メリークリスマス！」と言いながら帰ってきました。

「わあい、お父さんだ！」

けい子は、お父さんの首にだきつきました。

おかあさんもお兄さんも、ローソクのあかりのむこうで、嬉しそうに笑っています。

けい子もいっそううれしくなつて、テーブルのまわりをスキップしてまわりました。

(中区)

ミコちゃんは5才。もうすぐママの大きなおなかにいる赤ちゃんに会えるんです。ママは、
「赤ちゃんは女の子だからミコちゃんの妹なのよ」と、おしえてくれました。

「妹かあ……。」

ミコちゃんはひとりごとを言いました。

それから何日か過ぎた朝、いつものように

「ママ、おはよう。」

と、言ってみましたが、ママはどこにもいませんでした。

「どこにいるのー？ ママ。」

ミコちゃんが泣き出しそうになった時、パパが

「ミコちゃん、昨日の夜、赤ちゃんがうまれたんだよ。さあ、いっしょに病院へあいに行こう。」

と、言いました。

ミコちゃんは、いそいでパジャマを脱いで大好きなワンピースに着がえてパパの車に乗りました。

病院に書いて、階段をのぼっている

「えーっ、信じられないわー。」

という、ママの大きな声が聞こえてきました。

「何が信じられないのかなあ？」

パパの後ろからそーっとのぞいて見ると……ママがうまれ
たばかりの赤ちゃんを抱っこして、

「ミコちゃんほら、赤ちゃん、男の子だったのよ。女の子っ
て聞いていたから、まだ信じられなくて。」

ママは興奮して早口でそう言うて笑いました。

「ふーん、男の子かあ。じゃあ、妹じゃないんだねー。」

ミコちゃんは、妹がうまれたらお人形やおままごとをし
て、いっぱい遊ぼう、とワクワクしていたので、ちよつぴり
残念でした。

それでも、赤ちゃんのやわらかな手にそーっとさわってみ
ると、赤ちゃんはニコツと笑いました。

それから、ママと赤ちゃんにバイバイして家に帰ると、
東北の秋田に住んでいるおばあちゃんが来ていました。

「ミコちゃん、ひさしぶり。ちよつと見ない間にすっかりお
ねえちゃんになったねえ。赤ちゃんにあえたの？」

「うん、あえたよ。男の子だったから、ママびっくりしてた。」

そう言うとおばあちゃんが買って来てくれた、新幹線の
形をしたお弁当を食べました。おなかペコペコだったの
で、いつもはキライなニンジンもパクパク食べてしまいまし

た。

「ミコちゃん、何でも食べてエライねえ。さすがはおねえち
やんだ。」

と、おばあちゃんがほめてくれました。

つぎの日、パパは朝早くお仕事に行ってしまったので、お
ばあちゃんといっしょにママと赤ちゃんのいる病院へ行きま
した。

「本当はおばあちゃんじゃなくてパパと来たかったのにな
……」

と、ミコちゃんはごきげんナナメでした。

朝ごはんの時、いつものように大好きなアニメのテレビを
見ながら食べているとおばあちゃんに、

「ごはんを食べながらテレビを見ちゃいけません。ほらほ
ら、こぼれているでしょ。早く食べ終わってちょうだい。お
ばあちゃんはママの代わりにおそうじやおせんたくをしなく
ちゃならないから忙しいのよ」

と、叱られたからです。
プーっとふくれつつらをしながら下を向いて歩いていまし
た。すると、道のはじっこに色々な形の石が落ちていたのが
見えました。

「わあ、どれもみんなかわい石だわ。そうだ、この石をマ
マのプレゼントにしよう。」

ミコちゃんが今よりもっと小さかった頃、おでかけするとい

つも石を拾ってママに見せていました。するとママが「ミコちゃんは素敵な石を見つけたのが上手ね。」

と、ほめてくれたのを覚えていたのでした。

そして、丸い石や四角の石、きれいな色の石をいくつか選んで、昨日と同じ大好きなワンピースのポケットに入れられた。いつの間にかニコニコ笑顔になっていました。

ポケットはパンパンで重たくなってしまいました。ミコちゃんは早くママに石を見てほしくてがんばって歩きまわった。

病院に着くと、ママは赤ちゃんのおムツをかえているところでした。

「ミコちゃん、今日も来てくれたのね。うれしいわ。」

そう言うと、ママはミコちゃんをぎゅーっと抱きしめました。

「ミコちゃんつたら、テレビを見ながら朝ごはんゆーくり食べるもんだから、来るのが遅くなっちゃった。ニンジン食べないっつて、残すし着がえはイヤだっていうし、ちつとも言う事聞いてくれないのよ。まったく、あなたのしつけが悪いんじゃないの?」

と、おばあちゃんに言われたママは、

「ハイハイ、ごめんなさーい。」

と、あやまっていました。でも、顔は笑っていました。

いつの間にか、赤ちゃんはベッドの中でスヤスヤとネンネしていました。近づくとミルクのおいがします。ミコちゃん

んがそーっとプクプクのほっぺにさわってみると、赤ちゃんが

「ニコッ」

と、笑ったように見えました。

「そうだ、これ、ママにプレゼント。」

そう言うとミコちゃんは、来る時に拾った石をポケットから取り出してママに渡しました。

「まあ、素敵な石ね。ありがとう。ミコちゃんは石をさがす名人ね。」

お礼を言ったママの目には、うれし涙がにじんでいました。

「さあ、そろそろ家に帰りましょう」

おばあちゃんが言いました。もつともつとママのそばにいたかったけれど、バイバイする事にしました。

「いっしょに帰れなくてごめんね……。」

そう言うとママは、ミコちゃんをぎゅーっと抱きしめていました。

「うん、お家で待つてるから。赤ちゃんにもおもちゃいっぱいかしてあげるよ。」

ミコちゃんはそう言いながら、何だか泣きたくなりました。ママにバイバイ、と笑顔で手をふりました。

帰り道、手をつないで歩いてたおばあちゃんが、

「ミコちゃんはやさしい良い子ねえ。」

と、言っって頭をなでくれたので、ミコちゃんはとっとう

れしくなりました。

そして、ママと赤ちゃんが家に帰ってきました。赤ちゃんは、ピンク色のレースがたくさんついているベビー服を着ていました。うまれるまで女の子だと思っていたので、ママは、ピンク色の服しか用意していなかったんですって。

ミコちゃんの弟は「爽快」と言う名前に決まりました。おばあちゃんが

「5月の爽やかな季節にうまれたから爽快にするのはどうかしら？」

と、言っ、みんな大賛成して決まったのだそうです。

今日もミコちゃんは、ソウタに本を読んであげたり、大好きなお人形をかってあげたり、と楽しそう。

「妹が良かったのに、って思っていたけど弟もかわいいね」なんて言っていますよ。

ベビーたんすの上には、きれいに洗われた石が並んでいます。そう、ミコちゃんがママにプレゼントしたあの石です。ソウタが泣き出すと、ママが石を手の平でころがします。

「コロコロコロ」

と良い音がするので。すると、ふしぎ、ふしぎ。泣いていたはずのソウタは

「ニッコリ」

と笑い出すのです。

おしまい

(西区)

「入選」

星のバレリーナ

関根栄二

「はい、ドウミプリエ、伸ばして、ドウミプリエ、伸ばして」

先生の掛け声が、バレエスクールのレッスンスタジオの中に響き渡ります。麗子は、先生の掛け声に合わせて、一生懸命にレッスンをしています。

「手の内側を見て、かかとを下ろして、グランプリエ、麗子さん、ちゃんと背筋を伸ばして！」

「は、はい、すみません」

麗子は先生に指摘されて、慌てて姿勢を正しました。

小学校五年生の麗子は、三年ほど前からバレエのレッスンに通っているのですが、最近では、レッスンに行くのが嫌だと思うことが多くなってきました。バレエのレッスンは、厳

しくて、単調な繰り返しが多いなと感じていたからです。

麗子がバレエを習い始めたのは、二年生の時に、学校で同じクラスだった美穂に誘われたのがきっかけでした。美穂は、麗子よりも半年ほど先に、バレエを始めていました。美穂に誘われた麗子は、おかあさんといっしょに、レッスンを見学に行きました。そして、美穂といっしょに、レッスンに通うことになったのでした。でも、どちらかというところでも、おかあさんの方が熱心でした。おかあさんが、麗子にぜひバレエを習わせたいと思ったのでした。

ある日、レッスンの帰りに、美穂がこう言い出しました。

「麗子ちゃん、私ね、バレエをやめようと思うの」

急にこんなことを言われたので、麗子は驚きました。

「えっ、どうして？」

「私、あまりバレエには向いていないような気がするの」

「そんなことないと思うけどなあ……」

麗子はそう言って、美穂を励まそうとしました。でも、美穂がバレエには向いていそうもないことは、なんとなく麗子にも分かるのでした。

こうして美穂は、バレエスクールをやめました。美穂がやめてしまったので、麗子は、レッスンに行くのが、ますます気が進まなくなっていました。

それでも麗子は、その後もあまり気が進まないままに、バレエのレッスンを続けていました。すると、ある日先生がこう言いました。

「麗子さん、もうそろそろ、トゥシューズを履いてもいいわね」

「えっ、本当ですか？」

先生の言葉を聞いて、麗子はとても嬉しくなりました。トゥシューズとは、バレエを踊る時に、つま先で立つための靴です。つま先で立てるように、先端が平らになっています。ピンク色のサテンで覆われていて、見た目にもとても美しいものです。バレエを始める人ならば、誰でもトゥシューズを履いた自分の姿に、憧れることでしょう。でも、バレエの基礎がしっかりとできていないうちにトゥシューズを履いて、つま先で踊ると、足を痛めてしまうのです。そのため、バレエを始めてから、先生からトゥシューズを履く許可が出るのに、少なくとも三年ぐらいいはかかるのです。

先生のお許しが出たので、麗子はさっそく、おかあさんといっしょにトゥシューズを買いに行きました。バレエ用品を売っているお店に入ると、おかあさんが、

「この子、初めてトゥシューズを履くのですが」

と、店員さんに声を掛けてくれました。麗子は椅子に座って、店員さんが出してきてくれたトゥシューズを履いてみました。店員さんは麗子に、

「立って、第六ポジションでドウミプリエしてみて」

と言いました。麗子は椅子の背もたれに掴まって、第六ポジション（両足をピツタリとくつつける）で立ちました。そして、ドウミプリエ（かかとを床から離さずに、ひざを曲げることを）をしました。店員さんは他にも何足かトウシューズを出してきてくれました。麗子はそれらのトウシューズを履いて、ひざを曲げたり伸ばしたり、かかとを上げたり下げたりしてみました。そして、

「これが一番、足にピツタリですよ」

と、店員さんがすすめてくれたトウシューズに決めました。「私がトウシューズを履けるなんて、なんだか夢みたい！」麗子は嬉しくて、その日の夜は、トウシューズを抱きしめて眠りました。

次の日のレッスンで、麗子は初めて、つま先で立つ練習をしました。トウシューズを履いて、レッスンスタジオの壁際のバーに掴まりました。そして、つま先で立とうとしたのですが、グラグラしてしまつて、うまく立てませんでした。

「ひざを、もつとちゃんと伸ばして！」

と、先生に言われました。しばらく練習するうちに、足が痛くなつてしまいました。慣れるまでは、かなり大変そうです。でも麗子は、トウシューズを履けるようになったことによつて、とてもやる気になっていました。今までになかったほど、バレエへの情熱が高まっていました。

その日のレッスンが終わつて、家に帰る途中でのことでした。道を歩いていた麗子は、目の前に急に白い霞がかかったような気がして、クラクラと目まいがしました。

「あれっ、どうしたんだろう？」

麗子はその場に、しゃがみ込んでしまいました。

「私、どうなっちゃうんだろう？」

そう思うと、心臓がドキドキしました。しかし、しばらくの間しゃがんでいたら、心臓のドキドキも治り、目まいの症状もなくなりました。

「お嬢ちゃん、どうしたの？ 大丈夫？」

知らない女の人が、心配して声をかけてきました。麗子は、「はい、大丈夫です」

と、答えました。麗子は、今日初めてつま先で立つ練習をして、ちよつと無理をし過ぎたのかなと思いました。多分、それが目まいの原因だろうと思ひました。なので、この時にはまだ、あまり気にしませんでした。

それから何日か過ぎたある日、おとうさんが、「バレエをがんばっている麗子に、プレゼントだよ」

と言つて、一枚の封筒を渡してくれました。麗子が「何だろう？」と思つて、その封筒を開けてみると、一枚のチケットが入っていました。それは、ウクライナの有名なバレエ団の、「白鳥の湖」の公演のチケットでした。麗子は前から、

そのバレエ団の公演を、観たいと思っていたのでした。麗子は驚いて、しばらくの間、あつけにとられてしまいました。

「ちゃんと、おとうさんにお礼を言ったの？」

おかあさんにそう言われて、麗子は我に返りました。そして、

「おとうさん、ありがとう。私、とても嬉しい。前から、このバレエ団の公演を、観たいと思ってたのよ！」

と、お礼を言いました。

「自分のバレエの勉強のためにも、しっかりと観ておいでよ」
おとうさんは、にっこりと笑って言いました。

その公演が行われる会場は、市民会館のホールでした。麗子はバスに乗って、その公演を観に行きました。「白鳥の湖」は、前に本で読んだので、物語の筋は知っていましたが、バレエとして観るのは初めてでした。

第一幕が始まり、ジークフリート王子が現れると、会場には大きな拍手が沸き起りました。麗子も一緒になって拍手をしました。でも、麗子の一番のお目当ては、第二幕から登場する、主役のオデット姫でした。

第二幕で、オデット姫がつま先で歩きながら、両手を広げて登場すると、麗子は、その美しさに息を呑みました。そして、ジークフリート王子といっしょに踊る、アダージオというゆったりとした踊りに、うっとりとして見入っていました。

第三幕では、オデット姫の恋敵である、オデイルが登場

します。オデット姫とオデイルは、同じバレリーナが、一人二役で演じます。この幕の最後で、オデイルは片足を軸にして、もう片方の足を曲げたり伸ばしたりしながら、連続で三十二回も回転しました。これには麗子も驚いて、目が釘付けになりました。

そして、いよいよ最終幕である、第四幕です。悪魔の魔法によって、白鳥の姿に変えられていたオデット姫は、人間の姿を取り戻し、ジークフリート王子と永遠の愛を誓いました。客席からは、割れんばかりの大きな拍手が沸き起りました。しかし麗子は感動のあまり、拍手をするのも忘れていたほどでした。そして、「バレエスクールの発表会の時に、いつか必ず、オデット姫の役をもらおう」と決心したのでした。

公演が終わって、会場から出たところで、後ろから「麗子さん」と呼ぶ声が聞こえました。麗子が振り返ると、それは、麗子を通っているバレエスクールの先生でした。

「あつ、先生！」

「麗子さん、あなたも来ていたのね。『白鳥の湖』、どうだった？」

「とてもよかったです！ 私、すごく感動しました。発表会で、オデット姫の役をやってみたいくなりました」

麗子は興奮して、先生に言いました。

「まだすぐには無理だけど、あなたならきっと、できると思

うわ。だからこれからも、レッスンがんばってね」

先生は、麗子にほほ笑んで言いました。

「はい、先生、私がんばります！」

先生に励まされて、麗子はますます、やる気になっていました。

「腕を開いて、上げて、ポアント、戻して、上げて、プリエ、戻して」

麗子はその日も、先生の掛け声に合わせて、レッスンに励んでいました。片足を振り子のように大きく振り上げるレッスンをしている最中のことでした。麗子は足を振り上げた時に、クラクラと目まいがして、そのまま、床にボタンと倒れてしまいました。

「麗子さん、どうしたの？」

先生が驚いて、麗子のところへ駆け寄りました。ほかの生徒たちも心配して、麗子の周りを取り囲みました。麗子はすぐに意識を取り戻して、

「大丈夫です。すみません」

と言って、立ち上がろうとしました。でも、やはり足元がフラフラとしてしまいました。

「無理しないほうがいいわよ」

先生にそう言われて、麗子はその日の残りのレッスンでは、動くのはやめて、おとなしく見学することにしました。

レッスンが終わったので、麗子は家に帰ろうとしました。でも先生は、麗子の体を心配して、

「おかあさんに、迎えに来ていただいたほうが、いいんじゃない？」

と言って、麗子の家に電話をしてくれました。そして、おかあさんに、麗子を迎えに来てくれるように、頼んでくれました。

おかあさんが来るのを待っている間、麗子は、「おかしいなあ、私、いったいどうしちゃったんだろう？」と、少し不安になりました。「そういえば、初めてつま先で立つ練習をした日も、帰る途中で目まいがして、しゃがみ込んでしまったな」と、思い出しました。

麗子は、『白鳥の湖』を観てから、どうしてもオデット姫の役がやりたくて、レッスンを、とてもがんばっていました。そして、将来はプロのバレリーナになりたいと思うようになっていました。そのため家に帰ってからも、レッスンでやったことをおさらいして、一人で練習していたのです。ちょっとがんばりすぎてしまって、体に疲れがたまっていて、それで体調がおかしくなっているのかなあと、麗子は思いました。

麗子の家からバレエスクールまでは、歩いて十分か十五分ぐらいの距離です。でもおかあさんは、麗子の体を心配して、車で迎えに来ました。

「ご心配をおかけして、すみませんでした」

おかあさんは、先生にそう挨拶して、麗子を車に乗せました。そして、家に向かいました。車を運転しながら、おかあさんは麗子にききました。

「目まいをおこして倒れるなんて、いったい、どうしたの？」
「この頃、ちょっとバレエをがんばりすぎて、体に疲れがたまっているんだと思う」

「本当にそれだけならいいけど……。一回、病院でみてもらったほうがいいかもしれないわね」

おかあさんは、麗子のことごとく心配そうでした。

「大丈夫よ。明日のレッスンは休むから。先生に、そうしなさいって言われたの」

「今度めまいがしたら、必ず言いなさいよ。すぐに病院へ行くからね」

「うん、わかった」

おかあさんが言うように、今度目まいがしたら、やつぱり病院へ行ったほうがいいだろうなど、麗子も思ったのです。

次の日の朝のことです。麗子が顔を洗ってタオルで顔を拭くと、そのタオルに、血がべったりと付いていました。あれっと思つて、洗面台の鏡を見ると、鼻血が出ていました。麗子は鼻を手でつまんで、しばらくの間上を向いていましたが、鼻血はまだ止まりそうもありませんでした。

「麗子、何をしているの？ 早くご飯を食べないと、学校に遅れるわよ」

リビングから、おかあさんの声が聞こえました。麗子は鼻をつまんだままリビングへ行って、

「鼻血が止らないの」
と答えました。

「えっ、鼻血？」

おかあさんは、少し驚いたようでした。

「鼻血なんて、この頃出たことなかったのになあ」
と、おとうさんも少し心配そうでした。

仕方がないので麗子は、鼻に綿を詰めて、ごはんを食べました。でも、すぐに綿が血で真っ赤に染まってしまったかと思つくと、綿から血がポタポタと垂れてきてしまうのでした。なので麗子は、何度も綿を詰め換えなければなりませんでした。

ご飯を食べ終わっても、鼻血は止まりませんでした。おかあさんは、「鼻血が止まらないので、遅刻します」と、学校に電話をしてくれました。そして、

「こんなに長い間鼻血が止まらないなんて、おかしいわねえ」
と、心配そうでした。おとうさんも、麗子を心配しつつ、会社へ行きました。それから一時間たつても、まだ鼻血は止まりませんでした。

「麗子、やつぱりおかしいわ。病院へ行きましょう」

おかあさんが言いました。麗子も、そうしたほうがいいと思つたので、

「うん」

と、素直にうなずきました。

麗子は鼻をつまんだまま車に乗り、おかあさんが車を運転して、病院へ行きました。病院では、いろいろな検査を受けました。検査の結果は麗子には知らされず、おかあさんだけに知らされました。麗子は、白血病にかかっていたのでした。

麗子は、その病院に入院することになりました。おかあさんから、入院しなければならぬことを告げられた麗子は、「どうして? どうして入院しなければならないの? 私、何の病気なの?」

と、おかあさんに詰め寄りました。おかあさんは、「体力が落ちてきているから、しばらくの間入院して、安静にすることが必要なんだって」

と答えました。麗子を診察してくれたお医者さんから、そう答えるように、言われていたのです。

おかあさんは、一旦家に帰って、麗子の着替えや洗面道具などを持ってきてくれました。夜になると、おとうさんも来てくれました。

「麗子、何も心配はいらないからね。早く元気になることだけを考えなさい」

おとうさんにそう言われたのですが、麗子は、思わず、「あくあ、バレエのレッスンに行けなくて、つまらないな」

と、言ってしまった。するとおとうさんは、

「麗子、今はそんな事を言っている時ではないだろう!」
と、怒って言いました。いつもはやさしいおとうさんの怒った声に、麗子はびっくりしてしまいました。おかあさんは、

「そうよ、麗子。おとうさんの言う通りよ。今はほかのことは何も考えずに、早くよくなることだけを考えていなさい」と言つて、ベッドから起き上がっていた麗子に、羽織を掛けました。

おとうさんとおかあさんが帰ってしまうと、麗子は、急に心細くなりました。麗子はベッドに横になり、布団を頭からかぶると、涙が出そうになりました。すると、ベッドの横から、

「あらあら、泣いているのかな?」

という声が聞こえました。麗子が布団から顔を出すと、そこには、少し太った女の人が立っていました。その病院の、婦長さんでした。

「私、泣いてなんかいません」

麗子は、強がつてそう答えました。

「無理しなくてもいいのよ。あなたぐらいの年齢なら、無理もないわ」

婦長さんはそう言つて、麗子にほほえみかけました。そして、

「ここでは、私をおかあさんだと思つてね」

と言ってくれたので、麗子は少し、心強くなりました。

麗子が入院してから、一週間が過ぎ、少しずつ入院生活にも慣れてきました。おかあさんは、毎日お昼過ぎに面会に来てくれて、夕方まで居てくれました。おとうさんも、仕事が終わってから、毎日来てくれました。なので麗子は、家から離れていても、それほど寂しくはありませんでした。

でも、バレエのレッスンへ行けないのが、とても残念でした。バレエスクールの先生もお見舞いに来てくれて、「早くよくなってね」

と言ってくれました。麗子も、早くよくなって、バレエのレッスンに行きたくてたまりませんでした。

入院してから毎日薬を飲んだり、点滴を打ってもらったりしていたためか、目まいの症状は、治まっていました。鼻血も出なくなっていました。でも、いつも体がだるくて、やはり自分は何か重い病気にかかっているのではないかと、麗子は不安になるのです。

それに、どこかにぶつけたわけでもないのに、体のあちこちに、黒っぽいアザができるようになっていました。そのことをお医者さんに言っても、婦長さんに言っても、あまりはつきりしたことは、答えてくれませんでした。

そんなある日の夜、麗子はちよつと外の空気を吸いたくな

って、病院の屋上に出ていました。その日はとても天気がよく、星空がきれいでした。すると、

「麗子さん、もうすぐ消灯の時間よ」

と、婦長さんが、麗子呼びに来ました。そして夜空を見上げて、

「あら、はくちよう座が、きれいに見えていること」

と言いました。婦長さんのご主人は天文学者なので、婦長さんも、星座のことには詳しいのです。

「えっ、はくちよう座？」

「そうよ。ほら、あの明るい星が、一等星のデネブよ。白鳥の、しっぽの部分よ」

婦長さんが指をさしました。麗子は、じっと目をこらしました。

「あつ、本当だ！ 本当に白鳥が、羽を広げているみたい！」

麗子には、バレエの「白鳥の湖」で、白鳥の姿になったオデット姫が、夜空を羽ばたいているように見えたのです。そして、こう宣言したのです。

「婦長さん、私、絶対によくなるわ！ そして将来バレリーナになって、『白鳥の湖』のオデット姫の役をやるのよ」

それから、わずか数日後の朝のことでした。婦長さんが、麗子の病室に入ってきました。

「おはよう、麗子さん。今朝は、具合はどうか？」

麗子の返事がありませんでした。

「麗子さん、どうしたの？ 麗子さん！ 麗子さん！」
 婦長さんが麗子の枕元で何回呼びかけても、返事がありませんでした。婦長さんの顔が、みるみるうちに青ざめていきました。麗子は容体が急変し、ベッドの中で意識を失っていたのです。

麗子は、すぐに集中治療室に移されました。麗子のおとうさんとおかあさんは、「大至急来てください」と、病院に呼び出されました。しかし、おとうさんとおかあさんが病院に着いた時には、麗子はすでに、息を引き取っていました。

「麗子さんは私に、絶対によくなるわって、言ってくれたんです。そして将来バレリーナになって、『白鳥の湖』のオデット姫の役をやるんだって……」

婦長さんは、言葉を詰まらせながら、麗子のおとうさんとおかあさんに話しました。麗子のおとうさんとおかあさんは、涙をこぼしながら、婦長さんの話をじっと聞いていました。

その日の夜のことです。婦長さんのご主人が、はくちょう座の中に、新しい星を発見しました。婦長さんのご主人は、別に新しい星を発見してやろうと思ったわけではありませんでした。ただ、何となく星が見たくなくて、自宅のペランダに天体望遠鏡を出して、しばらく眺めていたのです。すると、

「おや？ あんな所に、見慣れない星があるぞ」

と、気が付いたのでした。その日、婦長さんは、麗子が亡くなったことでもいろいろあって、帰りが遅くなりました。それで、ちょうどその時に、家に帰ってきたところでした。
 「ねえ、ちょっと見てごらん。はくちょう座の中に、見慣れない星があるよ」

ご主人は、婦長さんに声をかけました。
 「えっ、はくちょう座の中に？」

婦長さんは、病院の屋上で、麗子といっしょにはくちょう座を眺めた時のことを思い出しました。そしてペランダに出て、望遠鏡を覗きました。

「これはきつと、麗子さんの星に違いないわ！」
 「えっ、麗子さんって？」

婦長さんは、ご主人に麗子のことを話しました。

「麗子さんはね、とてもバレエをがんばっていたの。将来バレリーナになって、『白鳥の湖』のオデット姫の役をやるんだって。それなのに今朝、容体が急変してしまつて……」
 婦長さんの頬に、涙がこぼれました。

「きつと、その夢を叶えるために、麗子さんは星になったのよ」

婦長さんは、涙を拭いながら言いました。

「そうか、そんなことがあったんだね。それじゃあこの星は、本当にその子の星なのかもしれないね」

と、ご主人は感動して言いました。

婦長さんのご主人は、その星の写真を撮影し、いろいろと調べた結果、やはり新屋であることがわかりました。その星は「レイコ」と名付けられ、バレリーナを目指した少女の話が、語り継がれるようになりました。はくちよう座には、いろいろな言い伝えの話がありますが、麗子の話も、その中に加わったのです。麗子は星になって、「白鳥の湖」の、オデット姫を演じているのだと。

(浜北区)

児童文学選評

那須田 稔

「児童文学」への応募数が増えて嬉しい限りです。今回は、今まででもっとも多い十三篇が寄せられました。幼年もの、ファンタジー、成長物語などバラエティ豊かな、質の高いものが多く寄せられました。

市民文芸賞「むぎ畑のカフェ」

ネズミのチュウさんのカフェ「かしわの木」を舞台に展開する仲間たちの危機に立ちむかう姿が、生き生きと描かれていてすばらしい。

市民文芸賞「あしたへの小さな芽」

「陸上」をがんばる少年の、挫折から立ちあがっていく一面がよく表現されていて感動をよびます。

市民文芸賞「丘の上の空は明るい」

天竜の病院の中にある特別支援学校でくらす少女を中心に、さまざまな子どもたちが成長する姿を描いています。力作です。

入選「いたずら子ガラスたちのぼうけん」

二羽の子ガラスたちの様が、ユーモアたっぷりに伝わってくる楽しい幼年童話です。

入選「おばあさん ほのかです」

幼稚園児のほのかが、祖母にだす手紙で構成されている心あたたまる物語です。

入選「絵葉書の魔法」

本棚から出てきた古い絵葉書をめぐる楽しいメルヘン。

入選「けい子のクリスマス・イブ」

クリスマスを迎える少女と、その家族のすがたがあたたかく描かれています。

入選「おねえさんになったミコちゃん」

はじめて弟ができた女の子のやさしい心が、生き生きと描かれています。

入選「星のバレリーナ」

バレエにあこがれ、ひたむきに生きる少女の姿がよく表現されています。

今回惜しくも選に入らなかった方も、さらに、よりよい創作にむかって挑戦して下さい。期待しています。

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

評論

「市民文芸賞」

邪馬台國は大和説

滝澤 幸一

初めに

古代日本の起源と言うべき邪馬台國やまたいこくは、日本の歴史書には無い。まだ文字を残すという文化が出来る前の時代になるが、中国の正史である『三國志』『魏書東夷伝倭人条』(以下『魏志倭人伝』と記す)に、邪馬台國女王卑弥呼ひみこが魏に使者を送り、皇帝より「親魏倭王」の金印と共に、銅鏡などを賜ったと記録されている。

『魏志倭人伝』は朝鮮半島から九州上陸までは異論の余地はないのだが、そこから邪馬台國までの経路に問題があり、所在地の解明には至っていない。邪馬台國の所在地は九州説と大和説の二つがあるが、九州説は里程が合わないこととされ、大和説(奈良)は方角が合わない。

これまでの多数の研究者により、残されている『魏志倭人伝』にも誤字や間違いがあるとされることから、『魏志倭人

伝』の概略と、内容を再検討してみたい。その前に邪馬台國成立までの古代日本の歴史的な状況も再確認したい。それらを踏まえて、言語の異なる人との、口頭のやり取りを考えると文字に間違いはないのか。そんな考察の仕方、九州説、大和説を比較検討することとする。

①古代日本と周辺諸国の状況

土器の製造をみると、中国ではBC三〇〇〇年代、既に現在の陶器と同じ製法が開発されていたが、朝鮮では櫛目文土器の時代で、列島では縄文土器の時代であった。

稲作はBC五〇〇〇年頃、長江下流域で始まったが、朝鮮半島に伝わったのはBC一〇〇〇年頃となる。列島に伝わったのはBC四〇〇〇年代に長江下流域から佐賀県あたりに、朝鮮半島からは福岡県あたりに、ほぼ同じ頃、共に戦乱を避けて渡来した人々たちにより伝えられた。この頃、大陸では春秋

戦国時代。半島は高句麗、新羅、百濟などによる騒乱の時代で、この後も長く続く。

九州伝播の三〇〇年ほど前には、アムール河經由でもたらされたと考えられる、青森と宮城に水田跡の遺跡がある。その前に北海道には陸稲の粃が発見されたとする研究もある。これら東北の水田では中国北部の粟や稗の穂を刈り取った、九州発掘よりも大きい石包丁が使われていた。

こうしたゆつたりとした交流から、列島と朝鮮半島の交流が積極的に始まり、海女の文化は半島へ。半島からは青銅や鉄の伝播があり、陶器などは相互交流があった。紀元後になると列島から朝鮮半島經由で、中国との交流が始まった。

檀原考古学研究所総務企画部長の寺沢薫著『王権の誕生』によれば、弥生時代、九州北部のクニが石斧の製造を流れ作業による、規格化を始めた。それまでは自分の使う石斧は、自分で作っていたが、重ければ扱い難く、軽ければ食い込みが悪かった。規格化と分業による專業制による生産性向上で、この石斧は石材分析の結果、九州、瀬戸内、難波辺りまで流通していたことが確認されている。この資力が大陸との交流を可能としたとされる。

一方でこの資力は軍備の充実につながり、他の国から脅威とみられ、山陰などでは青銅の祭器を埋めて、クニの安全を祈ったらしい痕跡が残る。私は北九州の強力なクニの力は統合には支障になった可能性を考える。

② 列島の諸事情

従来、稲作は弥生時代からとされてきたが、縄文時代末期に始まったことが最近判ってきた。では、どれ程の米が食べられていたのか。

穀物を出土した一九三遺跡からの出土品をみると、粟・稗・陸稲・瓜などに、小豆・大豆などを加えると、水稲との比率は半々だという。その他、ドングリ類は各地で大量に発掘される。ドングリは飢饉月に備蓄もされていたが、弥生時代の実際の食用には、ドングリ・米・雑穀類がほぼ等しく使われていたと考えられている。その後水稲の栽培が広がり、米の比率が上がって行く。滋賀県本願寺遺跡では五世紀までドングリの貯蔵があったことを示している。

米の面積当たりの収穫量は、現在の二割五分以下だったという研究がある。この収量は、アジアなどの未開の地域での、現代の収量に近いという研究報告もある。

米だけの食事は、祭りの時だけの特別食であったと思われる。美味しい食事にあり付ける祭りを待望した姿が想われる。また水田耕作は、連作が可能である。畑作物の多くは連作障害が出る。耕地の拡張を求められるが、水田耕作により、より生活環境が整い、土器の利用による保存方法の確立もあり、定住による安定した生活が成り立った。定住でも食糧の確保が出来る水稲栽培が国家誕生の引き金になったのは間違いないが無い。

③ 九州における渡来稲作民の闘争

初期の水稲栽培は九州で始まったが、大規模な灌漑設備や

耕地改良よりも、適地を選び栽培する方が普通だった。適地争奪は必然で、中国渡来人と半島渡来人の戦いや怨念からの惨殺の痕跡が吉野ヶ里遺跡や、その周辺で多数見つかっている。仲間の遺体の下からDNA鑑定で敵の子供の頭が埋没されている遺体。背骨などに刺し傷、切り傷が多い遺体など、怨念を想わせる埋葬遺体の発見が相次ぐ。

瀬戸内以東でも多数の刺、切傷のある遺体が発見されるが、これは巫女やシャーマンに対する、戦いに敗れた時、目的が叶わなかった時の仕打ちではないかと見られている。これは魏志倭人伝の中でも、「持衰」と呼ぶ禁忌や折祷をする役割の人の記述がある。

④九州の遺跡の検討

BC五世紀は九州に水稻栽培が伝播した年代である。板付I式期（BC四世紀）には、初期の水田跡や金属器、環濠集落も、この時期この地のみ存在する。稲・雑穀・豆類・果実類などの多彩な栽培食物が集中する。板付Ⅱ式期（BC三世紀）になると、遠賀川土器と共に、付近へ、東へと拡散を始め、福岡・佐賀などには集落内に渡来人たちの生活エリアが確立されていた痕跡が、吉野ヶ里遺跡などにある。弥生人と渡来人には共生の関係があったと推測できる。

一方、環濠集落と共に、遠賀川系土器の文化は伊勢湾地方にまで伝播するが、この先には進まなかった。

東海・北陸・関東では遠賀川土器の発掘は極めて稀で、環濠集落の出現も弥生中期中頃、大多数は中期後葉からの出現

となる。東北地方にはこれらの環濠集落が作られることはなく、北海道や東北地方には、大陸東北部からの異なる環柵集落が見られる。

環濠を掘る理由は部族間競争における、防衛性能の向上を図る目的であった。環濠の溝の中には、糞尿や腐敗し易いゴミを入れ、容易には渡河し難くし、中には木材などでの妨害物も仕込まれていた。環濠を作ること、居住する者の団結心も高まったと考えられる。

渡来人と縄文人・弥生人など在住の住民との関係は、DNA鑑定で見える限り戦闘の痕跡はなく、平和共存的であったと考えられる。弥生人の骨格は、縄文人より大陸人に近い骨格を為す。列島の民と渡来人の頻繁な婚姻関係があったと考えられる。

⑤『魏志倭人伝』から読み解く

『魏志倭人伝』は、帯方郡の倭国に行った使者の報告を、魚拳という史官が『魏略』に書き、『三国志』の編者、陳寿が『東夷伝』に記したとされる。

後漢（二五〇～二八〇）滅亡後、魏（二二〇～二六五）・蜀（二二一～二六三）・呉（二二一～二八〇）の三国鼎立時代を経て、魏は蜀を破った後、一旦滅ぶが司馬炎が西晋（二六五～三一六）を建国し、呉を破り三国鼎立は終わる。『三国志』はこの西晋の時代になって編纂されている。三国鼎立時代の魏が、呉の東方に親魏倭国を置き、呉を牽制したかの論もあるが、その論は当たらない。

『魏志倭人伝』は魏の景初二年（二三八）邪馬台国女王卑弥呼が魏に使いを出し、皇帝（明帝とされる）より「親魏倭王」の金印や銅鏡百枚の他、錦・真珠・鉛丹などを賜ったと記される古代日本の国家「邪馬台国」だが邪馬台国の記述は僅か二千字余り。文献的解釈はさまざまで、邪馬台国の場所の確定はされていない。

「怪百歩」とされる卑弥呼の墳墓、「銅鏡百枚」の記述にも百家争鳴。卑弥呼の鏡だと言われた三角縁神獸鏡の研究も、形・大きさ・原材料の分析などで定見は出ていない。

しかし『魏志倭人伝』に記された景初二年は三年（二三九）の誤りとして、それから正始八年（二四七）の倭国と魏王朝との交流記録が真実であれば、女王卑弥呼の死をふくむ邪馬台国の記事は、古代日本の二世紀半ばの約十年にわたる歴史事実である。

邪馬台国はどこにあったのか。邪馬台国と日本最初の王権とされる大和王権との関係はあるのか。日本国家の起源に迫るには避けて通れない重要な鍵なのである。

平凡社東洋文庫の『邪馬台国論考Ⅰ』著者橋本増吉氏によれば、商務印書館所蔵の本には「時」が「節」に、「記」が「計」。宋本には卑弥呼の中に、「四時」の「時」が「序」とあるとして、「春耕秋収」を知る倭国の農民が、四時と四序を知らない筈はない。云々の記述がある。『魏志倭人伝』はその版により、誤字や間違いの多い書のようにある。

また、橋本氏は魚拳の『魏略』、陳寿の「魏史本文」、後の

『後漢書』を比較し、歴史学者の末松保和氏の（相違点は）「まだ、印刷術の及ばない、伝写流布の…：単なる写し誤りや、脱漏衍入だけからも可なり本来の面目とは異なった、数種の異本が流布する様になっていたかも知れない」（元本のまま記述）ともある。版により誤字などがあるのは仕方が無い。

私は、帯方郡の使者の報告から『魏略』に写した魚拳。これを陳寿が『東夷伝』に編纂する時などに、間違いが無かつただろうかという疑念が強い。

帯方郡から不弥国までは、一途に南、南へと進むが、南に水行二十日の投馬国。ここから水行十日、陸行一月の邪馬台国となると、鹿児島県の南方海上になり、違和感がある。

書き写しをするのに、左に置いた書を読みながら、書き写したものでしょうかと考える。能率の良いのは、読み手が居て、聞きながら書を進めるのではなからうか。南はナン、東はトシヤ、ペイと違って、ナとトは、あ音、お音で口は大きめに開くが、「お」はやや横に開く。かなり近い発音だと思ふ。ましてや、南へ南へと続いて、ここだけが東となる。聞き違いや思い込みも考えられる。

南と書いてあるから南と、一切の妥協を退けるのではなく、（始めに）で述べたように、邪馬台国に至る途中の投馬国の位置を地図で確かめる。さらには邪馬台国に属しながら、狗奴国との間にあるとする。二十一カ国は現在のどこか。同じ発音の地名はないか。発音が近い地名はないか。その中

で、狗奴国の所在地が浮かぶ可能性はないか考へるに至る。

⑥ 投馬国はどこか

『魏志倭人伝』によれば、投馬国は五万戸余りとある。奴国（博多付近）で二万戸とすれば、九州説で邪馬台国に至る途上に、相当する地域は考へ難い。何故なら九州の地形を考へると、九州の平野と言へば、博多や福岡近辺の直方平野・佐賀の筑紫平野・熊本の本平野だが、これを経て水行十日、陸行一月で邪馬台国に至る地理的な余裕が無い。

一方大和説に立てば、瀬戸内海沿岸を航行する中で、倉敷や岡山辺りには結構広い平野がある。五万戸と見られたと考へる。また、海上に浮かぶ多数の島々は攻められ難く、その後は九鬼海軍の本拠地でもあった。その後の大陸との交渉を考へると、航海術の優れた民の存在が欲しい。ここより水行十日、陸行一月に無理はない。また、箸墓古墳や纏向遺跡では、吉備由来の物品である特殊器台・特殊壺・それから発達した埴輪などが見られる。

⑦ 邪馬台国に属す二十一国

『魏志倭人伝』に記述された、これら二十一国を見た時、鬼国は紀国や紀州ではないかと先ず感じた。鬼の国に喜んで住むであろうか。その次の為吾国は伊賀国と読めないかであった。そのように見ると、斯馬国は志摩・郡支国は串本・櫛田川などで、同音異字や近い発音の地名探索が始まった。地図の索引を横に置き『魏志倭人伝』を追うと、和歌山・三重を中心に、滋賀・京都辺りにそんな地名が多い。この二十一

カ国がこんなに揃うのは紀伊半島を中心にしたこの地方のみである。限られた狭い九州では揃へることは出来ない。そして『魏志倭人伝』は、その先は狗奴国だといっているのである。

⑧ 狗奴国の所在地を探す

『邪馬台国を捉えなおす』の大塚初重氏は、この書の中で「九州説を唱へる、東京大学の榎一雄氏の唱へる伊都国をセンターにして、邪馬台国を九州に納めた」とある。この書は特定はしていないが、狗奴国は隼人の住む宮崎南部から鹿児島が推定されてくる。

森浩一氏は『魏志倭人伝を読みなおす』で狗奴国の所在地を「熊本県の南を流れる白川か緑川までが女王国の範囲で、それより南の熊本県南部が狗奴国の所在地だとしている。氏は邪馬台国九州説の論者で、熊本県の菊鹿町に鞠智城という壮大な朝鮮式山城があり、熊襲の潜在的な脅威に備えた城だとし、郡内の郷に山門郷があるとす。熊襲の国が狗奴国だといふのだ。

氏は著書『敗者の古代史』で平成二十三年（二〇一一）十月十六日の、NHK特集番組『卑弥呼と邪馬台国の謎』について、原典の記述を無視して、狗奴国を勝手に東海に替えてしまった。日本人の知的水準を低く見て作ったと思へない。邪馬台国を追うのであれば、原典を忠実に沿わなければならない。狗奴国のことは『魏志倭人伝を読みなおす』で書いたので、ここでは省くと記述された。

私は、この書も読ませて頂いたが、方角には固執するが、

里程には苦心された氏の論に疑問を感じている。また、投馬国の所在地は、その書き方が曖昧だと触れず、邪馬台国に属しながら、狗奴国との間にあるとする二十一カ国には、紙数の関係で解説しないとされる。ここの部分は、邪馬台国の所在地を明確にする、避けることが出来ない大事な場面だと私は考える。

一方で帯方郡は邪馬台国だけでなく、狗奴国とも交流があったとする説は面白く読ませてもらった。

大和説を唱える歴史家、赤塚次郎氏の『幻の王国・狗奴国を旅する』は、前方後方墳という形は、東海地方に発達したS字甕と共に拡がって行く東海の文化そのものではないかとする。赤塚氏は狗奴国⇨伊勢湾沿岸説を伊勢の雲出川の柘榴石がS字甕本体に必ず混和剤として使われながら、S字甕に付加する補充部分には製作地周辺の砂粒が使われていることを、風習とするよりも、宗教性に近いとする。この分布は伊勢湾・東海・近江・科野・北陸の一部から関東まで拡がるとされる。

前方後円墳を「邪馬台国とその仲間たち」として、前方後方墳分布地域と伊勢湾沿岸部を「狗奴国とその仲間たち」と位置付け、狗奴国の中心部は紛れもなく伊勢湾・濃尾平野と赤塚氏は考えている。

寺沢薫氏は『王権誕生』で、「邪馬台国畿内説に立てば、文献史学では狗奴国は和歌山県の熊野・静岡県の久努・群馬県の毛野などが有力な候補」としながら、「伊勢湾沿岸」と

りわけ濃尾平野が有力視されている」としており、その根拠として赤塗の「山中式」という土器と、三遠式銅鐸を挙げている。奇しくも、結論は赤塚氏と重なる所在地だ。

時代を少し遡って、濃尾平野における遠賀川系土器と条痕文土器の分布から、伊勢湾西岸までは遠賀川系土器で、尾張一宮付近で混在が見られるが、その東や南は条痕文土器と明確に分かれている。この名残、西の渡来人系と東の縄文人系の人種間の差異が、列島において唯一表面化した地域と考える。

狗奴国は、伊勢湾西岸の志摩より北側の狭い地域と・尾張・三河・静岡西部に所在していたと思うのである。そうすると邪馬台国と狗奴国の戦乱の場合は、尾張一宮と渥美半島にその戦禍は残されている。

さらにもう一步、飛躍した考えを私は持つ。伊勢神宮の朝は、外宮に祀られている地方の神に食事を捧げることから一日が始まる。この地方の神とは狗奴国の王ではないかと、穿った考えを持つ。大和で敗れた大國主命は出雲大社に祀られ、狗奴国の王は外宮に祀られる。外宮というのが微妙ではないか。

『古事記』の征服の記録を見ていくと、隼人は征服された後、官命にも隼人将などが残り、南九州では薩摩隼人と誇りにもする。尊厳を立てながら、以降の共存を図るという手練が見える。この戦いの後、狗奴国の協力を得て、大和政権は一挙に東日本に勢力を拡大したと考える。

⑨ 邪馬台国について

吉野ヶ里遺跡は一九八六年の発見当時は、これが邪馬台国と言われたが、時代検証の結果『魏志倭人伝』の記述による時代より数世紀早いと分かった。九州には「山門」と書いて、「ヤマト」と読む地域が確かにある。だが日本初とはいえず、王権を握った国であれば諸国からの土器など、あるいはそれから発展した埴輪、特殊器台などがあろうと思うが、それが残っていないのが九州説の弱い所だ。

それに比べて、纏向遺跡からは大和・山陰・吉備・河内・近江・北陸・東海など各地の土器など、出土品は多彩だ。また一方で、水と火を使う祭祀の場もあった。地域首長を掌握する農耕儀礼の場や導水施設のある水のマツリの場などマツリゴト（政治）の舞台が造られ残されている。

同じ時代に造られた箸墓古墳でも、吉備で作られた特殊器台・特殊壺・埴輪が立てられ、墳丘の外側には四国東部の積石塚の様相があり、石材は河内の芝山から運ばれている。物と共に列島の各地から技術者の動員がなされた可能性も高い。

これまで北九州に本拠地を置くイト国が、古代日本を牽引して来たが、瀬戸内地方以東の国は警戒心を持っていた。イト国を盟主としない連合の枠組み作りが検討されると、イト国内でも外国の情勢は部落的な小国家では成り立たないことを見出し、互いが牽制し合う。

盟主の居ない、倭国の外交の窓口のない数年を、『後漢書』

は倭国大乱と記したのではないか。吉備・出雲・太邇波（丹波）など、イト国の青銅祭器支配に挑戦するかのような、大型墳丘墓を作り始めた諸国が主体となつて、大和に邪馬台国を成立させる。この場合、吉備でも、出雲でも、九州でもない場所が適地だった。大和政権は、こうして初の政権・邪馬台国成立の過程で、妥協と中庸を学んだと考えられる。

⑩ 女王卑弥呼と箸墓古墳

奈良県桜井市の箸墓古墳の一部周壕などの沖積状況と出土する土器のうち最下層の物は布留0式土器と識別され、二四〇～二六〇と推定された。これは卑弥呼の魏への使節派遣は景初二年（二二八）か三年、卑弥呼の死は正始七年（二四六）か八年頃であるから、土器と卑弥呼の死去の時期が同時代となる。さらに進んだ年代測定結果は、邪馬台国時代は従来の弥生時代の見方ではなく、古墳出現期に該当するという考古学界の見解が確立されつつある。これは『日本書紀』の神功皇后紀の記述にも符号すると『邪馬台国をとらえないおす』の著者、大塚初重氏は述べている。

さらに『日本書紀』には箸墓は第七代孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の墓と記されている。この姫はシャーマン的な能力を持つ巫女のように書かれているのも興味深い。第十代崇神天皇紀の中に、この姫は大物主大神の妻と記され、三輪山の神との神婚伝説もあり、墓の造営に「昼は人が造り、夜は神が造った」と記されている。箸墓の名は、箸に伝わる伝説から名付けられたとされている。

『日本書紀』は第四十代天武天皇の命を受けて編纂された。ずっと後の記録だが、編纂の頃に、そんな伝承があったのだらう。兎も角、箸墓の周壕土器が二四〇～二六〇年で、卑弥呼の死去の年代に合う。

当初は三角縁神獸鏡こそが、その鏡であろうと考えられていたが、その数が余りに多い。そして大きさや素材の違いもあって、列島で複製されたものも多いことが判ってきた。複製を作ったであろう石の型の発見は少ない。こんな状況から、油で固めた砂型が使われた可能性を私は考える。現在でも試作品などの製作に用いられる砂型は、細部にわたって精巧な複製が出来るが、その鑄型は残り得ない。

掘り出される青銅器は鏡面も、銅鐸も緑青と呼ぶ銅の変化により、輝く事はないが製作当時においては、錫の割合が多ければ白銀の美しい鏡面となり、物を写すことが出来たとされる。銅の比率を高めれば黄金色の輝きが得られ、銅鐸は輝いていたとされる。この検証実験もされている。古代人は羨望や驚異の目を持って、あるいは神の仕業と敬虔に崇拜したであらう。

⑪ 神話と鉄器

九州は鉄器の面でも優位だった。朝鮮半島から、鉄の製品として、あるいは鉄素材としてもたらされ、古代日本における分配の役を負っていたが、私はこれとは別に、新羅から山陰・越前から近江・大和へと伝わる、鉄鉱石からの精錬に始まる鍛冶生産技術があったとする主張を支持したい。大和の

遺跡からは、鍛冶生産で生じる不純物の鉄滓や各種の工具類の発掘がある。そしてこの地には鉄鍛冶に関すると思われる地名が連なる。

『古事記』に大穴牟遲神が須佐之男命の義理の息子になり、おおむねしのかみ 大国主命となり、すさのおのみこと 国造りを行う条がある。やがて東征軍に敗れ、国替えの話になるのだが、東征軍は朝鮮半島経由で優れた鉄器の装備が潤沢にあったのに、国産の鉄器は比較して劣性であった上に、補給にも時間が掛かったのではないか。初め優勢であった大国主命軍の敗北の理由は鉄の生産技術の違いと補給にあったとも考えられる。

『魏志倭人伝』を読み解きながら、ここまで日本最古の歴史書『古事記』の記述も参考にして来た。『魏志倭人伝』は、歴史学者末松博士が「まだ、印刷術の及ばない、伝写流布の：：単なる写し誤りや、脱漏衍入だけからも可なり本来の面目とは異なった、数種の異本が流布する様になっていたかも知られない」（元本のまま記述）と記述している。

私は言語の違う民が、稚拙な通訳を通して、同音異字にならざるを得なかった背景を持つ書であると決めて、同音異字や近い発音の探索をした。

箸墓古墳が造られたのは、女王卑弥呼の墓としてみれば年代が符合する。ここには列島各地から、陶器や石材などが運ばれ、積み石などからは、物品だけでなく技術を持った、労働者が派遣されていたと考えられる。纏向遺跡には火と水を使う祭祈の場や導水施設のあるマツリゴトの場があったのに

対して、九州にはそれらの痕跡はない。

こうしてみると、古代日本における、初の王権は大和に造られた邪馬台国しかあり得ないとの確信を私は持つに至った。

最後にこの文では、^{はしほか}箸墓古墳に触れることになった。古墳初期には見られなかった馬具が、中期の古墳からは急増する。これは大和政権が高句麗遠征の後、騎馬戦を経験し、騎馬の優位性を知った結果だとする説がある。少なくとも指揮者が馬を使うようになったと記してこの稿の終わりとする。

参考にした主たる書物

『邪馬台国をとらえなおす』大塚初重著 講談社現代新書

『幻の王国・狗奴国を旅する』赤塚次郎著 風媒社

講談社学術文庫『縄文の生活誌』岡村道雄著

講談社学術文庫『王権誕生』寺沢薫著

講談社学術文庫『大王から天皇へ』熊谷公男

列島の考古学『弥生時代』河出書房新社

列島の考古学『古墳時代』河出書房新社

日本・中国・朝鮮『東アジア三国志』田中俊明著 日本実業

出版社

『現代語古事記』竹田恒泰著 学研

『神社の起源と古代朝鮮』岡谷公二著 平凡社新書

『敗者の古代史』森浩一著 中経出版

『倭人伝を読みなおす』森浩一著 ちくま新書

平凡社東洋文庫「邪馬台国論考」橋本増吉著

『騎馬文化と古代のイノベーシオン』

(株)KADOKAWA「発見・検証・日本の古代」

(北区)

文学にみる小説の誕生

土居里華子

小説の誕生をめぐる

「言葉が、罪の概念を創った」と考えることがあります。その考えが芽生えたのは、世界史の教科書で見た、一枚の絵でした。それは先史時代に描かれたラスコーの洞窟画でした。

私は洞窟に描かれた牛や鹿の表現力の強さに惹かれました。それよりも興味が起こったのは、なぜ洞窟に絵を描いたのかという思いです。人々が暗闇の中で松明の火をともしながら壁画を描いている様子を、想像してみました。静物や風景を描くとき、私たちは対象と自分との間に距離を持って表現します。しかしラスコーの洞窟画が描かれた闇の環境を想像すると、距離というものはないのでは、という思いが生まれます。描かれた絵のどれもが、「傷痕」のように感じるのです。その「傷痕」を辿っていくと、そこに生きていた人々

の「願い」や「祈り」、「恐れ」というところに行き当たります。私はそこに、宗教的なものが見えるような気がします。ラスコーの洞窟画は、人々の内面にあるものを図像化したものと思えるのです。図像化することで人間が内面を認識していったということは、言葉の発生に近いもののようにも感じられます。人間は、図像化する行為をしながら、宗教的なものを獲得し、言葉の方に近づいていったのではないのでしょうか。

旧約聖書に『バベルの塔』があります。「バベル」は「混乱」を意味する言葉です。神は傲慢になった人間に、言語を混乱させました。言語を獲得していった人間が、その能力ゆえに神や自然を恐れなくなり、その報いとして『バベルの塔』の物語は書かれたと言えます。言葉は不完全なものとしてあると、人は知っていたのでしょうか。言葉の発生には宗教的なもの

のが深層にあり、具体的な形で旧約聖書などの書物が生まれたと考えられます。旧約聖書や日本の古事記などを読むと「神」の物語のように思われますが、「人」の物語のようにも感じるので。

『バベルの塔』で人間はまだ宗教の枠の中にいますが、次第に人間は神から離れ、言葉をつぐ意志のようなものを持ち始めました。人が人間の存在に強く惹かれた証拠が、言葉をつぐということなのかもしれません。そこには神の世界に縛られた人間ではなく、「自我」を持った人間としての姿が見えるように感じます。小説は、人間の思いの先に誕生したものであると思えるのです。

紫式部の『源氏物語』は世界最古の長篇小説と言われています。しかし、たった千年前の物語です。その新しさが不思議でなりませんでした。人間は宗教という枠の中で思考してきたからかと想像できます。その枠を超えて文学としての小説を書くには、長い時を経なくてはならなかったのかと。宗教から、「神なし」の世界へ、そして「人間」そのものへの関心が、小説の誕生だったのかもしれない。それは言い換えれば、神が与えた罪の意識を、「神なし」で、自らの意志で、知りたいという欲望を発見したのが小説だったのではないのでしょうか。

文学における罪

人間が「神なし」の世界を意識したところから小説が誕生

したとするなら、小説家はどんな意識と表現方法で「人間」を描こうとしたのか、興味が尽きません。

芥川龍之介とヨーロッパの作家、フランツ・カフカを素材にして、小説が持っている力と、そこにある「罪」の問題を考えてみます。

教科書に芥川の『羅生門』がありました。初めてそれを読んだとき、私は何かおぞましい印象を持ちました。読み直してみると、その印象よりも人間の持っているエゴイズムや、彼独特の文体に興味が湧きました。

芥川は初期のころ小説『鼻』を発表し、それを読んだ漱石は彼を評価しました。しかし、すべてを評価したわけではありません。「物語り類はシンプルなナイーブな點に面白味を伴ひます。惜しい事に君はそこを塗り潰してペタ塗りに蒔繪を施しました。」彼は言います。芥川は、文学に欠いてはならない「余白」を自らの作品から消してしまったのです。

漱石の『こころ』を読むと、どんなところにも、丁寧に人間の心のひだが描かれています。彼の文章を戸惑いや抵抗なく読めるのは、表現そのものがナチュラルで、人間の心をデリケートに描いているからだと思えます。感じたこととそこから生まれる世界を、情景とともに心の波紋として描いているのです。

芥川は、言葉が持っている美的な世界を意識した小説を残しました。彼は古典の『今昔物語』から幾つかの小説を選んでいます。その中で私は、『芋粥』と『鼻』を使って芥川の「人

間」への関心と、それと同じくらいに心を砕いた「美的文章」を考えてみることにしました。

「鼻高ナル者ノ、鼻崎ハ赤ニテ」。これは今昔物語の『芋粥』で表現されている五位の特徴です。では、芥川の『芋粥』はどうでしょうか。「五位は、風采の甚揚らない男であった。第一背が低い。それから赤鼻で目尻が下がっている、口髭は勿論薄い。頬がこけているから、頤が、人並みはずれて、細くみえる。唇は――」。今昔物語に比べ、五位の特徴が明瞭に書かれていることがわかります。「鼻」を読んでみても同じように、主人公、禅智内供の不格好な鼻が裝飾的に、強調されて書かれています。しかしそこに、『今昔物語』にあるような余韻は感じられません。これを漱石は「蒔繪」という言葉を使って、芥川を批評していたのではないのでしょうか。

漱石の『こころ』と芥川の小説には「罪」というものが色濃く描かれています。どちらも同じものに向かって、それを突き止めようとしていたのかもしれませんが、芥川は漱石とは違い、「罪」というものだけでなく「救済」を求めているように感じるのであります。

今昔物語の『芋粥』では、五位と利仁はほぼ同等に書かれています。芥川の『芋粥』では、五位が中心の物語として描かれています。『今昔物語』にはない、個人的意識のようなものが、芥川の書く世界にはあるのです。それは個として世界を見ることで、ひとりの人物をより効果的に表現しているようにも思えます。

芥川は、『芋粥』における「食べること」と、『鼻』における「身体」に強くこだわります。なぜ芥川は「食べること」と「身体」にこだわり、強調したのでしょうか。人間はひとつの欲望の中で生きる生き物です。五位は芋粥の腹いっぱい食べるのが夢でした。しかし、宴会で器に注がれている大量の芋粥を見ると、その食欲は消え失せてしまいます。

『鼻』においても、芥川は原文の『今昔物語』よりも極めて細かく、リアルに描いています。禅智内供の太い鼻は、上唇の上から顎の下まで下がって、異常なほどに膨らんでいます。人が熱湯をかけ、両足で踏み、一度は普通の鼻になったものの、数日後にはもとの不格好な鼻に戻ってしまうのです。強い欲望も、現実には与えられると空虚になってしまう心。このような、人間が不可避に抱え込んでしまう空虚な世界を、意図的に芥川は表現していると思えます。その空虚さは言葉を換えれば、「罪」への関心だったとも言えます。

芥川が、『今昔物語』から意図的に宗教的な作品を排除したのが「鼻」や「芋粥」だったという論があります。宗教にとらわれてしまうことで、表現できる世界が小さくなってしまふと、彼は考えたのかもしれません。大きくとらえていく世界の中で、人間の持っている表現の可能性を広げるのには限界があります。芥川はそんなものにとられずに、純粹に人間を描くことを望んだのでしょうか。人間の持つ複雑なものが見えにくくならないようにと。

芥川はある意味、裝飾的にならざるを得なかったと言えま

す。美的な感覚を多用することで、彼は文学の可能性と、人間が不可避に持つてしまう「罪」を乗り越えようとしていたと考えます。それらが重なり合い、細分化されることで、芥川独特の小説と「罪」の概念は拡張されます。それが、芥川の求めた心の救済であり、彼が自分自身の「弱さ」を見つけていくためのものだったのです。自分を理解するための方法を、芥川は文学を通して模索していたのかもしれない。

カフカと原罪

カフカの作品には、これまで読んだことのない不思議さがありました。

サルトルは「現代の、数少ない、最大の作家の一人である」と彼を称賛しました。人間が不可避に抱え込んでしまう「不安」と「出口のない世界」を、サルトルはカフカに見たからでしょうか。言い換えれば「方向性のない道」を、カフカに感じたと。サルトルは第二世界大戦の惨禍を契機に、「不条理」な世界を意識するようになりました。それは彼が、カフカの作品に親近感を抱いた始まりの瞬間ではなかったのでしょうか。

カフカの『断食芸人』の中で、断食し続けていることを褒められた断食芸人は、餓死する前に、こう言い残しています。「自分に合った食べ物を見つけないで済まなかった。もし見つけていれば、こんな見世物をすることもなく、みなさん方と同じように、たらふく食べていたでしょうね」と。私は

断食芸人のいう「食べ物」が、果たして空腹を満たすための「食べ物」であったかを考えてみました。

断食芸人は見張り人に監視されていなくても、決して食べ物を口にすることはありませんでした。それは、芸の誇りが許さなかったからだ。断食芸人は言いますが、ほかに大きな理由があったと思います。それは、彼の「心」の問題です。断食芸人は、断食をし続けることを職とし、いつか死が訪れることを知りながら、死をおそれていたのではないのでしょうか。言い換えれば、彼は「生きることに対する憧れ」を持っていたということです。しかし、彼には「食べたいもの」がなかった。それは自然の営みからの逸脱であり、神が与えたものを許容しない姿ではないでしょうか。断食芸人は、神によってつくられる「罪」への抵抗をしていたのかもしれない。

カフカの父親は、貧しい家に生まれ、自力で資産家となりました。その営みの反映からか過剰な自信家となり、カフカの作品を評価しませんでした。カフカはそんな父親に対して、屈折した思いを抱いています。「ぼくはあなたの意見をとても敬い、怖れてもいた」「あなたにとっては罪のないことが、ぼくには罪とみえた」。カフカが父親へあてた手紙からも、その思いは伝わってきます。それほどカフカにとって、父親の存在は絶対的なものだったのです。

傲慢とも思われる父親の姿とユダヤの神を重ねて、カフカの作品を理解しようとする人がいます。ドイツの思想家、ヴ

アルター・ベンヤミンです。「罰するものである父親は、同時にまた告訴人でもある。彼が息子を咎める罪は一種の原罪であるように見える」と彼は語ります。絶対的な神としての父親とカフカとの関係。カフカのどの作品にも、「巨大な力」に抵抗して、徹底的に打ちのめされる状況が描かれています。

小説『流刑地にて』に出てくる、「馬鋸」「製図屋」「ベッド」は死刑執行の判決を下すための機械の一部ですが、この機械は複雑かつ緻密に作られています。それに、とても奇妙なのです。囚人がベッドに横たわると、針がその体を突き刺し、文字を刻んでいきます。将校は旅行家に説明します。「十二時間のあいだ、だんだん深々と抉りこんで文字を刻みつけるのです」。機械が文字を刻みこむ操作は、ただの残酷な光景に思えますが、これは罪というものを記号化し、人間に罪というものを認識させているのではないかとも考えられます。なぜこの機械は、時間をかけて人を処刑してゆくのでしょうか。ここから窺えるのは、強い被虐性です。これはあの、傲慢な父を象徴するものだとも思えます。罪はないのに、罪を背負わされている感覚。それは「父親の前に出ると、とめどもなく罪の意識がこみあげてきた」と言ったカフカの心そのものようです。ベンヤミンは、「父親は罰する者である。罪は法吏を引き寄せるように彼を引き寄せる」と言っています。しかし、カフカの小説からは「巨大な力」に抵抗するような世界が窺われます。理不尽さの中で立ちすくみ、そして滅びてゆく世界を、カフカは冷静に描いています。この奇妙

な機械が、突然壊れだすように。「歯車は廻りながら『製図屋』のはしにきて——同じように次々と落下し、しばらく砂の上に立っていたかと思うとパタリと倒れて静止する」。この場面では、「巨大な力」は不完全なもの、喩えとしてであると、感じました。カフカは、神は人間を不完全なものとしてつくったと考えているのではないのでしょうか。

『断食芸人』や『流刑地にて』にはどこか共通した負のイメージ、言い換えれば被虐性のようなものを感じてなりませぬ。マイナーなものを受け取るカフカは、被虐性の中で生きていたのです。「罪はないのに罰はやってくる」。そうカフカは、手紙にも残しています。マイナーな世界を見ながら書くことで、彼が罰から罪を見出そうとしていたことが読み取れるようです。

カフカは表現することを通して、見えない大きな力に抵抗しました。物語がスムーズに理解されるよりも、されないことに向かって書かれているのが彼の作品です。「自分の小説には時間がかかる。それは誰も描いたことのない世界を書いているからだ」と、カフカは言います。すべてに意味があるように書かれたカフカの文章を、私はひとつひとつの言葉に立ち止まりながら読んでゆきます。それは「痛み」をかみしめながら読むことに似ています。

カフカは大きな力を外側から見るのではなく、内側に潜り込んで見ていました。彼は「痛み」を意識的に受け入れ、そこで生まれる世界を描いていたのではと思えるのです。文学

の持つている表現の仕方は様々ですが、そんな意味でカフカの文学は、私が今まで読んだ文学の中でも新しい感覚のものでした。

漱石、芥川、カフカは各々の表現で、罪というものが何であるかを切り開いてゆきました。それは、それぞれの作品がくれた恩恵のようにも思えます。人間とそれにまつわる「罪」と「償い」を見つめる契機を、彼らは私に与えてくれたと。

見えない罪と見える罪

『ヨハネによる福音書』でイエスは、ファリサイ派の人々に「見えなかったのであれば罪はなかった。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だからあなたたちの罪は残る」と言いました。彼らはキリスト教のいう「事柄」を理解していなかったにも関わらず、「見える」と言い張ったのです。「見える」ということは、視覚的に見えることではなく、濁った考えを消し、まっさらな目で世界を見るということです。

現代は、言葉にリアリティーを持つて文学に接しているのでしょうか。私たちの中にはファリサイ人のように、「見えないうのに見える」と思っている人が、多くいるように思えます。「見える」ということは、言葉の深くに意識がおりてゆき、そこに人間のコアを感じることで。しかし今、それができなくなっている。文学を通して人間を見つめるということが、機能しなくなっているのでは、と考えるのです。その原

因はどこにあるのでしょうか。

私たちは今、テクノロジーの進歩の中で生きています。インターネットやスマートフォンは今日、私たちの生活に欠かせないものとなりました。言い換えれば、言語が表面的に流れてゆく世界を私たちは生きていると思えるのです。言葉に対する感受性が曖昧になり、言葉が無機質になっていると。その理由は、大量の情報と消費を煽る操作によって本を読む、あるいは読まされていると直感するからです。それは、自分では「選び」、「読む」ことをしていると思っていますが、「物語」の中にある多様なところを深めず、ストーリーだけにとらわれているからでしょうか。「読み解く」ことを放棄しているようにも思えるのです。人間そのものへの意識が希薄になっているとも言えます。文学に携わる人たちの過酷とも思われる営為によって、私たちは「読む」という行為ができていないのに。

カフカの短編に「オドラデク」というものが出てきます。不思議な星の形をしたものが、階段を降りたり、動き回ったり、笑ったりする奇妙な小説です。

詩人の吉増剛造は、カフカの「オドラデク」について魅力的なことを言っています。「ペンヤミンはカフカの中の不思議な記憶の集合、結合だという言い方をして、それもおもしろい。それに反対したアドルノが、そうじゃなくてあれは商品社会における何かだと言ったというのね」と。そして吉増は「カフカはきつとオドラデクと名づけたときに別の言語

を發明した」のではとっています。ここから窺えるのは、カフカの小説は、多様性を含んでいて、「読むこと」を「拒んでいる」ということです。言い方を換えれば、カフカは私たちに「本当の読むこと」を「強いて」いるようにも思えるのです。

人は言葉を得ることによって「人間」への関心を深めてゆきました。小説の誕生は、人間をより知り、言葉を刻みたいという欲望があったからと言えます。

カフカや漱石、芥川龍之介の小説を読むと表現する欲望と狂気のようなものを感じます。彼らは表現することに衝き動かされる「罪びと」のようです。

私の目の前に何冊かの本が置かれています。本を開くと「流刑地にて」の一ページが目に残ります。論文を書き始めたころと今では、何かが違って感じられます。その感覚は、真っ白なページに刻まれた小説家たちの「罪の記憶」と、それに付随する自らへの強い「自意識」だったと思えるのです。そして彼らなしでは、私は人間という不可思議な存在に、触れることはなかったと。

《参考文献》

- 『聖書』 新改訳聖書刊行会訳（日本聖書刊行会）
高尾利教著 『ソシユールで読む聖書物語』（情況出版）
芥川龍之介著 『羅生門・鼻・芋粥・偷盜』（岩波文庫）

芥川龍之介著 『芥川龍之介集』（河出書房）
夏目漱石著 『こころ』（角川文庫）

『今昔物語集 五 新日本古典文学大系37』（岩波書店）
フランツ・カフカ著 池内紀編訳 『断食芸人』（白水ブックス）

『カフカ短編集』 池内紀編訳（岩波新書）

『絶望名人カフカの人生論』 頭木弘樹編訳（新潮文庫）

ヴァルター・ベンヤミン著 三宅晶子・久保哲司・内村博信・西村龍一訳 『ベンヤミン・コレクション』② エッセイの思想（ちくま文芸文庫）

吉増剛造著 『我が詩的自伝』（講談社）

（中区）

評論選評

中西美沙子

評論という文芸が今も存在可能であるとしたら、その根拠はどこにあるのか、時おり自問してみることがあります。

SNSの「進歩」によって言葉を丁寧に分けるものとする時代は終わったと、強く感じることがあります。そしてそれに迎合するような文芸が横行していることに危惧を感じています。

評論は論を為すべき「今」を見つめ、その「今」の問題点を切り拓くところに在るものだと考えます。言葉を換えれば、見えることを疑い、見えにくいものを拾い上げるといふ「執念」が評論を成立させているともいえます。

吉本隆明の「最後の親鸞」を読むと評論の意味が見えてきます。親鸞という複雑な精神に対して吉本は、親鸞に迫ろうとすることと同時に、自分の思考の限界を見つけています。「何かが足りない」「これで良いのか」と、彼は逡巡しながら論を始めます。自己欺瞞に陥らないところに言葉の力が生まれることを、吉本は示唆しているようです。それが本当の評論だといえるのです。

今回は5編の応募がありました。応募者のいずれの作品にも、「時代の劣化」に対する強い意識が窺われ安堵する心持ちになりました。

「邪馬台國は大和説」

歴史から私たちが学ぶことがあるとしたら、過ぎ去った時代と今を結びつけるところにあると思います。

筆者は「邪馬台國は大和にあった」という論を詳細に論じています。資料を集め、読み解き、論じているのです。論を為すためには、「熱い思い」と「冷めた目」が必要とされます。筆者の論を読むと究めて客観的な文体で、読むことを前に進めさせるものでした。特に序論である「稲作」と「邪馬台國論」との処に強く興味がわきました。

日本という国家の成立過程の一つに「稲作」が関わったのは自明なことですが、灌漑、埋葬の方法、城塞の形などを論ずることで、より古代日本の姿が鮮明に見えてきました。

筆者の古代に対する思いがこの論を為させたといっても過言ではないでしょう。ぜひ次の作品を期待しています。

「文学にみる小説の誕生」

近代小説の誕生は、宗教的なものに染まらないで、自らの意志で世界を把握することから始まったという論に、魅力を感じました。筆者はそれを「神なしの物語」と表現しています。

カフカと芥川龍之介という二人の作家が、小説をどのような自己のものとしたかが論じられています。とても骨組みが強く問題点に挑戦しています。芥川の間観察の鋭利さと美

意識との齟齬、そしてカフカの作品「流刑地にて」の中にある徹底した被虐性を読み解きながら、近代小説がどのように誕生したかという論に新しさを感じます。

カフカの小説はとても不可解で読むものを拒絶している感があります。カフカのどの作品も落としどころがなく宙吊りのままに終わっているのです。筆者はその作風の背景に、カフカを支配する父があり、その父はユダヤの教えそのものであると論じます。巨大な父性に羽交い絞めにされたものに対するカフカの自意識が「神なしの物語」であつたと。

筆者の意図は分かるのですが、やや突っ込みの浅さがあり、「小説の誕生」を推し進めるための作品に対する「読み解き」と「想像力」を深める必要があるでしょう。

「パスカルと仏法」

パスカルのパンセから仏教思想まで、様々な知識が総動員されていて筆者の博識には敬意を深くしました。

評論は学んだ知識を統合して一つの方向性に向かって論を進めることだと考えています。現代はデカルト的な合理主義にあふれています。その合理性が私たちにもたらしたものは、様々な負の形で表れています。

筆者が今の時代に深く疑問を持たれていることは、作品から推測できます。しかし筆者が意識しているものがどれだけ論じられているかというと、今ひとつ見えてこないのです。パスカルのパンセが抱いている時代的な意味を深く掘り下

げる方が、筆者の意図が見えてくるのではないのでしょうか。知識が表面的にならず、深く思想の根に根付いた作品が生まれることを期待しています。

「パンセの片言」

どうしても書き残したいという思いがある文章でした。批判精神も旺盛で、現代が孕んでいる問題を的確に捉えています。そして未来に対しての啓発もなされています。ですが評論としての骨格は、未だ形成されていないのが残念でした。日本の歴史を通して現代のあり方を批評する姿勢は評価できます。惜しむらくは、筆者の考えが時代の怒りからか、空転しているところでは。

現代の社会状況を冷静に見て論を為せば説得力のあるものになったと考えます。筆者が団塊の世代であることがこの論文に書かれています。自らの時代に立脚することで、描きたいものとしての論文が誕生するのではないのでしょうか。筆力も窺えるので再びトライされることを願っています。

戦後と現代を的確に表現した加藤典洋の「敗戦後論」と白井聡の「永続敗戦論」を読まれるのも、評論を為すためのヒントになると思えます。

「若者の皆さん、日本の戦争を知って下さい」

現代の政治家の姿勢に対し、鋭い危惧を抱いていることが文章から窺えます。その恐れとは、平和憲法が時に権力者に

よって疎外されつつあることの怒りでもありません。

現代の若者はその切迫した状況を知らしめることは、必要不可欠なことです。若者の多くは極めて保守色が強く、今進行しつつある強権政治にある種のシンパシーを持つてすらいるようですから。それは現状維持が彼らにとって、自分を守る事と考えているからでしょう。

さて筆者の論文を読んでの感想ですが、思いを書くことには、冷静な判断と文章力が求められます。筆者が考えを表現する為には、客観的な資料作りが欠かせないでしょう。

個人的には筆者の思いと選者の考えとは同じ地平に立っていると感じました。諦めずに書くことに励んでください。

随筆

〔市民文芸賞〕

芝生男のたわごと

北山七生

負け惜しみをほざく訳ではないが、我が家は築四〇年にも及ぶボロ屋敷だったが、幸い家の裏手には、芝生に覆われた一寸した広さの庭があった。

小生はここを『マイ・プライベート・グリーンガーデン』と勝手に称し、「俺には金はなくても、こんな素晴らしい庭がある」と、連日、ここで一人遊びに興じていた。

「ちえっ 何がグリーンガーデンよ。ただの原っぱじゃん」と、女房からは、ほとほと呆れられていたが……。

たしかに、一面、芝生に覆われているとはいえ、元々土手の補強の為に植える

ような荒っぽい種類の芝だったので、繊細なゴルフのショートパットの練習などには適さない。

それでも惚れてしまえば、あばたもえくぼで、小生は、このお気に入り芝生の上で、連日、雨でも降らない限り酒やつまみなどを用意して、『ひとりランチ会』、『ひとり宴会』を展開していた。

そして、そのメインの余興は、ギターを持ち出しての『ひとり熱狂ライブ』だった。

ギターは、それこそ半世紀以上も続けている得意の趣味だったので、クラシックタンロからシャンソン、タンゴ、カンツ

オーネ、カントリー、フォーク等の弾き語り、果てはハードロックまで、幅広いレパートリーを誇っていたので、未だ飽きることもなかった。

ただ近所に騒音をまき散らし迷惑をかけてはいけないので、クラシック、弾き語り用のエレアコギターから、ロック用のエレキギターまで、アンプを一切使用しないので迫力には欠けた。これが唯一、物足りないといえれば物足りなかったが……。

最近、これに加えて新しい遊びが一つ増えた。それはバット、グローブ、ボールを揃えての「ひとり野球ごっこ」だった。

芝生に仰向けに伏して、硬式ボールを思い切り空高く投げ、落下してくるそれを革グローブで「バシッ」と、まるで剛速球を受けたかの如く、わざと大袈裟に摩擦音を出してキャッチし悦に入るのだ。

次にチラシなどの紙屑を簡単に手で握り潰し、丸めた紙ボールを金属バットで

思い切りノックする。これも「カキーン」と良い打球音がして、まるで自分が強打者になったみたいで、スカッと気分爽快になる。そしてこれも勿論、この程度の音量なら近所迷惑にもならない筈だった。女房からは、

「よくもまあ毎日、一人で物好きなか、「そんなムキになってバットを振って、腰とか痛めて、年寄の冷や水ってことにならんでよ」と、これまた呆れられたり注意されたりしていたが……。



そんなある日、近所への散歩から戻って来た女房から、いよいよチクリ、いや、ぐさつと嫌味を言われた。曰く、

「あんた、車でさつと通り過ぎる人には解らんとと思うけど、ゆつくり散歩している人からは、あんたが庭で何をやっているか、様子が丸見えだに」と。

「えっ なんて。いちおう垣根もあるし、家の陰で、やってるだで、何も解らんなら」

「高く浮いてるボールが、道からすつか

り見えてるだに。だで、そこで変なことをやってるなあって、すぐに解るじゃん」

「うんっ 変なこと……」

変な事って、まるで物好きな変態扱いではないか。つまるところ、子どもならまだしも、今更、七十近くにもなつたくそジジイが、一人庭先で盆栽や花木の手入れ、はたまた家庭菜園ならいざ知らず、能天気な行動をしていて恥ずかしくないのか、みたいなニュアンスで言われたのだ。

更に、ここぞとばかりに、野球ごっこ音もさることながら、ギターの音も耳を澄ませば、道路の方までしつかり聞こえていたのだと告げられた。

「ええー 嘘だら。消音でやってるだで聞こえんなら」

「そんなことはないよ。シヤカシヤカ、シヤカシヤカ、耳障りだに」

よくバスや電車内で若者がイヤホンで音楽を聴いていても、ノイズがシヤカシヤカ漏れてきて、不愉快になることが

あつたが、どうもそれと同じ理屈らしい。

それでも気を取り直して云い返した。

「自分の庭だで、何をやっていようと勝手じゃん。好きな時に好きなことをやっつて何が悪いだよ。これこそ健康長寿の秘訣じゃん」

「あんたねえ、毎日、そうやって、一人よがりの好いたことばっかりやっつていと、早くボケるだに」

「しっ 失礼な。俺には夢中になれるものがあるだで、ボケる訳がないじゃん」

「それも物によりけりっていうの。あんたの場合は何時もワンパターンだし、そんな暇があつたら、もつと他に大事なやることがいっぱいあるらあ。それに、あんたのやっつてることは、世間との繋がりが全く無いじゃん」

たしかに、連日、テレビの健康番組などでも、専門の偉い権威だと云う学者たち、老いても常に世間への関心を保ち、他者とも繋がりを持ち続けることこそが肝要だと、盛んに喧伝している。

しかし、小生は今更そういう価値観こそ、もうまっぴら御免なのだ。日々、己の好きなことだけに打ち込み、他人にも世間にも無関心でいることの何と楽ちなことか。なまじ老いてこそ世間とは距離を置きたい。

仮に女房のみならず、「あのくそジジイ、毎日、芝の上でアホみたいに遊び呆けて、バカか」と、他人からの陰口まです聞こえてきたとしても、馬耳東風を貰うだけである。

(北区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

『市民文芸賞』

二十四年目の同窓会

犬塚賢治郎

ボートもやめた。短歌もやめた。新聞切り抜きもハサミが切れなくなつてやめた。写真もやめた。篠笛も音が出せずにやめた。車は売った。次回免許更新は多分できない。残ったのは成人病完全制覇の体と葉の袋。それからインプラントが四本。

聖地ベナレスに向かう巡礼者のような旅仕度をやっている。旅仕度は疲れる。たった一週間の旅行でさえ、息も絶えるかと思うほど疲れるのに、ずっと先までの旅の仕度は、アリゾナ炎熱砂漠をトボトボ歩くような寂寞の思いがある。ここ二年ぐらいい、パン焼き器にビデオレコーダー、ミニコンポが次々に壊れていよいよ気落ちした。

ハガキが届いた。「昭和三十四年中学卒業生同窓会のお知らせ」。もう案内は要りません、と二年前に書いたのに、辛抱強く送つて来たな、と少し感心する。なにしろ卒業後五十八年のことであり、「今更会ってハグでもないだろう」と欠席理由の思案をした。

最後に同窓会に出たのは二十四年前。あのときは皆、五十前、互いに仕事の愚痴やら自慢やらで盛り上がり二次会まで付き合つた。七十三歳の今はなんだろう。孫の自慢に病氣自慢か。ああ恐ろしい、私は内にも外にも孫がいない。「孫は期待しないでね」と子供に引導を渡されている。妻が同窓会に出ないのは、実に孫の話聞きたくない故だ。

近頃は何につけ、もう終りだなという思いがある。身内の年忌、新幹線の撮影、海外旅行。正座はできないし、朝起きが悪いし、飛行機が怖くなつたし緊張もする。あれもこれも、こつちから遮断するようになって来た。

気乗りしないでいたのに出席の返事を書いてしまったのは、『呼んでくれる内がハナだよ、これを最期にしたつていいんだし』。なるほどと考え直した。

会場のホテルについた。ここは奥山線の元城駅と軽便電車の整備工場があつた所で、通学路だった。荻村伊知朗と荘則棟が模範試合をしたカマボコ屋根の市立体育館がその南側にあつた。

カウンターの一番端っこ、十四組の受付に着かぬうちに声が掛つた。「ケンボウよく来てくれたね」「え、誰だおめえ、俺をボウ呼ばわりするのは」なに、声でわかつていたが、日頃の不義理の照れ隠しを言つた。永世幹事のハルノリだった。「トシボウも、さつきまで待つてたけど、心臓が悪くて夜は出歩けないと言って帰つた」という。それは済まないこ

とをした。

学年全部で七百五十名が同級生という大世帯、なかに生活保護受給者が三人いて、その一人が私。紹介してくれる人があつて二年生のとき東京に出た。知らぬ大人に混じつての丁稚仕事は、想像以上に辛くて、泣き言を書いては何度も級友に出した。励ましの手紙と干し芋やみかんを送ってくれた仲間の一人在トシボウで、今も年賀状の交歓がある、数少ない中のひとりだ。

会は物故者への黙禱で始まった。分かっているだけで百十名が亡くなつていった。会の参加者八十九名よりも多くの人々が既にこの世の人でない。

私の半年前に片方の目が急に見えなくなつた。五分ほどで回復はしたが、ずっと気になつている。同じころ喘息を発症して、子供のようには胸や腕にテープを貼ることになつてしまい気落ちしていた。

献杯で始まつた同窓会は、酒が進むにつれ、賑やかになつていった。かつては会長、社長、常務、理事長、調査役などと呼ばれた人たちが、みんな肩書きから

解放され懇談のひとつきを過ぐす。

私はビール瓶を抱え、ちらちらと物故者氏名の掲示を横目に見ながらテーブルを回つた。新聞のインタビュ記事が度々載つた人。タウン誌の同級生の交歓欄に載つた人たち、芸能人を奥さんにした人など、有名人のグループ。中でひとさわ元気なのは商店の経営者、葉種商、お寺の住職に医者、会計事務所のオーナーなど生涯現役を貫こうというグループ。開宴前から飲んでいた老人医療が専門のテツは、早くもテーブルに顔を伏せて寝てしまつた。ずっと前から何度も誘つてくれたトシヤスは会費の集計で忙しくて、落ち着いて席につけないでいる。

二次会こそ行かなかつたが出席してよかつた。『人はみな知らぬ齢を生きている』のだと改めて思つた。先々を考えすぎて、あれもこれも止めてしまつては、世の中面白くないではないか。思いがけず深酒をして、すっかりお気楽になつた。

重かつた心のふらつき、ゆらぎがするすると消えていく。帰りのバス停で、録り貯めのままだつた英会話番組を見てみ

るかと思へた。

二日後トシボウに電話した。意外と元気な声が聞けた。「また近くに行つたら寄るよ」と約束した。

一ヶ月後、私は妻と共に、簡易ビザ（ESTA）の取得など面倒な旅仕度をし終え、もう行けないと思つていた、グランドキャニオンへの旅に出た。

『身辺整理なんてやめろ、その時はその時さ、自分の足で歩けるうちが華なのさ』。同級生がそう教えてくれた気がしたからである。

（西区）

「市民文芸賞」

百円市

大橋よし子

平成七年お正月、去年の秋口から天候が不順で、冬野菜が次々と収穫が進み、年が明けてからは品不足になって高値が続いていた。

私の所では、家の直ぐ前にある畑で、少し遅れて植えたキャベツや白菜、大根が、好いぐあいに育っていた。

スーパーでは、キャベツが一玉二百五十円もしていた。

畑の横を通る人が「好いキャベツね」と、言いながら通った。

「お一つどうぞ」と言つてあげると、何倍ものお返しがきて恐縮してしまった。そうかと言つて市場へ運ぶほどの数は無い。何かいい方法は無いかと思つた。

「畑の横に台を置いて、一つ百円で売ろうかなー」

孫たちとおやつを食べながら、冗談半分に私が言つと、

「やりな、やりな。僕が宣伝してやるよ」
小学校三年生の上の孫の慎太郎が言った。

夕食の時、主人に話してみた。

「食べきれなくて腐らせてしまうより、好いかも知れないな。農協の生活指導員に聞いてみるよ」

さつそく話がまとまり、二、三日すると、『百円市』と書かれた、きれいな印刷物が届けられた。

それには販売日、時間、場所、がイラスト入りで書かれていた。

「おばあちゃん、僕、アパートやマンションの郵便受けに入れて来てやるよ。友だちにも話すよ」

慎太郎は直ぐに、自転車で配ってくれた。

販売日の朝、キャベツや白菜、大根などを袋に入れて台の上に並べた。

アツと言う間に売り切れてしまった。

「私の野菜も置かせてくれない」と友だちが言った。

「いいわよ。どうぞ、どうぞ」四人ほどが集まった。

こんなわけで、水曜日と土曜日に開くことになった。雨の日は、畑の横のピニールハウスの中で販売した。

お客さんが多くなって、どうしたものかと思つていた矢先、私の家の近くに農協の支店が開設されることになった。

その広場で朝市をしないかと言われた。

農協の女性部のクラブの一環として行えば、補助金も出るという事で、改めて部員を募り、部員も十五人ほど集まり『朝市クラブ』が発足した。

野菜を入れるコンテナや、お客さんが

使う買い物かごなども揃えた。

何でも一袋百円とした。袋には生産者番号を書いた。

ビニールハウスで、トマトや、早出しの野菜を作る部員もいて、種類も沢山揃った。

開催日も今までと同じ、水曜日と土曜日の七時からとした。もちろん、売上金は、農協に預けて、僅かであつたけれど、場所代も払うことにした。

初めての朝市の日、大勢の人が買いに来てくれて、大盛況であつた。問題も出た。

野菜の入ったコンテナを並べて、そこからお客さんに、自分の買い物かごの中にいれてもらい、時間が来ると販売した。すると、珍しいトマトや野菜は、取り合いになって、すぐ売り切れてしまう。後から来たお客さんからは「もう無いの」と、ブーイングが出た。

出荷の時間を決めても、早く持つてくれば、お客さんが待っていて、自分のかごに入れてしまう。出荷者も早く売れて

しまえば気持ちがいので、出荷の時間も早くなる。七時が六時になり、夏場は五時半頃持つてくる部員もいた。これだけは、私の携わつた十年間いつも問題であつた。

楽しい事も沢山あつた。

知らないお客さんとお話して新しい料理の作り方を教えてもらつたり、新鮮で美味しいと言つて下されば、やり甲斐があつた。

欲も出た。

忙しい中、何とか続いていた茶道、道具も欲しくなつてくる。さしあたり茶事に使う懐石道具が欲しいと思つた。輪島塗で揃えれば、百万円以上した。

一個百円の商品だと、一万個売らないと百万円にはならない。気が遠くなりそうな数字であつた。

しかし、単純計算して、一週間に出荷は二回、一回五十個ずつ出荷して、1カ月に四百個、一年間で四千八百個、およそ二年間で目標は達成出来ると思つた。この頃は、共働きの息子達から預かつていた二人の孫も、小学生になつて、手

がかからなくなり、母も元気であつたので、思いつき朝市が出来た。

主人も協力してくれて、休みの日は畑の土作りから、作物の世話までしてくれた。

お客さんが欲しがるもの、人があまり作らないもの、残品は処分して常に新鮮な物を心掛けた。

しばらくすると、お客さんが「十三番の野菜はどこ？」と言う様になつた。

十三番は私の生産者番号であつた。こうなると、残品は少なくなり殆ど完売であつた。

始めて一年と数カ月で、目標を達成することが出来た。

けれども、品物が沢山残る部員もいて、どうしても、品物が沢山残る部員もいて、どうしても良いかと相談し、農協のキヤッシュコーナーに置かせてもらう事になつた。

錠のついた金属性の貯金箱をコンテナにつけて、お客さんに、買った個数だけお金を入れてもらうことにした。無人販売である。

初めのうちは、売れた品物の数と、現

金がびったりあって、これは好い事を思いついたと思つた。

そのうち、現金の中に十円や五円が混じる様になった。千円以上も足りない時もしばしば出てきた。当番を決めて売るしかないと言う事になった。

キャッシュコーナーが開く八時半から十時半まで交代で当番をすることになった。私にとってこの二時間は貴重であつた。

二年ほど前から母の病気が再発し、手が掛かるようになっていた。当番はなるべく土曜日に代わってもらつた。

母の介護がより一層大変になつた頃、主人が団体の役員を退任して、私に代わつて朝市を始めた。

私は肩の荷をおろして、母の介護に専念することが出来た。

私にとつてこの十年間は、体は大変であつたけれど、作物を育てる楽しみ、それがお金になる、素晴らしい体験をする事が出来た。

およそ二十年前、手探りで始めた百円

市。

今はJAのファーマーズ・マーケットが、人気を集めている。その小さな小さな、火種になつたのではないかと自負している。

(中区)

「入選」

父の探し物

中津川久子

父が亡くなって二十年が過ぎた。最後の三カ月は声が出なくなったり、痰を詰まらせたりにして入退院を繰り返していた。

見舞に行くと、ベッドの上で胡座をかき、頭にはねじり鉢巻きをしている。思わず笑ってしまう。鉢巻きは、農作業をするときの父のトレードマークでもある。私を見つけると、よおつ、と言うように片手を上げて上機嫌だ。そして、いつになくよく喋る。

「南庄内みなしょうないと北庄内とどっちが力があるか」というと、村長がどっちから出るかなだという

「どうやら、昔の、となり村の合併問題が今のことと錯覚しているようだ。」

「大勢いるな。お前も早く行かんと、

婦人会の衆らが集まっているよ」

ナースセンターが役場に見えて、私が女房に映っているらしい。痴呆は確実に進んでいた。

ほどなくして、在宅医療に変わった。自宅のほうで、本人が落ち着いているという考え方である。しかし、病院の判断は、母や義姉あねが大変な負担がかかった。

様子を見に実家を訪ねてみると、奥から父の大声が聞こえてくる。

「忙しくてしょんないに、早く早くヤーイ」

母と寝室を覗くと、ティッシュの箱をちぎりながら、やたらと忙しがっているのだ。

「あー忙しいね、お父さん。でも、やつと片付いたよ」

私はとっさに、一緒になって忙しがってやる。父の顔がみるみる緩んできた。

「そうか、うん良かった。さあ寝まいよ」

「どうやら、夜なべ仕事でもしていたつもりだろう。」

三月に入ると、
「はくさんへ行く、はくさんへ」

と、毎日、口ぐせのように言っていた。

はくさんとは、となり部落にある白山神社はくさんしんじやのことと思われる。会話が自由になつてきたので、周りの者が判断するしかなかった。

「やっぱり、はくさんと言ってるよね」
兄や姉たちと口をそろえる。

「そうなのう、わしもそう聞こえるだよ」
母と私たちの聞こえ方は同じだった。

そんなある日、はくさんへ行きたい一心からか、寝床から這い出してきて外に出ようとしているのではないか。すっかり

痩せ細った父は、もう言うことも難しくなっていたはずなのに。どこに、こんな力が残っているのかと思うほどに、みんなの手を振り払った。

「そう、はくさんへ行きたいのね。じゃあ、今から行こうか」

訪問介護師さんの静かな問いかけに、
「うー、ぐおつ」

「そうだとやわんばかりに表情をくずす。ふたりの介護師さんの厚意に甘えて、白山神社に車を走らせた。」

「うっ、うおっ」

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

次々と飛びこんでくる景色に、身をのり出して声を上げる。しきりと指さす方向が白山に当たっているのは、偶然であろうか。

白山神社は車で五分。神社の前方はどこまでも田んぼが広がっていて、後方は小高い山や、竹やぶに覆われている。今では神社や寺で遊ぶ子はほとんどいない。

「お父さん着いたよ、白山だよ」

木々のはざまに観音さまが見え隠れしている。

「おう、おう」

窓に顔を押しつけて、全身で喜んでい

る。
「ほら、あれが観音さまだよ。拝もうか」
介護師さんに促されて、父の節くれだつた両の手がしっかり合わさった。私たちも做う。父は拝んだ後も、あっち、あっちという素振りでも境内の奥を指さすのであった。

白山行きを果たした満足からか、その月末にあっけなく逝ってしまった。九十一歳の大往生だ。それにしても、な

ぜ白山神社なのかが疑問に残った。母に訊いても分からない。

葬送が一段落すると、ひとり白山神社を訪ねてみた。いや、父に導かれたと言ったほうが正しいのかもしれない。四月の声を聞いたというのに、まだまだ風の冷たい日であった。

「あつ、あれだ」

思わず叫ぶ。神社の裏山に、濃いピンク色の山桜を見つけたのだ。ほっそりとした幹に、小ぶりの花がしがみつくようにして咲いている。咲いていなければ見落してしまうだろう。

「そうか、山桜だったのか」

ひとしきり風が立った。ざわざわとした中に、おうおうと父の音がする。

「お父さん、お父さんね。今、ようやくあなたの探し物、見つめました」

靈魂はしばらく梢のまわりをさまよって、すーっと、山の奥に消えていった。

(南区)

「入選」

家族の足を洗う

ほりうちよしひろ

夏のある日、ラジオで、親の足を洗うといいと言っていた。

「親の足か」考えてもみなかった。一度はしてみたい、洗わせてくれるだろうか、どう声をかけをすればいいのだなんて思う。

「なぜそんなことをするのか」と聞かれはしまいか。相続に有利なようにと思われるのも嫌だと、事を起こす前から考えてしまう。

親子であっても、なんとなく疎遠であった。

それにはわけがある。

実家ですつと空けて、まるで放浪したように生きてきた。親には説明せずにいることに気まずさや後ろめたさが先に立つ。

親の足を洗うこと。何だか未知の領域である。やらないでいるより、やってみよう、そういう思いが強くなった。親の足を洗うために実家を訪ねることにした。

昭和元年に作られた実家は大黒柱がある。黒光りし、格子戸は重々しく茶色だ。裏張りされた障子紙をより白く際立たせている。今時は珍しい風格がある。

土間の奥、昔、私が子供の頃には、東南の位置に風呂場があった。檜の風呂、今で言う浴槽である。洗い場はコンクリート仕上げ。その上に簀の子が置かれていた簡易なものだった。裸電球で、風呂場はうす暗く、普段は寒い場所だ。夏には水を張り西瓜を冷やすのが風呂の役目のひとつだった。

しかし、いったん、薪で焚きつけ、湯気が上がり出すと様子は変わる。すうつーとした鼻に通る爽やかな檜の香りが風呂場から広がり気分が安らいだ記憶が残っている。

檜の桶の肌がぬめぬめとしていたこともあった。思い出深い風呂場の匂いや感

触である。

今は、実家も改築され、土間はおさ上げでフローリングになり廊下となった。風呂場も、タイル張り、浴槽はステンレスである。

私にとっては、あまりなじみのない、入ったことのない今どきの風呂場である。

七十の後半になる母に声をかける。

「風呂場へ行って」と言う。

「何かね」と聞かれた。

とにかく行ってほしいと伝えた。まずは、風呂場に入れたので第一関門通過である。

「ここに座って」と洗い用の椅子に座ってもらおう。檜の腰かけ椅子も、プラスチックに代わっている。

あつげにとられていた母だった。何か考えてもいるようにも見えた。足を洗わせてもらいたいという意思がわかったかのようにだ。進んで足を出してきた。

丁寧にズボンを膝までまくり上げる。親の服や体に触れることは、離れていた自分には何だか不思議な感覚である。

母親の足をじっくりと観ること、触ることすらこの歳にして初めての経験である。

母の足は、ゴツゴツしていて、逞しい感じがする。色は少し茶色。「これが、おかあさんの足か」そう思いながら、抱いていたイメージとのギャップを感じていた。

大地を踏んでいるというような力強さがある感じだ。

女性の足というのはもっとふんわりしているものかと思っていた。そのイメージはあつざりとくつがえった。

近くには石鹸が置いてある。やはりボディシャンプーより石鹸が合う、しかも、牛乳のような匂いの石鹸が合う。私は石鹸を手につけ足の甲も念入りに洗ってやる。そうしていると「ほれ、これも」と言つて軽石を渡された。久しぶりに見た使い込んだ少しいびつになった軽石だ。

遠慮のない母の性分は大好きである。もう少し、この時が続いていてほしいと思った。

数分で母の足を洗い終わる。照れくさそうに「ありがとう」と言ってくれた。

これで、私は、やることをし終えたと思っていた。

「しまった」と思った。近くで様子を見ていた父が「俺のは」と言ってきた。

「わかったよ」と返したが、父には声をかけていなかった。

なんだかばつが悪い。

これが八十を過ぎた父と五十後半になった私の距離感なのだ。

私は、平然を装い、「お母さんの次は、お父さんだよ」とつさに嘘をついてしまった。

つた。

父の顔をまともに見ることが出来ずいた。

洗用の椅子に父を座らせる。

父の足は、予想に反してふにゃふにゃとしている。林業関係の仕事をしていた父の足は、山を仕事で歩き回っていたであろう、昔はきれいなふくらはぎがあり、遅しかつた。若い私の足よりきれいなものだろうらやましくも思っていた。今はどうだ。細く、ふくらみも無い。

糖尿病のせいか足も力なく白さも薄く感じた。

父は満足そうな顔をして「ありがとう」と言ってくれた。私は、嬉しかった。

親の足を洗い終え、私はほっとした。ちよつと善いことをした気分でもある。

この年まで親の足を触りもしなかったことに不思議な感じがしていた。

親子であっても、触れることは少ない。いっぱい子供の頃は触れられていたはずなのにと思った。

少し自分の中のわだかまりが取れたような気分でもあり、この調子と思い、実家とは離れている借家に帰宅した。

家に入るやいなや、妻にいきなり「足を洗おうか」と切り出した。

すんなり「やって」の言葉を期待して声を掛けたのだ。

間髪入れずに「何考えているの。やめて」と返された。ちよつとショックだった。

せっかく両親のところまで、いい気分だったのに、やっぱり妻は、もともとは他人さまだと自分に言い聞かせた。

妻とは仲は良いのだと知っているが、

押しつけに思うのか、ご機嫌が良くなかったのかはわからない。

夜になった。

食事も終え、二人でくつろいで、いつものようにテレビを観ていた。我が家は狭く、低い椅子に横に並んで座るようにしている。

妻がいきなり言いだした。「足を揉んで」

大そう栄養のよい丸太のようなふくらはぎが私に向けられた。

「ああ」と私は力ない返事をした。

これが我が家の現実であると思った。妻のふくらはぎを揉みながら日中の親の足を洗ったことを思い出していた。

きつと年数が経てば、妻は足を洗わせてくれる日が来るのだらうと思う。その時は、どう声をかけようか。そんなことを考えながら、妻の足を揉み続けた。

あれから数年経ち、母は父の逝った歳を超えたが元気で踊りや外出を楽しんでいる。

私は、相変わらず妻の足を揉んでいる。

(東区)

「入選」

スマートフォンと私

阪口佳寿子

「おばあちゃんには解らないと思うけど。」

「うん、分らないと思うけど……なに？」
ある日、近所に住む高校生の男孫と私とでこんな会話が始まった。そして彼は、宇宙のブラックホールのことを私に解りやすいように言葉を探しながら話してくれる。うんうんとか、ふーんとか相槌をうつ。

以前聞いた事があるような……ないような……などと思いながら丁寧に聞く。宇宙に関して特に関心もないし、今の生活に必要なもの。そんな私に解ることはないのだけれど、孫とのこの時間が愛おしくてたまらない。

そんな頃、手持ちのスマートフォンに不具合が起こり、買い換えることになっ

た。それなら新しい機種に、という流れになり、前々から、娘も孫も自分たちのと同じ機種のがいいと勧められていた。その機種が頭をよぎる。若者たちと同じでは、七十代の私がついて行けないだろうと躊躇しているところであった。

お店の方にそんなことを話し、相談にのっていただくと、即座に

「今まで使って来れているのだから心配ないですよ。使いこなしているご高齢の方がたくさんいらっしゃいます。」

と言ってくださった。それでもまだ恐るではあったが孫と同じ機種スマートフォンに変更した。大げさに言うと、清水の舞台から……の境地ではあった。

さて、それが大正解となった。何か理解不能なことが起きると孫が来るのを待って教えて貰える。設定して貰える。以前使っていたスマホでも、教えて貰う、設定して貰う、ということは何回もあった。しかし、同じ機種になるとその作業がとてもし易くなると思うのだ。お蔭さまで通話は勿論、メール、ライン、写真、

インターネットで簡単な調べもの、目覚まし機能等々使える。

それでも、何かあるごとにいちいち孫や娘に聞くのは、自分にとっても不便だけれど、当の孫たちにとっても、顔にも声にも出さないけれど、うるさいと思うことがあるだろう。自助努力をしようとして、パソコン教室の「モバイルコース」なるものの受講をした。

すると、あるわあるわ、こんなことができます、あんなこともできます、こんな機能が付いています、と、際限なく、と言ってもいいほど出てくる。

講師の説明を受けながら、今は必要ではないけれどあったら便利かな、と思うアプリを二つ三つダウンロードしてみた。

そのひとつに「乗換案内」がある。出掛けた先でこれがあつたら便利だろう、と思つて入れてみた。けれど実際は、手持ちの紙の時刻表を見ている。

また、「マップ」に関して言えば、元々入っているものに加えて「○○マップ」にはこんな機能が付いています、「△△

マップ」にはこんな機能が付いています、と、それぞれ特徴を掲げ、優柔不断な私を誘う。なにしろ、講師の方がポチポチと操作をすれば、立ちどころに隣の市にある私の「実家」にも、東京駅地下一階にある「銀の鈴広場」にも、イタリアの「コロセウム」にも行けてしまうし、その辺りの風景・様子までもが見られるようになっていくのだから…。

ある日、用事で東京へ行くことになった。わざわざ東京へ行くのだから用事を済ませた後一泊して、かねてから一度行ってみたいと思っていたところに行くことにした。あの宇宙飛行士の毛利衛さんが館長を務める、「日本科学未来館」へ、である。

パソコンで調べて、ホテルを出てから乗り継ぐ路線、時刻などをプリントアウトし、大事に持って出掛けた。ただ、このスマートフォンをもっとスマートに使うことができれば、プリントアウトなどしなくても、その場で検索すれば立ちどころに出てくる、ということはあるの

だけれど、悲しいかなその機能を使いこなす自信がない。講座で教えて頂いた手順を思い起こしながら、たどりながら、スマホの操作をしても、時間ばかりかかってその内疲れてしまう。そうなるのが分かっているから、予めパソコンで調べてプリントアウト、をしてしまうのである。

せっかくだがいくつかのアプリをダウンロードしたけれど、私の場合、現実にはなかなか思うようにはいかない、ということを再確認してしまった。

電車を乗り継ぎ、無事にたどり着いた「日本科学未来館」では、一日ひとりでゆったりと楽しむことが出来た。予約したシアターも観られたし、件のブラックホール関連も見、聞き、してきた。悲しいかな、今、頭の中には何も残っていないけれど…。

それでもまだ、このスマートフォンのもっている機能のほんの僅かしか使えていないだろう。もったいないけれど、今の私にはこれで充分である。アナログな

時代に生まれ育ってきたのだから、デジタルな機器もアナログに使用して自分なりの工夫をしながら過ごして行ければと改めて思う。もともと、メカに弱い私がこれらを使えること自体、上等とも言えることなのだから。

私が孫にしてあげられる宇宙の話と言えば、暦を片手に、「今日は旧暦十五日で十五夜だけれど、今月の満月は十六日となっているから明日が満月だよ。今日だって充分丸いけど明日はもっと丸くなるんだね」くらいのことしかない。

しかし、孫のために私にもできることがある。それは、「今日も、帰りにおばあちゃん家に寄るね」などと、ラインが来たときである。私は待つてましたとばかり、ウキウキと夕餉の支度を始める。孫の好物と、栄養バランスなどを考えながら。あ、スマホを使って献立を決める時もあることを、追記しておこう。

(中区)

たかはたけいこ

ゆるやかに、確実に

応募作品を読みながら、こうして時代はゆるやかに確実に変わっていくのだなと、しみじみ考えた。書き手の多くは高齢者になった『団塊の世代』の人たちだったからだ。両親の死を、自らの死を、受け止め、こうして書き残している。生きることはなにか、死とはなにか。確実に近づいている死を受け止めることは、自分の生きてきた道を振り返ることでもある。いままでの時間、これからの時間。それらを刻むのが『書く』という行為だ。

市民文芸賞
芝生男のたわごと

自宅の庭でひとり時間を過ごす老人の、日々の暮らしは痛快でもある。他人様の目などどうでもいい。自分が納得し、楽しめればそれで善しと、割りきり、開き直っている筆者。あっぱれである。

二十四年目の同窓会

趣味を次々とやめていく筆者のもとに中学の同窓会の案内状が届く。気乗りしないまま、出かけて、かつての学友たちとそれぞれに歩んできた六十年の人生を確かめる。「生きるとはなにか」をまた、私自身が考えさせられた。

百円市

二十年前、家庭菜園で野菜を作っていた筆者が通り過ぎる人と会話を交わして、畑でとれた野菜をあげた。いわば地域のファーマーズ・マーケットへの先駆けであった。人と人とのつながりの大切さ、続けていくことの大切さを教えてもらった。

入選

父の探し物

「はくさんに行く」と言う父を連れて、『白山神社』に行くと、安心したのか父は亡くなってしまふ。葬儀の後に、筆者は父に導かれるように『白山神社』に出かける。そこで見たものは、父と来た時は咲いていなかった見事な山桜だった。亡くなった父と筆者が重なる情景がありありと浮かぶ作品に仕上がった。

家族の足を洗う

家族の足を洗うといいと言われた筆者は久しぶりに実家を訪ねて、両親の足を洗う。ふたりに感謝されて帰宅して、次に奥さんの足を洗おうとすると、ピシヤリと断られる。親子、夫婦のそれぞれの絆の結び方が違うことがわかる秀作。

スマートフォンと私

スマホを買い替える時、娘と孫が同じ機種を使っていることに気づいた筆者は、同じものにする。この発想が実に柔軟かで賢い。同じ機種なら不具合や仕様のたいいのは対応できる。だからこそ七十代にして、スマホを活用できている筆者なのだ。

詩

「市民文芸賞」

星を砕く

高澤海玲唯

私は星を砕いた
小さな槌に力をこめて砕いた
青い星の内側
そこにはすべてがあるはず
きつとひまわりよりも輝かしく
きつと冬の銀河よりも美しく
きつと青い鳥よりも鮮やかなはず
星の破片は一つ一つが矢となり 剣となり
いつしか私を深く深くつきさしてゆく
砕かれた私は星の一部になれるのだ
ようやく辿りつけるのだ

素敵な何かがありますように
私を救ってくださいますように

いつしか槌がひしゃげて
私は星を砕き終わった

そこには

冷たい地面があるだけだった
砕かれていたのは

私のまっさらなままの心臓

私は静かに横たわる

骨は雪景色よりも輝かしく

血は果実よりも美しく

肉は朝焼けよりも鮮やかなはず

いつかまた槌を持ったひとが現れて
星を「己」を砕くなら

私はひとを救えるだろうか

〔市民文芸賞〕

妻に捧げる

田中貞夫

六月二十八日朝

早々に病院へ向かった。

激痛にたえて

車の助手席に座った

妻の横顔はゆがんでいた。

二度と再び

助手席に乗ることはなかった。

夏の日

さるすべりの白い花が

はらはらと散って

妻は逝った。

盆も過ぎた頃

医師より癌であることを告知された。

私と妻と二人で築いて来た人生が

音をたて、崩れ落ちた。

医師の説明も上の空で聞いていた。

それは私一人では支えきれなかった

その夜娘と義姉ねえさんに、癌である事を

涙声で告知した。

夏の日

さるすべりの白い花が

はらはらと散って

妻は逝った。

八月一日朝もやがあけて

熱い太陽が照りつける

朝九時妻は逝った。

少し前

妻は最後の力をふりしぼるように

私の目を見つめて

呼吸はしだいに

弱く小さく静かに閉じた。

夏の日

さるすべりの白い花が

はらはらと散って

妻は逝った。

(中区)

「市民文芸賞」

ジグザグ

ジグザグ

竹内としみ

ジグザグ ジグザグ

ふらふらと

ゆらゆらと

真つ白な頭と

空っぽな心と

真つ直ぐ流れる赤い水と

浮遊する肉の塊と

それだけを感じて

手を伸ばす

足を踏み出す

ジグザグ ジグザグ

きゅんきゅんと
ぐりぐりと

飛び込んできた色で頭を染める
突き刺さった棘で心を攪拌する

燃えさかる熱の塊で赤い水を逆流させる
ついには肉体をもバラバラにする

そうして見えた世界は

誰のものでもない

私だけのもの

進むことをやめたとき

深い沼の底に沈殿し

もがいても、もがいても

黒い藻がからみつき

やがて

消えていくひとつの魂

だから

歩みを止めず

ジグザグ ジグザグ

迷い
惑わされ
それでも進んだ先に
私の求めた世界が待っている

(中区)

「入選」

無題

内山文久

温かい 海のなか 微睡む
須臾 激しい雨音 雷が誘う
— 歓喜に震えたのだろう
— 希望に燃えたのだろう
岸に向かつて 夢中で泳いだ
浜に這い上がる アジサイの花の香りがした

「ふぎようふぎよう」
翻訳すれば「産んでくれてありがとう」
生まれた瞬間 そう叫んだのだ
応えて 父さん母さんが言ったのだ
「生まれてくれてありがとう」
でも 知るはずもないあかんぼう

初め二個だった 卵とおたまじゃくし
父さんのいのちと母さんのいのち くつつき生まれた
でも 違ういのちなのに どうしてひとつなのだろう

「入選」

父さんはどこに 母さんは どこにいるのだろう
 父さんでもないような 母さんでもないような
 おまえは いったい「誰」なのだろう
 でも 両親は言ったのだ 「僕」だと

新世界の扉

清泉陽子

— 思い起こせば 初めの頃から 随分大きくなっていった —
 「僕」そのものが大きくなったわけじゃない
 食べ始めたのは赤い 生あつたかあい流動食
 そいつはめちやめちや栄養がある
 一年もたたない間 おまえは元の身体の二十億倍
 三千グラムになっていた

温かい 海のなか 微睡む
 須臾 激しい雨音 雷が誘う
 — 歓喜に震えたのだろう
 — 希望に燃えたのだろう
 岸に向かって 夢中で泳いだ
 浜に這い上がる アジサイの花の香りがした
 生まれた時 とても嬉しかった
 でも嬉しいだけじゃなかったのだ 息をするのも辛かった
 「誰か」が「僕」になったのだ

(中区)

物心ついてから四半世紀
 組織の中で働いて収入を得た分
 給料天引きで偽りなき納税
 ビジネススーツとエプロンは
 仕事と家庭の両立の象徴
 シーンごとのモードで武装
 明るく染めたショートヘアも身だしなみのうち
 くたびれた感は厳禁の御法度よ
 幼き時代を経て半世紀がすぎると
 頭頂部と生え際に白がそよそよと加わる
 ヘアマニキュアが入ると
 いい具合のブルーがきれいに見えた
 昭和中期の子ども時代に見ていた
 日本のおばあさんというものは
 たいてい白髪の頭に

小さなおだんごを結っていた
黒っぽい地味な着物の衿に
折った手拭いをしゃんと掛けて
上っぱりというものを羽織って
家仕事の合間には表に出て年寄り仲間と
ワシヤカシヤワシヤカシヤ喋っていることもあった

婦人の地位が今よりどれだけ低くても
言いくるめられて生き方を強いられても
太平洋戦争を生きぬいてこられたのは
町じゅうにいた高齢女性すなわち
どこの家にもいたおばあさんたちの底力あればこそ

青く流れる髪は好きだったが
終わりなく染め続けることに限界を感じた
やめよう 自然のままに加齢を受け入れよう
羊水で育つマゴベビーに直面するまでに
無理を手離そう
グレーヘアはやわらかいいろ
きつきつの際のなさは捨て去り
笑うばあちゃんに変身するのだ
昔見ていたおばあさんの世界に
とうとう足を踏み入れるときがきたよ

老いじゃなく豊かでふくよかな加齢めざして
行こう できるだけゆつくり

(南区)

「入選」

時間の意識

高柳龍夫

海を抱えながら動いている地球
時間に従い
一瞬の停止もなく
変化を続け
生き物すべて地球で生きている
変化の速度はそれぞれで
たとえば金属なら酸化の速度
高温ほどその反応は敏速で錆び
たとえば動物なら移動の速度
小型動物ほど動作は機敏で短命

速度の変化は重力として体感させて
時間の経過を知らしめる

等速度であれば自覚することは不可能

雨あがりを待っている午後

退屈の極みは

振動さえ無くした静止感

それでも地球が動く限りは

時間の流れはとめどない

生命は力強い呼吸

体は大きく成長し

発達する鋭敏な感覚

旅先における驚きの出来事

鮮やかに躍動する肉体

年齢を重ねるほどに気付かぬうちに

低下していく歩行と思考回路の速度

一日とか一年とかも

感覚的に短縮していく出来事時間

そんな生物時間にかかわらず

地球時間は万物を崩して流して

引き寄せ押し返す

夢をみていない

もしくは夢を忘れてしまった

睡眠状態においては

意識がない

依って時間は存在しない

光もないし物質もない

意識だけが時間を認識する

過去は頼りない記憶に埋もれ

未来は期待の代名詞

(西区)

〔入選〕

森羅万象

浜名水月

歌人知らず

涼しさに休む風越え富士見える

富暮山に鶯が鳴いた

群生する林のツル草に露落ちて

新たな緑の新芽が風に咲く

吹く風は時に優しく温かく

春が冬の扉を開けて

時に厳しく冷やかに

吹き抜ける風は

谷から山へ 山から谷へ

森羅万象

すべての風が

我が五感をなでまわす

背筋に流れた汗を

緑の風が 颯爽とぬぐいさる

山路は七曲り

さわやかな風が

獣道に行く男の肉体を

森羅万象

はるか昔 山伏が

戦国武将が

野望に満ちた男の肉体は

冷たく透き通って

緑の闇に 影となり

風に運ばれて行った

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

人間五十年 下天の内をくらぶれば

夢まぼろしのごとくなり

一度生を受け 滅せぬ者あるべきか

紙虫食うともわすれまじ

死のうは一定の世なれば ばば殿おじゃれよ 朝ねもくたさ

れ 夏の夜は短く

夢枕 あげやらぬ間の 仇情け

森羅万象 水に洗われた

白骨は、貧富の差なく 誰も風に舞う

(西区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

『一期一会』 感謝』

早川奈美江

人と人との出逢いは偶然で必然
本来に逢いたい人と

巡り逢うのはとても難しい

人・物・風景

出逢いのひとつ ひとつ

どんな出逢いも

出逢うことに意味がある

今年20年ぶりに同窓会に出席した

久しぶりに再会した恩師

クラスメイト 部活の仲間

私の中学時代は

必ずしもいい思い出ばかりじゃないけれど、

大人になった私はもうあの頃とは違うんだ

今が、幸せならいいじゃないかと思う

中学時代にタイムスリップして

懐かしく楽しい時間を過ごした

もう、逢えなくなってしまう人もいて
淋しいけれど

出席して良かったとそう思えた

今、この時、この瞬間は一度だけ

『出席して良かった。』

そう思わせてくれた仲間と

この再会に素直に感謝している。

何も変わらない日々と

当たり前過ぎる時間

いつも支えてくれる家族や

友人 仕事仲間

そのすべてはかけがえのない宝物

同じように感じたり

同じように見える瞬間でも

同じものはひとつもない

今、あるすべての出逢いに感謝しよう

生まれて来てくれた

出逢ってくれた全ての人に

(袋井市)

〔入選〕

砂時計

水川 亜輝羅

〔南区〕

半年間も事故で入院した折にこれがあった
ならば 過去を振り返り 再にも未来に対しての希望を抱きて
退屈せずに日々を送れた
ものをと 思った 私にとっては
小宇宙である

ガラスの半球をつなぐ細い管を上部の砂が
通り抜けて落ち出すと砂時計が動き出す
上部の砂が失くなると砂時計は静止する
下半球のガラスの器の下に砂が溜っているのは静止
ひっくり返すと砂時計が動き出す
それで 分単位の時間が計れる
砂時計が静止しても 時そのものが止る
訳ではない 瞬時の時の経過が見られる
時を眺められるとは砂時計の持ち味でも
あるうか 器をひっくり返す単純な動作に
よって 時が見えるとは楽しいものだ
砂時計を操る動作が宇宙につながっている
気がする 今日を生かされている自分を
意識する時 感謝の念を憶える
何時どこで求めたものか 誰に貰ったものか覚えがない
薄いほこりを被り 本棚の隅にあった砂時計 何かを話しか
けて呉れた

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

詩選評

埋田昇一

詩が「詩」であるための条件は、言葉に詩的発想があるかどうかにかかっている。詩的発想とは普段は見慣れている風景の中に、ある時「驚き」を発見した時である。例えば庭の隅に蜘蛛の巣を見たときその素晴らしい形に驚く。また、蜜柑をみたときその瑞々しい色や艶に改めて「驚いた」時などである。

「主題」は無数にあるともいえるが、読んだ時には言葉が正確でなければならぬ。

第一位 「星を砕く」

星は槌で砕けるような物ではない。星には生成と消滅がある。

星が消滅する時異常に膨れ上がって遂に爆発する。その際星の破片は宇宙に広がる。地球上の元素はこの破片から成る。作品は比喩としてこの破片が私の中を突き刺していく。

砕かれていたのは私の真つ更な心臓。私はこの作品に素晴らしい新鮮な発想を感じた。

第二位 「妻に捧げる」

亡くなった妻は、娘と義姉さんに癌であることを涙声で告知した。私と妻の二人で築いてきた人生が、音を立てて崩れ落ちた。作者はその心境を「さるすべりの白い花がはらはらと散った」と表している。詩のもう一つの要素は人間の真実を描くことである。作品はこの好例であると云えよう。

第三位 「ジグザグ ジグザグ」

「ジグザグ ジグザグふらふらと ゆらゆらと 手を伸ばし足踏み出す」作者の生き方が、ここに集約されている。「迷い惑わされ、それでも進んだ先に求める世界」に明るい希望を見出す。

その他 「森羅万象」「一期一会」感謝」「新世界の扉」「砂時計」「時間の意識」「無題」の作品に感銘を受けた。

短歌

〔市民文芸賞〕

夢に來し笑顔の君は若きまま何も言はずに傍に佇つ

中区

内藤久仁茂

君はもう居らぬと夢に目覚めたり鼓動と聞きし雨垂れの音
憧れは残照のごと胸を染む蘇りくる遥かなる日日

流れつつ飛行機雲が崩れゆく叶へられざる夢消ゆるごと

幾許のいのち残れる 遠き日の夢もろともにわれは死すらむ

貫之も小町も下書きしたろうか三十一文字をためらいながら

中区

鈴木 利定

凜としてひとり静かは秘めし花群れて咲いても静かさひとつ
遠州灘に浜昼顔は咲き揃い波音潮の香止むことのなし

春立ちて歩みの先に芽生えたる露の薑食む今朝の味噌汁

絵手紙を描きてポストに入れし音ポトンと君をノックする音

漠然とあしたもあると信じてる電波時計の秒針見つ

西区

岡部

政治

立秋にカエルと虫の合唱を夜間透析の帰りに聞く

胆のうも腎臓もなき透析者見た目変わらぬ誤解がうれし
 老いという見えぬ魔物が着実に吾に近づき吾をむしばむ

奥会津湯岐ゆまたかまたひのえまた二岐ふたまた桧枝岐ひのえまたつげ義春よ今何してる

西区

野島

見司

昭和村昭和のままの朝が来て農夫草刈る早苗田の畔くろ

只見線一両列車鉄橋渡る対岸かくし川霧昇る

すつぽりと盆地をおおう朝霧に仏都会津の秋は深めり

葬儀終え安堵の後の寂しさよロウソクの灯の揺る先を見る

中区

石黒

實

夫亡くも土は命と凍天に母は畑に鍬を振るなり

凜々と冬の夜空は厳しくも強く生きよと北斗七星

梅が咲き猫柳の芽もふくらみて過疎の里にも春はまたくる

「入選」

南区 赤堀 進

初春ハツハルの回転扉の向こう側半透明の君に手を振る

うすらいを高くかざして登校の子等は朝日にさしあげて行く

例えば初めの恋は白だった今は深紅シレンクの葡萄が好き

中区 安藤 圭子

食堂がコンサートホールに早変わり瓶の小豆も波音になる

♪ひやさーさーいやー♪声のびやかに歌う人宮古島出か吾がヘルパーさん

わが町に軽便列車がありました昼は授乳に一駅乗りき

北区 伊藤 順子

背伸びしてなお手を伸ばし君を恋う花火の光あとを追う音

ケータイにゼロとイチとで届くのは君の本音と強がりのウン

地を這って強き命をつなぐ花寄りかからず到他を排さずに

北区 伊藤 美代

作品は五百有余の並ぶ部屋四季彩堂に初日を待ちぬ

集大成一期一会の姉弟展最初で最後燃え尽きた夏

キリキリと我が身泣きだす最終日長く短かき五日間なり

南区 太田 静子

言われたる自己責任の言の葉は突き放される寂しさのあり

増やさないつもりでも増えてくる財布のなかのポイントカード

やめますと約束をした君なのに何故か草煙の匂してくる

中区 畔柳 晴康

白木蓮曆に負けず蕾をば膨らめており春を微笑む

菩提寺の咲き誇りいる長藤に石の仏も笑み浮べおり

雨降りて妻は無言で墨を擦る午後のひと時静かなりけり

浜北区 澤木 辰子

三岳山懐の川名の初夏は山百合咲いて時鳥なく

物見遊山鎧橋から福満寺へ井伊の史跡巡りはじめ

ひよんどり思い浮かべて福満寺夕暮れて寺内人影もなし

南区 鈴木美代子

朝餉前の姑の決め事ポータブルトイレの始末と入れ歯つけをり

玄孫らも集まり来るとふお祝に何はともあれ仏壇磨く

救急車に運ばれし事も忘れをりまつたりと居る陽射しを浴びて

中区 戸田田 鶴子

久し振り知人集いてわが庭の月下美人の芳香に酔う

わが庭の籬に咲いた実葛万葉偲ぶ真赤な実生り

誰か来て誰かが帰る山の寺茜の空に鐘の音渡る

中区 猫田 伸

霧雨がまだ降り止まぬ夕刻の千木ちぎが支える空に大虹

一斉に燕立ちたる巣に下がる草を静かに揺らす朝風

大花火轟きながら幾重にも山懐やまふところに吸い込まれたり

南区 袴田 成子

谷間に鎮寺の杜あり棚田あり久留米木の風涼やかにあり

「仲直り、タッチしてね」と孫は言うママとばあばの些細な喧嘩に

「四時までね」義母の介護に携わる友は気の急ぐ午後の語らい

中区 山本 勝彦

花つければ命の終わる宿命の竜舌蘭が高みに
咲いた
うぐいすのプリマドンナに出会いたり尉ヶ峰
ゆく林道のわき
軒下でホバリングする燕らよそこはやめとけ
新築の家

西区 渥美 進

古の尾藤主膳の墓發見深き眠りの中に菊手向
けたり
浜岡の河津桜に君が居て揺れる黒髪潮風かお
る

南区 あゆのつか碧

のどかなり秋葉の山のふもと村うぐいすの声
山にこだます
秋葉口天竜またぐ大橋に思い出される渡船の
頃が

中区 内田 一郎

補聴器をはずし耳たぼそつと採み無事な一日
の渋き茶啜る
時として保護観察の少年の天使のごとき眼ざ
しを見る

中区 内山 文久

母十二歳じゅうに戦あかぎれの手に水灌ぐ心ならずも出でし
奉公
大戦後さかい辺境の集落むらに雑貨屋始せむ貧ひとしき人々に
赤字覚悟で

東区 岡本 久榮

峽にみる雪降る宿の露天風呂石に浸みたり赤
き湯の香は
格天上の広間より見る諏訪の湖雪降る中に小
舟の舫ふ

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

天竜区 恩田 恭子
 「内村航平」吊り輪に挑む緊張感われの背中
 も汗になりたり
 十二年に三十五校閉校す「蛍の光」のなんと
 重かり

西区 加茂 智子
 風吹けば蝶舞う時の訪れて人皆詩人になつてしまふ
 蜂蜜の蜜と秘密の蜜の二字似ているのはね甘いからだよ

西区 河合 和子
 小さき嘘そつとたたみたる胸の裡日傘をかざし菖蒲田めぐる
 青春を岳やまに魅せられし杳き日の甦りくる八月の雲

中区 川上 啓子
 来年もきつと帰ると言いだせず只手を振る子
 バスは遠のく
 傘杉の傘の穴から夏が降る百の青空百の夏いろ

中区 川上 とよ
 大声の声の団結運動会男八人百足競走
 青空の日射を浴びて走り行く町別りレー力の入る

中区 川上 勝
 炎天を墨継ぐよふに登りきて目指す傘杉あと百段
 参道の帰路の中ほど岩清水一段ごとの足の軽さよ

浜北区 川島百合子
母からの手織紬は五十年今日も着て行く茶道
の稽古
異国より働きに来る若者に日本語教え心を学
ぶ

中区 阪口佳寿子
夫からの預かりものの幾つかを娘らに渡せば
役目が終わる
七十余年生き来てやつと分かりたりもつとや
さしい道もありしを

中区 倉見 藤子
月祀る被爆の友と菊酒に果つるともなく来し
方語る
枯蠲螂網戸に一夜すがりゐて今朝はいづこに
秋雨しとど

中区 坂口 ちせ
彼岸此岸分かつところは見えぬままゆつたり
と消えゆきし送り火
カラカラと銀杏炒りて憂さはらすカラカラカ
ラとカラカラ淋し

東区 K · I
突然の天に召されし亡夫の背^{せな}想い日ながに吾
を忘れむ
初生りの無花果赤く天仰ぐ植樹の亡夫に如何
に届けむ

中区 清水 紫津
洋髪にネットの帽子身につけてモガを装う母
の若き日
ソフト帽黒きコートに身を包み白マフラーの
モボの我が父

北区 清水 孜郎

「生活凶画事件」境遇悲し菱谷氏「組織的犯
罪処罰法」暗き成立（菱谷氏 菱谷良一氏）
8、5歩打ちし藤井の目をぞ読む一二三の感
性鮮やかかなりし

中区 新谷三 江子

うつらうつらの夢にまみゆる友だちの如何に
在おすや消息皆無
足腰は弱りたれどもしやんとして電子辞書手
許に九十五歳

中区 鈴木 和子

ノルウェーのフィヨルドの山切りたちぬ太古
の氷河の力伝わる
九条に守られきたる七十年声小さくも署名に
託す

浜北区 竹内オリエ

紅くれないの薔薇の花束胸に抱き古稀の祝いの喜びに
染む
必要とされ捺印す吾であり責任覚ゆ強く生き
なむ

中区 手塚 みよ

冬瓜を中華味なる冷やし汁昼を振る舞うシル
バー会に
ステージに「南国土佐」を合唱す手作りのバ
ラ胸に揃えて

中区 寺田 久子

実家解体庭に座れる鬼瓦吾れ亡き屋敷如何に
なるらむ
痛い辛い言えば十指に余りあり全部封じてラ
ララ トレモロ

週延べで千二百余のボランテニア来年も又と
 再会誓ふ
 他人のために使ふ時間が命だと日野原語録
 百五歳

中区 鴛多 健

配達にバイクに乗りし四十年「どうてん」のごと休
 みつつ歩く
 ジオラマは家族の集う卓袱台に一汁一菜切干
 しの皿

中区 中村 弘枝

高知の友の賀状に肺気腫病みしとうボンベに
 点火し飛んで行きたし
 あせれども手も足も出ぬ我卒寿思ひ知ったか
 と神の声聞く

東区 内藤 雅子

大棟に二羽の土鳩のよりそひてたかぐもる午
 後何を語るや
 廃校となりたる庭の桜木の花あふれるて直に
 静もる

中区 中山 和

おばあちゃんと言われることもう無くてエア
 ーポケット見つめていただけ
 仏前で孫の写真に語る時私の声はとても優し
 い

中区 中村 照美

粘土持つ手の震えたる昨日今日まだ製作の意
 欲は失せず
 梅の咲く里に夏には蛍舞う翁嬸や静かに暮す

中区 平野 旭

北区 藤生 好則

老妻にモーラステープ貼ってやる医師の診断
五十肩とは
キリン死す病理解剖学生の眼教授の手元^{しよげ}悄気
る飼育員

中区 松浦ふみ子

姑の髪を洗へば「いくらかね」最初で最後の
冗談言へり
あくまでも蚊取線香にこだはつて部屋の数だけ
けブタが残りぬ

浜北区 峯村友香里

四歳がひとつの真理を知って泣く「ママがお
ばあちゃんになっちゃいや」
子と作る三時のココアもいけれど夜にはひ
とりラム入り紅茶を

東区 宮澤 秀子

野菜屑埋めたる畑に芽吹きたる南瓜の蔓はぐ
んぐんと伸び
相槌のほど良くひびく語らひに心開きて時を
忘るる

中区 宮本 恵司

冬の瀬に灰色の鳥立ちつくす瑞穂の国人あを
さぎと呼ぶ
浅き瀬に青鷺二本の脚に立つ水面ひかれば影
の映らず

中区 柳 光子

取り壊し終わりに狭き離れ跡祖母の膏薬の匂
いも失せぬ
姉の母妹の母そのあわいあたりに淡くわたく
しの母

西区 谷野 重夫
 佐鳴湖の天空焦がす大花火ドドンとドンと余韻残りぬ
 海原のシラス漁船は波の下うねりは高く見えて消えたり

天竜区 リコリス
 赤が咲き白も咲いてる曼殊沙華あなたと再会たいピンクのリコリス
 また今年君に会いたい涼しげに雨に打たれたリコリスに指を

浜北区 山下 晏義
 晴れてよし降りて又よし吾が人生晴耕雨読の気ままな暮し
 蛸の声降りしきる無言館無念の想ひ館内に満つ

北区 あひる
 九十代の恋話し聞く私も乙女の心持ちし熟女

西区 吉野 歌織

浜北区 飯田 たつ子
 裾までも富士が見える日^{おろが}拝みて浜松の地に安かれ祈る

屋上で君と探して見た星はどんな場所でもすぐに見つかる
 行き先も知らぬ手紙の封筒に切手を貼った指の冷たさ

中区 伊熊 保子
 今日一日無事に過ごせる仕合わせを明日も元気にリハビリ励む

踏みしめて雪降る街を歩きつゝラッピングと
言う 雪の像見ゆ
浜北区 池 蜻蛉

この坂は我が体調のバロメーター足の運びと
呼吸の具合
中区 石井 泰子

宇宙とは広がり続けているらしい壁で隔てる
国を尻目に
中区 石原 一郎

私は痛む人の言葉の通路 「苦海浄土」を書
きたる人が
中区 石原新一郎

古希迎ふ年なればこそ月一度カラーマニユキユ
アソバージユ仕上げ
西区 伊藤 米子

初夏の浜名湖畔の宿の夜兄弟会の楽しい宴
南区 井浪 マリエ

中秋に喪中ハガキを整理する七十二、三で去
る者多し
西区 犬塚賢治郎

マンションの窓から見ゆる浜松の秋も深まり
並木色づく
中区 今駒 隆次

浜北区 岩城 悦子
アリゾナの海に蛍の舞ひければリメンバーパール
ハーバー撞きし鐘

浜北区 青海 まち
ふるさとへ連れて帰つてと繰り返すほそき母
の手ぎゅつと握りくる

南区 内山 智康
柳川の川岸の柳も色付きて舟ゆるやかに水郷
下る

南区 大庭 拓郎
残されし絵手紙どれも美しく添え書き温しか
みさんの文字

南区 太田あき子
散策は日課となりて今日も又日暮れ早まる空
見上げつつ

中区 岡本 蓉子
夕やけや妹の手を引き母を待つ幼き頃の思い
出めぐる

天竜区 太田 初恵
緑蔭の四阿に酌み集へるは団塊戦士リタイア
謳歌

中区 織田 恵子
シャンソンを仏語で習ふ楽しみはピアフ モ
ンタン シヤルトレネよ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

天竜区 恩田 利子
病室で見たいと願ひし故郷の山に無言の叔母
の帰郷

南区 加賀の人
ブランコとすべり台へと一目散うしろ姿が
どんだん遠く

南区 影山 ふみ
かぜふけど百日草ヒヤクニチソウは身をまかせ屈身運動つか
れもせずに

中区 加藤貴代美
痩せたいと言つてる私努力せずご飯を残しケ
ーキを食べる

南区 カモメン
永年の希望待ちつつ年重ね初孫抱けば溢るる
涙

東区 川合 妙子
ひ孫らで野球チームかサッカーかチーム結成
夢に見るなり

中区 河田 琴栄
ただ君の「木枯らし吹くよ」の一言に冬がは
じまる気がしている日

東区 北島 はな
これあげるもみじのような手の平に丸い石こ
ろ珠より光る

中区 木下 文子
「風あるね」「涼しくなった」それだけの会話を交はす日々の平穩

中区 小林 和子
「日本人は」と言はれしときに弾かれし吾と思へり君は日系

東区 清川 真帆
栄養士なって感じたこの想い家族を想う母のようかな

東区 紺田みどり
届くかな入道雲を足で蹴り幼少思いブランコ揺らす

南区 久保 静子
繁栄の時は過ぎたり廃屋の解体の音淋しく響く

西区 近藤 茂樹
この頃は旅する前に足腰へ五臓六腑へしかと打診の

北区 後藤 とも
野良仕事いつも行き来の坂道に夕焼け映えて影法師踏む

天竜区 サウラ
憧れのそのマウンドで球投げる君汗光る輝く笑顔

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

東京に故郷の言葉捨てしより吾人生は地を離
れたり
東区 寒風澤 毅

我が娘古き遺跡を追い求め送りし母の気持ち
知らずや
南区 小 百 合

穏やけき時の巡りに感謝して温もる土に苗を
植えゆく
西区 柴田千賀子

定年で早朝歩く人が増え同じ時刻に違ふ顔触
れ
南区 白井 忠宏

出 額うなずきし君の項うなじに春はるの風想かぜおもい出ださるる遠おとい思おもい
中区 不知 火

戦死すな捕虜となりせば命絶て言いて母上声
上げ泣けり
南区 杉山 勝治

振る舞ひも面も豊かに唐物からものの茶入れ清むる
八十八歳
東区 鈴木 壽子

君ゆゑのわれのあること生あるこそふたたび
娶る今日は乾杯
浜北区 すすきとしやす

悩みごと抱えたままに花に向き笑顔の我に氣
付てわらう
北区 鈴木 弘子

遠足の園児等の声去りしあと動物園に午後の
日過ごす
東区 ストロベリー

死ぬときはどうでもいいと言うように
蝉のかたちは仰向け多し
中区 高橋 紘一

路線バス大きな文字で「直虎」と宣伝しつつ
走り行く秋
中区 高橋 幸

外は雪便りとだえて甦る木曾の山里友よいか
にと
中区 高山 紀恵

黒いほど緑濃き葉のホウレン草孫は美味いと
爺の喜び
北区 滝澤 幸一

風が木を梢を揺らす日暮れどき一葉となつて
揺れて揺られて
浜北区 橘 珠々音

妻逝きて過ぎ日の旅呼び戻す社より望む琴平
の街
中区 田中 貞夫

北区 出原 依美
どんぐりがあつたと喜ぶ小さな手秋のおとず
れ五感で感じる

中区 鳥井 美代
祖母の歌一首にひかれ歌の道たどり始めし孫
一人あり

南区 中村 淳子
三世代通いし園の藤棚に実のあまたあり風に
ゆれおり

南区 永井 真澄
長雨で唯一の晴れ間自転車で床屋病院行つて
来ましたよ

東区 長浜フミ子
墓参り生家に寄らず友の家代が代われれば遠い
故郷

浜北区 野中 睦己
若き時代^{とき}学びし校舎今はなく思い出の地に残
りし表門

浜北区 橋本まさや
擦れきれしブルージーンズを笑いつつ年甲斐
もなく試みに穿く

西区 浜名 水月
夏鳥が三岳山越え直政出世の門出松源寺なり

揚羽蝶傍らに舞ひ離れざる甥の嫁逝き明日三
回忌
浜北区 浜 美乃里

バスを待つ立位置たついち同じ通勤の人影のびて秋風
の吹く
中区 飛 天 女

酒好きの兄弟姉妹それも良し宴長々と夜は更
けゆく
北区 平井 要子

雑踏を流れる靴はそれぞれが歴史をきざむ大
河のしづく
湖西市 廣岡 楓

とりどりの花と野菜育てつゝ八十路となりて
冬を迎えむ
中区 堀内八重子

パン焼きがレシピ通りにならなくてこんがり
焼けたパンをじつと見る
中区 前田 繁喜

夜が更けてコウモリ騒ぐ暗がりと祭囃子の
響く町中
天竜区 松本 和樹

祭りの夜階段の下で待つ君に遅れてごめん
と謝る僕
天竜区 三 日 月

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

南区 水川あきら
社掃く巫女見当らず落葉舞う人影もなき神の
留守なり

東区 村木 幸子
曇天の湖面に人も船もなく黙すが如き今日の
浜名湖

天竜区 森坂 芳喜
夢の中かつての友と再会す夢より覚めて涙す
る朝

天竜区 森のうさこちゃん
名前呼ぶ振り返った時胸が鳴り上手くしゃべ
れず君がほほ笑む

北区 山田 文好
オヒシバの繁るを刈れば虫が鳴く汗まみれな
り諸行無常は

中区 吉川 愛
大好きな本の中で出会ってから自分の名前が
胸に灯る

中区 米澤 寿鶴子
賣れ残る二年続きの日記帳迷いて買し九十三
才の暮

中区 和久田 俊文
朝ドラにちよっぴり泣いて笑ってさ今日も一
日主夫のはじまり

短歌選評

村木道彦

今年の応募作も、写実派・言葉派（フィクション派）・そしてこの二つの要素を兼ね備えた作品など幅の広い作風が見られた。次の五人の方を本年度浜松市民文芸賞に推す

夢に來し笑顔の君は若きまま何も言はずに傍らに佇つ君はもう居らぬと夢に目覚めたり鼓動と聞きし雨垂れの音憧れは残照のごと胸を染む蘇りくる遙かなる日日流れつつ飛行機雲が崩れゆく叶へられざる夢消ゆるごと幾許のいのち残れる 遠き日の夢もろともなわれは死すらむ 三首目「憧れは残照のごと胸を染む」と詠い、五首目「遠き日の夢もろともなわれは死すらむ」といい、自らへささげる鎮魂の歌にほかならない。切実な作品は読む側の人々の居ずまいをただす力を持つものである。

貫之も小町も下書きしたろうか三十一文字をためらいながら凜としてひとり静かは秘めし花群れて咲いても静かさひとつ遠州灘に浜昼顔は咲き揃い波音潮の香止むこととなし春立ちて歩みの先に芽生えたる露の臺食む今朝の味噌汁絵手紙を描きてポストに入れし音ポトンと君をノックする音 一首目「貫之も小町も下書きしたろうか」、意表を突く巧みな語り口に読者は作品の世界に誘い込まれる。五首目「ポトンと君をノックする音」、軽快な旋律がこの方の持ち味。

漠然とあしたもあると信じてる電波時計の秒針見つつ立秋にカエルと虫の合唱を夜間透析の帰りに聞く胆のうも腎臓もなき透析者見た目変らぬ誤解がうれし老いという見えぬ魔物が着実に吾に近づき吾をむしばむ 三首目「誤解がうれし」に作者の屈折した心理がうかがわれる。

奥会津湯岐ゆまたまたのえまた二岐松枝岐つげ義春よ今何してる 昭和村昭和のままの朝が来て農夫草刈る早苗田の畔ほとり只見線一両列車鉄橋渡る対岸かくし川霧昇る すつぱりと盆地をおおう朝霧に仏都会津の秋は深めり 一首目「つげ義春よ今何してる」とは暖かい言葉かけた。そして四首目、あえて「仏都」と言上げた作者の想いを大事にしたい。

葬儀終え安堵の後の寂しさよロウソクの灯の揺る先を見る 夫亡くも土は命と凍天に母は畑に鋏を振るなり 凜凜と冬の夜空は厳しくも強く生きよと北斗七星 梅が咲き猫柳の目もふくらみて過疎の里にも春はまたくる 前三首の持つ厳しさとは視点を変えた風景が、四首目に置かれることによつて懐の深い連作となつた。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

全身で地球掘るごと牛蒯引く

浜北区

松本 重延

夏雲にキリンの耳を見失う

中区

澤木 幸子

棒稲架立つばきばき乾く稲の束

南区

鈴木 秀子

亀の子に万年といふ未来あり

東区

田中美保子

冬峰の大往生の日向かな

西区

山崎 暁子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

水仙や明治の母の佇まひ

浜北区

岩城悦子

鳥渡る野鍛冶の飛ばす火花かな

天竜区

鈴木利久

直筆の子規の横顔歳旦帖

東区

平野道子

鬼やらひ泣いたあの子が鬼になり

中区

小楠恵津子

天皇のゆつくり歩く終戦日

西区

池田智子

「入選」

さつま諸戦後は遠くなりにつり

浜北区

松本 重延

残月や宴のあとの虚空かな

黄落の大判小判降ることし

脊柱のギコギコと鳴る冬の星

中区

澤木 幸子

鍋ひとつあれば男の夏料理

遠ざかる私の中の敗戦日

遠雷や習ひ始めのバイオリン

嬰兒の爪透き通る良夜かな

掴む手にどつしりとあり稲を刈る

南区

鈴木 秀子

守り継ぐ一徹者や稲を刈る

先頭はすつぽり隠れ芒原

螻蛄のうす翅見せて飛ぶ構へ

東区

田中美保子

のら猫の爪をかくして日向ぼこ

しほり水引いて山家の春仕度

くるぶしのそはそはと待つ春の音

閉店の貼り紙ひとつ晩夏光

野の息吹すべて集めて風光る

西区

山崎 暁子

少年の未来まつさら夏燕

宿坊の固き枕や虫時雨

天竜区

鈴木 利久

涼しさや橋の下には橋の影

黒猫の尾のふれて散る萩の花

転びさうで転ばぬをさな檀の実

新涼やシャツの釦に海の色

引越しの荷を解く庭に石たたき

貧者の一灯無月の街を明るうす

浜北区

岩城 悦子

ぐいと引く初紅鬪志漲らせ

東区

平野 道子

松手入我は正座で相対す

控めな女先生鉄線花

寒波襲来鉛筆の芯固かりき

秋麗やちりと根付の金の鈴

蛍飛ぶ記憶の奥へ分け入りて

子規庵の庭に佇む時雨の来

市立ちてお国言葉や朝時雨

中区

小楠恵津子

花会式法螺の響きに包まれり

暗がりに急ぐ靴音冬めける

稚魚跳ねて水輪重なる夏の暮

西区

池田 智子

コップから水滴流る夏の昼

秋深し満ち潮に浮く巖島

夜明け前師走の月の孤高かな

この苦さすこぶるよろし路の臺

北区

安間あい子

紙風船つけばかそけき秋の音

他曖なき話しあれこれ蕎麦の花

遠景に富士をいただく寒日和

南区

井浪マリエ

訪うよりも訪われる暮し百日紅

マドンナの鏝広黒き夏帽子

連れ立ちて浴衣の少女束髪

晩年の父の存在籐寢椅子

以上、市民文芸賞受賞者入選句

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

春キヤベツ光遍し競りの市

南区

大田 勝子

待ちに待ちし産声聞けり今日の月

中区

大村千鶴子

秋耕のいつしか影の深まりて

四世代うまく嘯み合ひ若葉風

霜降りの蔬菜豊かに育ちけり

グッピーの盛んに生まれ新樹の夜

乾物の匂ふ軒端や寒日和

今生に誇りと悔と盆の月

中区

大平 悦子

中区

小楠 勝代

日の欠片食みて一日花むくげ

秋葉路は我のものぞと蟬しぐれ

飾らぬを美徳とするや石路の花

今宵咲く月下美人を見にゆかん

冬みうらら埴輪も笑ひ踊るなり

除夜の鐘つきゆく人の声はずむ

先生も家に帰ればちやんちやんこ

扁額の薄れし寺や春隣

算数は苦手外好き風光る 北区

梶村 初代

蓬萊橋のここが真ん中冬青空 南区

金田 みき

七色の帽子駆け出す春野かな

また一つ沢に流れし落椿

雲の峰夢のはみ出す子の日記

あかときの鳥語あふれし牽牛花

「温まるに」ぬく 椀たつぷりと冬菜汁

産土の家なき跡や草の絮

中区

勝田 洋子

東区

川口 八重子

まがる指そろえて庖丁研ぎし祖母

短夜の夢の余韻を持って余し

祖母の背を麦踏むように歩みたり

山帽子被りて山の風情かな

大寒や子に教わりしすばるほし昴星

鰯雲泳ぎて空の果てしなき

オバマ氏が大きな手にて折りし鶴

刈入れを待つざわめきや麦の秋

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

一群の鳥の帰巢や秋夕焼

南区

金原はるゑ

車椅子屯してゐる梅日和

北区

小鹿朝子

白木槿一花一朝あらたなり

口上の子に持たせやる草の餅

背のびして味見の柿を取りにけり

小春風ぎ身じろぎもせぬ泊り舟

山茶花の数多咲きつき静かかな

灯しても消しても独り夜の秋

にこやかに手話で語らふ雛の宵

中区

倉見藤子

広島忌オバマのスピーチ辞書引きつ

中区

佐野朋旦

兄の忌や書院に一枝沙羅の花

秋の虹野にある二人見下ろしぬ

夫遺す書庫の古地図や紙魚走る

秋日和真つ新の画布張りにけり

来し方や奉仕ひとすじ秋陽濃し

対岸の富士を仰ぎて秋惜しむ

木々を縫ふ子供列車に風光る

西区

鈴木 和

境内のオペラの調べ蓮の花

秋立つや庭に転がる球ひとつ

この宵のソリスト代わる虫の声

製服の白さ眩しき更衣

南区

高林 佑治

空蟬の爪しっかりと幹つかむ

稲束の投げ手受け手の妙技あり

秋日和堂々進むコンバイン

残り鴨首を畳みて寄り添ひぬ

中区

鈴木由紀子

門前の人走らせる春時雨

疲れ鶺鴒のまん丸の目で見つめらる

にぎり水作りてもぐる寒の鯉

雲速し台風圏の雨間かな

中区

中村 瑞枝

銀杏散る急勾配の茅葺き屋

破魔矢売る巫子の指なるネールアート

水母の児ルーペで覗く水族館

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

留守まもるかに蛇穴に入りけり

西区

西尾 わさ

菊人形緋の裾濡らす命水

存らえて夫と交わせる御慶かな

中区

松江佐千子

敗戦を語りし南瓜スープかな

露・蕨・今年のいのちもらいけり

草団子かくも小さきひとつかな

錆釘を入るる糠床みどりの日

新刊書読みかけしまま年暮るる

万歩計零に戻して年迎ふ

西区

野嶋 薫子

中区

山上アサ子

花筏分け来る鯉の鼻の先

走るたび鈴なる園児風光る

ごんぎつね土手うめつくす彼岸花

風光る掛け声揃ふ漕艇場

古書店の閉店せまる冬もみじ

初燕古き屋号の並ぶ街

老夫婦ただただ黙し日なたほこ

能衆の掛合続く夜半の春

中区

吉野 民子

笛の音にシテ朗々の望の月

風に乗りすつと消えたる鬼やんま

天平の礎石に松葉小春かな

花吹雪母の呼ぶ声するやうな

西区

縣 裕子

駆けて行く夏めく子らの軽き服

ベルサイユのかたちに雪の積もりをり

南区

赤堀 進

靴箱の白靴外に出たがらず

聞くふりをすれば聞こえし春の声

鍵穴やすでに茅に包囲され

面取れば好々爺なるさくら宴

西区

石塚 茂雄

囀りはデュオにコーラスソロも有り

空高く初子の舞ひに風光る

福豆や靴の中にも一つあり

北区

伊藤アツ子

千本のひまわり雨に光りをり

赤トンボ馬の背をかり一休み

少女らの体育座り花筵

中区

伊藤サト江

残菊やゆとり寂しき余生なり

組板の冬至南瓜と対峙せり

欽先に来しは何時もの石たたき

東区

伊藤 倭夫

水飛沫^{しぶき}八雲家族の焼津浜

中区

内山 文久

お賓頭盧撫でて禅寺紅葉狩り

日短や港に漁船待つ家族

「蟻行列」に最敬礼八雲の隻眼
秋高しやまとまほろば八雲逝く^ゆ

南区

伊藤 久子

中区

梅原 栄子

四方より木犀の香に攻め寄らる

卒業の以下同文と送り出す

自らへ乾杯高く敬老日
カーテンを閉ぢるに惜しき十三夜

冴え返る庭石渡る下駄の音

棟上げの槌音たかく冬に入る

北区

伊藤 美代

北区

大木たけの

徒長枝に鋏を入れて春待ちぬ

あゝ無情出番失なうキャベツ畑

飛ぶ花粉四十万個の嘆き節

今年また幸せ運ぶ軒つばめ

野水仙犬の駆けだす田んぼ道

東区

岡本 久榮

河豚と云ふ土地の訛や心地よき

天高し園児らの声どこ迄も

中区

小川 恵子

ころころと笑ふ老女や春深む

街並みの影絵となりし秋夕焼

頑なに意地貫けり野水仙

西区

刑部 末松

喉元に声あそばせて河鹿鳴く

大の字に稚児の眠る夏座敷

畦道を火走ることく曼珠沙華

良き事を集め集めて宝船

中区

小野田みさ子

麗らかや日差し浴びつつペタル漕ぐ

風そよぐ茅の輪くぐりの下駄の音

北区

金子千江子

終戦日父知らぬまま今を生く

銀杏や餓鬼大将を捉へをり

烏瓜の花夜話の始まりぬ

南区

神谷知恵子

ゴンドラに上がる喚声春の富士

腰おろす石に火照や広島忌

秋澄めり白くなるまで筆洗う

夏惜しむ腕に軽きワンピース

西区

加茂 智子

見上ぐれば万緑の中古城浮く

南区

河嶋美智子

ずっとこの庭にいました虫時雨

秋麗やしまうまの縞みな違ふ

夜濯ぎの肌着静かに泳ぐごと

秋うらら顔皆違ふこけし展

盆飾り丈夫につくる精霊馬

中区

川上 啓子

木洩れ陽の雨後の白神たまご茸

中区

川島 泰子

大念仏果てて身に入む月のいろ

コスモスや過疎の湯町の資料館

送火の傍らに置く酒二合

土筆見て顔もほころぶ旅すがら

千段を登りきつたり鐘涼し

中区

川上 勝

初鯉さばく店主の真顔かな

東区

切島 正子

念佛の笛の音遠く月落つる

種蒔けば命の鼓動溢れけり

楫の木の真下通りて墓参り

出来の良し抜く大根の穴深し

のきさきにゆれて輝くつるし柿

東区

紺田みどり

病める母蟬こえ止みし目を閉じる

ハイウエイを光り流れるオリオン座

中区

佐久間優子

膝頭揃へ幼ら雛の客

葡萄食べ終へて結論出すつもり

相席もかまはぬことよ走り蕎麦

中区

佐藤たえ子

手花火の零れて闇のつながれり

針穴がますます小さき年の暮

身の丈の暮し過せし宝船

晩鐘や時折鯉の跳ねし音

西区

柴田ミドリ

数へらるる程に目高の育ちたる

竜胆一輪ハイカーの列乱したる

中区

白柳ますみ

恋猫の足どり重く帰還せし

鈴虫のふ化始まりて安堵する

鳴く蟬の主役代りて夏は往く

北区

鈴木 章子

アンケートとる医学生沙羅の花

紅型の暖簾とうして蝉しぐれ

涼風のページを捲る無人駅

古箏笥右往左往の更衣

西区

鈴木 智子

発心の意志あるごとく柳絮とぶ

西区

平 幸子

蓑虫の天より糸を伸ばしけり

母の日の箱にあやなすりボン解く

山眠る木馬三騎の遊園地

休日のマニキュア紅し更衣

西区

鈴木 嘉子

中区

高橋 常子

石垣にからまる蔦の薄紅葉

温もりの香り楽しむ新茶かな

腸の苦みが好きと秋刀魚喰ふ

木蓮のつぼみふくらむ日和かな

九十九折り紅葉に染まり風匂ふ

土筆野や靴音響く親子づれ

東区

ストロベリー

中区

高橋 敏彦

中吉に胸撫でおろす初みくじ

赤石の峰白くして山眠る

新緑に羽揚げたる孔雀かな

十葉や白き十字の花清し

身の丈の暮らしでいいと鳳仙花

採り立ての茄子糠床に寝かしけり

燃えつきる命と知らず蟬時雨

東区

高林よ志子

芋の葉に光ためたる露の玉

足腰にこの自在欲し暮近し

西区

竹内 定八

ゴールデンウィークスキップの子らが行く

盆花は妻の好みし花ばかり

無農薬野菜にこぞる菜虫かな

中区

竹田たみ子

空^{カラ}つ風日に三本のバスを待つ

盆踊手足の動きままならず

旧姓で肩叩^{カッ}かれし秋祭

虫しぐれ今宵は野外コンサート

西区

竹山すず子

休暇明介護士さんの笑顔かな

リハビリの両手の胡桃音がすか

西区

田中ハツエ

百歳の母を主役に福笑

地図広げ期待膨らむ秋の旅

立冬や今年の予定残りたる

北区

鶴見 佳子

細やかな手話の指先風光る

天高し雲の流れと歩きけり

母の日に贈る母なしカーネーション

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

かたばみのぼんと弾けて梅雨の明く
中区 寺田 文子

初枇杷のひとつ色づく散歩道

鮮やかに夜景の泛ぶ稲光
西区 徳増 貴子

一陣の風に鷺草飛び立たむ

アルプスを共に挑みし夏帽子

読書終え我にかへりし夜寒かな

中区 鴫多 健

古稀迎えイナゴ佃煮作り居り

冬帽子他人の顔ですれ違う
中区 戸田田 鶴子

枝払ふ蟬の骸むくろの付いたまま

春の宵漫ろ歩きの影二つ

猫じやらし展覧会を活き返らす

温もりの残るやさしき冬帽子

中区 徳澄 英樹

肩車からくり人形夏祭り

窓明けてカーテン越しに春の声
中区 戸田 幸良

風花やすぎしひめぐるさんじゅかな

駅弁のぬくもり膝に冬の旅

聖観音凜とおわすや夏木立

冬の窓一つ一つの夜に入る

珍らしくなりし鬼百合東区定位置に

内藤 雅子

涼風のたちて空蟬揺れている

孫の策中区と知りつゝ爺の四月馬鹿

中村 貞子

ホーシンツクなぜか終りはスイツチヨン

少し斜ハスに被つてみよう春帽子

中区

永田 恵子

北区

西尾虹之助

春霞富士見え隠れする散歩道

四年生屋台の上の祭笛

梅干しやその香りに母思う

祭笛子供のうしろ大人吹く

滑り台見え隠れする冬帽子

律違う隣の町の祭笛

南区

中津川久子

中区

野田多満子

大寒や四十九日の僧の足袋

松の花仰げば淡き昼の月

万緑や音符飛び出す小学校

大花火宴たけなわ棧敷席

夕蟬や柩の小窓ギギと閉づ

遠花火ビルの狭間に見え隠れ

春愁やハーモニカの音のどこからか

西区

野中芙美子

畢生ひつせいを心でめぐる夕月夜

中区

飛天女

木下闇赤き鳥居の稲荷様

万緑や棚田に香る伊井の風

花の名を問へば紫蘭しらんと答へられ

にがうりの葉影で眠る黒いねこ

北区

羽生 遼平

中区

平野 旭

わかくさの山あかあかと春隣

レクイエム核の涙や白樺

山の端に明月ふわり湖染める

鉛筆で生命線を書き加え

へちま棚染むる緑の夏座敷

八卦見の外れ人生春の園

中区

林田 昭子

南区

藤田 節子

麗らかや亀の見上ぐる石の上

地下茎は立体交叉青き踏む

搗きたての蓬餅買ふ朝の市

ようやくに寝返りうてる子の五月

山峡の青田千枚見晴るかす

落蟬の手足綺麗に畳みをり

天空へ棚田の続く枯野道

東区

藤田八重子

結び上げし項見上ぐる盆踊

山道を知り尽くしたる葛の花

中区

藤本 幸子

一膳の箸に新たな年明くる

日の丸の旗なびかせてお元旦

朝霧に濡れて出荷の野菜採り

南区

古谷 とく

柔らかに岩をすべりて春の水

再会の握手は固き夕月夜

初春の眩しき海の真つ平ら

生きてゐるものの温みよふきのたう

南区

堀川千代子

亡くなつて知るやさしさよ春の雨

うららかや空飛びさうな犬の耳

北区

松原美千代

大仏の聞くは異国語暮の秋

堂々と車を見据ゑ立つ男鹿

曼珠沙華羽公の句碑を遠巻きに

西区

松本憲資郎

陽に背くひまはりの反抗期

AIの世を生きること冬怒濤

羽を下げさらに下げたるトンボかな

退院や花に向つて深呼吸

中区

松本 賢藏

風神の終のひと吹き春疾風

東区

宮澤 秀子

終戦忌骨折と火は忘れまじ

山の日の遠嶺暮れゆくむらさきに

ふるさとは山の墓だけ彼岸花

初雪の富士青空をしたがへて

北区

馬淵 文夫

南区

森 明子

赤とんぼわが世とばかり空中戦

柿若葉二の腕まぶし女学生

庭先の線香花火に家族の和

白水仙決意の瞳戴帽式

わき水にめだかの学校平和かな

バイエルの硬き調べや梅雨の入り

南区

水川 放鮎

南区

八木 裕子

栗の花狭き棚田を被ひけり

冬灯デイサービスの夫迎ふ

箱眼鏡少年の日を覗くこと

ふとん干す湿度確かめたしかめて

いにしえもかくなる音か小夜時雨

開戦日遠くなりけり冬の朝

山里は家族総出の茶摘かな

北区

山岡 照彦

おはようと声かけのぞくめだか愛

山間に地響き走る大花火

北区

山口 英男

ががんぼの障子打つ音夢に聴く

家中の刃物研ぎ上ぐ青葉風

桐一葉影やはらかに落ちにけり

中区

山田 知明

手を通す父の匂いの古外套

背負う子の大きな寝息春隣

誰某に話し掛けたき白露かな

終戦日想いおこせし無言館

西区

山本晏規子

夢にまで杖を忘れず花野行く

白木蓮一夜の雨に散り急ぐ

中区

和久田俊文

手鏡の白髪数えて大晦日

雨漏りや明けまでつづく木魚かな

虫の音を隣の家にお裾分け

南区

渡辺きぬ代

はくれんの白を増したる夕まぐれ

暮鳴いて嬰の片言二つ三つ

雷鳴や大きく開く仁王の眼

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

朝餉時つくつく法師鳴きはじむ

西区

浅井 裕子

群がりて登りゆく魚川見えず

浜北区

池 蜻蛉

秋分の日柄杓絡まる濡れ仏

熔岩らばの隅名すみ知らぬ花の草もみじ

西区

渥美 進

西区

池谷 和廣

秋桜の揺れて童の笑顔かな

夜雨来て俄かに止みし虫の声

一人旅紅葉ささやく南禅寺

蟹味噌もほのかに苦し多喜二の忌

西区

阿部 盛司

中区

池谷 静子

初花や長子の門出祝ふかに

ひっそりと経きょうに酔いたし彼岸寺

蘆の角大群落の湖畔かな

縄をとぶ古希と五才の夏休み

中区

伊熊 保子

中区

石井 泰子

薔薇の花色を競いて庭に咲く

普段着の医師と出会いし良夜かな

空蟬の一日で尽きる命かな

台風に掃かれし空の青さかな

荒川の流に添ひて花筏 西区

伊藤しずゑ

黒南風や緋の男の下駄の音 中区

今駒 隆次

鉢のまま居間に据えたる胡蝶蘭

バス待つ間暫しの会話夏兆す

空梅雨に長くつで踊る隣家の子 北区

伊藤 順子

新涼に熟睡^{うまい}して朝七時半 中区

岩崎 五郎

終戦日祖母に倣いて黙祷す

秋天の下に城あり歴史あり

搔堀や餓鬼大将の顔に泥 中区

伊藤 清太郎

水音の遠く近くに夏の蝶 中区

右崎 容子

箒目に添いて落ちるや沙羅の花

ひと品は酔の物添へて夏料理

青空へじゃがたらの花今さかり 中区

伊藤 紀子

春宵やひと騒ぎして眼鏡いづ 中区

内田 一郎

咲き満ちて雨に濡れいる額の花

年老いてなお夢語る月夜かな

花形のリレーの走者雁渡る

西区

太田沙知子

小さき手を合わせて潜る茅の輪かな

中区

小楠 達司

ひそやかに人見をさけて帰り花

本陣の三和土冷やつと虫の声

南区

太田 静子

湖西市

片岡 優宇

爺婆の会話遮る蟬しぐれ

母の日に懐かしき塩握り食む

秋風にコースをのばすウォーキング

サンダルで痛む小石や夏の旅

中区

大屋 智代

中区

加藤貴代美

下校時の少女ら呼びて虹仰ぐ

ころころと癒してくれるちちろ虫

十字路や平和活動去年今年

甲子園終わった風のさびしさや

中区

岡本 蓉子

中区

金取ミチ子

蟬しぐれ今を生きると囃しけり

白百合のこちらを向きて誘えり

ほのぼのと若き日めぐる酔芙蓉

合唱の「野菊」に友を想いけり

長閑さやまたも大きく猫の伸び

南区

金子 典子

送り火の天に繋がる大文字

独り居の闇の深きに半夏生

浜北区

川島百合子

手づくりの餡の塩梅柏餅

まなこ上げ微笑えみをおくりし初鏡

浜北区

金子眞美子

コスモスを静かに揺らし遊びいる

東区

北島 はな

母の日や鉛筆の文読み返す

広き野を思い出させるレンゲ草

形代に我が名記して身を祓ふ

中区

川合 泰子

梅雨つゆ晴間花いちもんめ子等の声

北区

北村 友秀

田の面をかすめて飛ぶや夏つばめ

走りさる子の息白し父よりも

思い切り庭木剪定風通る

中区

川上 とよ

滑稽に弾むてのひら鳳仙花

西区

絹 枝

颱風や避難勧告十二号

宵闇や何処か何処かノクターン

晩秋の短い光に足るを知る

北区

久野悦郎

秋桜と君の香りを運ぶ風

天竜区

サウラ

秋茄子に夕餉のあかり雲流れ

山里の深夜に響く鹿の声

中区

畔柳晴康

西区

佐藤健

波小僧東に移り梅雨となり

ウエアアの眞新らしきや春踊

日も落ちて乱れ飛び交う恋ほたる

雲水の手には缶ジュース秋の風

北区

後藤とも

東区

佐藤周歩

藪そうじ防空壕の跡二つ

遠雷や亡き友手を振る川向こう

家壊し長持ちの奥麻のかや

空蟬が転がる庭の寂しさや

中区

齊藤三重子

南区

小百合

初みくじ大吉の声弾みけり

春灯そつと照らせば影ふたつ

料峭やふり向く窓に灯の洩るる

冬空に願いを託す星の数

逃げ水を追えど逃げゆく道の先

浜北区

澤木 辰子

盆踊り混じる訛と肌の色

中区

不知火

喜寿の春うすく紅さしクラス会

空蟬の風に揺れてる古刹かな

裸木の間に遠く富士静か

北区

清水 孜郎

廃校となりし校舎の蟬時雨

西区

新村ふみ子

終い彼岸亡母のしらない母のこと

空高く家紋入りなる祝風

廃屋や土塀に絡む蔦紅葉

西区

清水 康成

ガーベラを加へて供花の華やぎぬ

西区

新村みち子

凍る夜や防火祭舞う炎

はればれし花野の風のなかにかな

雨上りカナカナの声透き徹る

西区

清水よ志江

八十路来て母似の皺の初鏡

西区

新村 幸

肉厚の焼椎茸をもてなさる

凧祭りねじり鉢巻肩車

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

茄子漬けや紫色が知恵の味 北区

鈴木うた子

黄水仙咲きて空屋あきやに色を添え 中区

高山 紀恵

山畑昔恋しや芒原

爛漫はなに咲き終おえ去ゆきぬ花はな筏

南区

鈴木やよい

北区

滝澤 幸一

包丁が吸い込まれるや大西瓜

椋鳥の群れ雲の如波の如

蝉しぐれ今朝一番のBGM

鴉戻る木のでつぺんの声高し

東区

砂間 達也

浜北区

竹内オリエ

尾根筋の風車は速し今朝の冬

帰省子と過こせし幸の日々速し

さういへば夫は還暦帰り花

人生の寂しき余白冬鴈

中区

関根 由雄

中区

竹下 勝子

红柿や咲いているよに実りけり

牛蛙父の躰たに負けまいぞ

年の暮急ぐや芸奴の下駄の音

ツリーより小さき三脚社会鍋

屋久鹿の静かに立てり野営明け

西区

竹平 和枝

大鷲の純白眩し寒に入る

マイホーム猫の親子も三尺寝

北区

土屋 芳郎

新米の入荷届くと旗なびく

耳に住む虫と共鳴秋の夜

西区

竹平 安則

冬陽浴び井伊の橘輝けり

南区

黒葛原千恵子

みちのくは全山紅葉松映える

時を經し井水の社の鈴鳴らす

楚々と咲く天使のごとき路地の百合

中区

館石 照子

指ほどの松茸二本澄まし汁

中区

手塚 みよ

涼しげな上弦の月今日の夜

初物の無花果一つ先ず供う

春秋や母の抱きし小銭入れ

西区

田中 安夫

老いの足適ひて茅の輪くぐりけり

中区

寺田 久子

老い二人背中に止める今日の月

着ることも無き秋袷たとう紙

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

蛇が居る逃げる逃げるよぼけ蛙

南区

利徳 春花

足停まる魅惑な香り梔子花は

か

川岸のすすきが原の茶屋の飯

東区

長浜フミ子

うぐいすの一声飛び込む運転席

中区

鳥井 美代

天竜川声のみ降らす揚雲雀

北区

西尾 淳子

マネキンと同じ春服着し店員

落雲雀河原しばらく風の音

向日葵で迷路を遊ぶ子供達

東区

なおとら

刈りあげた庭に輝く今日の月

中区

錦織 祥山

まめごはんおいしいそうなふたごたち

あざやかな紅葉谷間にわく泉

ケアホーム紙を丸めて鬼遣

おにやひ
北区

中村 寿

遠足の帰りたいよと泣く子かな

中区

二橋 記久

鉢に入る引越先の忍草

蓮の葉の雨一粒の揺らぎかな

中區
まちなか
街中に渡船場跡やカンナ燃ゆ

二橋 康男

西區
べに
紅ひきて大人めく子や祭髪

西區
貝寄風の岸に立ちたる奥浜名
連子窓開けて風入る夏料理

野田 俊枝

西區
搦め手は蟬の死骸のをちこちに

野島 見司

西區
ネクタイを母に教わる新社員

袴田 定代

夏雲やみかんの摘果まだ中ば

年重ね七夕様に願いごと

北區
幼なき日こたつの中の指けんか

野末 法子

南區
軒下は風の道ぞよ大根干す

袴田 吉一

花筏多くの讃辞のせてゆく

市民の樹見上ぐる傘へ春の雨

北區
あたたかやうなづきあいて手話の人

野田 智恵子

浜北區
はしやぐ声隣の子等の庭花火

橋本 まさや

薔薇真紅火のごとき歌つくりたし

コスモスの風の行方をほしいまま

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

余生とはどれほどの時間とき苔の花

中区

長谷川絹代

体操す工事現場に息白し

浜北区

浜美乃里

恋猫の眠りを股ぐスニーカー

榎の実拾ひ遊んだちやんちやんこ

浜北区

服部 節子

南区

林 甲太郎

教へ子の顔顔顔も花の中

山城の太鼓櫓や稲の花

木犀は魔術師となり香を放つ

星月夜天竜川は滔々と

西区

浜名湖人

中区

伴 周子

老いてなほ夕焼雲の照り返し

外つ国の人と経読む初桜

一望の山田寺跡ぞ夕時雨

鬼子母神みんなよらつせ石榴の実

西区

浜名水月

北区

疋田 三二

生まれしは赤猿が如し春の雪

ひまわりや子等の道草見えかくれ

闇に鳥かがり火燃える焚きやかな

あじさいに心ひかれし我が人生

いま何時ひまわりに聞く野良仕事

北区

藤井 星子

新米の艶めく粒や塩むすび

浜北区

松島 日出子

大相撲扇子うちわの波寄せし

八十路過ぐ手に余る畑罫雲

雛段に祖母の手になるあられかな

北区

藤生 君江

木となれず華となれずに野焼かな

西区

松永 真一

紅葉宿外人客で賑わいぬ

石に石石に遊べや吾亦紅

休日の窓一杯の春陽射し

西区

堀内 一枝

打ち上げし花火小さき日本海

西区

松本 みつ子

山開富士山頂の日の出かな

でで虫も湧水飲みに来てをりぬ

月めぐり一枚残し冬支度

北区

牧 元久

五月晴縄文時代の貝の層

中区

宮本 恵司

棚田行く子らが弾けて穴惑い

ナウマンの太肋骨白詰草

ふとあばらぼね

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

胸の奥映える星座と天の川

天竜区

森坂 芳喜

冬ざれの船辺に軋む舳綱

中区

山下 静子

風そよぎ螢火光る星の下

薫風や北の大地の長き貸車

天竜区

森のうさこちゃん

中区

山下 宏

もみじ狩りカメラに収め癒される

稲刈りし白鷺一羽動くだけ

秋空の下で名を呼ぶ友の声

花火の音今宵はどこかじつと聴く

西区

谷野 重夫

西区

山下 昌代

三色の菊人形は武者姿

目を閉じて隣の猫と日向ぼこ

人生に卒業は無し大晦日

トラクター鳥が後追う春の土

西区

山口 久江

西区

山下美恵子

母の日の子等と遊歩の足軽し

藪の中筥掘りの鍬ひびく

黄落や白き帽子の富士拝す

蝸牛道すじつけて登り行く

青虫を連れ帰ったり畑より

中区

山中 伸夫

名聞を引き摺る人に亀鳴けり

中区

和田 有彦

交差点信号待ちか浜千鳥

門口や花梔子の香り立つ

なます切る組始めの老ひとり

中区

横田 照

夕立や雨音響く窓に猫

北区

あ ひ る

掃ききれぬ落葉は風にまかせけり

群生の紫陽花多彩万華鏡

中区

伊藤志津子

いわし雲去年もみたか西の空

南区

和 季

金魚草たつた一輪母の笑み

すずなりの柿をながめて一句かな

浜北区

岩崎 秀子

蝸牛動きに集中間の長さ

西区

和久田しづ江

枝垂れ梅香り競いて咲きにけり

中区

江川 一子

発芽いま恵みの穀雨天にあり

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

山峡の曲り曲りの田植えかな
中区

大仲 功

迷いこみペランダで鳴くコオロギよ
中区

鈴木かや子

敬老の歌声響く長寿かな
南区

カモメン

紫陽花や優しい祖父を思い出す
中区

鈴木千恵子

秋十月米寿過ぎててもまだ青春
東区

川合 妙子

サクラ見てこれまでの春思い出す
南区

純 礼

姫椿書み膨らみ春を待つ
西区

コギト

母を越えハードカバーの「十年日記」
中区

竹田 道廣

遠雷の音に家路を急ぎけり
中区

佐藤 ケイ

夜も更けて虫の奏かなでる演奏会
中区

田中 貞夫

花散りて上の妹の三回忌
南区

白井 忠宏

懐しや屋上に見るいわし雲
中区

角皆 かつ

折り鶴に新茶ふくます老婆かな

東区

時久シヅ子

黒猫の伸びしとやかに山の朝

西区

原田 悠平

庭先の落葉一枚しおりとす

中区

鳥居きく子

赤トンボ光を浴びてどこへ行く

天竜区

松本 和樹

晴れ晴れと湖畔に栄える秋桜

南区

永井 真澄

冬の日にひらひら落ちるおくりもの

天竜区

三 日 月

アザギマダラひらり飛びかい蜜を吸う

中区

中村 崑十郎

流れ星秋の夜空をひた走る

南区

水野 健一

もぎたてのトマトほおばり微笑む子

西区

のり弁大盛り

いわし雲列を作りて泳ぎけり

中区

山本 澤乃

生き物はみな空を見る四月かな

中区

畑中志げの

天道虫手の先留まりかわいいな

東区

幸 村

九鬼あきる

本年度は二桁台の応募者の増加に加え、高校生八名の参加は嬉しい限りであった。静岡県や浜松市東区の高校生俳句への先進的な取り組みが実りつつあることに他ならない。全体として、更なる質の向上を期待したい。熟慮の末、最終的に次の十句を第六十三集の市民文芸集とした。

・全身で地球掘ること牛蒡引く

松本 重延

ダイナミックで全身の把握に共感を覚えた。「地球掘ること牛蒡引く」とは何と大胆な。大仰と言えばその通りだが、作者の感動はこう言わざるを得ないのだ。根源的な捉え方は氏の句境の一つ。(へさつま諸戦後は遠くなり(にけり)も身に染みる句。

・夏雲にキリンの耳を見失ふ

澤木 幸子

入道雲に代表される夏雲は白い大きな雲で生命感に溢れている。作者はキリンを仰ぎ見ていたのだが、突然現れた雲に遮られてしまう。「キリンの耳を見失う」の措辞が光る。平明に徹しながら新鮮な詩心がいい。

・棒稲架立つばきばき乾く稲の束

鈴木 秀子

棚田あたりの光景であろう。刈られた稲は乾燥させるために稲架にかける。「ばきばき乾く」が意外な効果をあげている。(守り継ぐ一徹者や稲を刈る)にも土を忘れない作者がいる。

・亀の子に万年といふ未来あり

田中美保子

池の辺に固まって甲羅を干したり、這い回ったりしている亀の子が主役。その可愛らしい姿に「万年といふ未来」を念じたのだろう。心む時間がこの句には流れている。

・冬蜂の大往生の日向かな

山崎 暁子

(冬蜂の死にどころなく歩きけり 鬼城)の句を思い出す。これは死ぬ間際の弱った蜂。掲句は大往生を成し遂げた蜂である。下五の「日向かな」が倅せを演出していることに注目した。

・水仙や明治の母の佇まひ

岩城 悦子

水仙は早春の候に開花する。花卉は白、花冠は黄色でその姿は清楚で香りもいい。掲句は、水仙の花を通して亡き母上を偲んでいる。「明治の母の佇まひ」に凜とした女性が見えて来る。

・鳥渡る野鍛冶の飛ばす火花かな

鈴木 利久

初午で有名な花学院の前の野鍛冶の家を思い出した。番師

が存命の頃は、この家にはよく立ち寄り、話を聞いたものだ。この句「飛ばす火花」が生きている。「鳥渡る」季語も動かない。

・直筆の子規の横顔歳旦帖

平野 道子

昨年は、正岡子規生誕百五十年と言うことで、子規の話題も数多くあった。この「歳旦帖」の発見もその一つ。掲句はそれを受けての一句。横顔の子規がますます輝いて見えるようだ。

・鬼やらひ泣いたあの子が鬼になり

小楠恵津子

「鬼やらひ」は、今日では節分の夜の豆撒きとして定着している。掲句は、鬼が怖くて泣いた子が、成長して年男として豆を蒔いている姿を詠んだ。しみじみ時の流れを感じる作者がいる。

・天皇のゆっくり歩く終戦日

池田 智子

天皇ご一家が何かと話題になった一年。「天皇のゆっくり歩く」に、戦後の天皇の歩みを思い起こしているのだろう。

本年度もいろいろな傾向の作品に出会えたことに感謝したい。俳句は短い詩型だが、「省略」ということを覚えると、時空を越えた世界も詠むことが出来る。更なる挑戦を期待します。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

各駅停車に乗って風の色編んでく

南区

中津川久子

夕暮の街角で手にした月の重さ

東区

生田 基行

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

沈みきれぬ月を心の空き地に置く

東区

生田 基行

途惑う青春を投げ捨て十六夜の月

落ちゆく夕陽にささやく白い三日月

冬眠というキップ持って地下鉄へ

東区

井手賀代子

この角を曲がれば魔法にかかりたい

ひらひらと鳥がゆく夕刻の白いひかり

中区

嘉山 春夫

椅子引きずって玄関先ピンポン押した三歳児

レコードの針落とす秋の長雨トタン屋根

道端にクルミ一個大樹の雨あがる

冬の夜は月に目鼻を入れてみたくて

中区

河村かずみ

いちようの葉一行の詩となり舞い上がる

寒風に揺れているブランコニ短調

晩鐘の一打幸せの風連れてくる

中区

倉見 藤子

酔芙蓉人の一生のごと変る

ひとよ

讃美歌に蔦の教会心ほぐれる

南区

中村 淳子

キンモクセイ香りよく目にも秋告げる

雨を待つ遅まきのコスモス伸びている

列車の汽笛聴こえる夜半の静けさ

冬満月に水面の水母くらげが透けて見え
 濱北区 橋本まさや

大事なものを幾重にも隠そうと乙女椿

みのうちをあかせばならぬとチューリップ

南区 林 甲太郎

時間が骨折した青空

いわし雲へ組みあがるがらくた

風を握ると夜になった

天竜区 リコリス

やはりネコ誰にもなつけず気ままに生きる

また今年も君に会いたい紫陽花の雨

海に沈む夕陽ってあなたみたい去って行く

胸さわぐ救急ヘリが夕日の中に
 北区 伊藤美代

お手本は子育てに奮闘中の親つばめ

濱北区 岩城悦子

ほうたる窓辺にひとつ同窓会たけなわ

アウシュヴィッツの貨車のごと花火の送迎

南区 太田静子

しがみつく塀の空蟬標本のように

かくれんぼした鶯が鳴く

南区 大庭拓郎

桜散る動物園にキリン棒立ち

一粒の種子より生れし夕顔の花

朝ぼらけのお月様は恥かしそうな色白 北区 大道くにを

どの靴も花びら付けてパラソルに染まる

手を振りあえば心の魂たまが行き来する 中区 小笠原靖子

ふり返りつつ行く夕映えの道喜寿すぎる

こぼれ種で咲きほこりたる鶏頭や 中区 岡本 蓉子

夕顔の花をかぞえて友偲ぶ

ソファアの凹みへ朝の証し私と新聞 浜北区 木俣 史朗

湯上りの生き様のせている今日の目盛

暑さに負け木陰で笥の音涼しさを聞く 中区 畔柳 晴康

ビルが建ち音だけ響く祭り花火か

ローカル線北へ北へと雁来紅 中区 白井 宜子

誰待つとなく去り難し夕花野

不帰ノ嶮ポツンと赤いヤツケ 北区 鈴木 章子

黒菱平からポケットにさよなら又ね

夫婦って永遠だよと言ってみる夜もある 浜北区 竹内オリエ

秋が来て風に吹かれてひとり月を見ている

中區
落葉たち何を語らい舞い落ちて行く
戸田田鶴子

中區
どこふく風闇にひらめく十三夜
錦織 祥山

ものいわぬまゝ庭の椿の落ちにけり

いつもと変らぬ二人ですごす秋の暮れ

中區
戸田 幸良

中區
藤本ち江子

茶碗二つ並べて今宵十三夜

廢校の桜パラパラ私根強く残ります

木枯しや街の交番煌々と無人

三年目のシクラメン一年草から「ヨロシク」と

南區
中津川久子

東區
宮本 卓郎

今日もまたちいさなヒミツに水をやる

じゃあねと宵にまぎれる白い微笑

遊女塚にピーヒャラ曼珠沙華の宴

ハンチングちよいと斜めに見知らぬ街の風

東區
長浜フミ子

中區
渡辺 憲三

吊り橋の途中で秋を振り返る

秋深まりまだ外せぬ心の釦

水たまり全身びしょびしょ秋雨

唇よせれば雲間に隠れる十六夜の月

春の海行きつ戻りつ裳裾を返す

中区

伊熊 保子

白山神社のご奉仕手が悴む秋の朝

中区

高鳥 謙三

秋の月明かりに本を開く

北区

伊藤 順子

一先ずは家系つながる孫ができ

中区

高橋 紘一

薬のむも眠れぬ夜もありすべて自然と受けとめる

浜北区

大城 節子

朝刊を開ける鍵もつ父ねむる

中区

竹田 道廣

菊日よりあなたと呼べない寂しさよ

中区

花 信 栖

広島資料館心の襞に突き刺さる生き証人の声

中区

鴉多 健

さざんかの花咲いて又年を越す

浜北区

澤木 辰子

宅急便ふる里の香りみなぎりて

東区

内藤 雅子

草むらは小鳥の早朝会議場

南区

白井 忠宏

亡き祖母は虹の架け橋天国へ

南区

永井 真澄

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

お互いに思い込みあり老いのすれ違い
西区
 浜名 湖人

山頭火まだ死にたくはありません
西区
 浜名 水月

介護施設玄関に見し雛飾り
浜北区
 浜 美乃里

それでいいならいいんだよ五十路越え
中区
 ヒメ 巴勢里

湯わかし器の音小夜時雨
南区
 水川 彰

抗がん剤投与日の五月の雨は冷たくて
中区
 宮司 もと

自由律俳句選評

鶴田育久

今回の応募者は四十二名と減りましたが、自由律俳句では山頭火・放哉に続いて顕信や、最近では伊那の乞食俳人井月も映画化されたりして再び脚光を浴びつつあります。どうか皆さんの一層の奮起を期待するものです。

予選句として次の十三句を採りました。(○印二次予選句)

ソファアの凹みへ朝の証し私と新聞

湯上がりの生き様のせている今日の日盛

各駅停車に乗って風の色編んでく

遊女塚にピーヒャラ曼珠沙華の宴

風を握ると夜になった

秋深まりまだ外せぬ心の鉤

○夕暮の街角で手にした月の重さ

沈みきれぬ月を心の空き地に置く

ローカル線北へ北へと雁来紅

○レコードの針落とす秋の長雨トタン屋根

○吊り橋の途中で秋を振り返る

大事なものを幾重にも隠そうと乙女椿

酔芙蓉人の一生のごと変わる

そして、慎重熟慮の結果、次の二句を市民文芸賞に推すことにしました。

とにしました。

各駅停車に乗って風の色編んでく

どんな小さな駅にも必ず停まっていく各駅停車の旅を、作者は、のんびり風の色を編んでいると楽しんでます。それは、車窓を流れる遠くの山や近くの街の風景を、一条の風の色のように編んで行くと見立てている素敵で詩的な旅心です。

夕暮の街角で手にした月の重さ

夕暮れの街角で何気なく見つけた月を、様ではなく、手にした重さと感覚に表した作者の気持ちを感じることは仲々難しい。ここは、さり気なく受け止めましょう。月ってそんなに重いのかしら？と読者を軽く惑わせるだけでも立派な詩になります。ポエジーには理屈など要りません。

次に印象に残った句を挙げます。

遊女塚にピーヒャラ曼珠沙華の宴

面白い句です。ピーヒャラのオノマトペが実に利いています。

酔芙蓉人の一生のごと変わる

一生をひとよと読ませることで、句に深味が出ました。

レコードの針落とす秋の長雨トタン屋根

秋の長雨の様をレコードの針のノイズの音に重ねた妙。

吊り橋の途中で秋を振り返る

人生を示唆している吊り橋。そこから振り返る秋。鮮やかな秋の色か、それとも枯れた風景なのか。考えさせられます。

「その途中」が入ることで句が生きました。

川柳

〔市民文芸賞〕

妥協することで躲した向い風

東区

竹山恵一郎

豆を炊く手間ひま掛けて母の味

中区

伊熊靖子

重箱の隅を突つてまた嵐

東区

菊川文江

行き詰まり立ち位置かえて見る余裕

西区

鈴木均

一病をそつと手なずけ前を向く

中区

鶴見芙佐子

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

誰のため首を振るのか風見鶏
中区

浅井 常義

美しい花を支える母の土
南区

鈴木千代見

本心を隠して覗く万華鏡

カーナビであなたの胸に辿り着く

弱音吐く心に掛けた夢舞台

チクワの穴覗けば明日が見えてくる

被災地へ一本道が描けない

織りムラもあつたとふたり日向ぼこ

後悔の波間に浮かぶ羅針盤

やわらかな舌に本音を掴まれる

母想う

中区

鈴木 賢三

中区

高橋 博

しみじみと母の生きざましのぶ朝

手を繋ぎ同じ夢見て八十路越え

やんわりと母にさとされ目に涙

野の花と風に押されて今日を生き

母の恩五十路を過ぎて身にしみる

老妻と励まし合って共に老い

花たむけ母にざんげの頭たれ

思いやり貰って今日も前を向く

かみしめるふるさとの味母の味

戦場に孫等の雄姿無き折る

西区

思い出を総浚いして家仕舞い

竹平 和枝

中区

聞き流す術身に付けて穏やかに

伊熊 靖子

押し入れて眠りこけてた志

若い芽を伸ばす力の褒め言葉

断捨離を手紙写真が鈍らせる

気配りの言葉でわかるお人柄

父の声聞きつつ遺品整理する

残された針箱亡母の技量知る

収穫箱洗い今年の農終える

太田 初恵

中区

虫くいの心埋めてくダイアリー

有本 千明

天竜区

ルンルンの訳は簡単投句載る

お医者さま患者はワタシこちら見て

ほつれ目の糸を紡いで生きている

保育器で育った生命孫四十

今日の余白ピンクで染めて春が行く

「国難」と叫んで選挙勝ちました

句点打つふつとためいき夜が明ける

東区

追憶のページにあの日鮮やかに

思慮浅く微罪を重ね悔いしきり

絡み合う虚実にこころ惑わされ

不用意に出たつぶやきを拾う風

竹山 恵一郎

中区

あちこちを繕いながら生きてゆく

少しかけ無理してつかむ明日の夢

失敗も苦勞も超えて懐かしい

退職後始めた花壇夢を蒔く

鶴見 美佐子

北区

甘え声捨て少年の顔になる

言い負けて子の横顔を見上げてる

悪役になろうと思う母の情

文字の揺れあの日の気持ちまで読める

田中 恵子

東区

気が置けぬ友と至福の時過ごす

さりげなく心を包むお持て成し

華やかな絵文字が躍る子のメール

人生は喜怒哀楽を生むドラマ

中村 雅俊

中区

山越えて幾つ別れを越えたやら

廣島 幸江

東区

授かった命の重さ受け止める

守屋三千夫

幼手の力いっぱい愛掴む

努力より結果を追いかける若さ

燦々と恋引つ掛かるあばら骨

漢方のようにじんわり親の愛

二十二時明日の恋の爪を塗る

年重ね似たくなかった父に似る

中区

お喋りの特効薬で胃が治り

馬淵よし子

北区

人生の苦難に耐えて咲かす花

山口 英男

空腹があればこれもと買ったがる

心の窓あけて素直な風を入れ

ぶつぶつと妻の怒りでする火傷

許す気になって大きく息を吸う

青空へ昨日の罪の許し乞う

忘れぐせ注意しあつて老い二人

蓮田枯れ白鷺一羽佇みて 中区

伊熊 保子

風鈴の涼しき音色隣家より

手に汗をかいて見ている大相撲 南区

伊藤 信吾

空晴れて洗濯物が風に舞う

園バスの窓に並んだ白帽子
ママの胸抱かれて乳児笑顔見せ

池田 稔

浜北区

猪原 萱風

ライバルの訃報に夢の消える夜 中区

逆転の夢を叶えた苦労坂

失言を猪口に詫びてる友と居る

酒好きがじっと見ている空コップ

増え続く錠剤ボンと胃に投げる

メモ帳と手をつないでる認知症

中区

市川 緑

東区

内山 敏子

心配りのつもりで焼いたおせつかい

平凡で心やすらぐ兎小屋

だんだんと背が曲がるのも母に似て

つつき合う大皿小皿ぬくい家

思い込みいつも反省責める口

赤ちゃんのやわらかホッペ押してみる

飽食に守りたきこと腹八分

南区

太田 静子

夕陽背に指切りした手あたたかい

中区

小島 松太

抜歯後のトウモロコシの恨めしい

手をつなぎあゆめば消えるわだかまり

ムツとする言葉に返す苦笑い

不覚にも素を曝け出す影法師

東区

菊川 文江

西区

佐野つとめ

愚痴ばかりこぼして暗い森を行く

躓いて拾った小石持ち帰る

損してる気が強そうな怒り肩

逝く友の愛用の杖寂しがる

失敗を気にせぬ人の高い声

おむすびが知ってる母の塩加減

東区

木村 民江

西区

鈴木 均

幸せの欠片繋いで輪を作る

拘りを捨てた鏡は笑ってる

微睡んでいる間は老いも一休み

やり切って向う岸から見るわが家

言い合って一夜明ければ親と娘に

拘りを希望にかえただけで丸

終活へふいに患う誤嚥症 南区

中津川久子

又三郎うたた寝してる無人駅

痛いのがママのまほうで飛んでいく 南区

あゆのつか碧

冷奴お好きなんです恋ダンス

泡沫 中区

荒木いつか

負けん気のためまぬ努力歩は金に 東区

宮澤 秀子

裏ばなしまだ大根が煮え切らぬ

忬度は数の力で藪の中

岩城 悦子 浜北区

排除しますと言った本人排除され

アイスクリーム溶けるまでする立話

青嵐ピアスの穴を吹き抜けり

凜として生きた証は色あせず 中区

足立 和代

コンクリートの穴のタンポポ綿毛舞い 天竜区

恩田 恭子

何気ないやさしさだけをあたためる

言い訳が多くて何も出来ぬ年齢 ととし

なだれ込み電車の席でスマホ打ち

南区

カモメン

耐えること学び昭和を強く生き

中区

倉見 藤子

自販機に挨拶されて襟正す

行間に滲む愛情さりげなく

中区

嘉山 和美

中区

畔柳 晴康

弟が眠った隙のママの膝

不眠症居眠りだけは場所問わぬ

その話聞いたと言えず二度三度

教訓は胸に残りて今が有る

東区

川口八重子

北区

小鹿 朝子

冗談の中に本音の隠し味

老いの皺ではありません笑い皺

あの人に返せぬ思い恩送り

真実という薄皮でくるむ嘘

西区

恭 子

浜北区

澤木 辰子

おっぱいに吸いつく吾子の初仕事

金は無し体動ける今が幸

やっと寝た子の顔色は満足気

老介護仮面の奥のなみだ顔

給料に反映しない好景気 北区

鈴木 勝則

異国の地義姉の訃報の落葉散る 西区

竹川美智子

好景気財布の中は反比例

カサカサと落葉心に砕け散る

居酒屋を素通りさせる検診日 浜北区

鈴木 覚

愛犬も同じサプりに振る尻尾 東区

竹山 容子

病む母の笑顔の中にある覚悟

今朝もまた血圧計と握手する

希望の灯水掛けちゃった百合子さん 北区

滝澤 幸一

気合い入れ蒲団を上げるまだ卒寿 中区

手塚 美誉

爺の目はどこの誰より家の孫

菫の種初夏の蒔き頃書き記す

浮き雲はきょうも幸乗せ希望乗せ 浜北区

竹内オリエ

おさなごの寝顔みつめて癒やされる 北区

出原 依美

沖をゆく船のともしび亡父恋し ちち

空見上げ離れて暮らす父母想う

夏帽子お花畑で蝶になり 中区 寺田 文子

秋冷の便座ひんやり縮こませ 中区 戸塚 忠道

化粧水のキャップころころ逃げ出して

食卓の下へ葉がよく隠れ

中区 徳田美知子

東区 内藤 雅子

行水の麦わら帽子はしゃいでる

満面の笑みの裏側見えかくれ

無農薬やつぱりこれねこの味だ

ハエタタキ持てば逃げゆくにくらしさ

南区 ど ぜ う

中区 袴田 宣子

エンディングノートの白に涙落ち

雲切れて一気に進む山登り

ウォーキングつまずいて知る我が人生

見渡せばはるかに続く白い道

中区 戸田田 鶴子

中区 平野 旭

人生に下書きは無し今日明ける

秋の居間ドキリとさせし置手紙

春の風花粉と黄砂つれて来る

風吹きて秋の形の雲となる

すこい草修業と思いとりまくる

浜北区

馬塚 五朗

生きる糧見つけて道をまっしぐら

南区

水川 彰

連呼する平和空しく聞こえる

週刊誌不倫合戦止まらない

西区

谷野 重夫

今年また妻のタクトで動かされ

自らを育てて花を咲かす汗

西区

山田とく子

荒波に乗って大地へたどり着く

終活へ金勘定が忙しない

四ツ池で若者走り真似てみる

南区

あそビジネス

中秋の月見団子にもみじの手

西区

渥美 進

また生んで旅立つ母の耳奥へ

西区

飯田 幸子

柚の香を湯舟にうかべひとひねり

北区

伊藤 美代

明日知れぬ体急かしてコストコに

中区

内山 文久

洗濯機今日も雨天で昼寝する

中区

大村 晴三

秋晴れや泳いでみたい広い空

中区

岡本 蓉子

親不幸思い出させる彼岸花

中区

小栗 秀治

住んでよし隣りから来るおすそ分け 北区 加藤 典男
 給湯器に急かされ今日も風呂タイム 中区 齊藤 三重子

足腰の弱りし分は手を生かし 中区 金取ミチ子
 おいあれで何でも済ます夫婦仲 中区 不 知 火

健脚が車椅子のり山想う 浜北区 金子眞美子
 休刊日物音もなく静かなり 南区 白井 忠宏

べた褒めの弔辞に遺影苦笑い 中区 川上 啓子
 暮らしにもメリハリ付ける習い事 中区 鈴木 敏子

免許証返す覚悟が定まらぬ 中区 川上 勝
 秋の夜の夢へと誘う干し布団 西区 関 まち子

台風すぎ体曲げてる露地野菜 東区 河村 幸
 駅弁たべ日本全国旅をする 中区 高鳥 謙三

六十路かと決意新たに学ぶ道 西区 絹 枝
 小石投げ波紋と対峙する孤独 中区 高橋 紘一

卒寿過ぎ次は五輪と夢を持つ 南区 久保 静子
 去りし道荒れ野に埋もれ元通り 西区 高柳 龍夫

手を焼いた子に手を曳かれ医者通い

中区

高山 功

妻と子と孫に言われて車やめ

中区

戸田 幸良

ミサイルに防衛激くジェット音

中区

高山 紀恵

華やかなステージの裏修業の子

中区

中村 禎次

待ち時間延びるにつれて増す不安

西区

竹平 安則

文庫本葉なつかし染のあと

東区

長浜 フミ子

婆三人笑いコロげて夜が更ける

中区

建部 紀子

人生に敗者復活戦よあれ

浜北区

橋本 まさや

友達と比較している我がいる

南区

寺田 喜代子

物忘れ笑いあったり怒ったり

中区

長谷川 絹代

耳なりで一年中が蟬の声

中区

寺田 千恵子

国民の耳目を逸らす外遊だ

西区

浜名 湖人

治らぬを治めることで齡重ね

中区

寺田 久子

自治会で過去の肩書脱げぬ野暮

西区

浜名 小舟

膝痛し心が折れる何もかも

中区

鶴多 健

相手の目見ずに詫びとは失敬な

浜北区

浜 美乃里

凧高く初孫嬉し肩車 北区

藤生 君江

集大成角帽の舞う春を待つ 東区

堀内まさ江

有りの儘受け入れ見入る深い皺 中区

馬淵 征稍

へそくりを慌てて移す妻の影 中区

宮崎 和子

挨拶をされても名前出てこない 中区

山下あい子

お悔み欄まだ掲載は早過ぎる 中区

山下 宏

悩みても流れるままが人生か 中区

山中 伸夫

孫曾孫布団の山を残し去る 中区

米澤寿鶴子

川柳選評

今田久帆

今年は昨年より応募者数が二五名増え、五六四句の中から、私の心を捉えた二七句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、五句を市民文芸賞とさせていただきました。

短詩文芸はリズムが大切です。そのリズムによって句の流れが作られますので、五七五の流れを大切にすると、心に響く句になります。流れが悪い時は、字余りや字足らずになり、意味もわかりにくくなりますので、リズムを大切にしましょう。どうしても字余りになる時は上五（最初の五音字）に持つていけばリズムは崩れません。まず、声に出して読んでみると、楽しめると思えます。

市民文芸賞予選句

思いやり貰って今日も前を向く
 燦々と恋引つ掛かるあばら骨
 後悔の波間に浮かぶ羅針盤
 人生に下書きは無し今日明ける
 ライバルの計報に夢の消える夜
 文字の揺れあの日の気持ちまで読める
 病む母の笑顔の中にある覚悟
 押し入れて眠りこけてた志

冗談の中に本音の隠し味

ムツとする言葉に返す苦笑い

心の窓あけて素直な風を入れ

青嵐ピアスの穴を吹き抜けり

不覚にも素を曝け出す影法師

努力より結果を追いかける若さ

ほつれ目の糸を紡いで生きている

真実という薄皮でくるむ嘘

やんわりと母にさとされ目に涙

小石投げ波紋と対峙する孤独

負けん気のためまぬ努力歩は金に

青空へ昨日の罪の許し乞う

美しい花を支える母の土

市民文芸賞

◎妥協することで躲した向い風

向い風の中でやっていくのはしんどいが、妥協することで、逆風を和らげ、自分の思いを達成する道を残して生きていく。

◎豆を炊く手間ひま掛けて母の味

母の味はこれまでなかなか出せなかったが、手間と時間を掛けてやっと母の味に近付くことができた思いが伝わって来る。

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

◎重箱の隅を突つてまた嵐

重要なことからかけ離れた枝葉末節を突つくことで、互いにわだかまりが生まれ、素直に受け入れることができなくなる。

◎行き詰まり立ち位置かえて見る余裕

行き詰まると、一方方向からの突破に拘るが、立ち位置を変えて物事を見つめると、別な解決方法が見えてくる。

◎一病をそつと手なづけ前を向く

年齢とともに様々な病気と付き合うことになるが、加齢等で治りにくい病とはうまく付き合い、前を向いて生きている。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸 第64集』作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸 第64集」を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(二編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワードプロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

六 選 者

選者の氏名は、平成三十年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第64集」の作品募集要項に記載します。

七 募集期間

平成三十年九月一日(土)から十一月二十日(火)まで。(必着)

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所創造都市・文化振興課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ **応募原稿の書き方**については、別紙募集要項の「**応募原稿の書き方**」をご覧ください。
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、82円切手を貼って**、作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品のジャンルの数に関係なく一通で結構です。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成三十一年二月初旬までにお知らせします。
市民文芸賞及び入選の作品は、平成三十一年三月発行予定の第64集に掲載いたします。
市民文芸賞の方には、平成三十一年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸第64集」を一部贈呈いたします。
購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発 表

十 表 彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一クリエート浜松内

☎〇五三一四五三一三三三三

「浜松市民文芸」第64 集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎を)

部門	小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句《旧かな・新かな》・自由律俳句・川柳	題名	原稿枚数 (ページ数)	
	(部門に1箇所○をお付けください)		枚	
ふりがな				
氏名		年齢	歳	男・女
ふりがな		(平成30年11月20日現在)		
発表名 ペンネーム		名称 所在地		
住所			電話番号	
文芸館使用欄	受付月日	受付番号		

編集後記

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいる
あなたかさ
俵 万智

浜松市民文芸第六十三集が発行される頃には、寒さもやわらぎ心も身体もあたたかく感じられる季節になつていくことでしょう。今年も、多くの方々の厚意に支えられ発刊の運びに至りましたことを、心からお礼申し上げます。

さて、昭和三十年に創刊された「浜松市民文芸」も六十三年目を迎えました。第一集は、山内泉氏による「西浦田楽の能面」絵が表紙を飾り、六十四ページに渡って、評論詩・俳句・短歌・小説の5部門に、市民の皆さんの入選作品が掲載されています。応募作品総数は、七百八十七点でした。そして、編集後記には、「果たして当市始まって以来の計画なので、当方の期待どおりに、文芸愛好の市民から沢山の優秀作品が応募して貰えるかどうか、不安に思っていた。が、最後の締め切り日に近くなつて、俄に作品が殺到し、数の上ではまずまず当方の期待が満たされ、大変嬉しかった。当市での、芸術の他の部門の活発な生長に比較して、文芸部門の活動は、まだまだだいたい遅れているという自覚から、本年度を出発点に、更に広汎な市民各位のご参加を得て、来年度は更に内容の充実した水準の高い浜松市民文芸第二集を発刊できますよう、文芸愛好の市民皆様のご奮起を祈ります」とつづられていました。

あれから六十三年、浜松市民文芸は、二百九十ページの質量共に誇れる文芸誌に成長しました。本年度も、百二歳から十五歳までの老若男女、幅広い年齢層の方々から投稿いただきました。今回投稿いただいた作品総数は、二、六四三点、投稿者数は延べ六百四十人に上ります。中でも、高校生による投稿が大きく増えたことは特筆すべき点で

す。更にその中から高校生二人の市民文芸賞受賞者が生まれました。浜松市民文芸の明るい未来を象徴しているようですね。そして、どの作品も「伝えたい」という熱い思いにあふれ、読者を作品の世界に誘ってくれます。「どんな思いを如何にして伝えるか」は永遠の課題であり、だからこそ私たち人間は、挑戦し書き続けたいではないでしょうか。次は、どんな作品に出会えるのか大変楽しみです。

これからも「浜松市民文芸」が皆様の文芸発表の場として活用され、浜松市の文芸の向上と普及を図るといふ創始の精神をしっかりと受け継いで、発展することを望みます。

最後に、改めて、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、御協力に厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 下石精子

浜松市民文芸 第63集

平成三十年三月十七日 発行

発行 浜松市
編集 (公財)浜松市文化振興財団
浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一

〇五三一四五三三九三三

印刷 杉森印刷株式会社

浜松市民文芸

第六十三集

発行日

平成三十年三月十七日

編集・(公財)

浜松市文化振興財団 浜松文芸館

浜松市中区早馬町2-1

電話 053-453-3933



THE 10th
HAMAMATSU
INTERNATIONAL
PIANO
COMPETITION

第10回 浜松国際ピアノコンクール

2018.11.8 [木] - 11.25 [日] 会場 | アクトシティ浜松

主催  浜松市  浜松市文化振興財団

審査委員

小川典子 (審査委員長・日本)

ヤン・イラー・チェック・フォン・アルニン (ドイツ)

ロナン・オホラ (イギリス)

ウー・イン (中国)

ヤニーナ・フィアルコフスカ (ポーランド/カナダ)

アレクサンダー・コプリン (アメリカ/ロシア)

迫昭嘉 (日本)

ディーナ・ヨツフェ (イスラエル/ドイツ)

ポール・ヒューズ (イギリス)

ムーン・イクチュエ (韓国)

エリソ・ヴィルサラーゼ (ロシア)

お問合せ

浜松国際ピアノコンクール事務局 〒430-7790 静岡県浜松市中区板屋町111-1 公益財団法人浜松市文化振興財団内
E-mail: info@hipic.jp TEL: 053-451-1148 FAX: 053-451-1123